

# 京都府遺跡調査概報

## 第 49 冊

1. 176 号 関 係 遺 跡
  - (1) 内 和 田 古 墳 群
  - (2) 嗎 岡 遺 跡
2. こくばら野遺跡
3. 高田山古墳群(付 高田山中世墓・経塚群)
4. 細 谷 古 墳 群
5. 長岡京跡右京第381次
6. 木津川河床遺跡
7. 大 切 遺 跡

1 9 9 2

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昨年開設から満10年を迎えました。当センターでは、これを記念し、特別展覧会や特別講演会の開催及び論文集の刊行等の事業を実施してきたところでありますが、これらの諸事業の遂行にあたりまして皆様方の御協力を賜りましたことを、厚くお礼申し上げます。ふりかえりますと、当センターの設立以後10年間に、公共事業は年々増加の一途をたどり、それに伴い、発掘調査は単に件数の増加だけでなく、近年は特に大規模化する傾向にあります。こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究を図ってまいりました。このような発掘調査成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行してまいりました。また、毎年、「小さな展覧会」・「研修会」を開催し、出土遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成3年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部・京都府中丹土地改良事務所・京都府農業開発公社・京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した、内和田古墳群・鳴岡遺跡、こくばら野遺跡、高田山古墳群、細谷古墳群、長岡京跡右京第381次、木津川河床遺跡、大切遺跡の各発掘調査を取めたものであります。本書が、学術研究の資料として、また、埋蔵文化財を理解する上で、なにかがしかの役にたつところがあれば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された上記の諸機関をはじめ、加悦町教育委員会・久美浜町教育委員会・福知山市教育委員会・綾部市教育委員会・長岡京市教育委員会・八幡市教育委員会・田辺町教育委員会などの関係諸機関、並びに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 176号関係遺跡    2. こくばら野遺跡    3. 高田山古墳群(付 高田山中世墓・経塚群)    4. 細谷古墳群    5. 長岡京跡右京第381次    6. 木津川河床遺跡  
7. 大切遺跡

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 176号関係遺跡 (1) 内和田古墳群	与謝郡加悦町明石 内和田	平2.7.19～ 10.19	京都府土木建 築部	森 正
(2) 嗎岡遺跡	与謝郡加悦町後野 嗎岡	平4.1.13～ 2.28		石崎善久
2. こくばら野遺跡	熊野郡久美浜町甲 山古君原野	平2.7.26～ 平3.8.30	京都府土木建 築部	森島康雄
3. 高田山古墳群	福知山市庵我中	平3.5.7～ 8.23	京都府中丹土 地改良事務所	小池 寛
4. 細谷古墳群	綾部市位田町細谷	平3.9.18～ 10.30	京都府農業開 発公社	小池 寛
5. 長岡京跡右京第381次	長岡京市東神足2 丁目・勝竜寺	平3.8.1～ 11.6 平4.1.8～ 1.28	京都府土木建 築部	鍋田 勇
6. 木津川河床遺跡	八幡市八幡	平3.12.2～ 平4.2.1	京都府土木建 築部	小池 寛
7. 大切遺跡	綴喜郡田辺町東・ 河原・草内・興戸	平4.2.3～ 3.7	京都府土木建 築部	小池 寛

3. 本冊の編集には、調査第1課資料係が当たった。

## 目 次

1. 176号関係遺跡発掘調査概要-----	1
(1) 内和田古墳群-----	2
(2) 嗎岡遺跡-----	29
2. こくばら野遺跡発掘調査概要-----	33
3. 高田山古墳群(付 高田山中世墓・経塚群)発掘調査概要-----	73
4. 細谷古墳群発掘調査概要-----	93
5. 長岡京跡右京第381次発掘調査概要(7ANMKO地区)-----	105
6. 木津川河床遺跡平成3年度発掘調査概要-----	131
7. 大切遺跡発掘調査概要-----	139

# 插图目次

## 1. 176号関係遺跡

第1図	調査地位置図	1
第2図	周辺古墳分布図	3
第3図	調査地地形測量図	4
第4図	内和田2号墳地形測量図	5
第5図	内和田2号墳出土土器実測図	5
第6図	内和田4・5号墳地形測量図(調査後、1/200)	6
第7図	内和田4号墳主体部実測図	7
第8図	内和田4号墳出土土器実測図	8
第9図	内和田4号墳出土金属器実測図	9
第10図	内和田5号墳SX01上面土器出土状況図	10
第11図	内和田5号墳SX01実測図	11
第12図	内和田5号墳SX02実測図	12
第13図	内和田5号墳SX03実測図	13
第14図	内和田5号墳SX04・07・08実測図	14
第15図	内和田5号墳SX05・06実測図	15
第16図	内和田5号墳SX09・10実測図	16
第17図	内和田5号墳SX11・16実測図	17
第18図	内和田5号墳SX12実測図	18
第19図	内和田5号墳SX13実測図	19
第20図	内和田5号墳SX14・15・17・18実測図	20
第21図	内和田5号墳出土土器実測図(1)	21
第22図	内和田5号墳出土土器実測図(2)	22
第23図	内和田5号墳出土鉄器実測図	24
第24図	内和田古墳群変遷図	25
第25図	周辺地形図及びトレンチ配置図	30

## 2. こくばら野遺跡

第26図	調査遺跡位置図	33
第27図	調査地周辺遺跡分布図	34
第28図	調査地周辺地形図	36
第29図	調査地区位置図	37
第30図	検出遺構配置図	37
第31図	竪穴式住居跡1平面図・断面図	39
第32図	竪穴式住居跡2平面図・断面図	39
第33図	竪穴式住居跡3平面図・断面図	40
第34図	竪穴式住居跡4・土坑2平面図・断面図	41
第35図	竪穴式住居跡5平面図・断面図	42
第36図	竪穴式住居跡6平面図・断面図	43
第37図	竪穴式住居跡7平面図・断面図	44
第38図	竪穴式住居跡8平面図・断面図	45
第39図	竪穴式住居跡9竈部分断面図	46
第40図	竪穴式住居跡9平面図・断面図	46
第41図	竪穴式住居跡10平面図・断面図	47
第42図	竪穴式住居跡10竈部分断面図	47
第43図	竪穴式住居跡11平面図・断面図	48
第44図	掘立柱建物跡1平面図・断面図	50
第45図	掘立柱建物跡2平面図・断面図	50
第46図	掘立柱建物跡3平面図・断面図	51
第47図	掘立柱建物跡4平面図・断面図	52
第48図	掘立柱建物跡5平面図・断面図	52
第49図	掘立柱建物跡6平面図・断面図	53
第50図	掘立柱建物跡7平面図・断面図	53
第51図	掘立柱建物跡8平面図・断面図	54
第52図	掘立柱建物跡9平面図・断面図	55
第53図	掘立柱建物跡10平面図・断面図	56
第54図	掘立柱建物跡11平面図・断面図	56
第55図	掘立柱建物跡13平面図・断面図	57
第56図	掘立柱建物跡14平面図・断面図	58

第57図	掘立柱建物跡15平面図・断面図	58
第58図	土坑1平面図・断面図	60
第59図	土坑3平面図・断面図	60
第60図	土坑6遺物出土状況平面図・立面図	60
第61図	土坑7平面図・断面図	60
第62図	出土遺物実測図(1)	61
第63図	出土遺物実測図(2)	62
第64図	出土遺物実測図(3)	63
第65図	出土遺物実測図(4)	63
第66図	出土遺物実測図(5)	64
第67図	出土遺物実測図(6)	65
第68図	出土遺物実測図(7)	66
第69図	出土遺物実測図(8)	67
第70図	出土遺物実測図(9)	68
第71図	出土遺物実測図(10)	68
第72図	出土遺物実測図(11)	69
第73図	出土遺物実測図(12)	70

### 3. 高田山古墳群(付 高田山中世墓・経塚群)

第74図	調査地位置図	74
第75図	高田山古墳群地形測量図	75
第76図	2号墳墳丘測量図	76
第77図	埋葬主体部(S X 9105)実測図	77
第78図	埋葬主体部(S X 9105)出土遺物実測図	78
第79図	埋葬主体部(S X 9105)出土遺物実測図	78
第80図	弥生時代遺構配置図	79
第81図	弥生時代集石遺構(S X 9108)実測図	80
第82図	2号墳西側傾斜面南壁断面図	80
第83図	弥生土器実測図	81
第84図	中世墓・経塚群配置図	83
第85図	中世墓(S X 9101)実測図	84
第86図	中世墓(S X 9101)出土遺物実測図	85
第87図	経塚1(S X 9102)実測図	87

第88図	経塚2(S X9103)・土坑(S X9104)実測図	88
第89図	経塚群・土坑(S X9104)出土遺物実測図	89
第90図	銭貨拓影	90
第91図	経塚2(S X9103)出土青白磁実測図	90

#### 4. 細谷古墳群

第92図	調査地位置図	94
第93図	細谷1号墳地形測量図	95
第94図	細谷1号墳石室実測図	96
第95図	遺物出土状況実測図	98
第96図	出土遺物実測図	99
第97図	出土遺物実測図	100
第98図	出土遺物実測図	101

#### 5. 長岡京跡右京第381次

第99図	調査地及び周辺の遺跡位置図	105
第100図	トレンチ配置図及び土層断面図	107
第101図	第1トレンチ検出遺構平面図	109
第102図	S D381102・S D381103平面図・断面図	110
第103図	弥生土器実測図	111
第104図	第1トレンチ下層遺構面(1) 検出遺構平面図	112
第105図	第1トレンチS E381101出土遺物実測図	113
第106図	第1トレンチS K381123出土遺物実測図	113
第107図	S K381119・381120平面図・断面図	114
第108図	第1トレンチS K381120(1~19)・S K381119(20~24)出土遺物実測図	115
第109図	第1トレンチ遺構内出土遺物実測図	116
第110図	第1トレンチ包含層出土遺物実測図	117
第111図	第2トレンチ検出遺構平面図	118
第112図	第2トレンチ北部検出遺構図	119
第113図	第2トレンチS D381205出土遺物実測図(1)	120
第114図	第2トレンチS D381205出土遺物実測図(2)	121
第115図	第2トレンチS D381205出土遺物実測図(3)	122
第116図	第2トレンチS D381205出土遺物実測図(4)	123
第117図	第2トレンチS K381214出土遺物実測図	124



第118図	S K381217・381218-----	125
第119図	S K381218出土遺物-----	125
第120図	第2トレンチS K381217出土遺物実測図-----	125
第121図	S E381201平面図・断面図-----	126
第122図	第2トレンチS E381201出土遺物実測図-----	126
第123図	第2トレンチ遺構内・包含層出土遺物実測図-----	127
第124図	S K381210出土遺物-----	127
第125図	瓦実測図-----	127
第126図	第3トレンチ-----	128
第127図	第4トレンチ-----	128
第128図	第3トレンチS D381301出土遺物実測図-----	128

#### 6. 木津川河床遺跡

第129図	調査地位置図-----	132
第130図	トレンチ配置図-----	133
第131図	第1トレンチ南壁断面・第2トレンチ北壁断面実測図-----	135
第132図	第1トレンチ測量図・東壁断面実測図-----	136
第133図	第2トレンチ測量図-----	137
第134図	出土遺物実測図-----	138
第135図	銭貨拓影-----	138

#### 7. 大切遺跡

第136図	調査地位置図-----	140
第137図	調査地地形測量図及び東壁断面実測図-----	141
第138図	出土遺物実測図-----	144
第139図	表面採集資料実測図-----	145
第140図	古墳時代遺物包含層範囲推定図-----	147

# 図 版 目 次

## 1. 176号関係遺跡

### (1)内和田古墳群

- |       |                       |                      |
|-------|-----------------------|----------------------|
| 図版第1  | (1)内和田古墳群遠景(西から)      | (2)内和田5号墳全景(南から)     |
| 図版第2  | (1)5号墳SX01全景(東から)     | (2)5号墳SX01墓壙上面土器出土状況 |
|       | (3)同 器台出土状況           |                      |
| 図版第3  | (1)5号墳SX02全景(南から)     | (2)同 木棺内遺物出土状況       |
|       | (3)5号墳SX03全景(南から)     | (3)同 墓壙上面土器出土状況      |
| 図版第4  | (1)5号墳SX04全景(東から)     | (2)5号墳SX05・06全景(東から) |
|       | (3)5号墳西半部の状況(南から)     | (4)5号墳SX09・10全景(北から) |
| 図版第5  | (1)5号墳SX11全景(東から)     | (2)5号墳SX12全景(東から)    |
|       | (3)5号墳SX13全景(西から)     | (4)5号墳SX14全景(東から)    |
| 図版第6  | (1)5号墳SX15全景(南から)     | (2)5号墳SX16全景(東から)    |
|       | (3)5号墳SX17・18全景(南西から) | (4)5号墳南裾部の状況(東から)    |
| 図版第7  | (1)4号墳調査前全景(東から)      | (2)4号墳調査後全景(北から)     |
|       | (3)4号墳主体部全景(西から)      | (4)2号墳トレンチ全景(南から)    |
| 図版第8  | 出土遺物(1)               |                      |
| 図版第9  | 出土遺物(2)               |                      |
| 図版第10 | 出土遺物(3)               |                      |
| 図版第11 | 出土遺物(4)               |                      |

### (2)嗎岡遺跡

- |       |                   |                     |
|-------|-------------------|---------------------|
| 図版第12 | (1)A-1トレンチ全景(南から) | (2)A-2トレンチ全景(東から)   |
|       | (3)A地区古墳全景(北東から)  | (3)A地区古墳遺物出土状況(東から) |
| 図版第13 | (1)B-1トレンチ全景(南から) | (2)B-3トレンチ全景(北から)   |
|       | (3)Cトレンチ全景(南から)   | (4)Dトレンチ全景(東から)     |

## 2. こくばら野遺跡

- |       |                   |               |
|-------|-------------------|---------------|
| 図版第14 | (1)A地区全景(北東から)    | (2)A地区(北東から)  |
| 図版第15 | (1)A地区(北東から)      | (2)D地区北西半全景   |
| 図版第16 | (1)D地区南東半全景(南西から) | (2)B・E地区北西半全景 |

- 図版第17 (1) 竪穴式住居跡 1 全景(西から) (2) 竪穴式住居跡 3 全景(北西から)
- 図版第18 (1) 竪穴式住居跡 5 全景(西から) (2) 竪穴式住居跡 7 全景(北東から)
- 図版第19 (1) 竪穴式住居跡 9・10 全景(南西から) (2) 竪穴式住居跡竈断面(東から)
- 図版第20 (1) 掘立柱建物跡 1 全景(南から) (2) 掘立柱建物跡 8 全景(北から)
- 図版第21 (1) 掘立柱建物跡 9・10(南東から) (2) 掘立柱建物跡13(北から)
- 図版第22 (1) 掘立柱建物跡15(北から) (2) 土坑 6 遺物出土状況(南西から)
- 図版第23 (1) 竪穴式住居跡 1～3 出土遺物(番号は実測図と一致)  
(2) 竪穴式住居跡 4～6 出土遺物(番号は実測図と一致)
- 図版第24 (1) 竪穴式住居跡 7 出土遺物(番号は実測図と一致)  
(2) 竪穴式住居跡10出土遺物(番号は実測図と一致)
- 図版第25 出土遺物(1)
- 図版第26 出土遺物(2)

### 3. 高田山古墳群

- 図版第27 (1) 調査地遠景(北東から) (2) 調査前全景(北から)
- 図版第28 (1) 調査地全景(北から) (2) 埋葬主体部完掘状況(北西から)
- 図版第29 (1) 埋葬主体部、土師器・須恵器検出状況(東南から)  
(2) 弥生時代 S X9107完掘状況(北から)
- 図版第30 (1) 中世墓検出状況(東から)  
(2) 中世墓検出状況(最上位礫群除去後、東から)  
(3) 中世墓遺物出土状況(東から) (4) 中世墓蔵骨器内古銭出土状況
- 図版第31 (1) 経塚群・土坑充填礫検出状況(北から)  
(2) 経塚 1 経筒検出状況(南から)  
(3) 経塚 1 底部遺物出土状況(南から) (4) 経筒21竹製経筒遺存状況
- 図版第32 (1) 経筒23竹製経筒遺存状況 (2) 経筒23竹製経筒遺存状況  
(3) 経筒23竹製経筒木製蓋 (4) 経筒23竹製経筒漆被膜
- 図版第33 (1) 経塚 2 遺物出土状況(南から) (2) 経塚 2 瓦質経筒出土状況(北から)
- 図版第34 出土遺物(1)
- 図版第35 出土遺物(2)
- 図版第36 出土遺物(3)

### 4. 細谷古墳群

- 図版第37 (1) 調査前全景(西から) (2) 石室全景—第 2 次床面検出時—(南から)
- 図版第38 (1) 第 1 次床面遺物出土状況(南から) (2) 第 2 次床面遺物出土状況(南から)

- 図版第39 (1)遺物出土状況(中央列石左：第2次床面、右：第1次床面：西から)  
(2)石室完掘状況(北東から)

図版第40 出土遺物(1)

図版第41 出土遺物(2)

#### 5. 長岡京跡右京第381次

- 図版第42 (1)第1トレンチ上層遺構 (2)第1トレンチ下層遺構(1)
- 図版第43 (1)土坑S K381120・381119(東から) (2)土坑S K381120遺物出土状況  
(3)溝S D381102・381103(南西から) (4)溝S D381103埋没状況(東から)
- 図版第44 (1)第2トレンチ上層遺構(北から) (2)第2トレンチ中層遺構(北から)  
(3)第2トレンチ下層遺構(北から)  
(4)溝S D381205遺物出土状況(東から)
- 図版第45 (1)第2トレンチ南部検出遺構 (2)土坑S K381214(西から)  
(3)土坑S K381217遺物出土状況 (4)第3トレンチ全景(南から)  
(5)第4トレンチ北部全景(南から) (6)第4トレンチ北壁(南から)
- 図版第46 出土遺物(1)
- 図版第47 出土遺物(2)

#### 6. 木津川河床遺跡

- 図版第48 (1)調査地遠景(石清水八幡宮付近から) (2)第1トレンチ遠景(西から)
- 図版第49 (1)第1トレンチ全景(東西部分：東から)  
(2)第1トレンチ全景(南北部分：南から)
- 図版第50 (1)土坑群完掘状況(東から) (2)噴砂3検出状況(西から)
- 図版第51 (1)第2トレンチ全景(南から) (2)噴砂・流路断面観察(南から)

#### 7. 大切遺跡

- 図版第52 (1)調査地全景(中央奥が防賀川天井部盛り土：北から)  
(2)調査地全景(防賀川天井部盛り土から)
- 図版第53 (1)古墳時代前期包含層検出状況(西北から)  
(2)古墳時代前期包含層範囲確認状況(西北から)
- 図版第54 (1)遺物出土状況(布留式土器：西から)  
(2)遺物出土状況(畿内第V様式：西から)
- 図版第55 (1)第4トレンチ全景(西から) (2)第4トレンチ全景(西北から)
- 図版第56 出土遺物

## 付 表 目 次

1. 176号関係遺跡	
(1)内和田古墳群	
付表1	内和田4号墳出土銅鏃計測表-----9
付表2	内和田5号墳出土鉄鏃計測表-----23
付表3	内和田古墳群出土土器観察表-----26
付表4	内和田古墳群墓壙規模一覧表-----28
2. こくばら野遺跡	
付表5	竪穴式住居跡一覧表-----48
付表6	掘立柱建物跡一覧表-----59
4. 細谷古墳群	
付表7	出土土器分類表-----102
付表8	土器法量比較グラフ-----103
付表9	出土土器法量表-----104
5. 長岡京跡右京第381次	
付表10	ピット一覧表-----129

# 1. 176号関係遺跡発掘調査概要

## はじめに

本概要報告は、一般国道176号の道路新設改良事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受け、1990年度に調査を行った内和田古墳群と1991年度に試掘調査を行った嗎岡遺跡について報告する。内和田古墳群は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長水谷壽克、同調査員森 正が担当し、嗎岡遺跡は、水谷と同調査員石崎善久が担当した。本概要報告の執筆は、各担当者が行い、付表3の遺物観察表は、京都教育大学学生の齊藤 優が作成した。なお、蔵ヶ崎遺跡の2次にわたる調査は、整理作業の都合上、前年度に報告を行う。

なお、調査に係る経費は全額京都府土木建築部が負担した。



第1図 調査地位位置図(1/50,000)

- |           |          |         |          |              |
|-----------|----------|---------|----------|--------------|
| 1.内和田古墳群  | 2.枝山古墳   | 3.蛭子山古墳 | 4.作山古墳   | 5.温江(加悦)丸山古墳 |
| 6.温江大塚古墳  | 7.鳴谷東1号墳 | 8.七面山古墳 | 9.後野円山古墳 | 10.白米山古墳     |
| 11.倭文神社古墳 | A.嗎岡遺跡   | B.桜内遺跡  | C.中上司遺跡  | D.温江遺跡       |
| E.桑飼小学校遺跡 | F.蔵ヶ崎遺跡  | G.須代遺跡  |          |              |

## (1) 内和田古墳群

### 1. はじめに

内和田古墳群は、京都府与謝郡加悦町字明石小字内和田に所在する。当初、分布調査等によって北西方向にのびる丘陵の先端部から順に、1～8号墳の8基の古墳が確認されていた。このうち1号墳と7・8号墳は造成範囲外であり、墳丘裾部分の係る2号墳から6号墳までが調査範囲となった。しかし、3・6号墳については試掘トレンチを設定した結果、自然地形であることが判明した。このため4・5号墳及び、2号墳墳丘裾部分について面的な調査を行うこととなった。調査の結果、2号墳では、墳丘の南辺を区画する溝を検出した。また、4号墳ではテラス状の平坦面において、古墳時代前期の木棺墓1基を検出し、これに伴い、銅鏃・鉄剣等の遺物が出土した。5号墳では、弥生時代後期前葉～古墳時代前期の木棺墓・土壙墓計18基を検出し、これに伴う鉄剣・鉄鏃などの鉄製農工具・武器などの副葬遺物と供献土器群が出土した。

現地調査は、1990年7月19日より開始し、10月19日までの期間中、延べ64日を要した。なお、調査面積は約600㎡に及んだ。現地説明会は、9月29日に行った。

### 2. 古墳群の立地と周辺の環境

内和田古墳群の所在する加悦町は、京都府北部の名勝天橋立から南に10kmほど内陸の、野田川中流域に位置する。

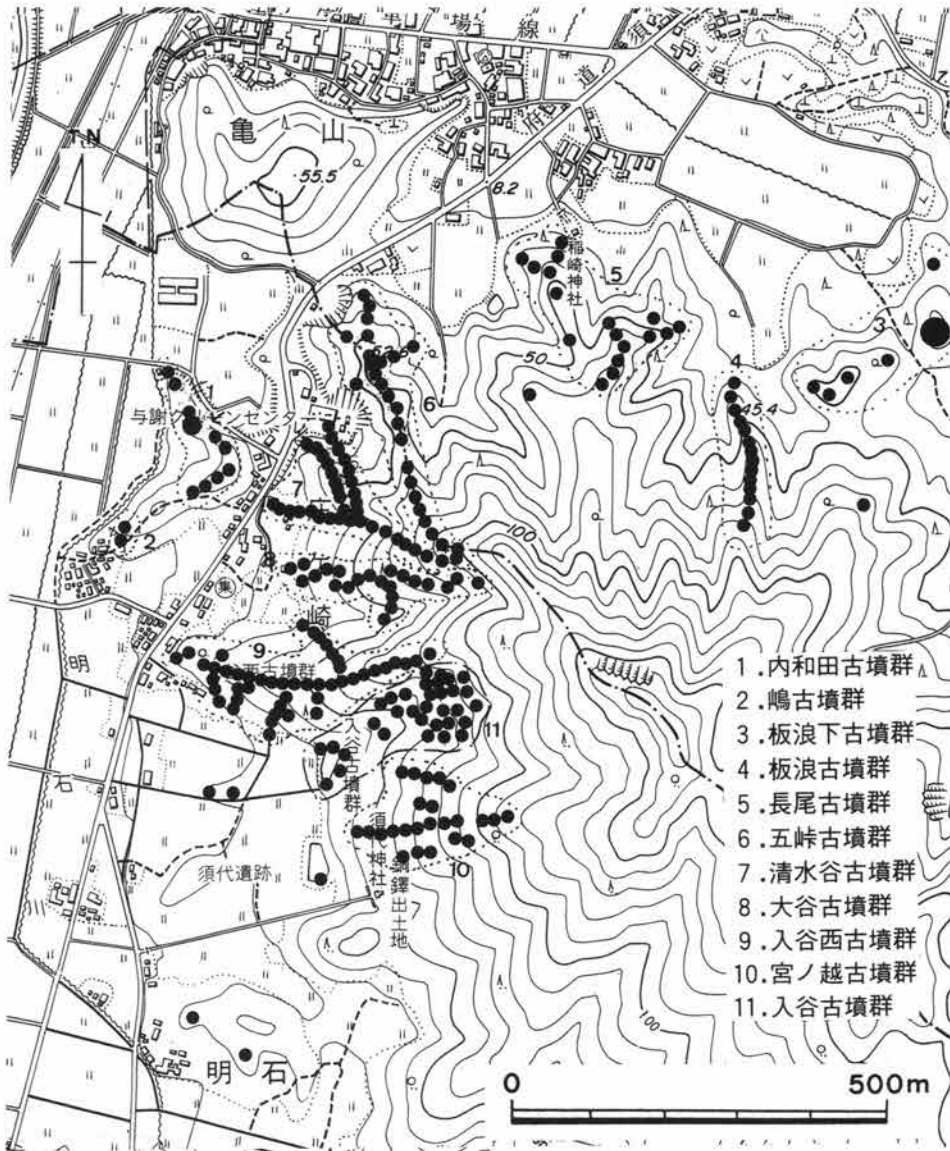
古墳群の位置する丘陵は、現在の野田川町と加悦町の町境のすぐ南側にあり、野田川の形成した沖積地に面して、北西方向と南西方向の2方にのびる独立丘陵状である。標高は5号墳墳頂部で約59mで、水田面との比高差は約50mを測る。この丘陵上には、北西方向の尾根上に12基、南西方向の尾根上に2基の古墳が確認でき、それぞれ内和田古墳群・嶋古墳群と呼称されている。このうち嶋古墳群は、墓地造成によってすでに削平されているが、過去に須恵器が採集されており、古墳群築造時期の一端をうかがうことができる。<sup>(注1)</sup>

また、丘陵の西側には府道須津・加悦線が通り、さらに西側の丘陵部には多くの小規模な墳墓が分布しており、野田川中流域では最も濃密に小規模古墳及び弥生時代墳墓の存在する地区となっている。

さて、本古墳群の位置する野田川流域は、丹後地域でも有数の大形古墳が分布する地域である。その大半は、中流域右岸の沖積地に面する丘陵部にあり、特に加悦町の温江地区

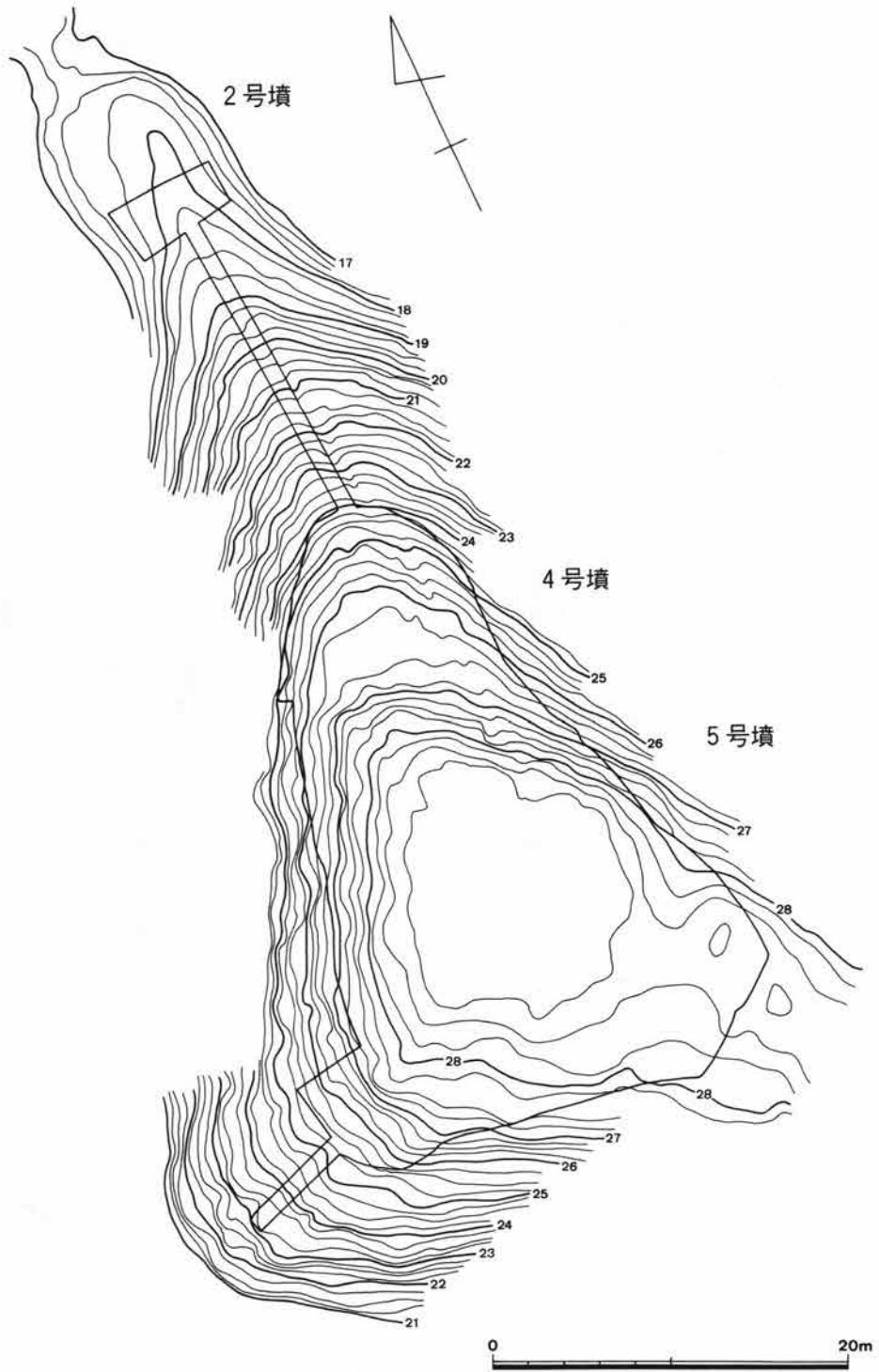
に顕著に認められる。古墳時代前期のものとしては、後半～末にかけての加悦(温江)丸山古墳(円墳；径65m)や大形前方後円墳である蛭子山古墳(前方後円墳；全長145m)がある。しかし、蛭子山古墳以降は、河口部に法王寺古墳(前方後円墳；全長74m)が存在するものの、中流域では大形円墳あるいは方墳が相次いで築造され、大形前方後円墳が再び築造されることはない。

以上のように、古墳の状況を見るかぎり、前期後半に突出した首長墓の存在が指摘され、丹後地域の古墳時代の大きな特徴といえる。



第2図 周辺古墳分布図





第3図 調査地地形測量図(1/400)

### 3. 調査の概要

#### 2号墳(第4図)

2号墳は、この古墳群の立地する丘陵の先端付近で、標高約17m、後述する4号墳からは比高差にして約8m下がった地点に位置する。北側は、ほぼ同形態・同規模の1号墳に接している。ここでは、墳丘の南側裾部が造成範囲内となったため、一部を調査するにとどまった。

墳丘は、尾根の稜線に直交する直線溝で区画する長方形を呈している。その規模は、南北10m・東西9m、高さ約80cmを測る。検出した区画溝は、幅約1m・深さ約40cmを測り、断面「U」字形で、尾根に直交する方向に直線的に掘削されている。

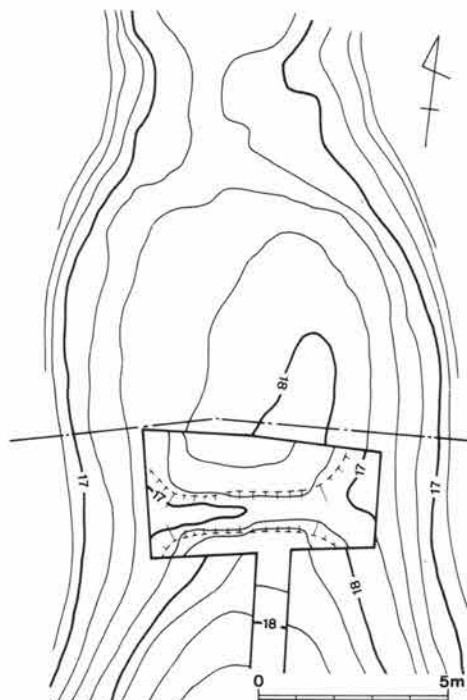
溝の埋土中からは、若干の土師器片が出土しており、このうち2点を図化し得た(第5図1・2)。

#### 4号墳

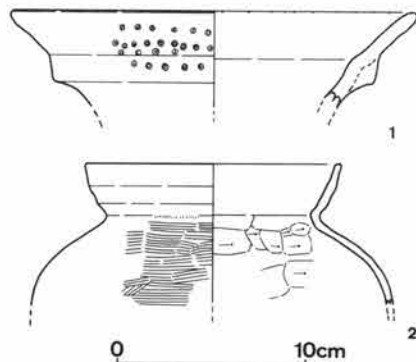
#### 墳丘(第6図)

5号墳から北に続く尾根の稜線上を削りとり、平坦面を確保している。このため、平坦面は台形状を呈し、南北約5m・東西最大幅でも8.5mを測る小規模なテラスとなっている。平坦面南側には、幅約40cm・深さ15cm程度の浅い直線溝を設けて、区画を行っている。また、この溝の上位側の斜面には、平坦面造成時の削平面が、27.0m等高線以下に残されているのを確認することができる。この他の3方では、特に墳丘裾を示す傾斜変換点はない。

ここでは、南側の区画溝内の埋土中から土師器壺の破片が2点出土した(第8図3)。これらは同一個体で接合することができた。



第4図 内和田2号墳地形測量図(1/200)



第5図 内和田2号墳出土土器実測図



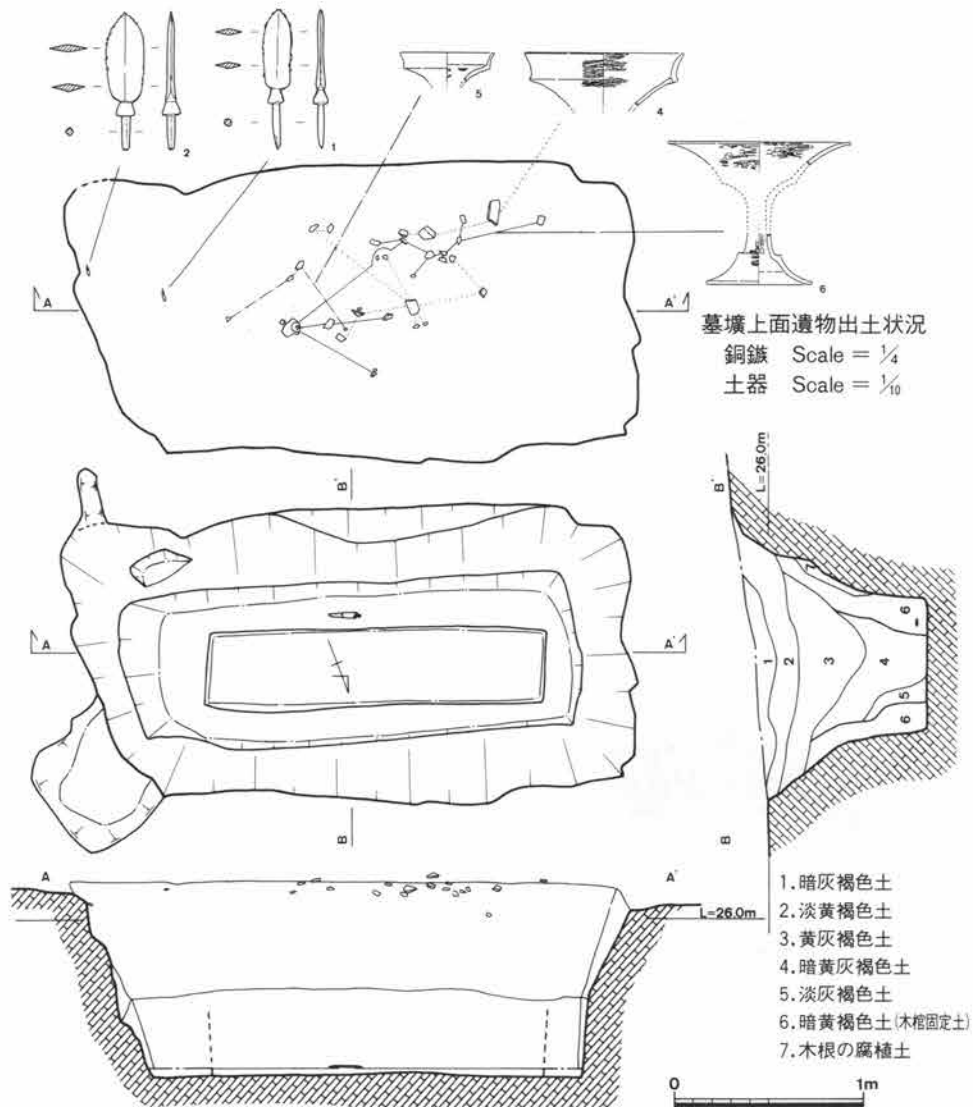
第6図 内和田4・5号墳地形測量図(調査後、1/200)

## 埋葬施設(第7図)

## ①墓壙と木棺

平坦面の中央に、風化花崗岩の地山面から直接掘り込み、主軸を尾根方向に直交させる墓壙を1基設ける。墓壙の平面形は、隅丸長方形を呈し、断面形は下端部から約40cmは、ほぼ垂直に立ち上がり、これより上部は角度をかえて、やや外開き気味に立ち上がっている。下方の垂直な部分については、その高さからみて、木棺の高さにほぼ対応すると考えられる。墓壙底面は、ほぼ水平面を保っている。

木棺については、平面及び断面土層の観察結果から、箱形を呈したものと推定できる。



第7図 内和田4号墳主体部実測図

棺材の厚み及び底板材の有無については、明確にすることはできなかった。また、木棺の規模は、墓壙底面よりひとまわり小さく、木棺を設置した後に棺の両側及び木口には、墓壙掘削時の土を充填している。

## ②遺物出土状況

棺内出土の遺物はない。棺外南棺側部分で、鉄剣一点が切先を東に向けて置かれていた。やや棺側に傾くが、ほぼ水平な状態である。ただ、出土した高さが墓壙底面から約5cmのところと低い位置であり、木棺固定の際の土を入れる作業の途中で埋置しているものと判断せざるを得ない。このほかには、墓壙検出面で土器群及び銅鏃が出土した。銅鏃は2点あり、このうち鏃2は、墓壙東側の短辺肩部に接して、鏃身を北に向けている。鏃1は、前者より約40cm内側にあり、同じく鏃身を北に向ける。鏃1は、鏃2より約7cm高い位置にある。土器群は、墓壙中央から南西寄りにかけて、破片となり散乱している状態である。器種としては器台が3点あるが、完形に復原し得るものはない。

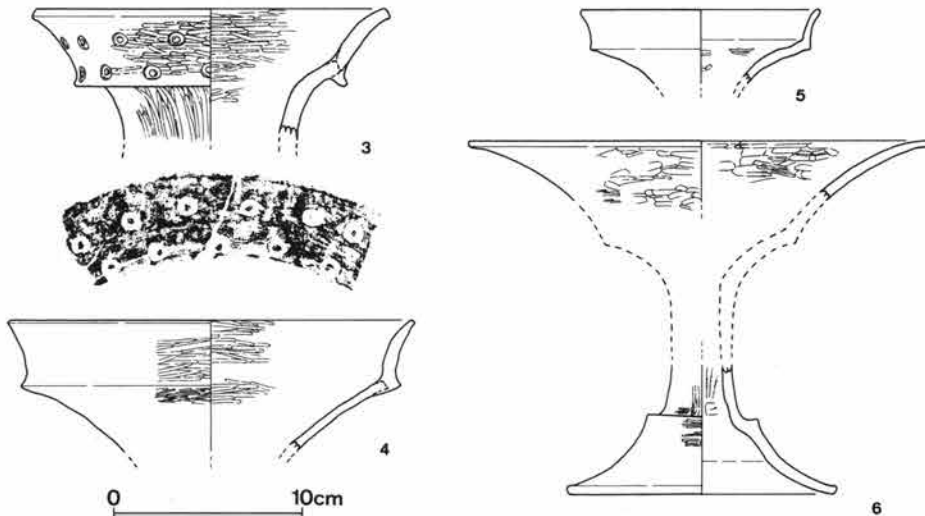
## 出土遺物

### ①土器(第8図)

3は、墳丘溝内から出土した二重口縁壺である。口縁部外面には、竹管文を施す。4～6は、墓壙上面で出土している。いずれも器台であるが、4と5は同形態の大小である。6は、脚部と裾部に段を持つもので、北陸系の要素と考えられる。詳細は観察表にゆずる。

### ②金属器

銅鏃(第9図1・2) 2点ともに茎・篋被を有する柳葉式銅鏃である。表面は風化と錆



第8図 内和田4号墳出土土器実測図

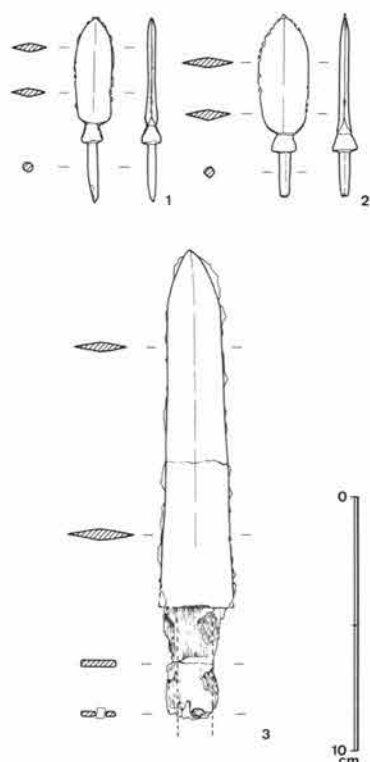
3.溝内出土 4～6.墓壙上出土

によって細かな凹凸が著しく、研磨痕等の観察はできない。各計測値は表に譲るが、両方ともにほぼ全長を同じくするものの、2の方が鍔身部幅が広く、茎が短い。鍔身部には縦一文字鑄を有し、最大幅を鍔身上半におく。関部は丸みを帯びて筥被に接続する。筥被は、特に1では鍔中軸よりややずれており偏っている。茎断面は丸みを帯びるものの、2では断面四角形に近いものとなっており、2の茎端では切り離しの際に入れた刻み目の跡が認められる。

鉄剣(第9図3) 鉄剣は1点出土した。茎端部が欠損しているため、現存長18.5cmを測る。剣身には鑄が認められ、断面形は菱形を呈する。関はやや鈍角で茎に接続する。茎には、柄木の木質が残存する。

#### 5号墳

5号墳では、自然地形を利用したややひずむ台形の平坦面上で18基の埋葬施設を確認した。これらはすべて同一面(風化花崗岩の地山面)で検出した。



第9図 内和田4号墳出土  
金属器実測図(1/3)  
1・2.銅鏃 3.鉄剣

付表1 内和田4号墳出土銅鏃計測表(cm)

番号	全長	鍔身長	鍔身幅	鍔身厚	筥被長	筥被幅	茎長	茎幅	色調	備考
1	8.4	4.2	1.6	0.35	0.8	0.9	2.4	0.4	淡灰緑色	表面風化著しい ・縦一文字鑄
2	7.15	4.65	2.05	0.4	0.75	1	1.75	0.45	淡灰緑色	表面風化著しい ・縦一文字鑄

ただし、後述のように、うち5基は、弥生時代後期前葉と考えられるため、古墳に伴うものは13基の埋葬施設となる。

以上、大きく2時期に分けられる遺構群を同一面で検出した理由は、古墳自体が顕著な盛り土をもたず、主に地山整形により墳丘を造成し、墓壙掘削時にも地山面から掘りくぼめたためである。仮に若干の盛り土された後に、盛り土上面から墓壙が掘削されていたとしても、平安時代以降、現代までこの地点がなんらかの形で利用され、地山面に及ぶ攪乱のためその判別は現状ではできなかった。また、平坦面周縁の浅い溝及び、不定形の土坑が存在するが、これらは埋土の状況・ラフな掘形からみて新しい時期のものとは判断した。

弥生時代の主体部として認識できるもののうち、墓壙内から土器の出土したものはS X 05とS X 13の2基のみである。この他については、切り合い関係・墓壙の規模・形状・埋土の状況などから判断し得るものである。ここでは、遺構番号順に説明を行い、その中で弥生時代の遺構と判断したものについても触れていくこととする。

#### 墳丘(第6図)

5号墳平坦面は、標高58.5m付近に位置し、規模は南北15m・東西12.5mを測る。南側の丘陵高位側には、墳丘を区画する浅い直線溝を設ける。溝は、幅約3mで、深さ約40cmを測る。このほかの3方は、尾根斜面を若干整形して直線的にしているようではあるが、特に墳丘裾を明示するような傾斜変換点はない。

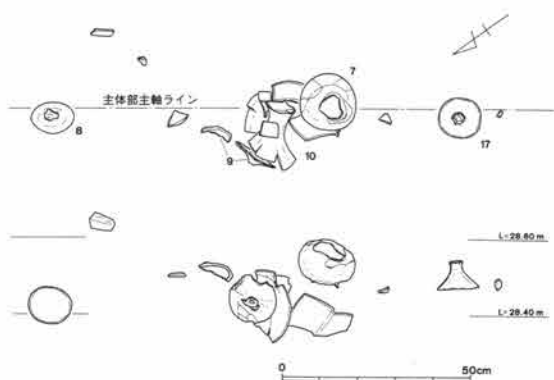
#### 埋葬施設

S X 01(第10・11図) 墳丘平坦面のほぼ中央に位置する木棺墓である。

①墓壙と木棺 5号墳中最も大きな墓壙である。S X 02及びS X 04の墓壙とほとんど接しているが、かろうじて切り合い関係にはない。ただ、東側のS X 06は土層断面から見て、S X 01掘削時に切られていることがわかる。

墓壙平面形は、南側が若干幅広い隅丸長方形を呈する。墓壙断面形は、長軸方向の両サイドに幅20cm程度のテラスを設けるため、横断面は2段を呈するが、木口側には段をもたない。この段は墓壙底面から約25cm程度と低い位置にある。墓壙底面も上面と同様に南側が幅広になっており、南端部幅約110cm・北端部幅約70cmを測る。これは後で触れる木棺の形状にも対応するものである。

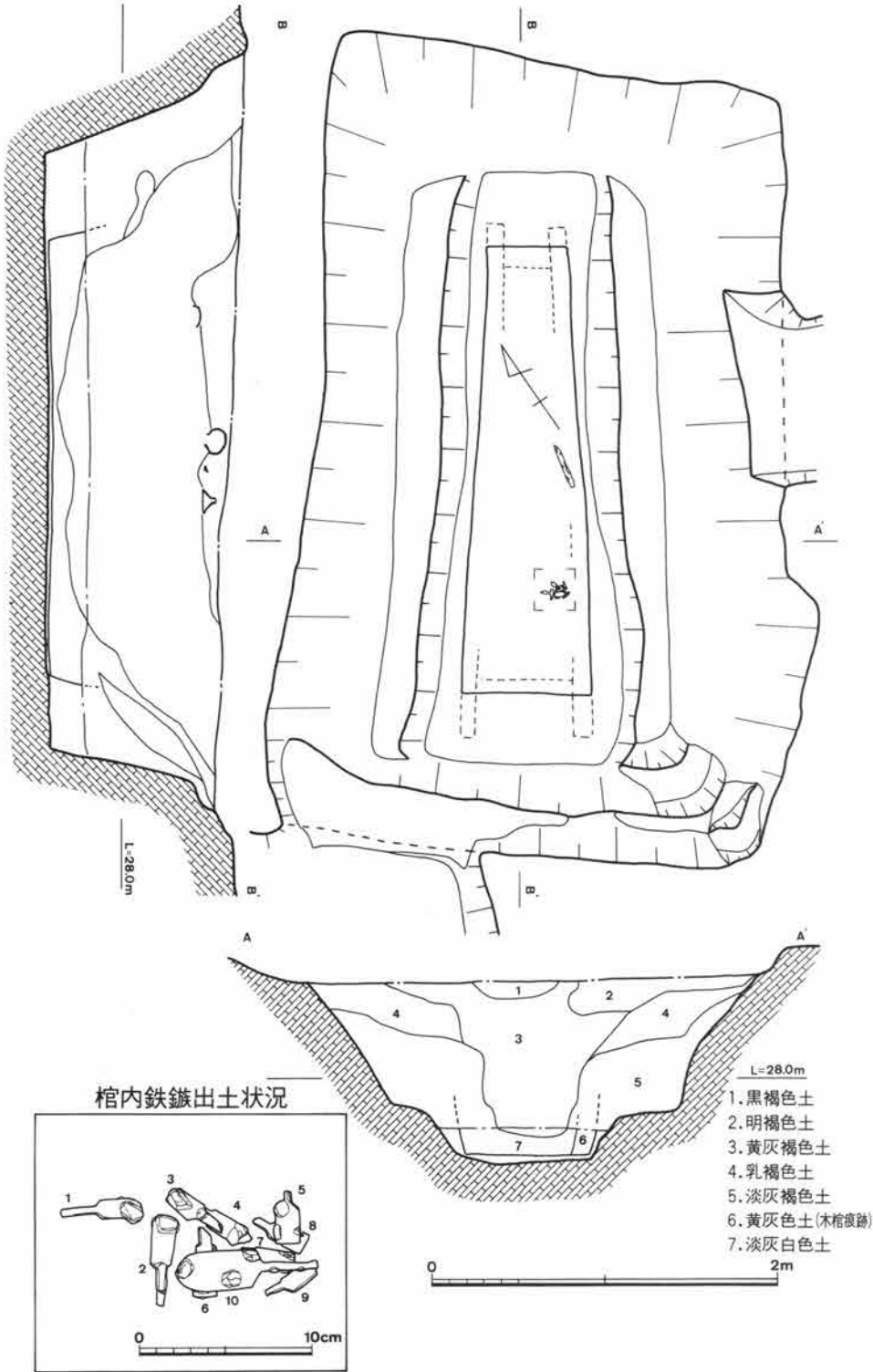
木棺は、墓壙底面付近でかろうじて確認した。平面形は南木口側が幅広い長方形であるが、木棺痕跡確認作業中に側板が木口板より突出する平面形を確認しており、木口を「H」形に組んだ木棺が想定できる。棺の高さはわからないが、木棺蓋板の腐植崩落に伴うと見られる墓壙埋土第1層の落ち込みが約45cmに及び、ほぼこれに近い数値と考えられる。



第10図 内和田5号墳S X 01上面土器出土状況図(1/20)

頭位は、南木口が幅広い木棺構造を採る点と後述の鉄刀の方向から南側に置くとみられる。

②遺物出土状況 遺物の出土地点は大きく3地点に分けられる。墓壙上面には土器群が置かれていた。これらの土器群は墓壙上面に及ぶ攪乱によるため、本来の器種・個体数を正確に把



第11図 内和田5号墳 S X01実測図(1/40)



握することができないが、完形あるいはこれに近い状態のものとして、低脚杯1・高杯2・器台2・壺1が木棺のほぼ真上になるように置かれていた(第10図)。加えて、完形には復原できないが器種の判明したものとして、壺口縁部3点(第21図14~16)・器台2点(12・13)がある。前者は、木棺の腐植陥没によって落ち込んだ土層中から出土しており、なかでも器台(10)には、壺(7)がセットとして乗せられていたと考えることができる。

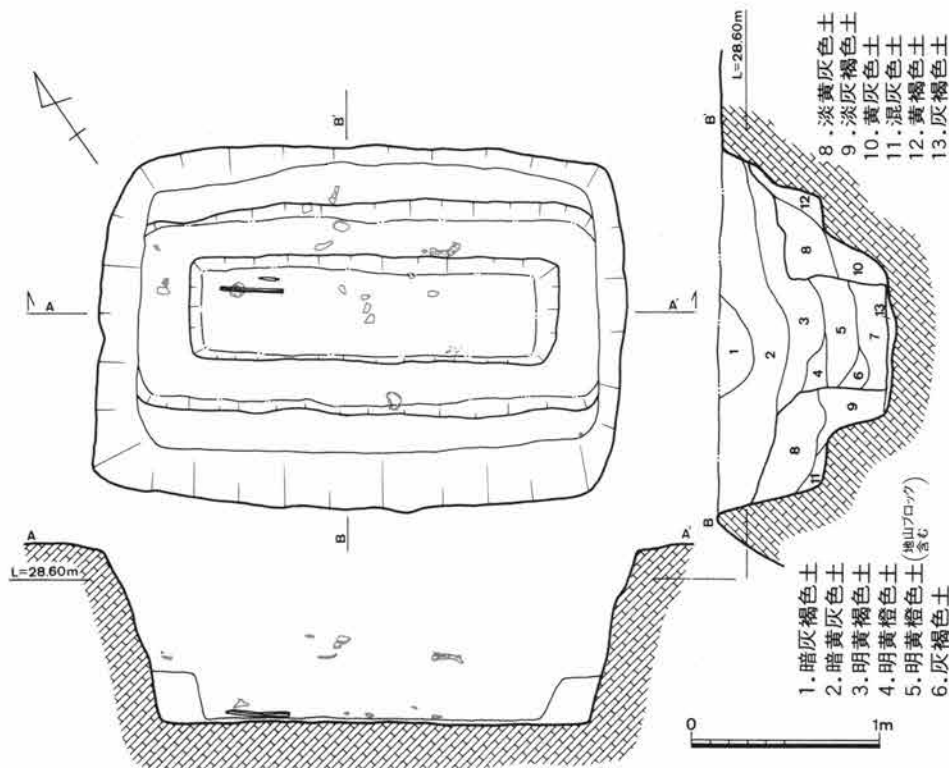
次に木棺内から鉄刀1点が出土した。切先を北木口側に向け、木棺主軸に対しやや斜めに置く。遺体の右腰付近と考えられる。また、この鉄刀から南へ約60cm離れた地点で鉄鏃10点がまとまり出土した。これらは、方向もまちまちで、加えて木棺底面レベルより数cm浮いた状態であった。木棺の蓋板上付近に置かれたものが、落ち込んだと考えられる。

S X 02(第12図) S X 01の北短辺に接する木棺墓である。

①墓壇と木棺 墓壇平面形は隅丸長方形で、主軸をS X 01と直交方向にとる。断面はS X 01と同様長辺両サイドに幅約20cmのテラスをもつため、横断面は2段だが、短辺側に段を作らない。

木棺は、箱形を呈し、木棺高は裏込め土の状況から、40cm程度であったと推定できる。

②遺物出土状況 棺外遺物は、土師器台付壺1点がある。墓壇埋土各所で細片で出土し



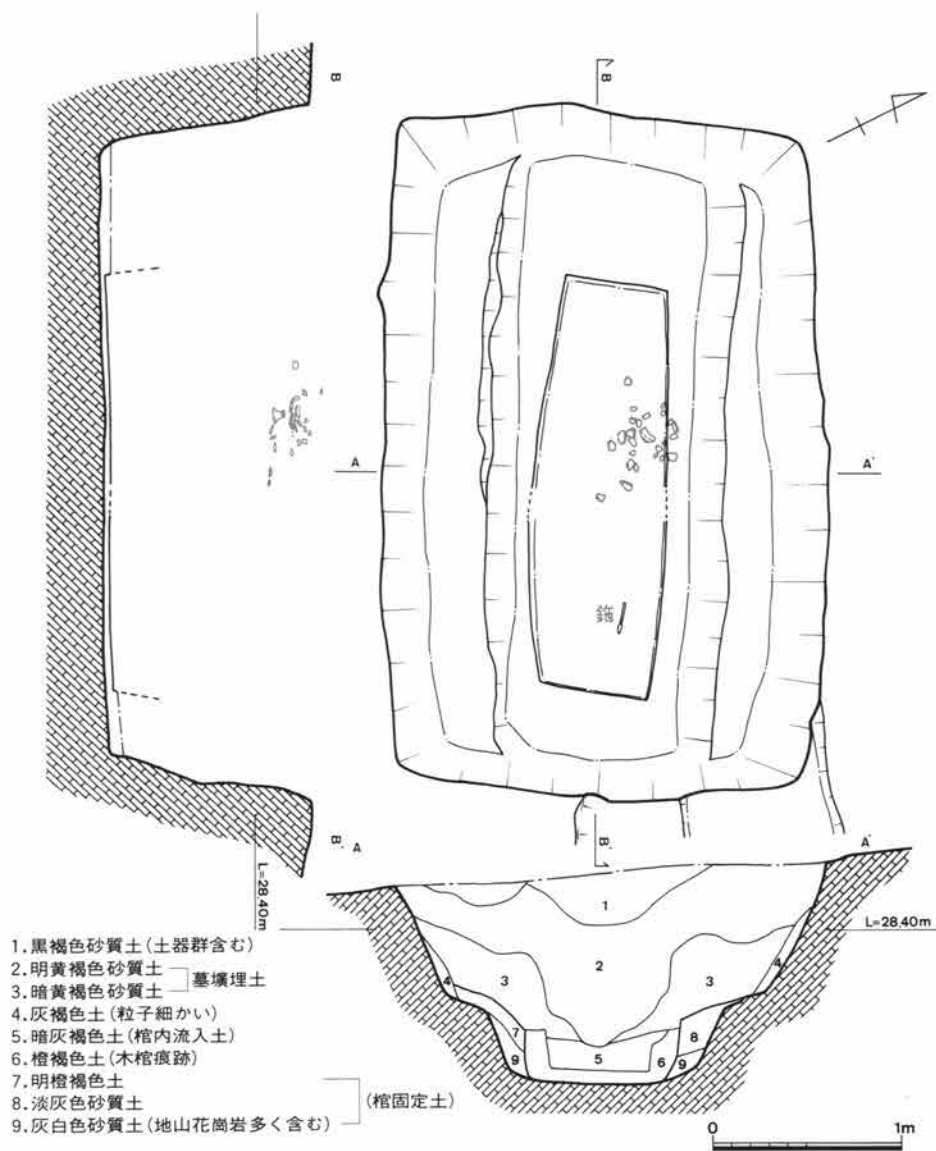
第12図 内和田5号墳 S X 02実測図

だが、すべて同一個体で完形近く復原した。意図的に破碎し、木棺埋め戻し過程で置かれたのだろう。台部分は棺内遺物の鉈上に乗った状態で、木棺直上に置かれたと考えられる。

棺内遺物には、鉄鉈2点・鉄剣1点がある。2点の鉈は、重ね合わせた状態で刃先を東に向けて置かれていた。鉄剣も切先を北に向け、鉈の南側にほぼ並行に並べてあった。

S X 03(第13図) S X 01の南短辺に接する木棺墓である。

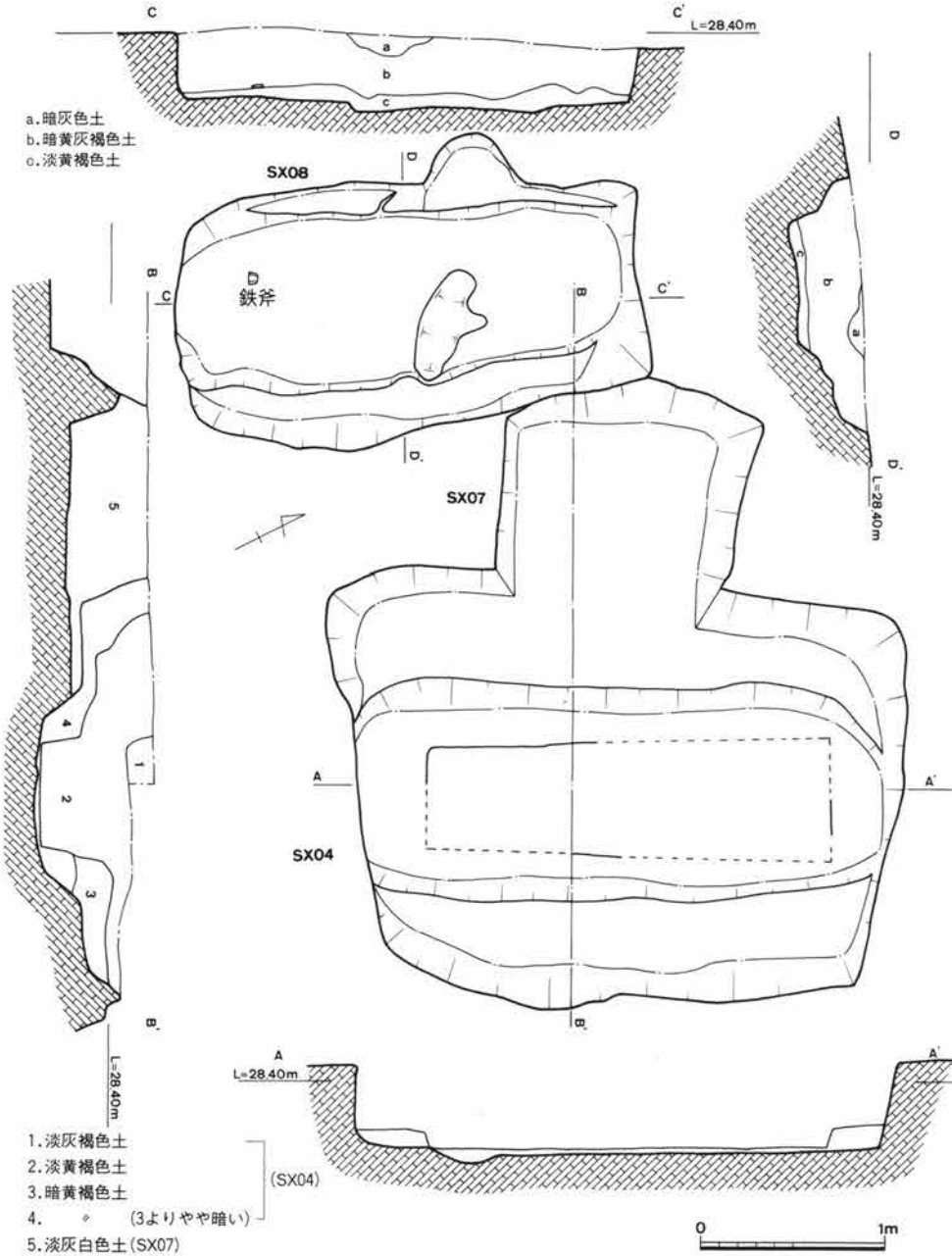
①墓壇と木棺 墓壇平面形は隅丸長方形を呈し、主軸をS X 01と直交方向にとる。断面形は、S X 01・02と同様に長辺に段を持つため、横断面のみ2段になる。木棺は、箱形を



第13図 内和田5号墳S X 03実測図

呈するもので、土層の観察結果から、木棺材の厚さを10cm程度と推定できる。

②遺物出土状況 墓壙上面からは、台付二重口縁壺が1点出土した。かなり細片となっていたが、脚台部分が正立しており、比較的まとまって出土したことや、ほぼ完形に復原できたことから、本来は完形のまま墓壙上面に置かれていたものと考えられる。



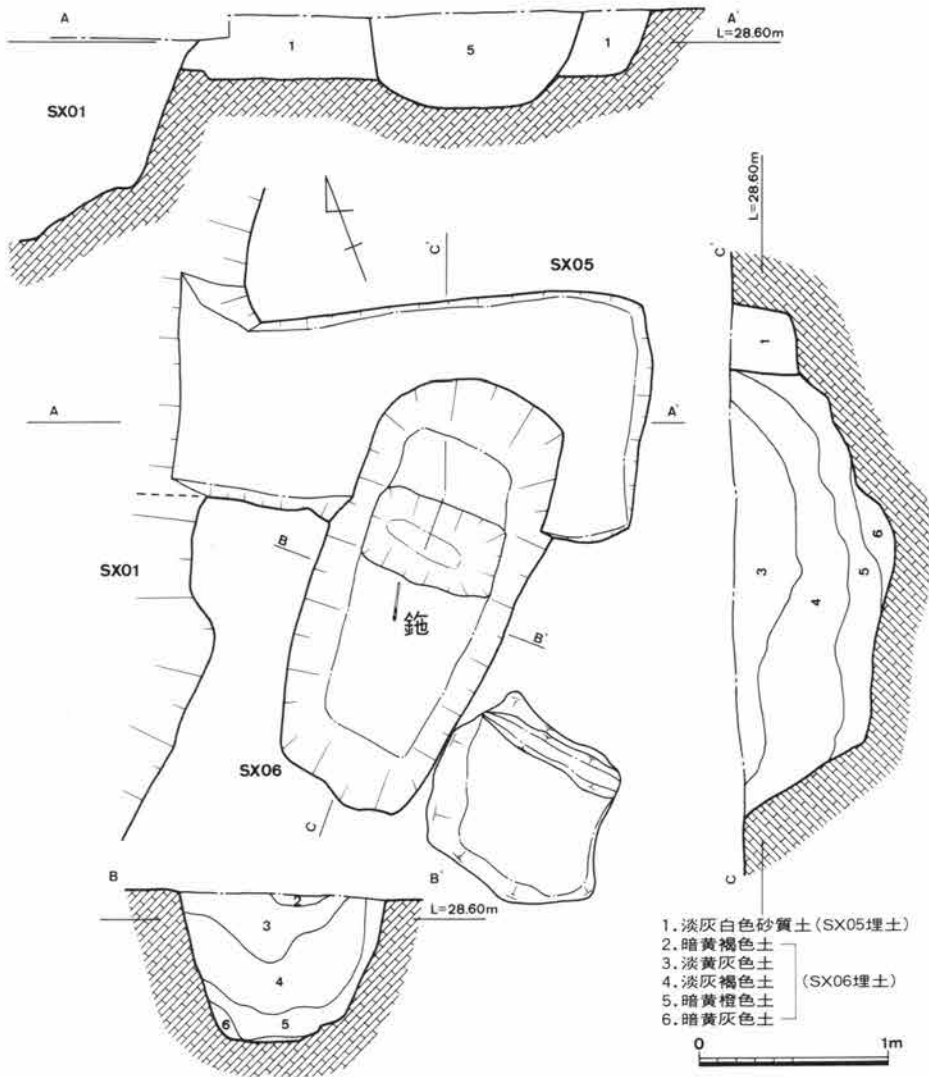
第14図 内和田5号墳SX04・07・08実測図

棺内遺物としては、鉈が1点ある。棺内東木口寄りに、刃先を東に向けて置かれていた。また、墓壙埋土中から弥生土器片が2点出土しているが、これは混入したものであろう。

S X 04(第14図) S X 01の南短辺に接する木棺墓である。

①墓壙と木棺 墓壙平面形は、ややいびつな隅丸長方形を呈し、主軸をS X 01と同方向にとる。断面形はS X 01～03と同様に、長軸両サイドに段を持つタイプである。前述の墓壙に比べると、掘形が浅い。また、墓壙西長辺はS X 07と切り合っており、その切り合い関係からS X 07→S X 04という前後関係がわかる。木棺は箱形を呈する。出土遺物はない。

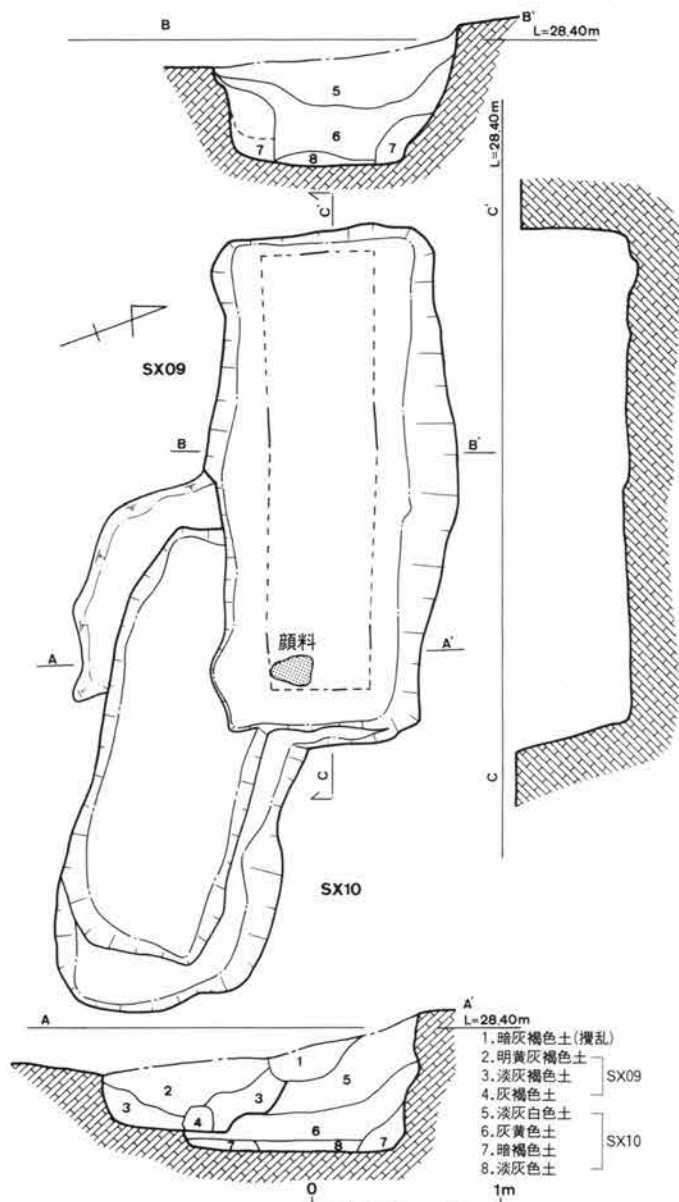
S X 05(第15図) S X 01の東に位置する弥生時代の墓壙である。



第15図 内和田5号墳S X 05・06実測図

墓壇は、東側短辺がやや幅広い隅丸長方形を呈すると考えられる。ただし、西側短辺は、SX01に切られているため全形は不明である。底面はほぼ平坦な面をなす。さらに後述するSX06にも切られていることから、木棺の存在は明確にすることができなかったが、墓壇の形状からみて箱形の木棺を想定してよいと考えられる。遺物は、墓壇埋土中から弥生時代後期の甕片が2点出土した(第22図22・23)。

SX06(第15図) SX05の南に重複して位置する土壇墓である。



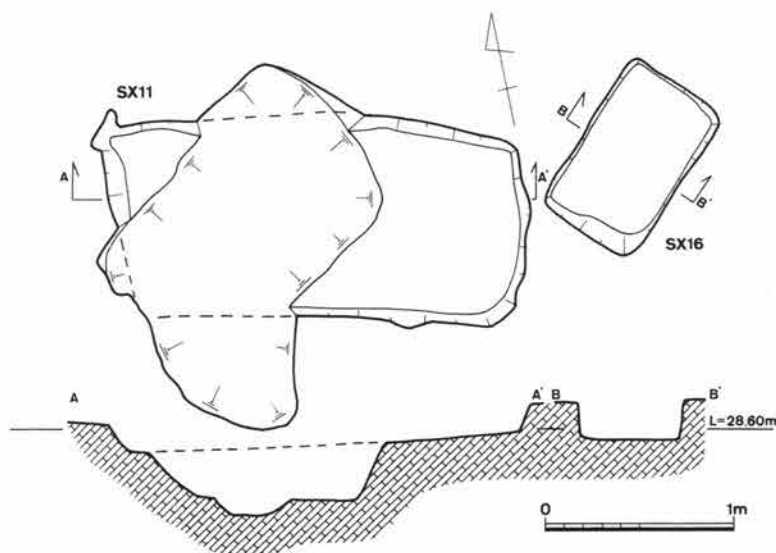
第16図 内和田5号墳SX09・10実測図

墓壇平面形は、隅丸長方形を呈するが、全体に丸みを帯びる。主軸は、SX01とほぼ平行にとる。断面形は、上方から下方へむけ幅が狭くなるが、壁面には凹凸がみられ、底面も平坦でない。この墓壇形状と埋土の堆積状況から、木棺を使用していない土壇墓と考えられる。

墓壇底面のほぼ中央から、鉈が1点出土した。

SX07(第14図) SX04の西に位置する弥生時代の墓壇である。

墓壇平面形は、隅丸長方形を呈するものと考えられるが、SX04に東半部を切られているため全形は不明である。底面はほぼフラットな面をなす。また、西側短辺についても、SX08に切られている。遺物は出土していないが、墓壇の規模・形状がSX05と共通す



第17図 内和田5号墳SX11・16実測図

る点と、古墳時代主体部に大きく切られている点から、古墳造営以前のものと判断した。

SX08(第14図) SX07の西に位置する木棺墓である。

墓壙平面形は、ややいびつな隅丸長方形を呈する。主軸はSX01と同方向にとる。断面形は、長辺の両サイドのみ2段になる。墓壙掘形が浅いものの、形態としてはSX01～04と共通する。埋土の観察結果では、木棺の存在を確認することはできないが、墓壙の形状からみて、箱形の木棺を想定することができよう。

SX09(第16図) SX04の南に接する木棺墓である。

墓壙平面形は、ややいびつな隅丸長方形を呈する。断面形は、長短軸方向ともに無段で掘り込む。底面は、若干の凹凸がみられるが平坦に近い。木棺は、箱形を呈する。木棺底面東木口付近に、20cm程度の広がりをもって、赤色顔料が認められた。出土遺物はない。

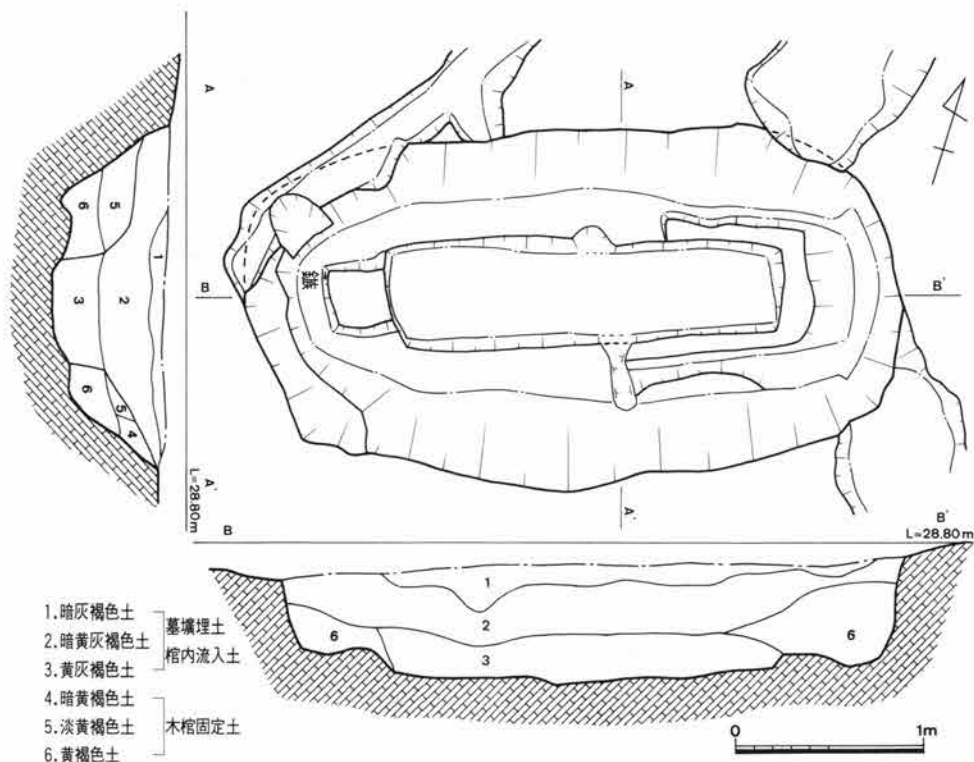
SX10(第16図) SX09と重複して位置する墓壙である。

平面形はややいびつな隅丸長方形を呈し、主軸をSX09と同方向にとる。断面形は、北側長辺と東短辺はだるい2段をなすが、他は1段である。墓壙の北西コーナーは、SX09を切っている。出土遺物はない。

SX11(第17図) SX01の北に位置する墓壙である。

墓壙平面形は隅丸長方形を呈するが、中央部にある攪乱によって全形は不明である。主軸はSX01と直交方向にとる。断面形は各壁とも1段掘りであり、底面はフラットであるが、西に向かい傾斜をもつ。出土遺物はない。墓壙埋土・形態は、SX05・07と共通する。

SX12(第18図) SX11の北に位置する木棺墓である。



第18図 内和田5号墳S X12実測図

①墓壇と木棺 墓壇平面形は、各辺ともふくらみをもつ隅丸長方形で、主軸は墳丘中央を占めるS X 01～04の方向に斜行する。断面は、底面まで1段であるが、木棺設置部分はさらに浅く1段掘りくぼめる。墓壇西隅については後世の溝により削平されている。

木棺は、箱形と考えられる。東木口部分の土層をみると、裏込め土が木棺の方向へ流れる状況が認められ、木口板が内側へ倒壊したとみられる。

②遺物出土状況 棺外西木口部分から鉄鏃が1点出土した。刃部を北に向け、墓壇底面に接して置かれていた。

S X 13(第19図) S X 17東側で墳丘東端部に、やや離れた弥生時代木棺墓である。

①墓壇と木棺 墓壇平面形は長方形で、断面は各壁ともに垂直に近く下げる1段掘りである。底面もほぼ平坦である。主軸は、S X 05直交方向にとる。木棺は、箱形を呈する。

②遺物出土状況 墓壇底面付近で弥生土器片(高杯杯部；第22図24)が出土した。同一個体の小片が床面に散らばるが完形にはならない。

S X 14～16・18(第20図) 周辺部に位置する小規模な埋葬施設である。

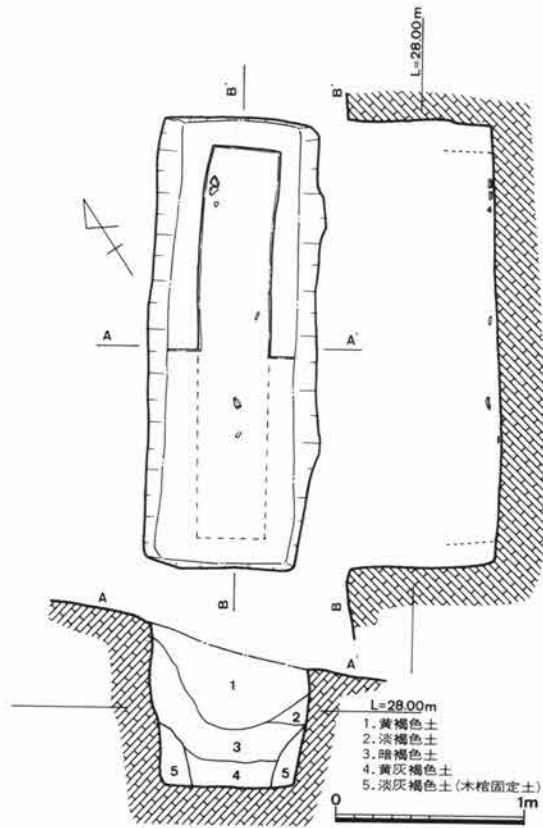
いずれも隅丸長方形を呈し、その規模は長軸で1mに満たない。S X 14～16はS X 02を囲むように配置され、S X 18はS X 03の東側に位置する。これら小規模な墓壇の木棺の有

無は、明確にできないが、各壁面とも直線的で、底面もフラットであることから小形の木棺が使用されていたと推定できる。

これらのうち遺物を出土したものは、S X 14のみで、鉈が1点ある。

S X 17(第20図) S X 03の東短辺に重複する、弥生時代の墓塚である。

主軸は、S X 03と同方向にとるが、西半部をS X 03に、東木口部をS X 17に切られている。このため墓塚の大半が失われており、全形は不明である。しかし、墓塚の幅・深さがS X 05に近似し、埋土もS X 05・07・11と共通しているため、同時期のものと考えられる。出土遺物はないが、S X 03の埋土に混入していた弥生土器片が本来この墓塚に伴っていたものである可能性が高い。



第19図 内和田5号墳S X 13実測図

## 出土遺物

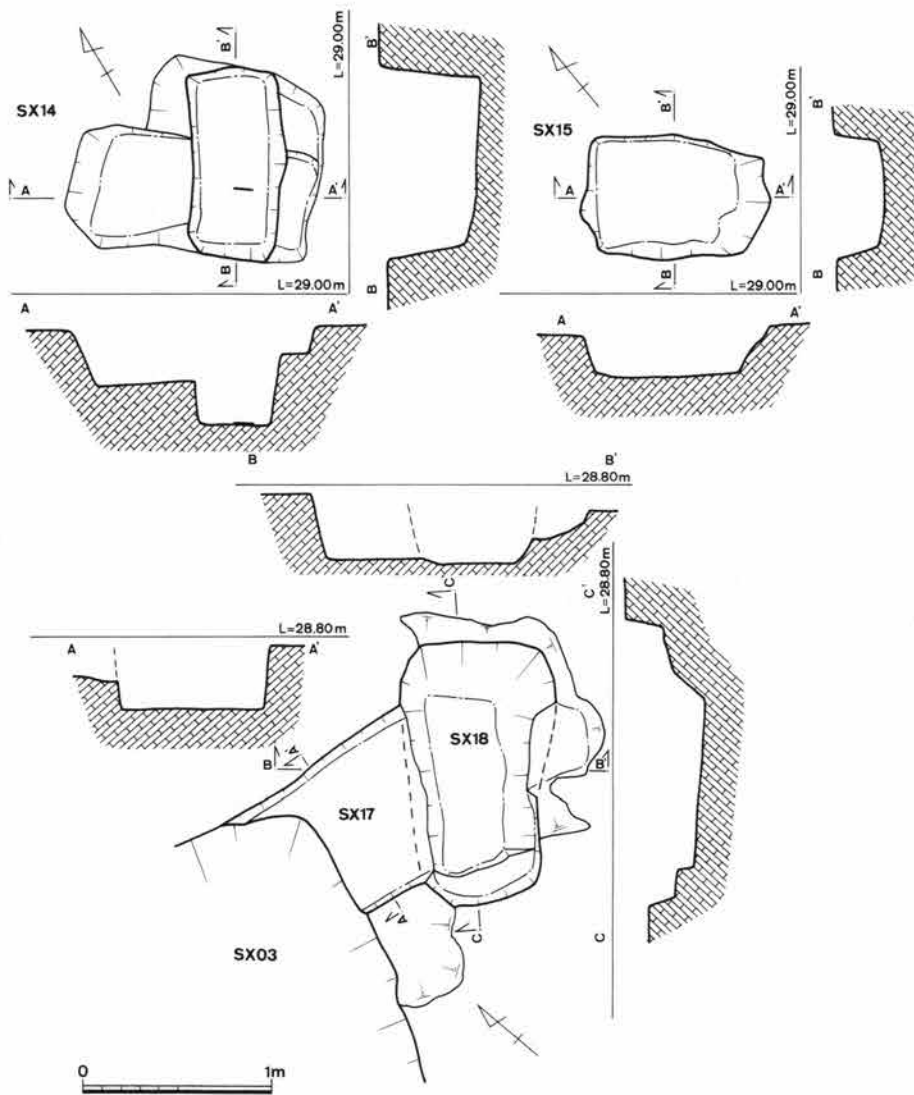
### ①土器(第21・22図)

5号墳出土土器は、大きくは3時期に分けられる。まず、弥生時代墳墓に伴う土器群がある。これには、S X 04埋土中の甕(20・21)、S X 05の甕(22・23)、S X 13の高杯(24)がある。いずれも埋葬に伴うものであり、甕が主体となっている。後期前葉頃と考えておく。

次に、S X 01を中心とする5号墳の各埋葬施設に伴う一群である。中でもS X 01の墓塚上面で最も多くの土器が出土した。ここでは攪乱を受けたため、本来の土器組成を示すとはいえないが、判明した器種と個体数は、器台4(10~13)・壺4(7・14~16)・高杯2(9・17)・低脚杯1(8)である。S X 02では、台付甕1点である(18)。これは、器壁が薄く、外面にはていねいなヘラミガキが施されている。器表面にはススが薄く付着し、火を受けたことがわかる。S X 03には、台付きの二重口縁壺が1点ある。これらのほかに、墳頂部攪乱土からは(25~30)も出土している。いずれかの埋葬施設に伴っていたと考えられる。

第3群には31~35がある。31は播鉢、32・33・35は土師器椀、34は黒色土器椀である。





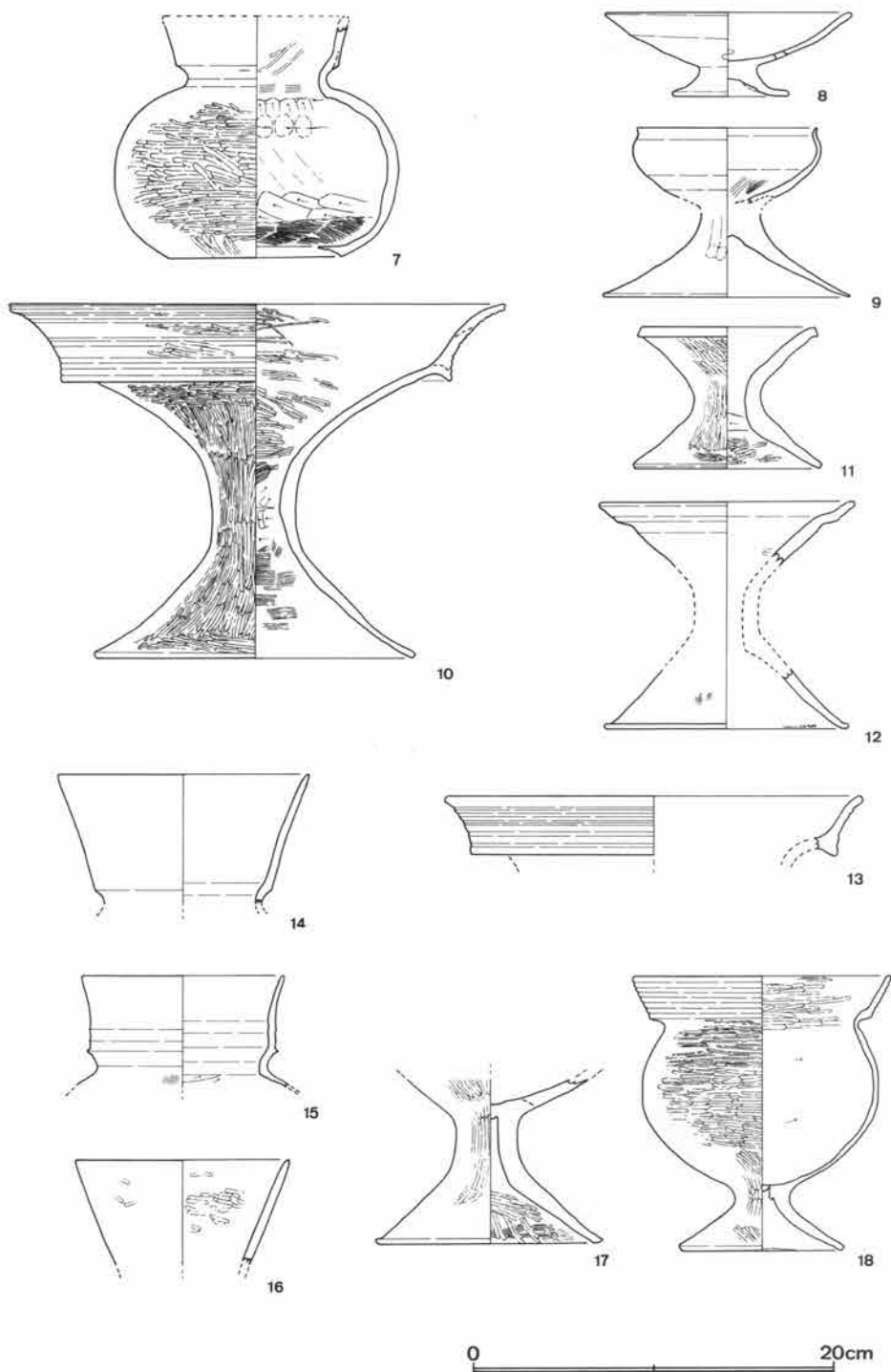
第20図 内和田5号墳S X14・15・17・18実測図

②金属器(第23図)

武器

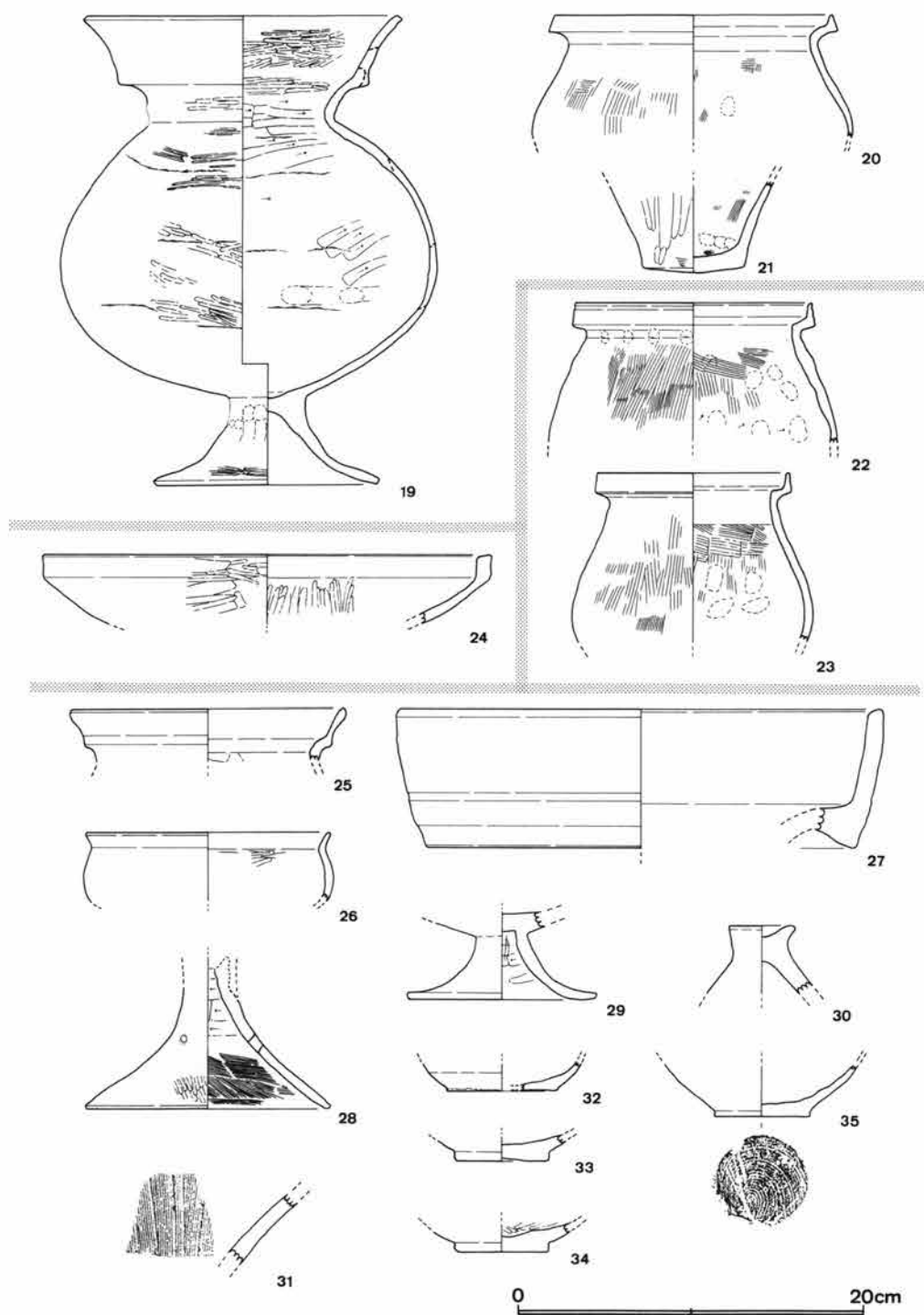
鉄刀(12) SX01出土。平棟造りの短刀で、やや内反り気味である。全長は24.5cmで、刃部幅1.8cm・同最大幅0.4cmを測る。関は、錆のため不明確だが、やや鈍角をなしているものと見られる。茎は、4.5cmを測り、中位に目釘孔1か所が確認できる。刀身には布の痕跡が断片的に観察でき、特に茎部分では下半部全面に認められる。木質は全く付着していないため、鞘・柄ともにはずされた状態で布にまかれて副葬されたものと考えられる。

鉄剣(13) SX02出土。茎の長い短剣である。全長18.4cm・茎長7.0cmを測る。切先部



第21図 内和田5号墳出土土器実測図(1)

7~17. S X01 18. S X02



第22図 内和田5号墳出土土器実測図(2)

19~21. S X04 22・23. S X05 24. S X13 25~35. 攪乱土

分は錆のため折れてい  
るが、錆が明瞭に観察  
できる。剣身は中ほど  
でやや幅狭になり、関  
に向かい若干広がる。  
関は鈍角をなし、茎下  
端部には、目釘孔1か  
所がある。

付表2 内和田5号墳出土鉄鍬計測表(cm)

番号	出土地点	全長	鍬身長	鍬身幅	鍬身厚	茎長	備考
1	S X 01	(5.8)	3.4	1.4	0.3	(2.4)	茎部布付着
2		5.3	3.3	1.45	0.25	2	茎部布付着
3		5.2	2.9	1.6	0.3	2.3	
4		5.35	3.2	1.45	0.5	2.15	
5		(3.8)	2.7	1.75	0.2	(1.1)	
6		5.1	2.9	1.8	0.4	2.2	
7		(5.5)	3.6	1.8	0.4	(1.9)	鍬身部布付着
8		(5.1)	3.2	(1.6)	0.2	(1.9)	
9		5.2	3.1	1.6	0.3	2.2	鍬身部布付着
10			9.2	5.6	2.7	0.5	3.6
11	S X 12	4.6	2.6	1.3	0.4	2	鍬身部布付着

#### 鉄鍬(1~11) 1~

10はS X 01、11はS X 12出土。10を除く10点は、細部に相違があるが、直刃で側刃に刃を作らない鑿頭式として扱うことができる。全体に錆が著しく、遺存状況は悪い。計測値は付表2にゆずるが、1~9については、全長5.1~5.8cmで、鍬身の厚さは0.2~0.5cmとややばらつきが認められる。鍬身平面形は、側刃が平行なもの(1・3・4)とやや開き気味で逆台形を呈するもの(2・5~9)がある。断面は長方形であるが、全体に薄づくりで、刃端部の稜角は明瞭でない。11は、やや小形であるが同型式の鍬である。10は、大形の有茎柳葉式である。鍬身断面は扁平なレンズ状を呈する。関は丸みをおびて茎にいたる。全体に布痕跡が残るものが多い。

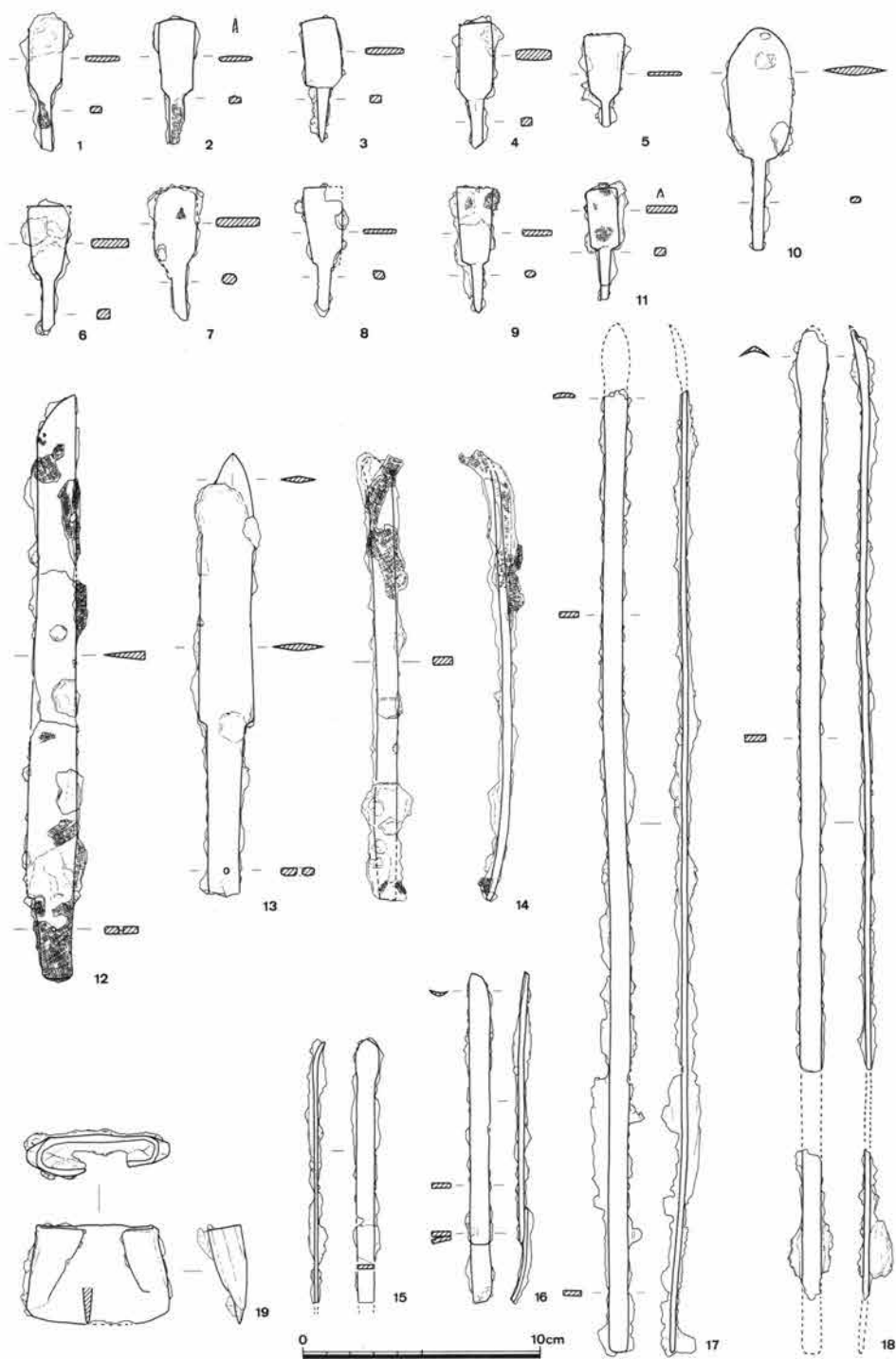
#### 工具

鉄鉈(14~18) 計5点出土した。14は、S X 06出土。全長18.7cm・幅0.9cmを測る。刃部は、錆と二重に残る布の痕跡のため明瞭に観察できないが、反り上がり、曲がったものとなっている。15は、S X 14出土である。茎端部は若干折損しているが、現存長11.5cmの短いものである。16は、S X 03出土である。全長13.8cmで、茎下部は二重に重なったようになるが、どういうものか判然としない。17・18は、S X 02出土である。錆のため部分的に折損してしまったが、同形同大のものである。17の現存長は40.7cmを測り、18の刃部をあわせて考えると43cmの全長が復原でき非常に長いものである。

鉄斧(19) S X 08出土。両側縁を内側に折り返して柄の挿入部を作る。刃部幅6.0cmを測り、平面的にはやや曲線を描く。

#### 4. まとめ

以上、今回調査を行った内和田2~5号墳では、弥生時代後期の墳墓と古墳時代初頭~前期後半にかけての大きく2時期の墳墓の状況を確認することができた。最後に、各時期ごとの状況を整理し、変遷を後付けてまとめたい。



第23図 内和田5号墳出土鉄器実測図

1~10・12.S X01

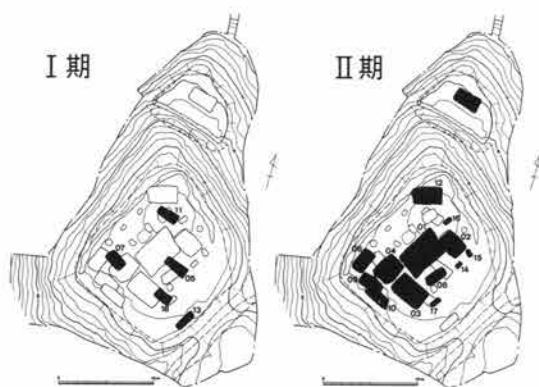
11.S X12 13・17・18.S X02 14.S X06

15.S X15

16.S X03

19.S X08

まず、先述のように、埋葬施設出土の土器及び墓壙の状況から、5号墳築造以前の埋葬施設を5基抽出し得た(SX05・07・11・13・18)。これらの埋葬施設は、5号墳に先行する意味でも、5号墳下層墳墓として一括し得る。以上の下層墳墓の時期をI期として、5号墳築造以降をII期として各時期ごとにまとめる。



第24図 内和田古墳群変遷図

#### I期 5号墳築造以前の下層墳墓

は、ほぼ同規模な5基の木棺直葬墓で構成される。SX13のみ墓壙主軸を異にするが、他の4基は、同方向に配される。この時点で、墳丘の造成がどの程度行われたのかは不明である。出土した土器は、弥生時代後期前葉に位置づけられるものであり、下層墳墓の時期を示すものと理解できる。

II期 次に、5号墳で下層墳墓と同地点において、SX01を中心として13基の埋葬施設が営まれる。現況での墳丘は、恐らくこの時点で整えられたものと考えられる。とはいえ顕著な盛り土を有することもないため、主な造作としては、南側の溝の掘削及び、平坦面の削平、他3方の斜面の若干の整形程度であったものと考えられる。

5号墳の埋葬施設は、計13基であるが、その配置状況は、平坦面中央にSX01があり、SX02～04は、これと切りあうことなく墓壙肩を接し、主軸は、同方向または直交方向にとっている。さらに、これらを取り巻くように、より規模の小さな墓壙が配されている。なかには、SX14～17のように長軸長でも1mに満たないほど小規模なものも存在しており、幼児棺とすると、家族墓的な色彩を強く保持した状況と見ることができ。配置の状況から見るとやはり、中心のSX01を契機として、順次周辺部に配されたものと考えられる。また、先述のように、墓壙の配置関係と墓壙規模には、密接な相関関係が認められるものの、SX12のみ中央部の墓壙主軸に斜交しており、墓壙平面規模も、中央部のSX02や04より大きく先の相関関係からは外れたものといえ、注意される。

さらに2号墳・4号墳との前後関係については、土器の示す状況から5号→4号→2号墳の順序が考えられるが、どういった経緯で4号墳という新たな区画を造成したものか問題が残る。5号墳各主体部のなかでは、先述のようにSX12のみ墓壙配置の規則性から外れている。主軸方向に、一定の規範の存在を想定し得るなかで、その枠から外れるという点をもって、後出的な要素とすれば、5号墳最後の主体部をSX12として、これ以降4号

付表3 内和田古墳群出土土器観察表

古墳	出土地	No.	器種	形態の特徴	成形技法の特徴	色調	胎土	法量(cm)	備考
2	溝	1	壺	*口縁部は緩く広がる二重口縁。口縁端部内面に刻み目。 *口縁部外面に3ないし4段の竹管文を施す	*口縁部内・外面;ナデ(ヨコ)。 *口縁部の段は断面三角形の粘土帯の貼り付けによって成形する。	淡茶褐色	大粒の白色、半透明砂粒を多く含む。	口径21.4	*口縁部のみ残存
		2	甕	*口縁部は頸部から内湾気味に短く立ち上がる。 *肩部がやや張る。	*口縁部・内外面;ナデ(ヨコ)。体部・内面;ヘラケズリ(ヨコ)外面;ハケ(ヨコ、8条/cm)。	外面 淡赤褐色 内面 黄灰褐色	白色、半透明砂粒を多く含む。	口径13.4	*胴部外面にスス附着。
4	溝	3	壺	*頸部は直立し、口縁部に向け外反気味に開く。口縁屈曲部を下方に短く垂下させる。 *口縁部外面には竹管文を二段に配する。	*口縁部・外面;上段ミガキ、屈曲部下ナデ(ヨコ)。内面;ヘラミガキ(ヨコ)。頸部・外面;ヘラミガキ(タテ)。全体的に仕上げがていねい。	明茶褐色	白色、半透明砂粒を若干含む。 細かい砂粒多く含む。	口径18.3	*口縁部のみ残存
		4	器台	*口縁は、屈曲した後直立気味に外反する。	*内・外面;ヘラミガキ(ヨコ)。	淡茶褐色	大粒白色半透明砂粒若干含む。	口径21.1	*受け部のみ残存
		5	器台	*口縁部は、屈曲した後直立気味に外反する。	*内面;ヘラミガキ、外面;不明。	淡茶褐色	細かい砂粒若干含む。	口径12.5	*受け部のみ残存 *4と5は、胎土・焼成近似。
5	S X O I 墳	6	器台	*口縁部は、屈曲した後大きく外反する。脚柱部は細く、直立する脚部は筒部から段を形成した後外反して開く。	*口縁部・内外面;ヘラミガキ、脚柱部外面;ヘラミガキ(タテ)、脚部・内面;ナデ(ヨコ)、外面;ヘラミガキ(ヨコ)	明茶褐色 色	大粒の白色、半透明色の砂粒含む。 細かい砂粒含む。	口径24.6 脚部径14.0	*北陸系
		7	壺	*直立気味に立ち上がる二重口縁を呈する。 *体部最大径は中位にあり、扁球形のプロポーションを呈する。 *底部は焼成後穿孔する。	*口縁部・内面;ヘラガキ(タテ)、外面;不明、体部・内面;頸部直下にヘラケズリ(タテ)指頭圧痕、中位にナデ(ナナメ)、下位ヘラケズリ(ヨコ)、ハケ12条/cm、外面;ヘラミガキ(ヨコ)	内面 明茶褐色 ~淡灰褐色 外面 明茶褐色 ~淡黄褐色	細かい砂粒若干含む。	口径9.9 残存高13.0	
		8	低脚杯	*杯部は内湾気味に浅い。杯底部付近に一对の円孔。脚部は杯部より小さく緩く外反。	*器壁風化のため不明。	橙褐色	細かい砂粒若干含む。	口径13.4 器高4.75 脚径6.3	
5	S X O I 墳	9	高杯	*杯部は丸みを帯びた碗形で、端部をわずかに外反させる。脚部は八字に大きく開き、脚径は口径をしのぐ。	*杯部・内面;ナデ(ヨコ)、底部ハケ4条/6.5mm、外面;ナデ(ヨコ)、脚部内面;ナデ(ヨコ)、外面ヘラミガキか?	淡茶褐色	白色・半透明砂粒含む。	口径9.9 脚部径13.6	
		10	器台	*ハの字に開く脚部に大きく開く二重口縁。口縁屈曲部は下方へ若干突出。外面に4条1単位のごく弱い擬凹線12条。口縁端部に沈線1条	*口縁・内面;ヘラミガキ(ヨコ)外面;ヘラミガキ(ヨコ)。脚柱部・内面;ハケ、ケズリ(ヨコ)。外面;ヘラミガキ(タテ)。	内面淡褐色~黄褐色、外面 明淡茶褐色	白色、半透明砂粒含む。	口径27.3 脚部径17.8 器高19.45	
		11	器台	*口縁端部に外傾する面をもつ。脚端部に1条の沈線が施される。	*口縁部・内面;不明、脚柱・内面;ヘラケズリ(ヨコ)、外面;ヘラケズリ(タテ) *脚部内面;ヘラミガキ(ヨコ)、外面;ヘラミガキ(タテ)、裾部(ヨコ)	明赤褐色	大粒の白色、半透明砂粒含む。 細かい砂粒含む。	口径9.6 脚部径10.2 器高7.9	

	12	器台	*口縁部は緩く屈曲する二重線。屈曲部強いナデ。脚端面はわずかにヨコにつまみ出す。	*口縁部・内面;ナデ(ヨコ)、脚柱部・内面;ヘラケズリ(ヨコ)、脚部・内外面;(ヨコ)。	暗灰茶褐色	白色、半透明砂粒含む。	口径13.8 脚部径13.6 器高12.4	
	13	器台	*口縁部外反する二重口縁。屈曲部若干垂下。 *口縁部外面に6条の弱い擬凹線を施す。	内外面;ナデ	淡燈褐色	白色、半透明砂粒	口径22.8	
	14	壺	*屈曲部をわずかに表現し、長く直立気味の二重口縁を呈する。	不明	淡燈茶褐色	若干の砂粒	口径13.8	
	15	壺	*屈曲部に明瞭な稜を持つ二重口縁。 口縁は外反気味に直立。	*口縁部・内外面;ナデ(ヨコ)、体部内面;ヘラケズリ(ヨコ);外面;ハケ	淡茶褐色	細砂粒含む。	口径11.1	
	16	壺	*やや外方に直線的のびる口縁部。	*内外面;ヘラミガキ	赤茶褐色	大粒の白色、半透明砂粒含む。	口径11.8	
	17	高杯脚	*脚柱は中空で直立し、脚部ハの字に開く。 やや丸みを帯びる杯底部わずかに残存。	杯部・外面;ヘラミガキ(タテ)、脚部;ヘラミガキ(ヨコ)、裾付近はヨコハケ後タテミガキ。	明茶褐色	白色・半透明砂粒含む。	脚部径11.7 残存高9.0	
S X 0 2	18	台杯壺	*小形の二重口縁壺にハ字形の脚台をもつ。 口縁部外面に弱い擬凹線(7条)、体部最大径は中位で球形を呈する。 器壁薄い。	*口縁部内面;ヘラミガキ、体部内面;ヘラケズリ(ヨコ)、下位はタテ、外面;ヘラミガキ(ヨコ)脚部;内面;ケズリ、外面ヘラミガキ(タテ・ナナム)。体部底は小円孔に粘土を充填する。	明茶褐色	細砂粒含むが精良。	口径14.1 器高15.2 脚部径8.4	
S X 0 3	19	台付壺	*短く直立する頸部に外反気味にのびる二重口縁を呈する。体部最大径はやや下方にあり、下膨れ気味。脚台は、小さく緩く広がり、中位で緩く屈曲する。	*口縁部・内面;ヘラミガキ(ヨコ)、外面;ナデ(ヨコ)、頸部体部・内面;ヘラケズリ(ヨコ・ナナム)、外面;ヘラミガキ(ヨコ・ナナム)、脚台内外面;ナデ(ヨコ)、外面端部にヨコミガキ。 *体部は、幅4~5cmの粘土帯を内傾接合。	暗茶褐色	白色・半透明砂粒含む。	口径17.8 器高27 脚径12.7	
	20	壺	*頸部屈曲した後、内上方へ短くつまみ上げる口縁部。外傾する面を持つ。肩の張る体部	*口縁部・内外面;ナデ(ヨコ)、体部・内面;ハケ後ナデ、指圧痕、外面;ハケ(タテ・6条/1cm)	淡黄白色	白色・半透明砂粒を多く含む。	口径16.2	*弥生土器(埋土中混入)。 *口縁・体部にスス附着。
	21	壺底部	*しっかりとした平底	*内面;ハケ(タテ)6条/5mm、内底に指圧痕、外面;ヘラミガキ(タテ)後ナデ。底面;ハケ・ナデ	黄褐色	白色・半透明砂粒多く含む。	底部径5.8 残存高5.1	*弥生土器(埋土中混入)。 *20と同一個体の可能性大。
S X 0 5	22	壺	*頸部で大きく屈曲し、内傾気味に短くのびる口縁部。端部外面に弱い凹線の痕跡。	*口縁部・内外面;ナデ(ヨコ)、体部・内面;上位ハケ(タテ・ヨコ)、下位ケズリ、指圧痕、外面;ハケ(タテ)7条/cm。	黄灰褐色	白色・半透明砂粒多く含む。	口径13.6	*弥生土器。 *体部にスス附着
	23	壺	*頸部で大きく屈曲し、短く直立する口縁部。	*口縁部・内外面;ナデ(ヨコ)、体部・内面;ハケ(タテ・ヨコ)6条/1.3mm指圧痕外面;ハケ(タテ)6条/8mm。	黄灰褐色	白色・半透明砂粒多く含む。	口径11.0	*弥生土器。 *体部にスス附着



S X 13 攪 乱 土	24	高杯	*緩く外方へ広がる浅い杯部で端部が短く直立。端面はやや内傾。	*内面;ヘラミガキ(タテ)、外面;ヘラミガキ・ケズリ。	淡橙褐色	白色半透明砂粒多く含む。	口径26.0	*弥生土器。
	25	壺口縁	*丸みを帯びる口縁部を持つ「ナア壺」。	*内外面;ナデ(ヨコ)、頸部内面にケズリ。	淡褐色	白色半透明砂粒含む。	口径15.6	
	26	高杯 (鉢か?)	*丸みを帯びる体部で、*口縁部は外方へ短く折り返す。	*口縁部・内外面;ナデ(ヨコ)、内面はミガキか?	淡褐色	白色半透明砂粒含む。	口径14.1	
	27	壺口縁	*大形の二重口縁壺。大きく屈曲し直立気味の口縁部。屈曲部は、若干下方へ突出。	*内外面;ナデ。	暗橙褐色	白色半透明砂粒多く含む。	口径27.8	
	28	高杯脚	*細い脚柱からハの字状に広がる。中位に3か所に円孔を持つ。	*内面;脚柱ケズリ、下方ハケ(ヨコ・ナナメ)14条/1.4cm、外面;ヘラミガキ(タテ)。	乳褐色	白色半透明砂粒含む。	脚部径14.0 残存高8.7	
	29	脚台	*19と同様の脚か?	*内面;上位ケズリ(ヨコ)	淡黄褐色	白色半透明砂粒含む。	脚部径11.0 残存高5.2	
	30	蓋	*つまみ中央部が凹む。	内外面;ナデ。	淡黄灰色	細砂粒含む。	残存高4.0	

付表4 内和田古墳群墓壙規模一覧表(m)

	墓壙規模		木棺規模	
	長	幅	長	幅
4号墳	2.90	1.50	1.75	0.35
S X 01	4.54	3.00	2.54	0.76
S X 02	2.78	1.90	1.77	0.54
S X 03	3.60	2.34	2.11	0.66
S X 04	2.94	2.22	2.19	0.57
S X 05	1.30	(-)		
S X 06	2.28	1.08		
S X 07	(-)	0.80		
S X 08	2.50	1.30		
S X 09	2.68	1.30	2.24	0.55
S X 10	2.56	1.06		
S X 11	2.22	1.08		
S X 12	3.43	1.84	2.02	0.54
S X 13	2.36	0.90	2.00	0.35
S X 14	1.00	0.48		
S X 15	0.98	0.64		
S X 16	0.92	0.54		
S X 17	-	0.80		
S X 18	1.30	0.80		

墳の地点が、新たに造成されたものと考えることができる。

以上、5号・4号・2号墳をⅡ期として取り扱ったが、古墳群の時期は、出土土器を中心に検討を行わなければならないが、在地土器群については、現時点では当該時期の土器資料に乏しく、その時期比定にも慎重を要する。ここでは、5号墳 S X 01 出土の供献土器群を古墳時代前期前半頃とし、2・4号墳については一部前期後半に及ぶものと、幅を持たせて考えておく<sup>(注2)</sup>。

この他、5号墳平坦面の北・西をめぐる浅い溝及び、不定形の土坑については、その時期を決しがたいが、攪乱土中からは、平安時代末頃・江戸時代の土器片、さらに戦前には、祠が建てられていたこともあり、近世以降の瓦片等も出土している。いずれ

かの時期に伴うものとみてよと考えられる。

ほぼ以上のような状況であるが、その他の出土遺物の問題も含め、さらに検討を行い、別の機会に報告を行いたい。

(森 正)

## (2) 嗎岡遺跡

### 1. はじめに

嗎岡遺跡は、京都府与謝郡加悦町字後野小字嗎に所在する。嗎岡遺跡は、1979年、加悦町教育委員会の後野円山古墳群発掘調査により、縄文時代から中・近世にいたる遺物が出土し、付近に広範囲に及ぶ遺跡の存在が推測された。そこで、当センターでは発掘調査に先立ち、遺跡の性格・範囲をより明確にするため試掘調査を行った。現地調査は平成4年1月13日から開始し、同年2月28日に現地作業を終了した。調査面積は約250m<sup>2</sup>となった。

### 2. 調査概要

嗎岡遺跡は、野田川東岸の中位段丘上に立地する。この段丘は、平野部から入り込むいくつかの谷により4つの小丘陵に把握できる。調査に際しては便宜上、南からA・B・C・D地区と呼称した。以下、各地区に設定したトレンチの状況を簡略に報告する。

①A地区 A地区では1～3の計3か所のトレンチを設定した。

A-1トレンチ A地区平坦面ほぼ中央に設定した3m×10mのトレンチである。層序は、表土を除去すると、約40cmの暗灰色土層があり、その直下で暗橙褐色粘質土である地山面となる。遺物は、この暗灰色土層より大部分が出土している。遺物には中・近世土器、縄文時代早期に属する押型文土器、黒曜石剝片などが出土し、遺構としては時期不明のピット・土坑などが検出された。

A-2トレンチ A地区西斜面側に設定した3m×3mのトレンチである。表土除去後、暗灰色土層を介し地山面に至る。西側部分では旧表土と考えられる黒色土が認められ、その上に地山ブロックを含む灰褐色土層が認められた。遺物・遺構は検出されなかった。

A-3トレンチ A地区南端で確認した古墳状隆起に対して設定したトレンチである。まず、古墳状隆起を中心に対しトレンチを設定したところ、幅約2mを測る周濠と思われる溝を確認した。そこで、古墳の規模・形態及び主体部の有無を確認するため、さらに2か所のトレンチを設定した。中央に設定したトレンチをA-3 aトレンチ、東に設定したトレンチをA-3 bトレンチ、A-3 cトレンチとする。

A-3 a・A-3 bトレンチでは主体部確認のため墳頂部平坦面について面的な拡張を行った。表土を除去した段階でA-3 bトレンチ東端で須恵器甕2点・須恵器杯1点を検出した。このことから、この古墳状隆起が古墳であることが確実となった。トレンチ南端

では主体部と思われる土色の変化を確認した。主軸を東西にとるが、その規模についてはトレンチ外に出るため明らかにできなかった。また、この主体部に平行して別の主体部と思われる土色の変化を北側で確認しているが、盛り土の下層から掘り込まれているらしく、北辺部分については掘形を確認することができなかった。周濠は3か所のトレンチ各々で確認された。この周濠から復原される古墳の規模・形態は直径約18mの円墳になるものと



第25図 周辺地形図及びトレンチ配置図(1/2,000)

推定される。築造時期は、出土した須恵器からほぼTK47型式に並行する時期と考える。

②B地区 B地区では3か所のトレンチを設定した。

B-1トレンチ B地区の中央に設定した2.5m×21mのトレンチである。層序は表土ー暗灰色土ー暗橙褐色粘質土(地山)の順である。遺物は、中・近世土器が出土した。大部分が江戸時代の所産と考えられる。遺構としては、時期不明のピット・溝状遺構がある。

B-2トレンチ B-1トレンチの西側に設定したトレンチである。3m×4mの範囲で集石を検出し、石材の間から土師器片が出土した。集石の性格として墓である可能性が高い。また、トレンチ周辺にも石材が散在しており、複数の墓が存在すると予測される。

B-3トレンチ B-2トレンチに平行するかたちで東側に設定した1.2m×14.5mのトレンチである。層序はB-1トレンチと同様である。遺構・遺物とも確認されなかった。

なお、B地区ではこの他に調査期間中に実施した分布調査により丘陵北斜面で須恵器甕片を表採している。

③C地区 C地区では古墳となる可能性が考えられたため、十字にトレンチを設定した。基本的層序は他地区と同様であるが、表土から地山面まで約10cmと浅い。遺構として丘陵先端に直交する溝状遺構を検出した。埋土に遺物を含まず時期・性格などは不明である。

④D地区 丘陵に対し直交方向に設定した5m×10mのトレンチである。基本的な層序は他地区と変わらない。この地区は近年まで畑地として耕作されていたため、南北方向の畝痕跡が各所で検出された。なかには石を詰めた暗渠状の溝も存在した。遺構としてはこれら畝に切られるかたちで尾根筋に平行する溝を1条検出した。規模は幅約1m・深さ10cmを測る。断面形は緩い弧状を呈する。総延長約10mを確認し、さらにトレンチ外へのびる。溝埋土からは擬凹線をもつ弥生土器が出土しており、この溝の時期を弥生後期に比定できる。遺物には、この他に耕作土出土の中・近世土器、鉄滓、石器などがある。

### 3. まとめ

今回の調査で明らかになった点などを列記してまとめたい。

①縄文早期の押型文土器は、後野円山古墳下層から出土していた。今回の調査ではA-1トレンチ、A地区で確認した古墳の周濠から黒曜石の剝片を伴い押型文土器が出土している。また、A地区東方に広がる平坦面でも押型文土器を表採しており、遺跡の範囲はかなり広範囲に及ぶものと推測される。面的調査により遺構が検出される可能性がある。

②弥生時代ではD地区で検出した後期の溝がある。過去の調査でも擬凹線をもつ土器の出土は知られていたが、具体的な遺構の検出は初例であり、遺跡の性格について考える好資料を提供できるものとする。

③古墳時代ではA地区で新たに古墳の存在を確認できたことを大きな成果としてあげることができる。この段丘上では、七面山古墳・後野円山古墳群といった首長系譜を引く大形墳の存在が知られていた。今回検出の古墳は規模こそ小さいものの、その築造時期は5世紀末頃に比定され、方墳である後野円山2号墳と近接した時期の築造と考えられる。

(石崎善久)

## おわりに

調査に際し、京都府宮津土木事務所・加悦町教育委員会・京都府教育委員会・同与謝教育局・同宮津地方振興局・京都府立丹後郷土資料館等の関係諸機関に御協力いただいた。また、調査作業員・補助員として地元の方々・学生諸氏の協力を得た。記して感謝する。

調査参加者の氏名は以下のとおりである(順不同・敬称略)。

大崎康文・松室孝樹・西世津子・斉藤 優・中前幸子・杉原美加・林田登之・羽生夕紀子・森 友美・長岡深緒・保坂 亨・小椋博之・森岡梅子・野村幸代・高橋志津子・杉本利一・小牧義雄・香山利幸・土井正一・能勢 昇・山上初野・市田操子・佐賀伝江・西村律子・中西たつ江・細野貴代巳・大江義雄・山本まき枝・山本むつ枝・西原久枝・小西久江・小田初江・小田静枝

また、現地調査ならびに本概報作成にあたって、下記の方々からご指導・ご協力を得た。記して謝意を表します(順不同・敬称略)。

佐藤晃一・都出比呂志・和田晴吾・浪江庸二・岡田晃治・下川賢司・広瀬和雄・山上弘・禰宜田佳男・上田 睦・安田 章・肥後弘幸・森下 衛・細川康晴・安 英樹・羽生夕紀子・森 友美・上田いずみ・吉水ゆう子

(森 正・石崎善久)

注1 表採の須恵器杯蓋1点が、加悦町で保管されている。5世紀末葉頃(TK47型式併行)である。

注2 5号墳については、該当する時期の墳墓として近年調査された弥栄町大田南2号墳があり、出土土器から4世紀中葉の年代が考えられている。宮津市波路古墳も同様の時期かと考えられる。また、弥栄町奈具岡遺跡S2号方形周溝墓では、土器群とともに定角式鉄鏃が出土しており、古墳時代初頭の例として注意される。5号墳の土器群は、前2例より古相を示す奈具岡例に近いものと考えられる。

肥後弘幸他『大田南古墳群』(京都府弥栄町文化財調査報告第7集 弥栄町教育委員会) 1991  
中嶋陽太郎『波路古墳・波路城跡・荒神社跡』(宮津市文化財調査報告第16集 宮津市教育委員会) 1988

川西宏幸他『奈具岡遺跡発掘調査報告書』財団法人古代学協会 1985

## 2. こくばら野遺跡発掘調査概要

### 1. はじめに

こくばら野遺跡の発掘調査は、一般国道178号の道路新設改良事業(神野バイパス)に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。平成2年度には用地買収の終了していた部分について試掘調査と本調査を行い、平成3年度に残り部分の本調査を行った。平成2年度の調査期間は平成2年7月26日から同年12月13日までで、調査面積は約800㎡、平成3年度の調査期間は平成3年5月14日から同年8月30日までで、調査面積は約700㎡である。調査に要した費用は全額京都府が負担した。

### 2. 位置と環境

こくばら野遺跡は、熊野郡久美浜町大字甲山小字古君原野に位置する。遺跡は、久美浜湾東岸の標高11～12mの段丘上に立地している。この段丘は、久美浜湾との間にある低い山塊から派生したもので、段丘面は北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。段丘の北東から南東側にかけては谷に向かう急傾斜の斜面で、特に南東側は絶壁状を呈している。段丘上の地山は、淡黄色のシルト質粘質土であるが、南東側の絶壁状の斜面の露頭の観察によれば、粘質土の下層には白色砂層が堆積している。この砂層はあまり締まっておらず、ところによっては流出して上層の粘質土がオーバーハングした状態になっている。段丘東側の谷は、南に延びており、蓮池と呼ばれる大きな池を経て川上谷川流域の低湿地につながっている。この谷は、湧水の豊富な湿地帯で、現在耕作されている水田も腰までつかるような深田である。

この遺跡の立地する久美浜湾東岸に発達した海岸段丘上には長良遺跡、日光寺遺跡、浦明遺跡などの集落遺跡が分布している。長良遺跡は、この遺跡の北北東約1.6kmに位置する遺跡で、奈良時代の掘立柱建物跡、柵跡などが検出され



第26図 調査遺跡位置図



第27図 調査地周辺遺跡分布図

- 1.長良遺跡    2.日光寺遺跡    3.浦明遺跡    4.こくばら野遺跡    5.雲晴遺跡

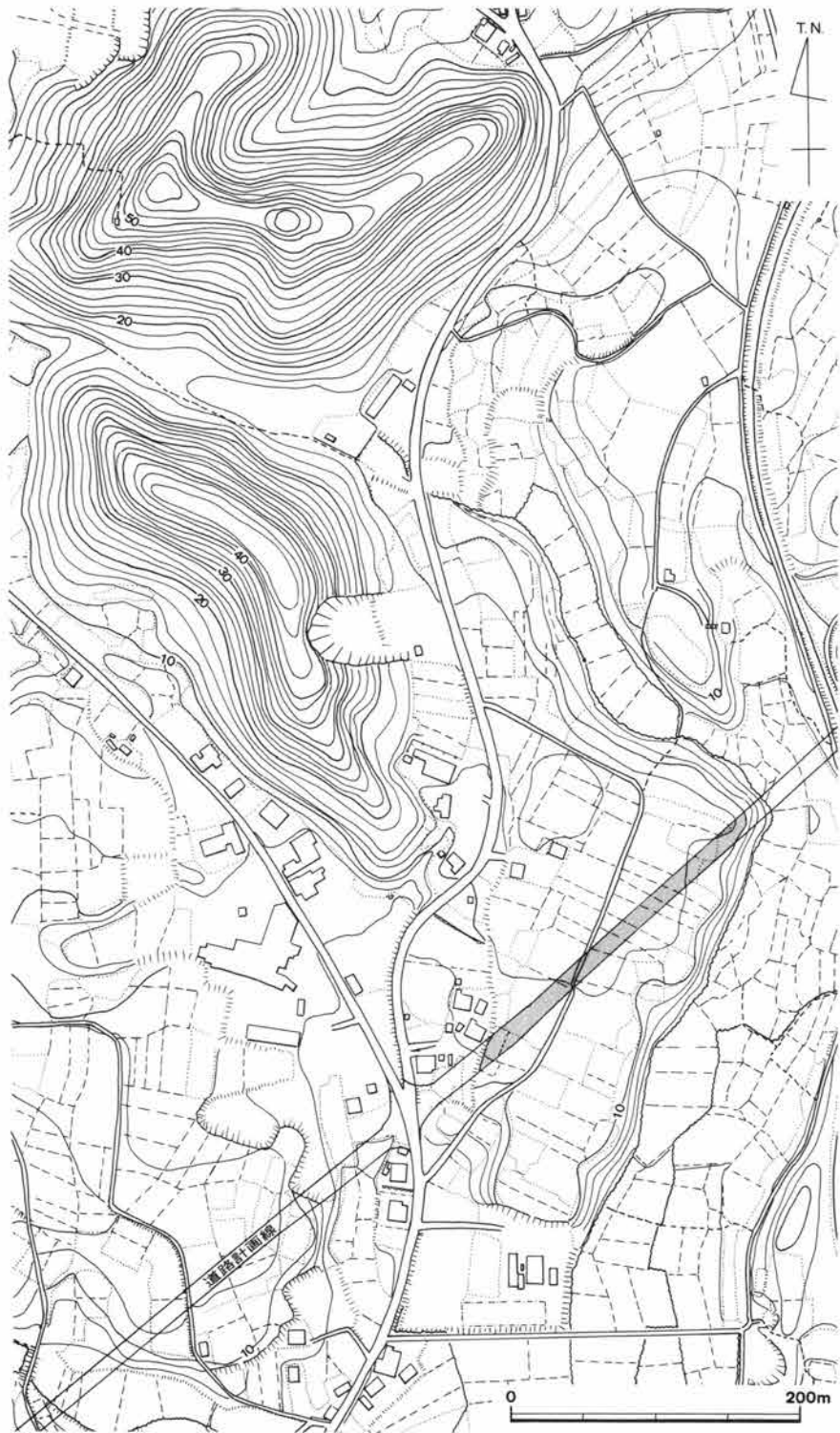
ている。日光寺遺跡は、この遺跡の北北東1.3kmに位置し、長良遺跡とは小さな谷をはさみ相対している。日光寺遺跡では弥生時代中期のピット、古墳時代の竪穴式住居跡、飛鳥時代末から奈良時代にかけての掘立柱建物跡群・<sup>土</sup>胞衣埋納遺構と考えられる土坑、平安時代の掘立柱建物跡、青磁椀を副葬した鎌倉時代の墓など、各時代の遺構が良好に検出されている。弥生時代の環濠集落として有名な浦明遺跡は当遺跡の北北東約1.0kmに位置する。浦明遺跡では、弥生時代の遺構の他に、古墳時代の竪穴式住居跡、中世の堀などが検出されている。この遺跡の位置する段丘上においても奈良時代の須恵器・土師器をはじめ、多くの遺物が表面採集されており、発掘調査で集落関係の成果の得られることが予想された。

### 3. 調査経過

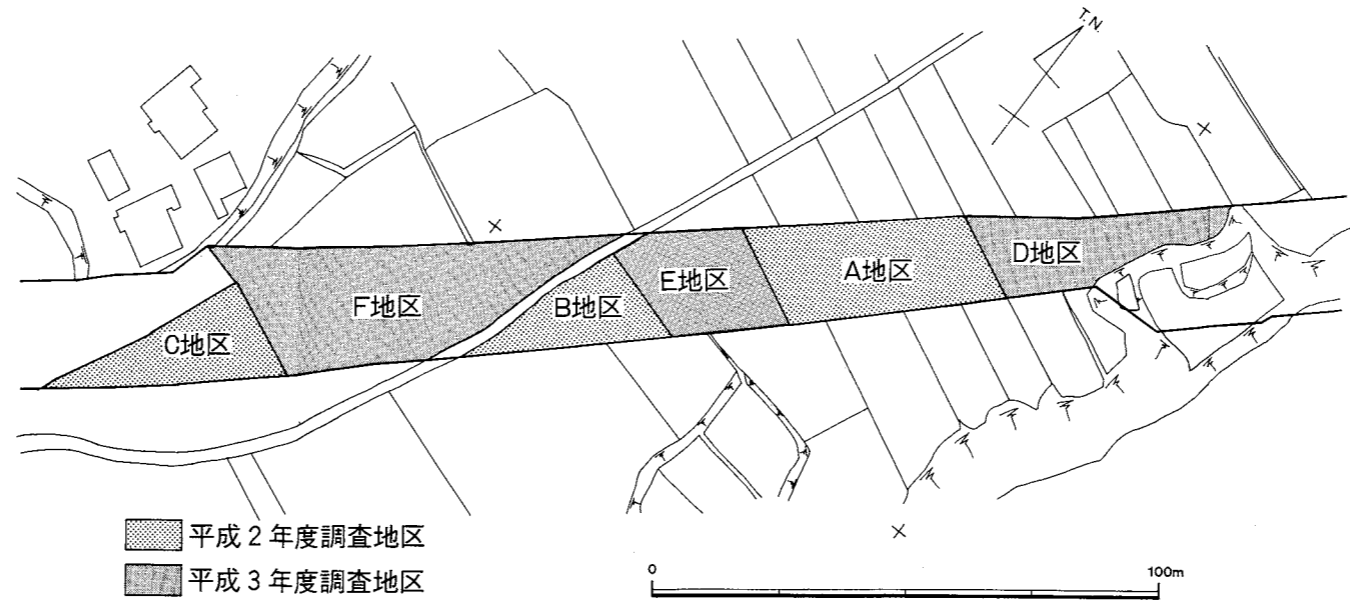
調査地の現状は畑及び果樹園であった。試掘調査着手時には調査対象地内に未買収地が残っていたために、とりあえずすでに用地買収の終了していた部分を北東から順にA地区、B地区、C地区として、各地区に幅約2mのトレンチを設定して試掘調査を行った。試掘調査の結果、A地区の北西側に道路計画線に沿って設定したトレンチでは、Y=97,240ライン付近より東側では厚さ5cm前後の薄い包含層の存在していることが判明した。また、B地区から北東側では遺構が存在していることが確認され、包含層の遺存している部分では良好な状態で遺構が検出された。また、C地区では遺構・遺物ともにまったく認められず、すでに削平を受けているものと判断された。試掘調査終了時になっても、調査対象地の残り部分については、用地買収の見込みが立っていなかったため、A地区、B地区の本調査を平成2年度に行うこととなった。平成3年度の調査は、前年度の未調査地を北東から順にD地区、E地区、F地区として行うこととしたが、原因者側から、遺跡北東側の谷に架かるバイパス橋梁工事のための仮設進入路を調査地内に設けたいとの要請があり、調査地南東側半分に進入手を設けた。遺構が顕著であったD地区については北西側の調査を終了したのちに協議を行い、進入路を付け替えて南東側の調査を行うこととなった。このために、D地区の北西側と南東側にまたがる掘立柱建物跡の確認を現地においても図上で行わざるをえず、また、全体写真の撮影ができないなど、現地調査に不都合が生じた。E地区においてはB地区で検出していた溝の続きと掘立柱建物跡を検出した。F地区においては、幅約2mのトレンチを設定したが、C地区と同様に調査対象となる遺構・遺物がまったく検出されず、遺構の存在している範囲は段丘中央を通過している農道の東側に限られるものと判断した。

なお、調査用の座標は道路予定地中心線付近に任意の基準点を設けて行った。調査用座標の道路延長方向への基準線は真北に対して東に約47°55′振っている。

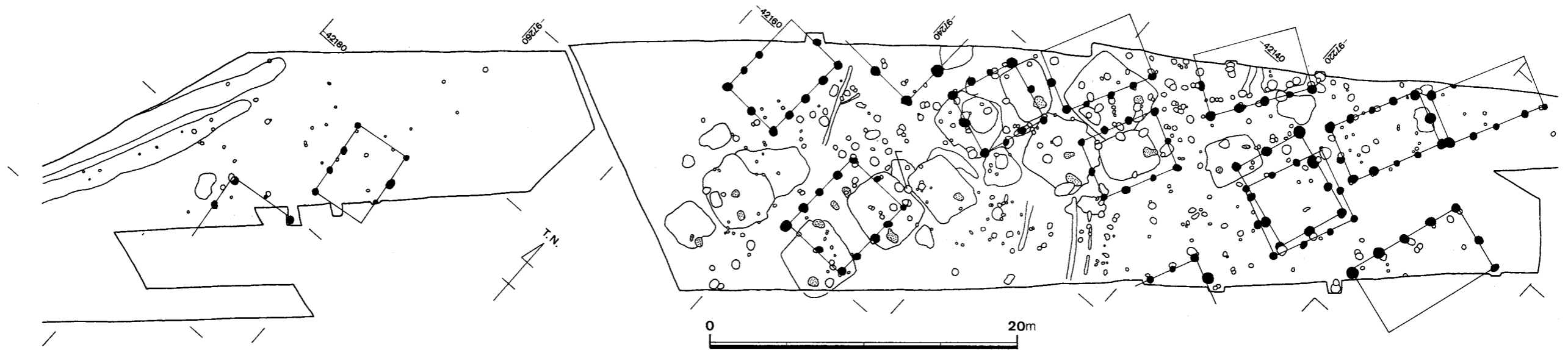




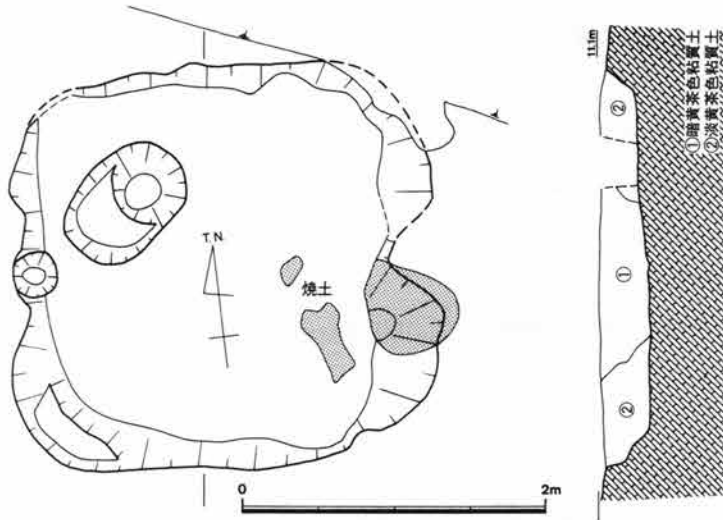
第28図 調査地周辺地形図(アミ部分が調査対象地)



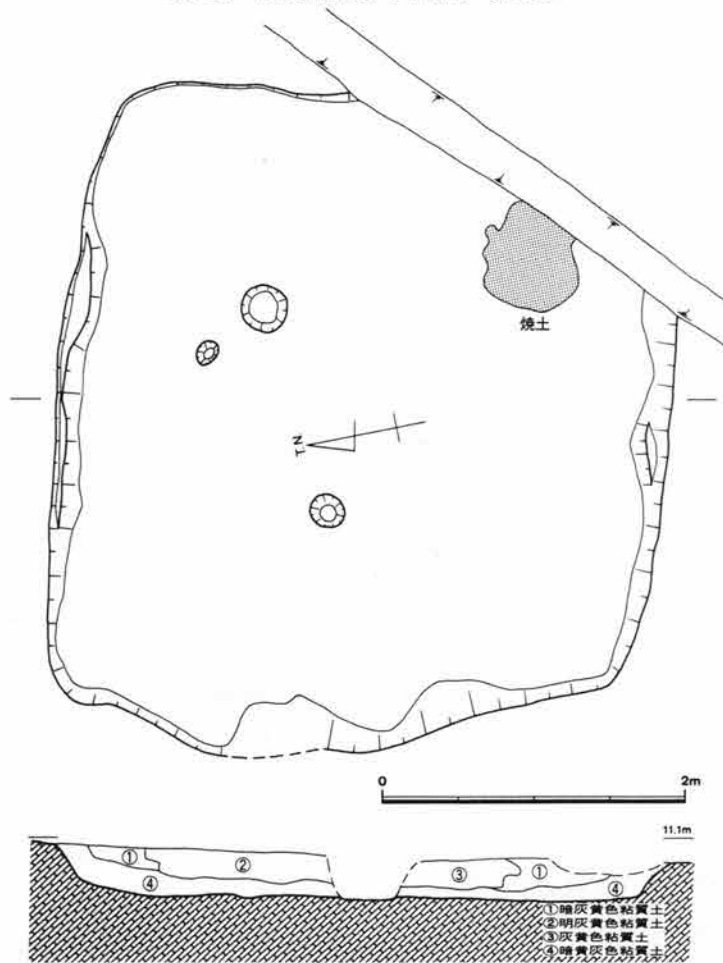
第29図 調査地区位置図



第30図 検出遺構配置図



第31図 竪穴式住居跡1 平面図・断面図



第32図 竪穴式住居跡2 平面図・断面図(1/40)

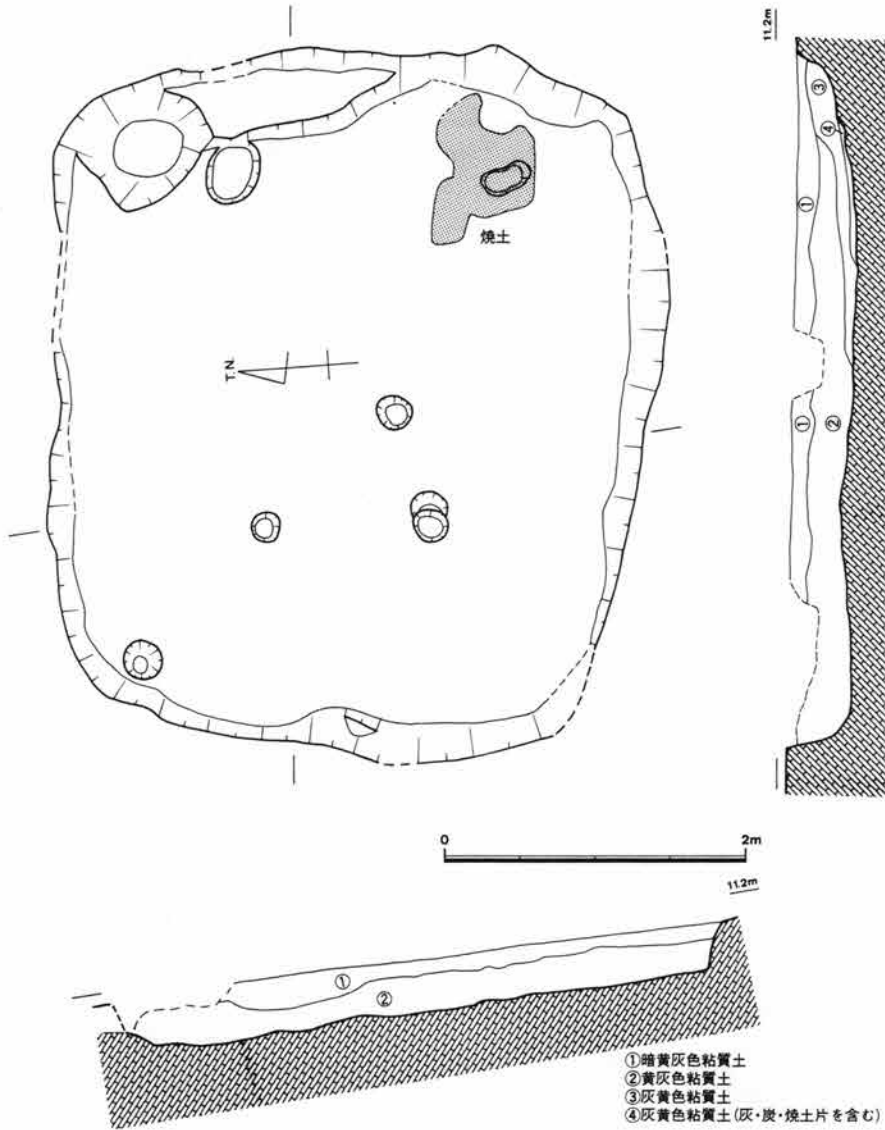
#### 4. 調査概要

##### (1) 検出遺構

今回の調査ではA地区、D地区を中心に多くの遺構が検出された。検出された遺構には  
竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝、ピットなどがある。竪穴式住居跡と掘立柱建物  
跡については、復原できたものすべてについて述べるが、その他は主なものとどめた。

##### ① 竪穴式住居跡

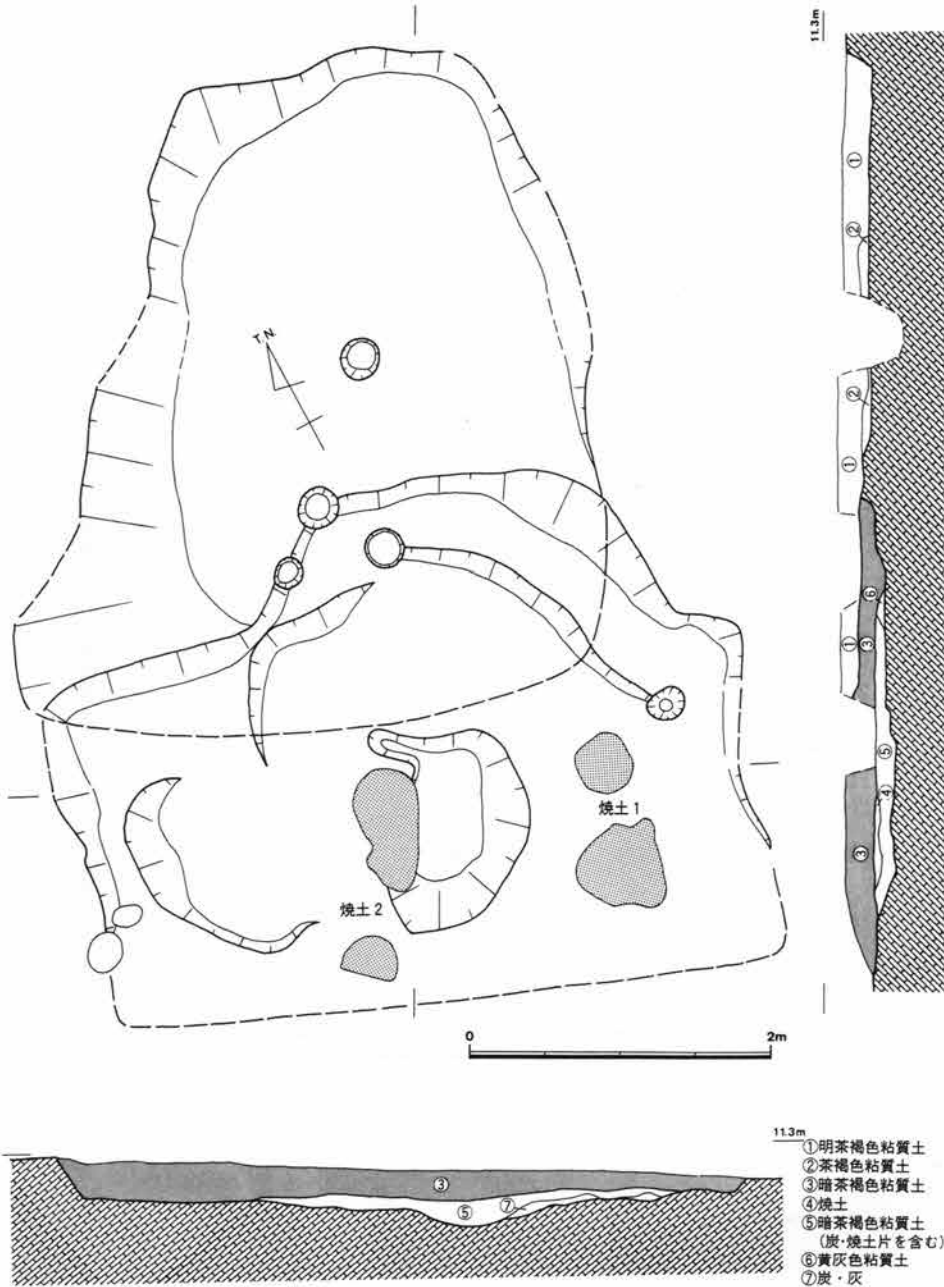
竪穴式住居跡は全部で11棟検出した。住居跡の規模などは付表5に示したとおりである。



第33図 竪穴式住居跡3 平面図・断面図(1/40)

竪穴式住居跡1 (第31図)

2.6m×2.8mを測る東西に長い隅丸長方形プランで、深さは約30cm残っていた。周壁溝はなく、壁は床面から緩やかに立ち上がっている。東辺南寄りに竈が設けられ、床面と壁が赤く焼けているほか、検出面にも三日月状の赤変が認められた。床面に長径0.86m・短

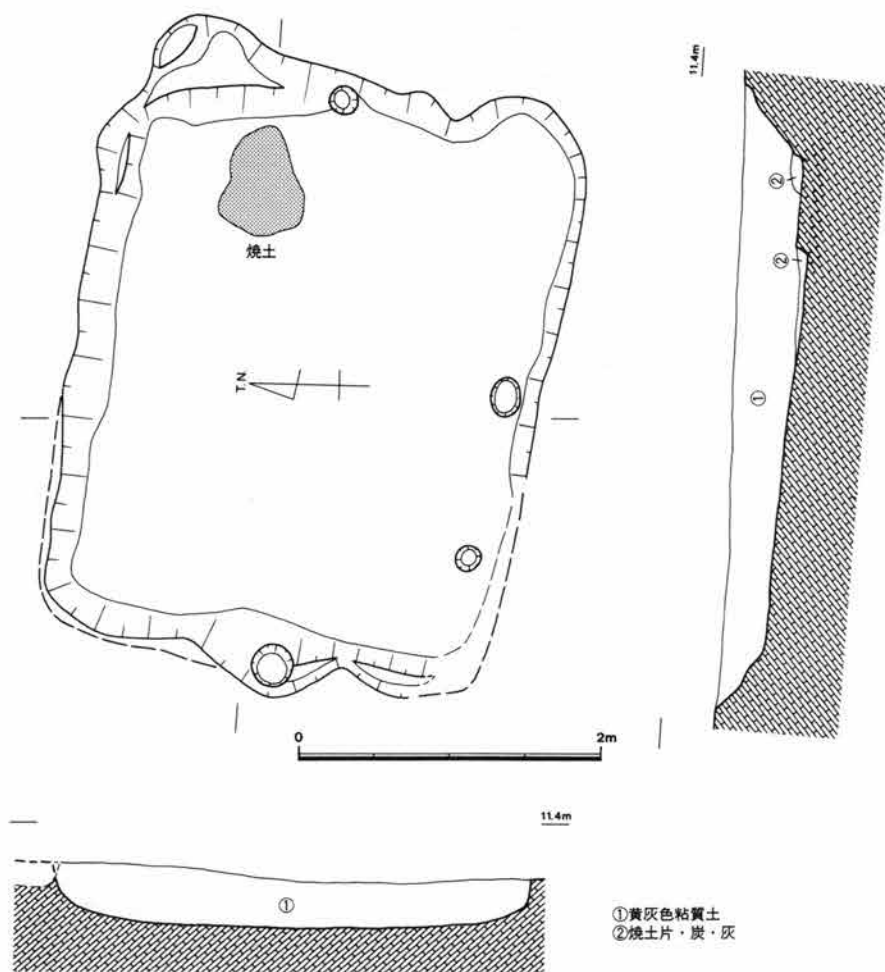


第34図 竪穴式住居跡4・土坑2 平面図・断面図

径0.59m・深さ0.16mを測る二段掘りのピットが検出された。西辺中央部には、床面からの深さ0.48mを測るピットがあり、柱穴になるように思われたが、対応する柱穴は認められなかった。埋土は黄茶色系の粘質土で、人為的に埋められたようである。

竪穴式住居跡 2 (第32図)

4.1m×4.3mを測る東西に長い隅丸長方形プランで、深さは約30cm残っていた。周壁溝はない。東辺南寄りの床面が赤く焼けていることから、この場所に竈が設けられていたものと考えられる。床面で検出したピットは深さ20cm足らずしかないうえ、住居跡の各辺に平行して並ぶものがないので、柱穴とするには若干疑問がある。埋土は最下層の④層が自然に堆積したのち、人為的に埋められたものであり、住居廃絶後しばらくの間埋め戻しが行われなかったことを示している。



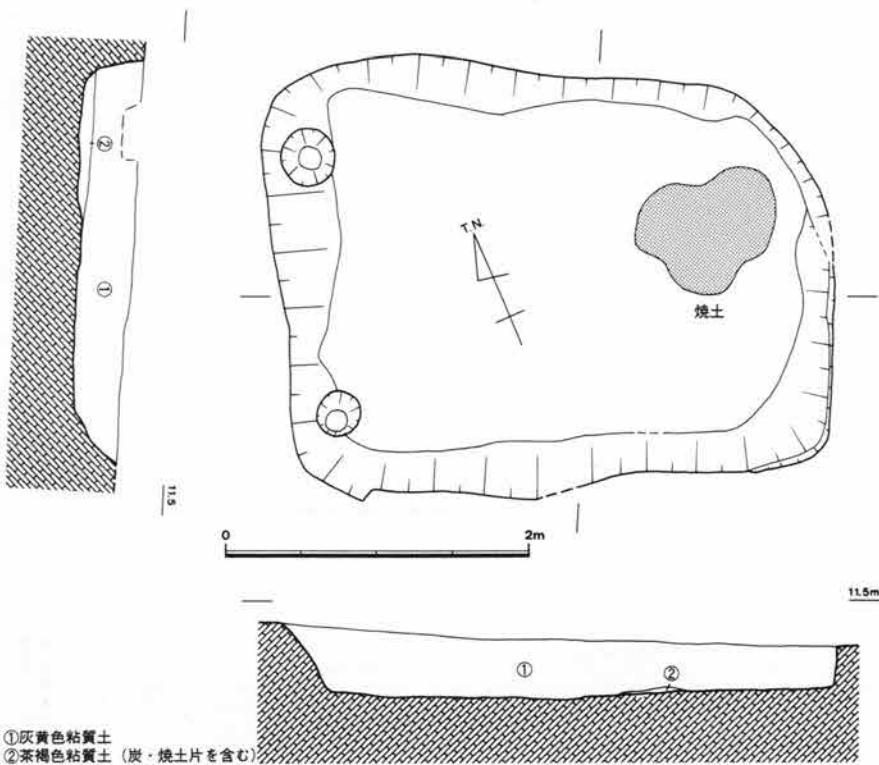
第35図 竪穴式住居跡 5 平面図・断面図

竪穴式住居跡 3 (第33図)

3.9m×4.6mを測る東西に長い隅丸長方形プランで、深さは約40cm残っていた。周壁溝はなく、壁は床面から緩やかに立ち上がり、東辺南寄りに竈を設けている。この部分の床面は赤く焼けているが、壁は焼けていない。床面の焼土中に浅い窪みが認められ、支脚を据えた場所ではないかと思われる。床面で検出したピットのうち、住居跡の短辺に平行して並ぶ2基は支柱穴と思われ、西壁近くの1基は住居の入口にかかわるものであろうか。

竪穴式住居跡 4 (第34図)

北側を土坑2によって失い、南側を攪乱により削平されているため、本来の平面形ははっきりとしないが、長辺4.5mを測る東西に長い竪穴式住居跡と思われる。焼土が2ブロック検出され、いずれも竈に伴うものと思われた。中央には不整形の浅い土坑があり、焼土1から流れ込んだ炭と、焼土混じりの暗茶褐色粘質土が堆積している。この上面に焼土2があるので、焼土1が古く、焼土2が新しいことがわかる。短辺に竈を築くことを通例とするこの遺跡の竪穴式住居跡のあり方とは異なっており、疑問が残るが、竈を作り替えたものと解釈している。

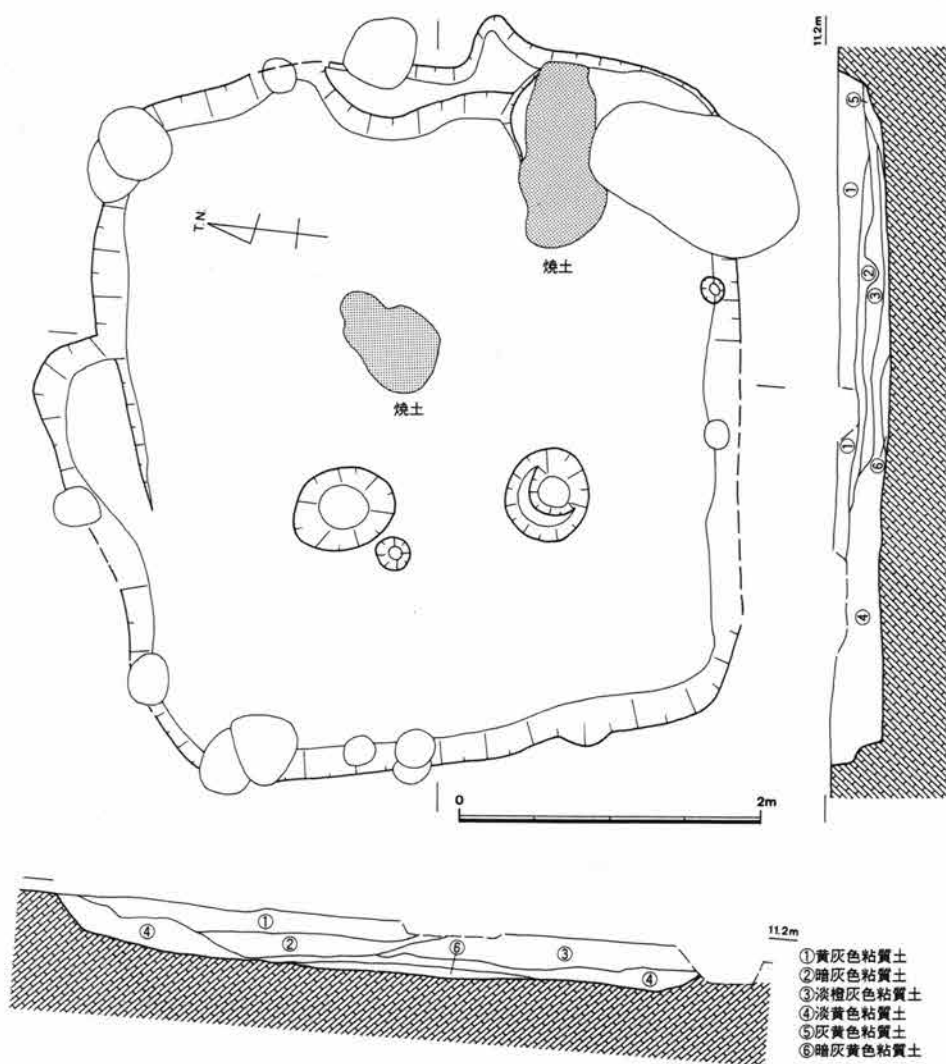


①灰黄色粘質土  
②茶褐色粘質土 (炭・焼土片を含む)

第36図 竪穴式住居跡 6 平面図・断面図

竪穴式住居跡 5 (第35図)

3.1m×4.1mを測る東西に長い隅丸長方形プランで、深さは約40cm残っていた。周壁溝はなく、壁は床面から緩やかに立ち上がっており、東辺北寄りに竈が設けられている。この部分の床面は赤く焼けているが、壁は焼けていない。なお、北西隅の一部分が後世の浅い土坑によって切られていることが断面観察等によって判明したが、検出面において平面形を確認することはできなかった。短辺中央の相対する位置に深さ約40cmのピットがあり、支柱穴になるものと思われる。また、南辺に沿って検出された2基のピットは住居の入口を示すものと考えられる。



第37図 竪穴式住居跡 7 平面図・断面図



竪穴式住居跡 6 (第36図)

2.8m×3.6mを測る東西に長い隅丸長方形プランで、深さは約40cm残っていた。周壁溝はなく、壁は床面から緩やかに立ち上がり、東辺北寄りに竈を設けている。この部分の床面は赤く焼けているが、壁は焼けていない。西辺の壁が立ち上がる部分に2基のピットが検出されており、支柱穴になるものと思われるが、東辺には対応するピットがない。

竪穴式住居跡 7 (第37図)

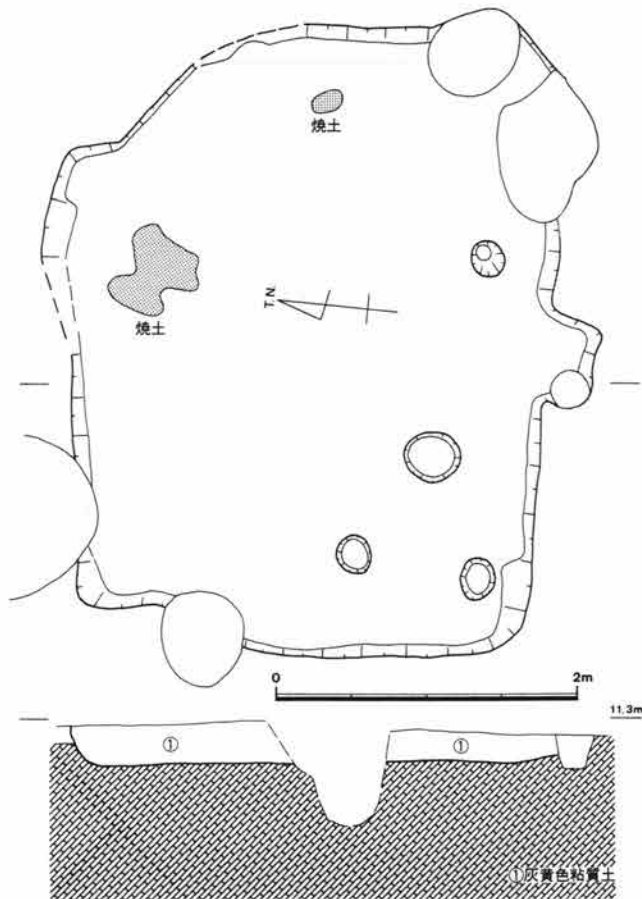
4.3m×4.6mを測る東西に長い隅丸長方形プランで、深さは約30cm残っていた。周壁溝はなく、壁は床面から緩やかに立ち上がっており、東辺南寄りに竈が設けられている。この部分の床面と壁が赤く焼けている。また、竈とは独立して床面中央付近に焼土がある。支柱穴としては直径約60cmのピット2基が検出されており、それぞれの深さは60.3cm(北)、73.2cm(南)を測る。南辺の小さなピットは入口にかかわるものであろうか。住居跡の埋土はブロック土を多く含む粘質土である。

竪穴式住居跡 8 (第38図)

3.5m×4.2mを測る東西に長い隅丸長方形プランで、深さは約30cm残っていた。周壁溝はなく、壁は床面から緩やかに立ち上がっており、北辺東寄りに竈が設けられている。竈が長辺に設置されている点で、他の住居跡と異なっている。床面で検出されたピットはいずれも深さ20cm足らずの浅いもので、明確に支柱穴と認定できるものはない。

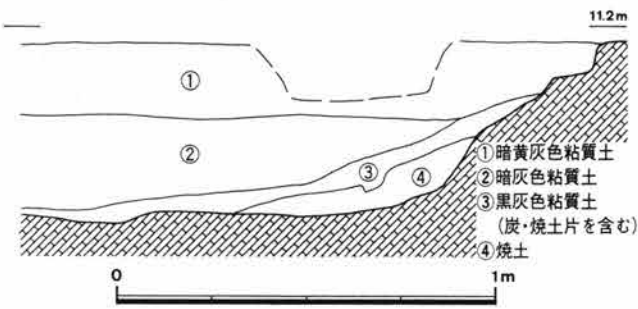
竪穴式住居跡 9 (第39・40図)

3.0m×3.7mを測る南北に長い隅丸長方形プランで、深さは約50cm残って



第38図 竪穴式住居跡 8 平面図・断面図

いた。周壁溝はなく、壁は床面から緩やかに立ち上がっている。北辺東寄りに竈が設けられており、床面と壁及び検出面の一部にも焼土が認められる。東辺中央に床面からの深さ約70cmのピットがあり、主柱穴になるものと思われる。これに対応するピットが西辺中央部に想定されるが、後世のピットによって失われたものと考えられる。床面の一部には第③層灰黄色粘質土の堅く締まった貼り床が認められた。竈部分に設定した畦の観察によると、焼土の上には炭、焼土片を含む黒灰色粘質土が堆積している。竈の構築物は検出されず、また埋土中にも竈に使用されたような粘土は認められない。この状況はここで検出

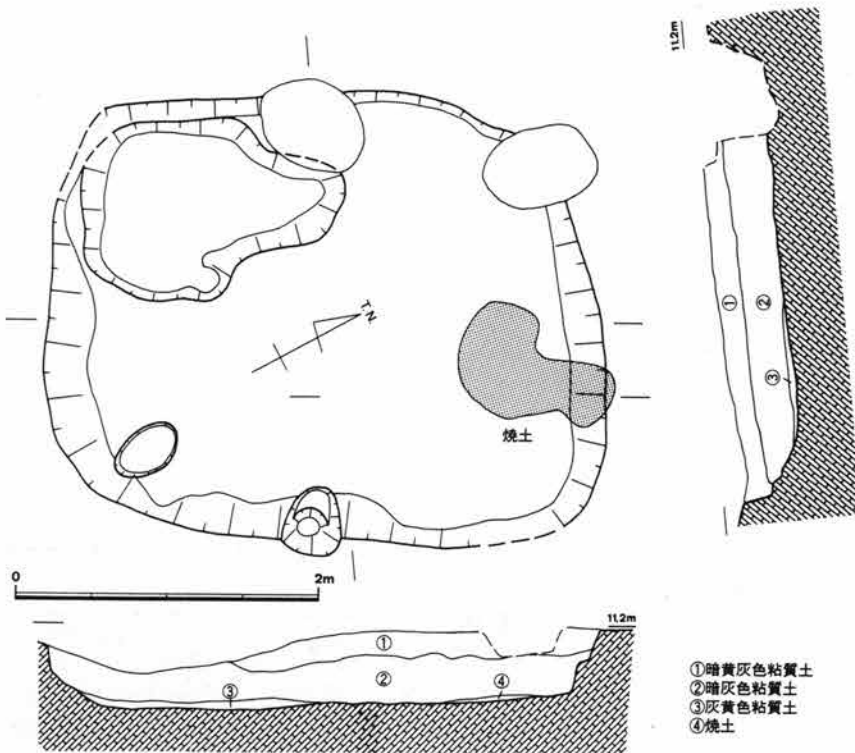


第39図 竪穴式住居跡9 竈部分断面図

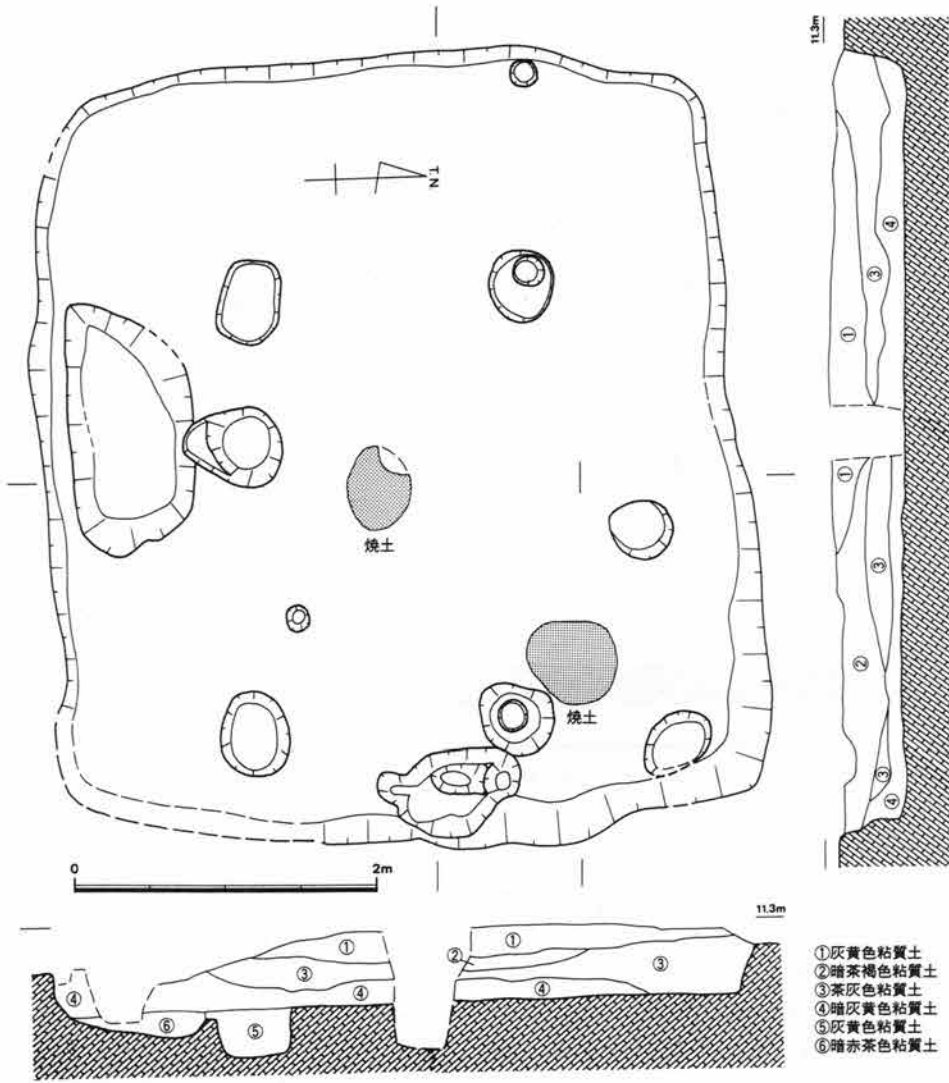
された竪穴式住居跡に共通しており、竈がどのような構造をしていたかは不明である。

竪穴式住居跡10(第41・42図)

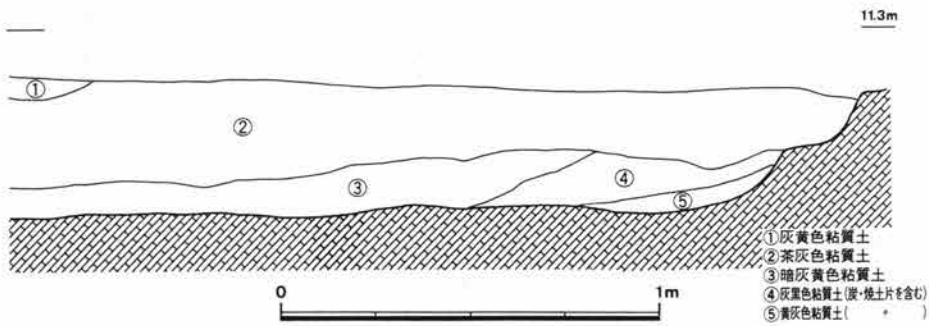
4.7m×5.1mを測る東西に長い隅丸長方形プランで、



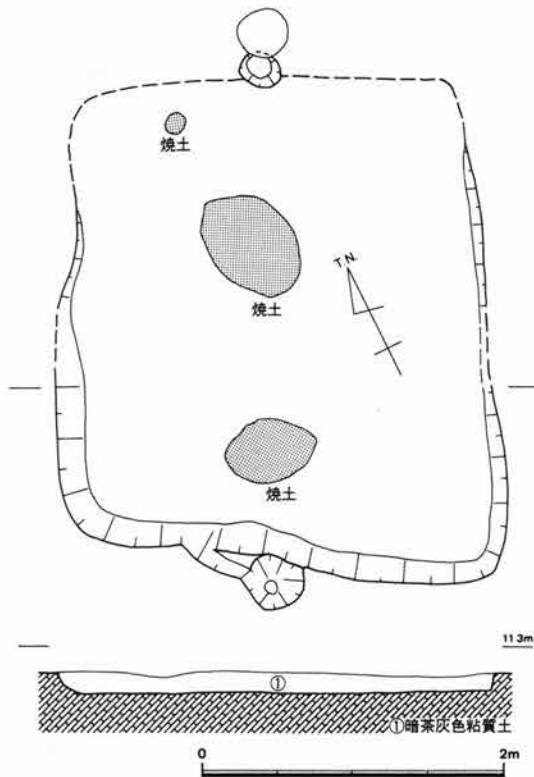
第40図 竪穴式住居跡9 平面図・断面図



第41図 竪穴式住居跡10平面図・断面図



第42図 竪穴式住居跡10竈部分断面図



第43図 竪穴式住居跡11平面図・断面図

深さは約50cm残っていた。竪穴式住居跡9に南東隅を切られている。周壁溝はなく、壁は床面から緩やかに立ち上がり、東辺北寄りに竈を設ける。竈は床面部分のみに焼土が認められる。また、これとは独立して床面中央にも焼土が認められる。主柱穴としては東西に長い長方形に配置された4基のピットがある。北東の主柱穴の柱抜き取り穴から須恵器杯身(第39図50)が出土した。住居跡の南寄り中央には堅く締まった土の入った不整形の落ち込みがあり、この上面が住居の床面と考えられる。この落ち込みを切って、深さ約30cmのピットがある。このピットには灰黄色の細かい砂質土が入っている。竈部分には炭、焼土片を含む灰黒色粘質土が斜めに堆積している。

竪穴式住居跡11(第43図)

北側を攪乱により削平されているが、主柱穴と考えられるピットの位置から3.1m×2.9mを測る南北に長い隅丸長方形プランの竪穴式住居跡が復原される。北辺西寄りと中央北寄りの焼土が竈と考えられ、南辺中央付近にもこれとは独立した焼土が認められる。北辺と南辺の中央で検出されたピットが主柱穴と考えられる。

付表5 竪穴式住居跡一覧表

遺構名	規模(m)	長軸	竈の位置	主柱穴の数と位置
竪穴1	2.6×2.8	東西	短辺・東	1・短辺中央
竪穴2	4.1×4.3	東西	短辺・東	2?・床面
竪穴3	3.9×4.6	東西	短辺・東	2・床面
竪穴4	?×4.5	東西?	長辺?・南	?
竪穴5	3.1×4.1	東西	短辺・東	2・両短辺中央
竪穴6	2.8×3.6	東西	短辺・東	2・西短辺
竪穴7	4.3×4.6	東西	短辺・東	2・床面
竪穴8	3.5×4.2	東西	長辺・北	?
竪穴9	3.0×3.7	南北	短辺・北	2?・両長辺中央
竪穴10	4.7×5.1	東西	短辺・東	4・床面
竪穴11	2.9×3.1	南北	短辺・北	2・両短辺中央

## ②掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、15棟を復原することができた。掘立柱建物跡を構成するピットのうち、竪穴式住居跡と重なるものは、例外なく住居跡の埋土の上から掘られており、掘立柱建物群が竪穴式住居群より後出することを示している。以下、各建物跡について簡単に述べるが、規模、柱間寸法などは付表6に示したとおりである。

### 掘立柱建物跡1(第44図)

北西隅が調査区外に延びるが、2間×4間の南北棟であると考えられる。掘形の直径は50cm前後を測る。柱の直径は15cm前後と推定される。この建物跡のピットからの出土遺物には、101・105・115・116・118がある。

### 掘立柱建物跡2(第45図)

2間×4間の建物を復原したが、東辺と西辺は平行しない上、柱間寸法のばらつきも大きい。掘形は円形を呈し、直径40～70cmを測る。この建物跡のピットからの出土遺物には、95・96がある。

### 掘立柱建物跡3(第46図)

直径60cmを超える掘形を持つピット3基が直角に並んで検出され、建物の南東隅と考えた。規模は不明であるが、掘形が他の建物跡よりも大きいことから、少なくとも2間×4間以上の建物を想定することができよう。この建物跡の東辺のラインが掘立柱建物跡2の西辺ラインの延長上に来ることも注意される。いずれのピットでも柱の痕跡を確認することはできなかった。

### 掘立柱建物跡4(第47図)

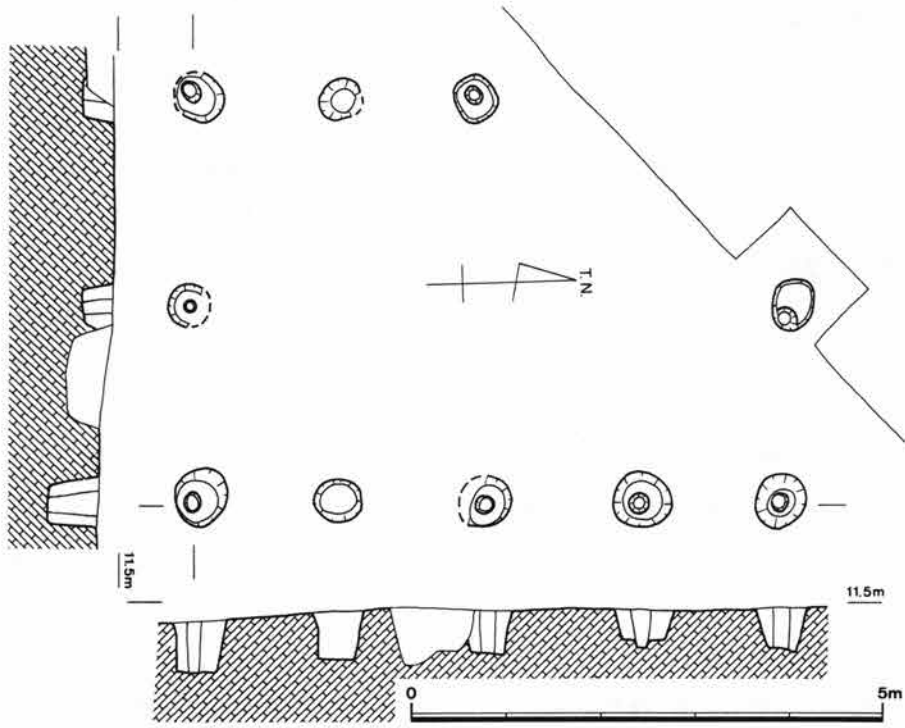
2間×3間の南北棟である。北辺と南辺の中央のピットが棟持柱のように、少し外側に突出している。東西の柱間が南北に比べて長いために、建物跡の平面形は正方形に近くなっている。掘形の直径は50cm前後である。この建物跡のピットからの出土遺物には102がある。

### 掘立柱建物跡5(第48図)

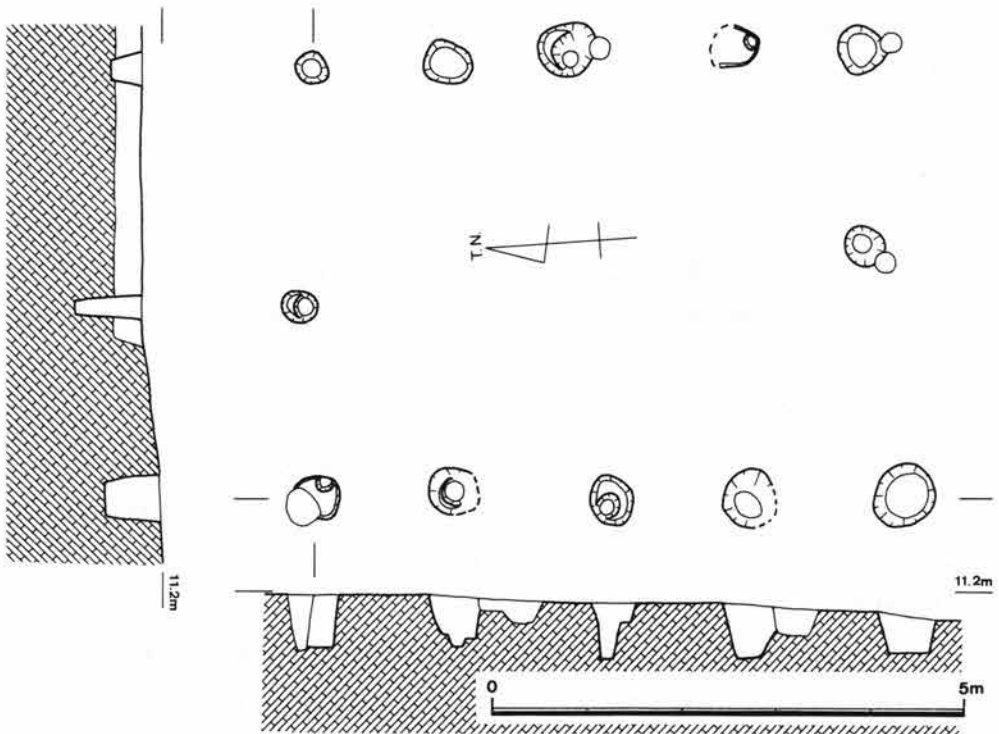
建物跡の北西半分が調査区外に延びる2間×4間の南北棟が復原できる。南辺の中央に想定されるピットが外側に少し突出している。東辺は、4間のうち中央の2間の柱間が広がっている。掘形は円形で、直径40～50cm程度を測る。

### 掘立柱建物跡6(第49図)

掘立柱建物跡5の東に、約3mの間隔を置いて並ぶ2間×3間の南北棟の建物跡である。掘形の直径は40～50cm程度を測る。柱の直径は15cm前後と推定される。短辺の中央の柱が建物跡の中心ラインよりも東に寄っている。



第44図 掘立柱建物跡1 平面図・断面図



第45図 掘立柱建物跡2 平面図・断面図

**掘立柱建物跡7(第50図)**

建物跡の北西半分が調査区外に延びる2間×4間の南北棟が復原できる。掘形の直径は50cmをやや超える大きさである。柱の直径は20cm程度と推定される。この建物跡のピットから出土した遺物には、128～132がある。

**掘立柱建物跡8(第51図)**

2間×4間の南北棟である。掘形の直径は40～65cmとかなりばらつきがある。西辺の柱間寸法が東辺の柱間寸法よりも短く、全体では東辺の方が約26cm長い。

**掘立柱建物跡9(第52図)**

2間×3間の東西棟である。今回の調査で検出した建物跡のなかで、東西棟であることがわかる唯一の建物跡である。掘形は直径60cmを超えるものが多い。柱の痕跡を認めることができたピットは少ないが、直径20cm程度の柱が用いられていたものと推定される。

**掘立柱建物跡10(第53図)**

2間×3間の南北棟である。東西の柱間が長いので、建物跡の平面形は正方形に近い。掘形の直径は30～40cmと、やや小振りである。この建物跡のピットから出土した遺物には133がある。

**掘立柱建物跡11(第54図)**

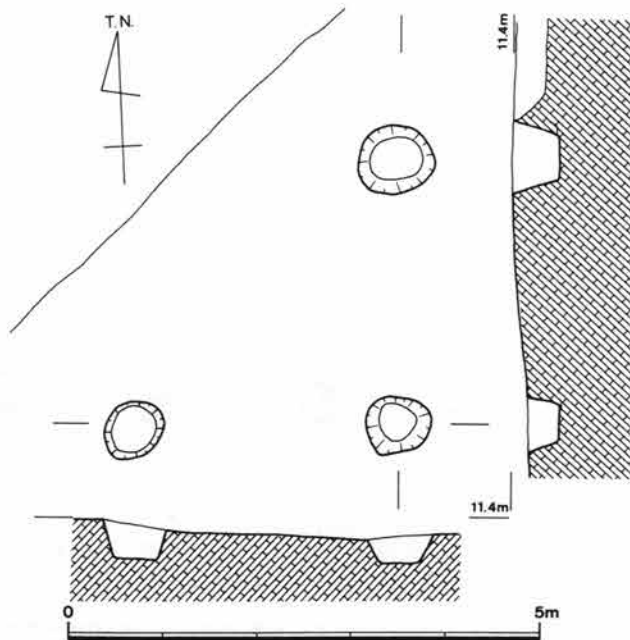
他の建物跡が東西2間になるものが多いのとは異なるが、東西の柱間が長い1間×4間の建物跡と考えた。掘立柱建物跡8のピットに切られており、これより先行するものである。

**掘立柱建物跡12**

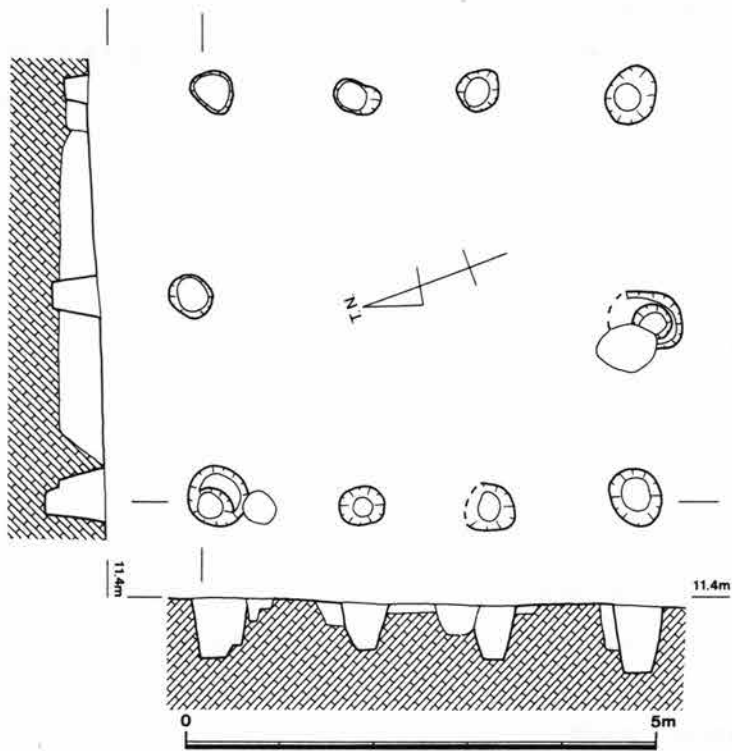
D地区南端で検出した。建物の大半が調査区外に延びると推定されるうえ、西辺のピットの切りあい関係が攪乱などによって不明瞭であったため、全体図(第30図)上での復原のみにとどめた。

**掘立柱建物跡13(第55図)**

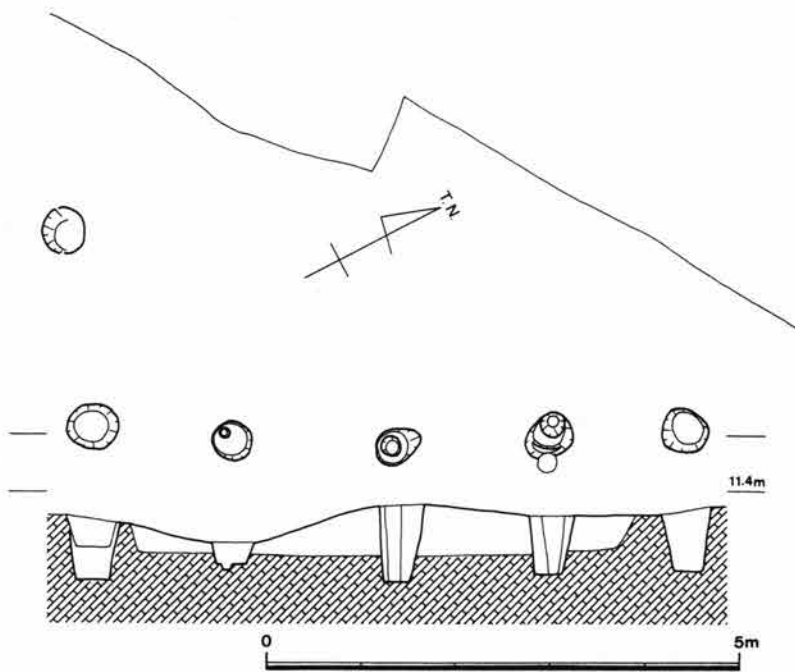
南東の約半分が調査区外に延びるが、2間×4間の南北



第46図 掘立柱建物跡3 平面図・断面図

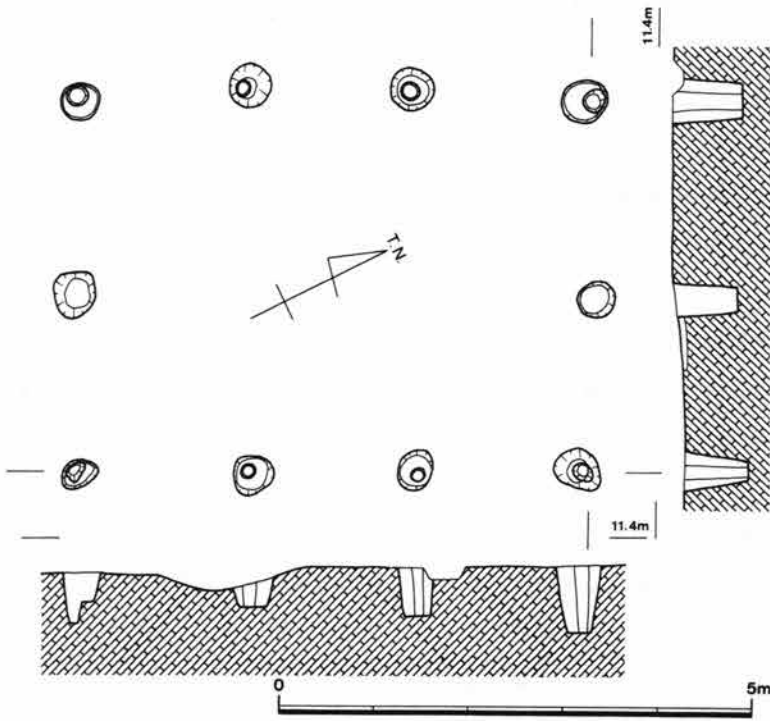


第47図 掘立柱建物跡 4 平面図・断面図

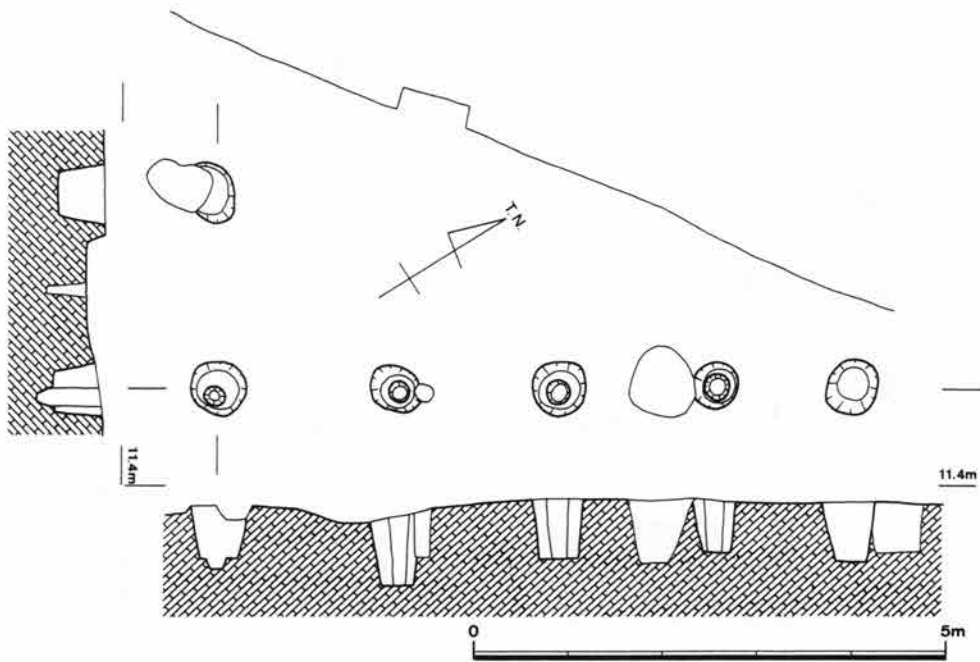


第48図 掘立柱建物跡 5 平面図・断面図





第49図 掘立柱建物跡6 平面図・断面図



第50図 掘立柱建物跡7 平面図・断面図

棟と考えられる。直径60cmを超える大形の掘形を持ち、今回検出したなかではもっとも規模の大きい建物跡である。柱痕部分には軟らかい粘土が入っており、この建物の柱が立ち腐れになったものと考えられる。柱の直径は20cm程度と考えられる。また、この建物跡の西辺の各ピットに切られて、やや小振りのピットが検出されている。

掘立柱建物跡14(第56図)

建物跡の北西隅を検出した。桁行方向は調査区外に延びるため不明であるが、梁間は2間になるものと思われる。

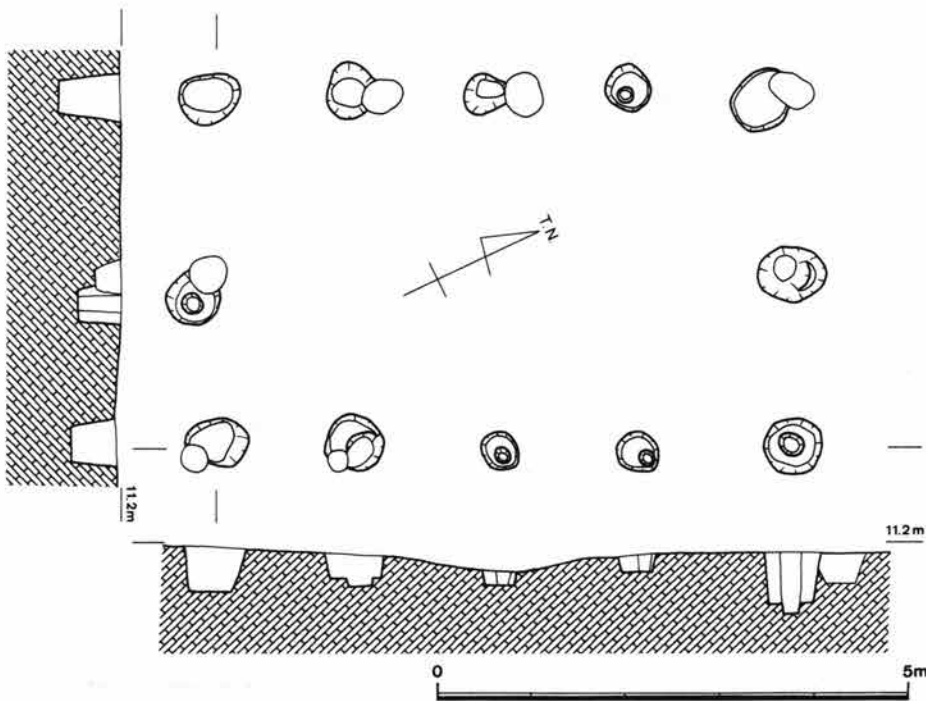
掘立柱建物跡15(第57図)

北辺の中央のピットを攪乱によって失っているが、2間×3間の掘立柱建物跡と考えられる。掘形は直径40～50cmを測る円形で、柱の直径は15cm程度と推定される。

③土坑

土坑2(第34図)

竪穴式住居跡4と重複して検出された。両者の切り合い関係を平面において確認することはできなかったが、断面の観察によって土坑の方が新しいことが判明した。平面形は隅丸の台形状と推定されるが、西側は緩やかな落ち込みで、肩が不明瞭になっている。深さは約20cmで、埋土は明茶褐色粘質土である。



第51図 掘立柱建物跡8平面図・断面図

土坑3 (第59図)

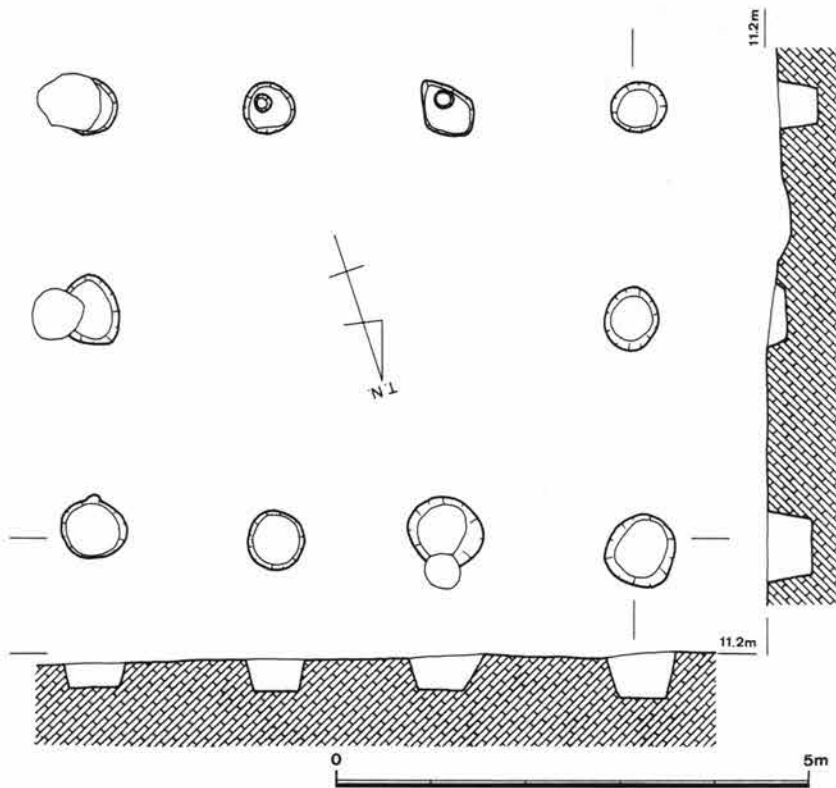
北西側が調査区外に出るため、平面形は不明である。壁の立ち上がりのようなす等は堅穴式住居跡と同様であるが、規模が小さすぎること、東側に竈を持たないことなどから土坑としたが、なお堅穴式住居跡の可能性は残されている。土師器甕が出土しているが、遺存状態が極めて悪く復原することができなかった。

土坑6 (第60図)

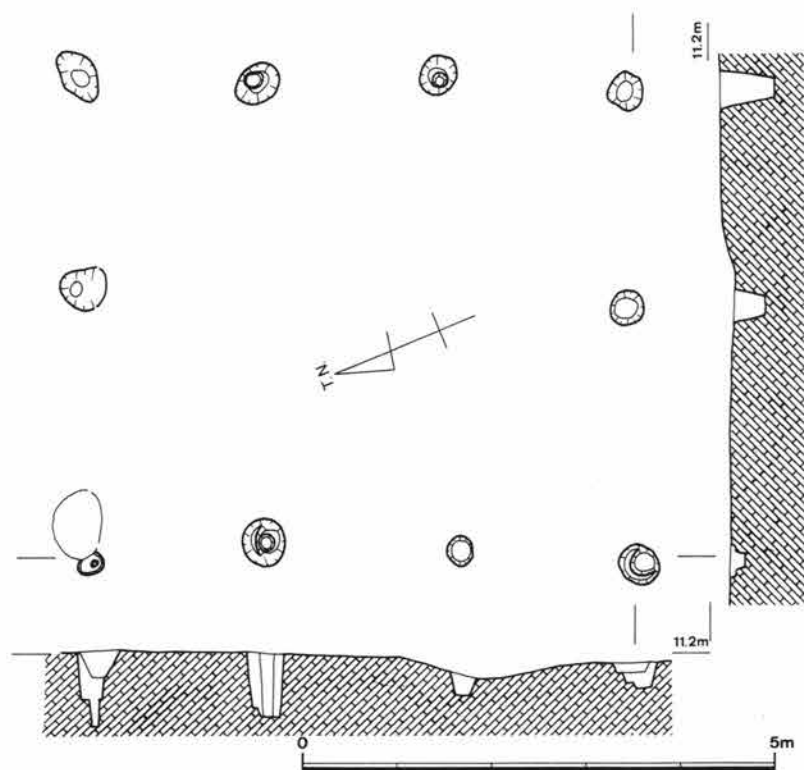
堅穴式住居跡3と5の間で検出された直径40cmあまりの土坑である。土師器の短頸壺を正置し、土師器の甕を口縁部を下にしてかぶせている。壺の中からは遺物は検出されなかった。

土坑7 (第61図)

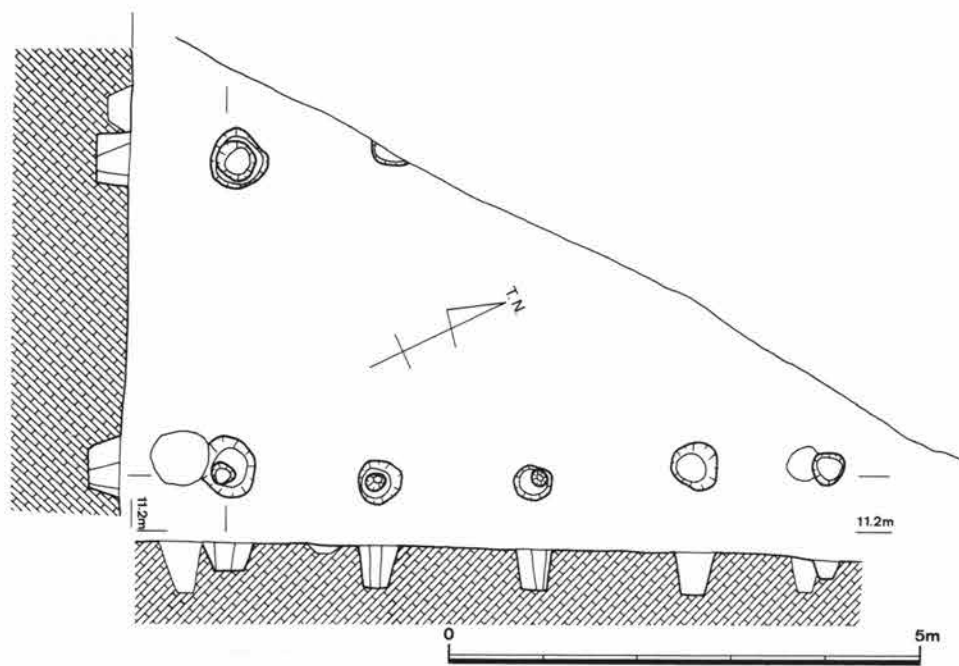
長径2.5m・短径1.5mの長楕円形に半円形のテラス状の段がついた土坑である。深さは約45cmを測る。埋土は暗茶灰色粘質土である。



第52図 掘立柱建物跡9 平面図・断面図



第53図 掘立柱建物跡10平面図・断面図



第54図 掘立柱建物跡11平面図・断面図

(2)出土遺物

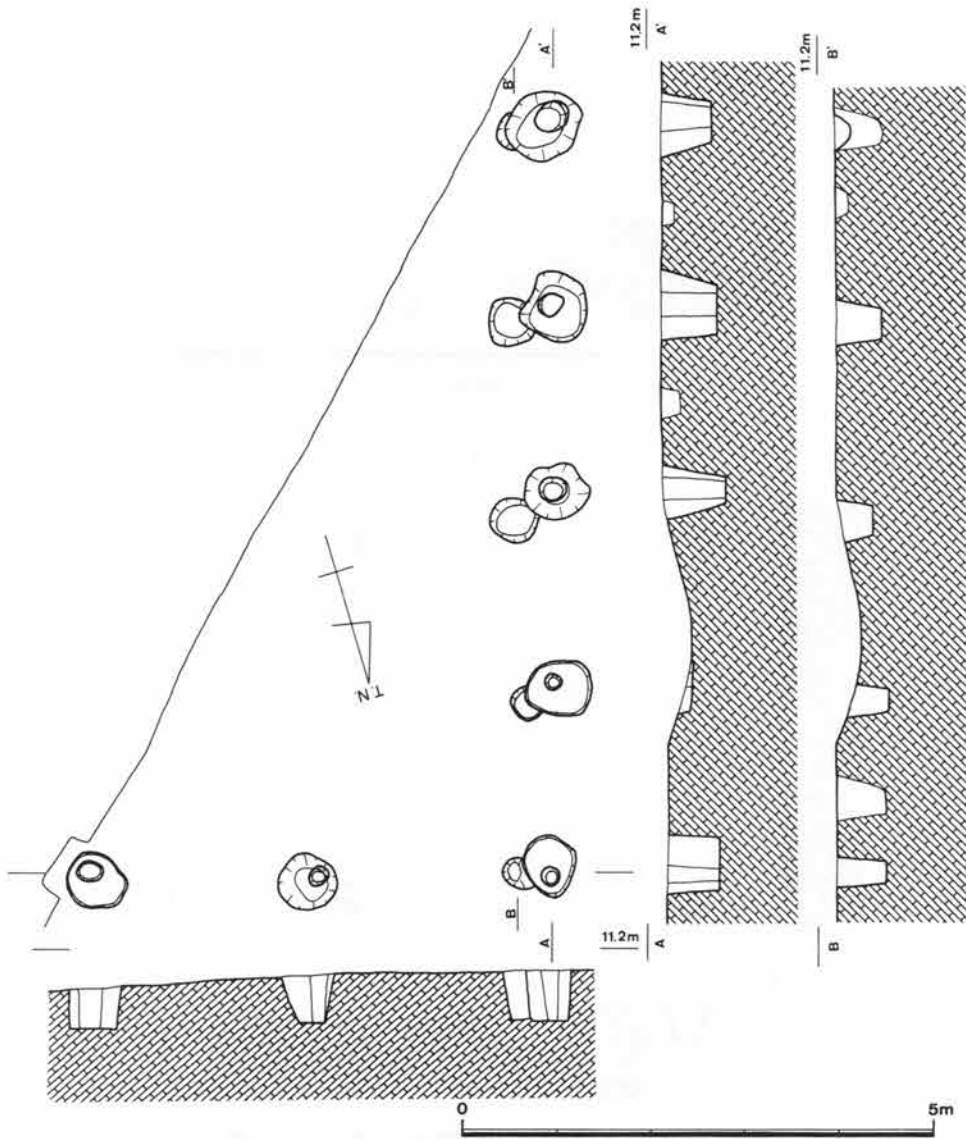
出土遺物は原則として遺構ごとに報告するが、土錘のみは最後に一括している。

a. 竪穴式住居跡の出土遺物(第62～66図)

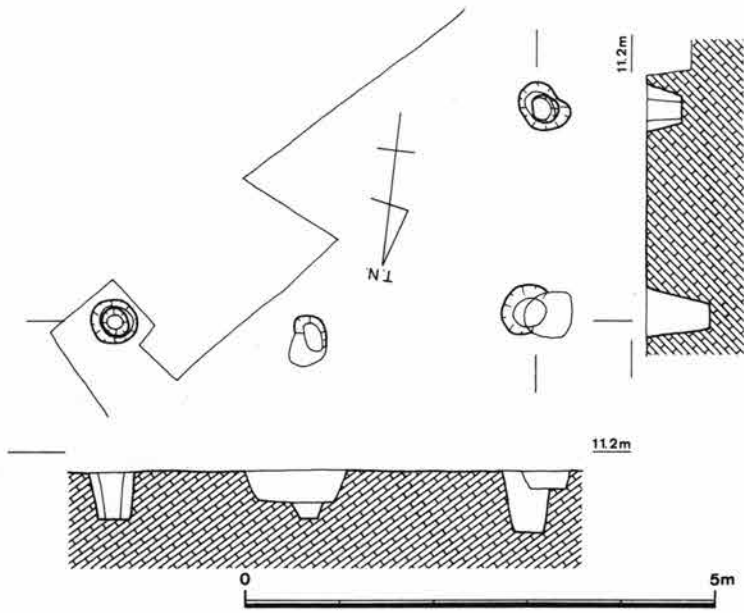
竪穴式住居跡から出土した遺物はほとんどが埋土から出土した破片であり、住居における使用時の同時性を示すものはないが、以下、各住居跡ごとに報告する。

1)竪穴式住居跡1出土遺物(1～3)

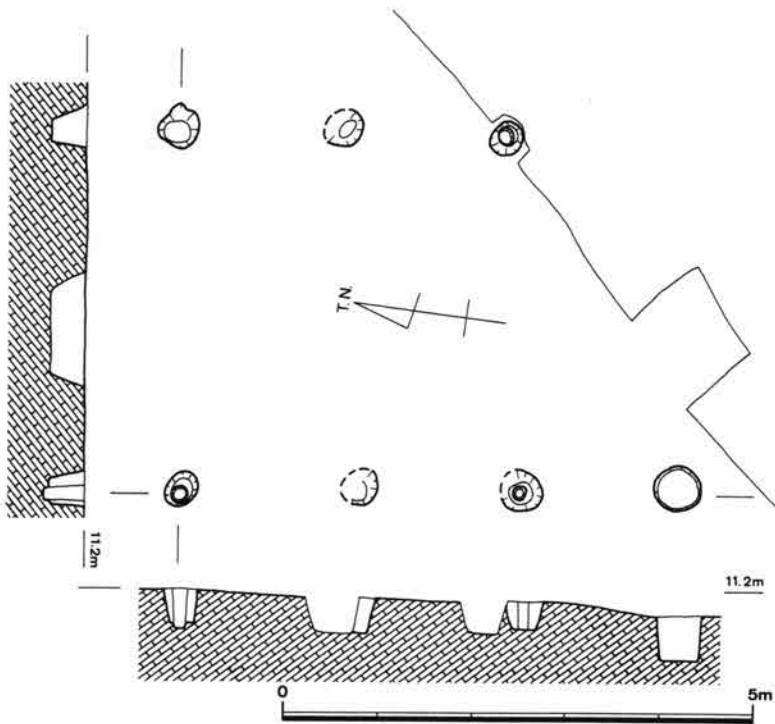
1は、須恵器壺の蓋と考えられる。2の土師器甕は、この遺跡で出土する各種の土師器



第55図 掘立柱建物跡13平面図・断面図



第56図 掘立柱建物跡14平面図・断面図



第57図 掘立柱建物跡15平面図・断面図

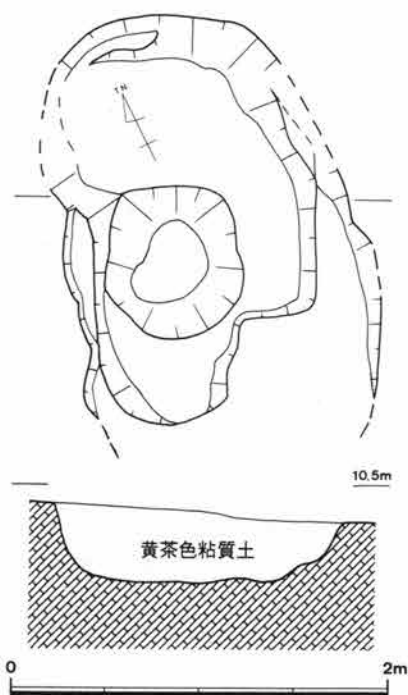
付表6 掘立柱建物跡一覧表

遺構名	規模(間) 東西×南北	柱間寸法(m)				大きさ(m)		長軸	主軸方位	群
		北辺(西-東)	西辺(北-南)		北辺	西辺				
		南辺(西-東)	東辺(北-南)		南辺	東辺				
掘立1	2×4	-、1.94	-、-、1.40、1.60		-	-	南北	N2° E	I	
		2.25、2.06	1.48、1.62、1.56、1.56		4.31	6.22				
掘立2	2×4	1.80、2.52	1.38、1.62、1.48、1.68		4.32	6.16	南北	N4° E	I	
		2.72、2.04	1.44、1.28、1.92、1.16		4.76	5.08				
掘立3	?×?	-	-		-	-	?	N3° E	I	
		2.76	2.78		-	-				
掘立4	2×3	2.22、2.14	1.62、1.34、1.54		4.36	4.50	南北	N20° E	II	
		1.82、2.36	1.48、1.36、1.58		4.18	4.42				
掘立5	?×4	-	-		-	-	南北	N27° E	III	
		2.00	1.42、1.72、1.78、1.40		-	6.32				
掘立6	2×3	2.09、1.82	1.95、1.76、1.75		3.91	5.46	南北	N26° E	III	
		2.08、1.89	1.74、1.80、1.85		3.95	5.39				
掘立7	?×4	-	-		-	-	南北	N33° E	-	
		2.18	1.43、1.68、1.68、1.98		-	6.89				
掘立8	2×4	1.77、1.84	1.44、1.44、1.48、1.50		3.61	5.86	南北	N25° E	III	
		2.22、1.43	1.53、1.53、1.53、1.53		3.65	6.12				
掘立9	3×2	2.12、1.74、1.95	2.42、2.21		5.81	4.63	東西	N19° E	II	
		2.05、1.92、1.79	2.32、2.16		5.76	4.48				
掘立10	2×3	2.90、2.22	1.84、2.05、1.95		5.12	5.84	南北	N23° E	IV	
		2.66、2.29	1.81、1.99、1.97		4.95	5.77				
掘立11	1×4	-	-		-	-	南北	N25° E	III	
		3.32	1.45、1.62、1.74、1.62		3.32	6.43				
掘立13	2×3	2.42、2.44	2.07、2.01、1.96、1.98		4.86	8.02	南北	N17° W	-	
		-	-		-	-				
掘立14	2×?	2.30、2.09	2.13		4.39	-	南北	N7° W	V	
		-	-		-	-				
掘立15	1(?)×3	3.80	1.88、1.72、1.77		3.80	5.37	南北	N7° W	V	
		-	1.78、1.70、-		-	-				

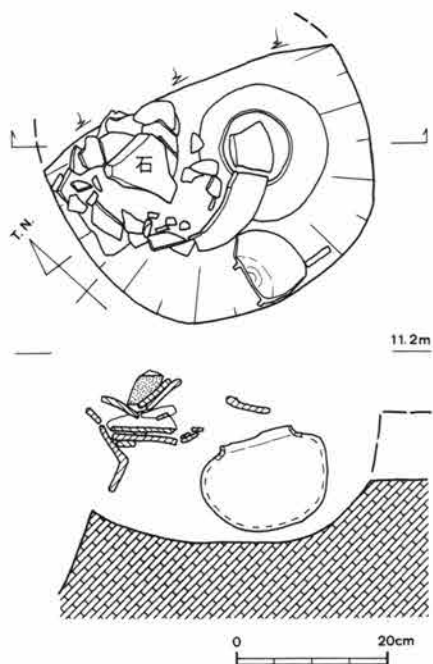
甕類に通有の、礫を多く含んだ粗い胎土を有する。焼成も不良で、遺存状態が悪い。3は、竈の支脚に使用されていたと考えられる扁平な石で、火を受けていた部分が赤変しており(図のアミ点部分)、地面に斜めに突き立てて使用していたことがわかる。使用時に地面との境になる部分が特に強く熱せられていたようで、ピンホール状に剝離した穴が多数認められる。

## 2) 竪穴式住居跡2 出土遺物(4~8)

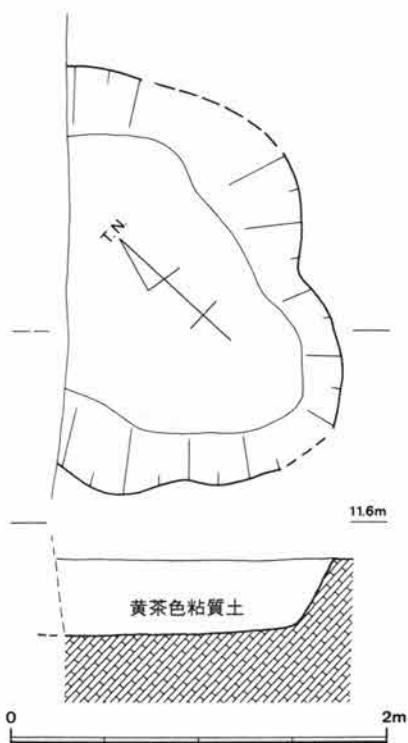
4・5は、いずれも須恵器の小破片であり、4は杯、5は壺の口縁部になると思われる。8は、非常に整った球形に成形された石である。表面がかなり平滑になっているので、穀



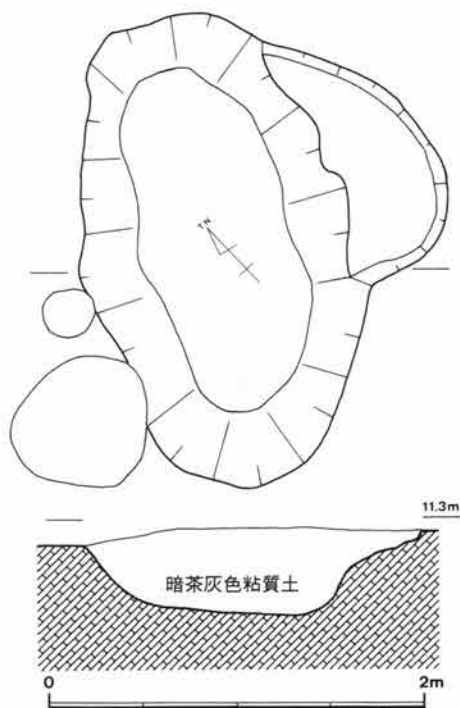
第58図 土坑1 平面図・断面図



第60図 土坑6 遺物出土状況平面図・立面図

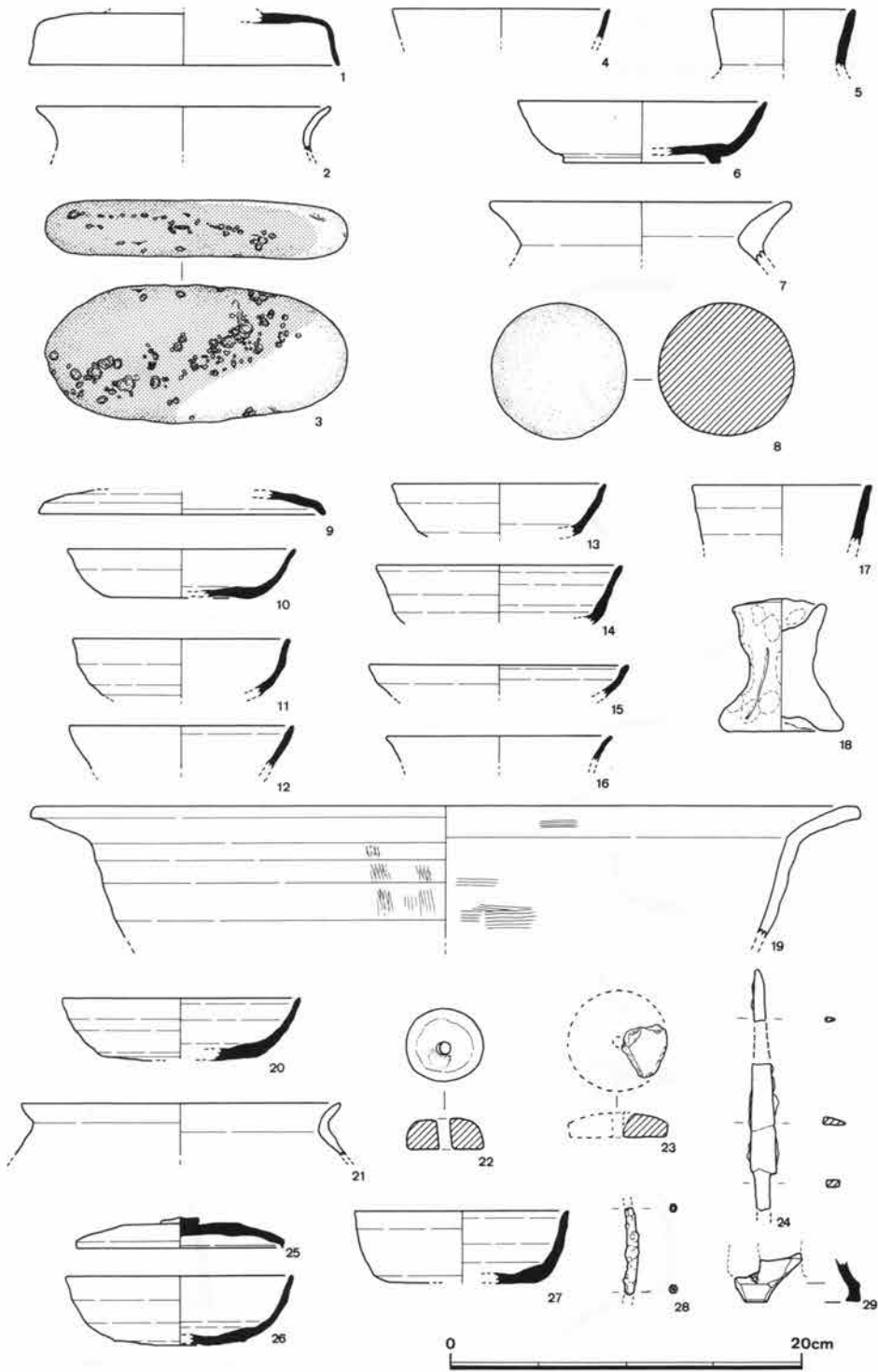


第59図 土坑3 平面図・断面図



第61図 土坑7 平面図・断面図





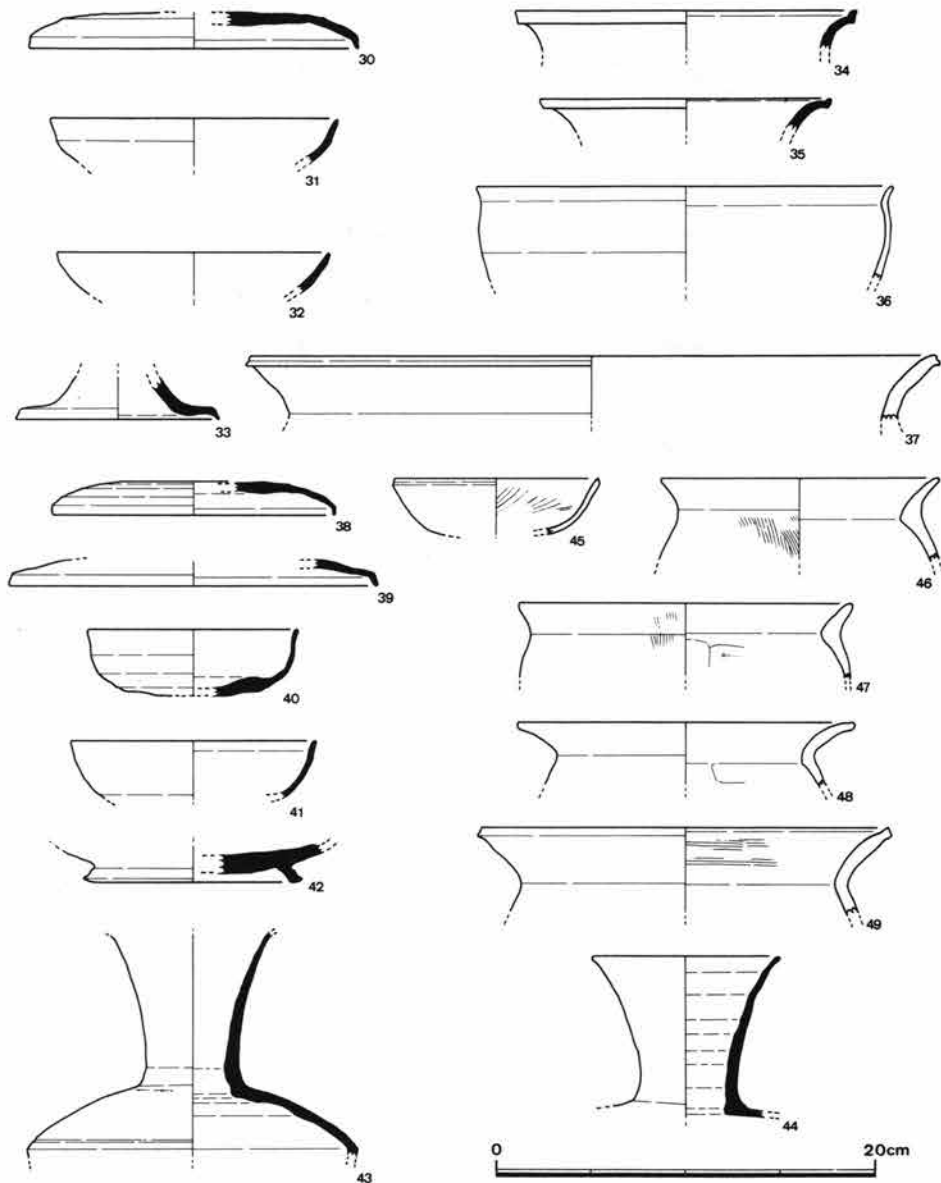
第62図 出土遺物実測図(1)

1~3. 竪穴1    4~8. 竪穴2    9~19. 竪穴3    20~24. 竪穴4    25~29. 竪穴5

物などを摺りつぶすのに用いられたのではないかと考えられる。

3) 竪穴式住居跡 3 出土遺物 (9~19)

須恵器のうち、13~15は白っぽい胎土をしており、非常に軟質の焼成である。17は、須恵器壺の口縁部と思われるが、胎土焼成ともに極めて良好で、後述する竪穴式住居跡 7 出土の長頸瓶などと同生産地からの搬入品であると思われる。18は、土製の籠の支脚であ



第63図 出土遺物実測図(2)  
30~37. 竪穴 6 38~49. 竪穴 7

る。底部の接地面は面取りされている。19は、「く」字に外反する口縁部をもった土師器鍋である。灰白色の粗い胎土で、外面はタテ、内面はヨコ方向のハケ調整を施す。

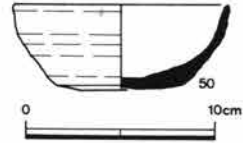
4) 竪穴式住居跡 4 出土遺物 (20~24)

22・23は、紡錘車であるが、22は土製、23は石製である。

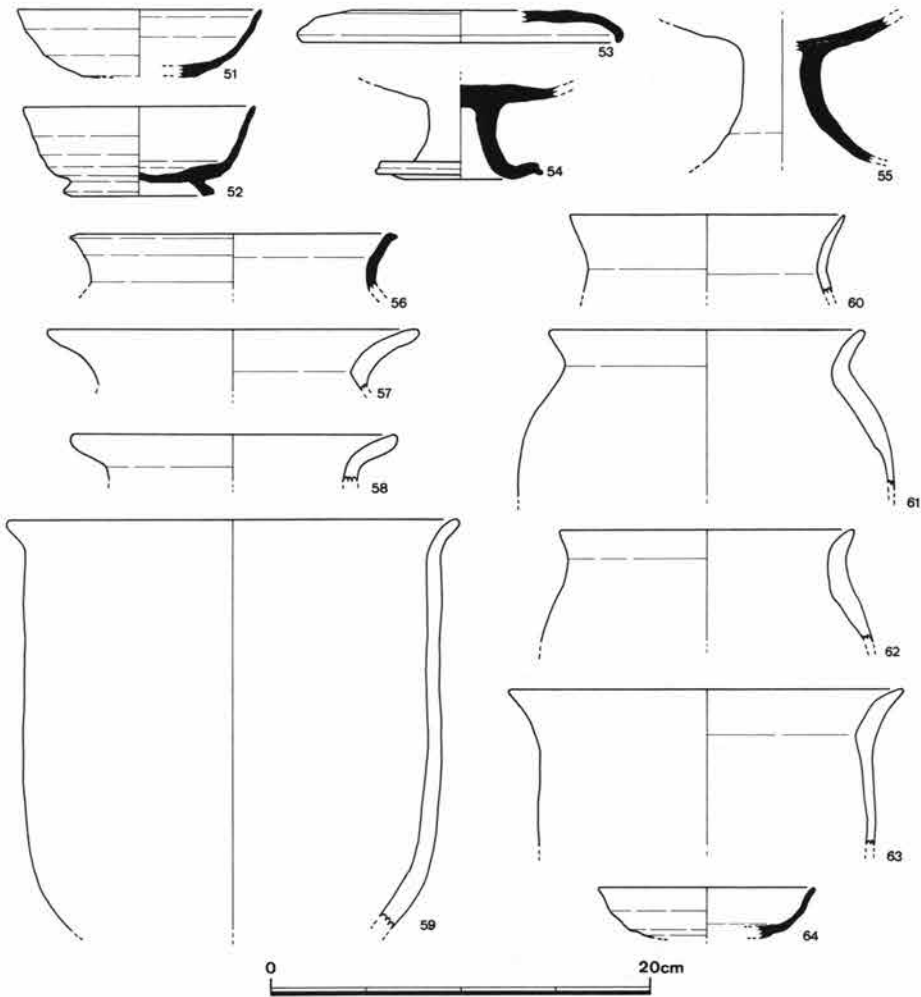
23の石材は緑色凝灰岩である。24は、鉄製の刀子である。

5) 竪穴式住居跡 5 出土遺物 (25~29)

25・27は、白っぽい胎土でやや軟質の須恵器である。28は、断面六角形の用途不明鉄製品で、中空になっているように思われる。29は、円面硯の脚部である。



第64図 出土遺物実測図(3)  
竪穴10



第65図 出土遺物実測図(4)  
51~63.竪穴10 64.竪穴9

6) 竪穴式住居跡 6 出土遺物 (30~37)

いずれも細片ばかりである。36の鉢は、非常に軟質の白っぽい土器であり、土師器としたが、焼成不良の須恵器かもしれない。

7) 竪穴式住居跡 7 出土遺物 (38~49)

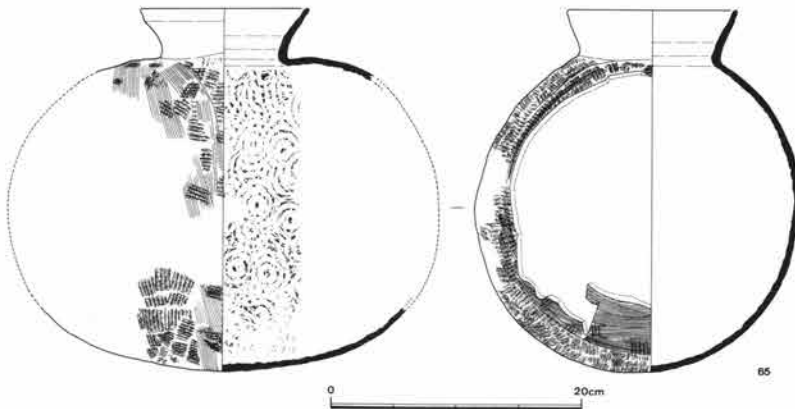
須恵器のうち、43・44の長頸壺は胎土が精良で、成形技法、調整技法ともに優れており、この遺跡で出土する他の須恵器とは異質である。壺の内容物とともに持ち込まれたものではないだろうか。45は、内面に放射状の暗文のある土師器で、丹後地方のこの種の土師器特有の赤橙色の胎土を有する。

8) 竪穴式住居跡 9 出土遺物 (64)

64は、須恵器杯である。小破片であるが、図示できる遺物がほとんど出土していないので掲げた。

9) 竪穴式住居跡 10 出土遺物 (50~63・65)

50は、北東の主柱の抜取り穴から出土した須恵器杯である。焼成時の歪みが大きく、正確な口径はわからないが、11cm余りを測る。直径1cmほどの白色礫を含むなど、胎土は非常に粗い。7世紀末頃の所産と考えられる。他は埋土中から出土した。須恵器のうち、51・55は白っぽい胎土の非常に軟質のものである。57~63の土師器甕は、共通して直径3mm前後の礫を多く含む粗い胎土である。器面の摩滅が著しく、調整を観察することは困難であるが、59の内面にはかすかにヘラケズリが認められる。このほか、同様の胎土で、口縁部に直径5mm程度の穴を焼成前に穿った蛸壺と考えられるものが出土している。65は、須恵器横瓶である。竪穴7出土の長頸瓶と同様の胎土、焼成で、同一産地の可能性が高い。



第66図 出土遺物実測図(5) 竪穴10

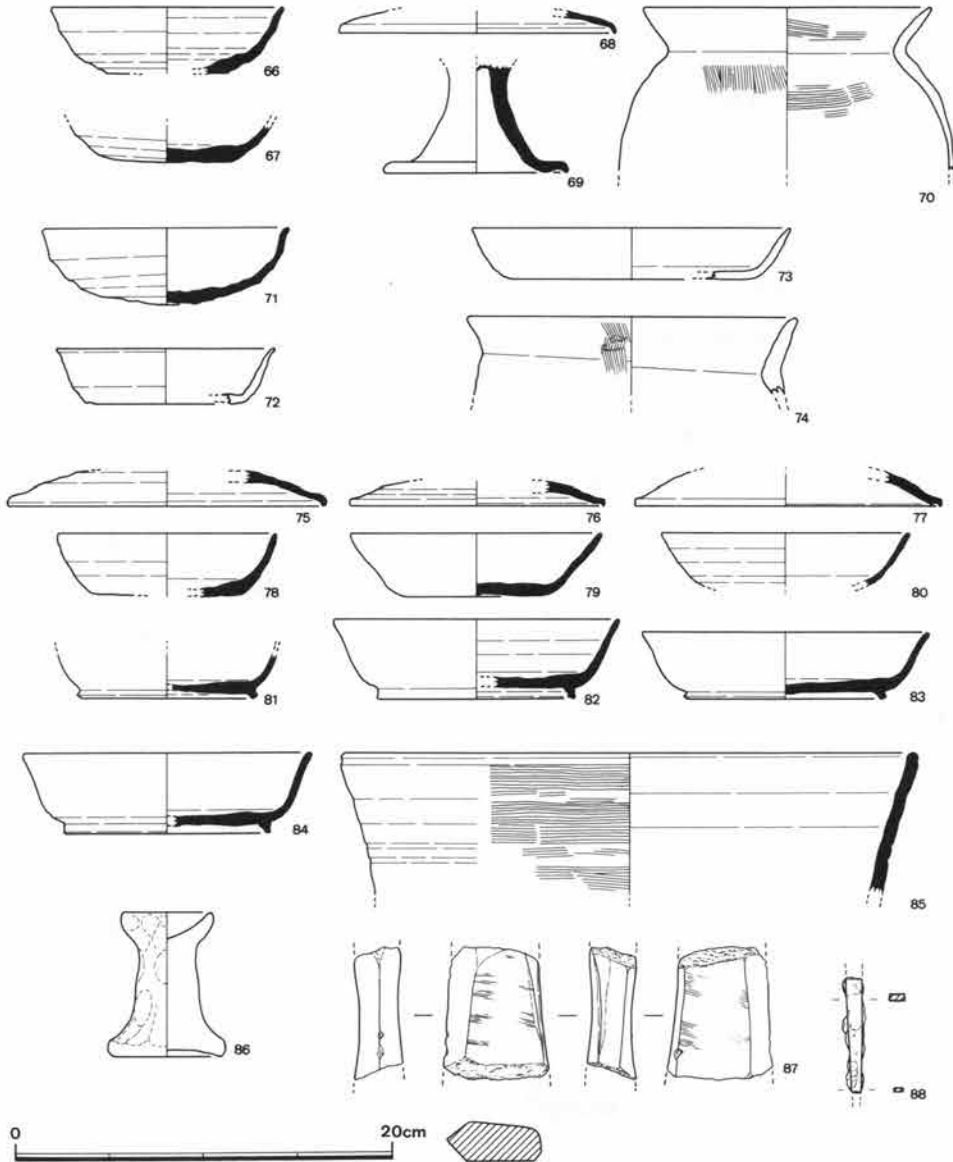
b. 土坑出土の遺物

1) 土坑1 出土遺物(66・67)

ともに須恵器杯である。底部はヘラ切りの後、特に調整を施していない。胎土は灰白色で、焼成はやや軟質である。

2) 土坑2 出土遺物(75~88)

75~76の須恵器杯蓋は、口縁部が少し外側に引き出される傾向がみられ、竪穴式住居跡



第67図 出土遺物実測図(6)

66・67.土坑1    68~70.土坑5    71~74.土坑4    75~88.土坑2

出土のものよりやや後出する要素をもっている。無高台の杯身の79のように口縁部が斜め上方に大きく開く器形や、81~84の高台にもやはり新しい傾向がみられる。85は、壺の口縁部である。堅穴式住居跡7・10で出土した長頸瓶や横瓶と同じ胎土、焼成である。須恵器のうち、82~84はやや軟質の焼成である。86は土製の竈の支脚である。二次的に強い火を受けたためか、淡桃色を呈している。87は砂岩製の砥石で、全面を砥石面として使用している。88は、断面長方形の鉄製品である。

### 3)土坑4出土遺物(71~74)

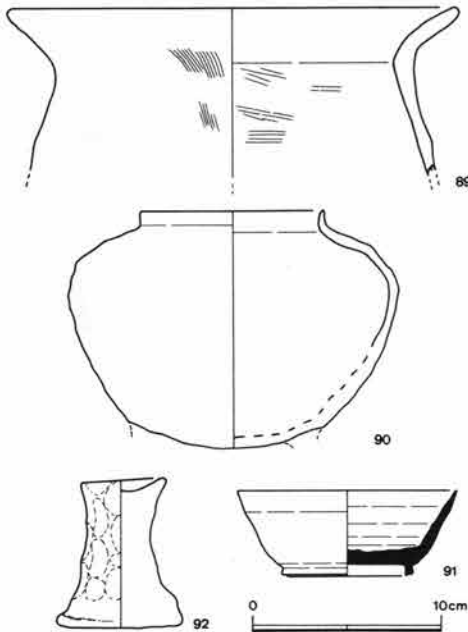
71は、須恵器杯身としたが、土師器とほとんど変わらない軟質の焼成で、灰白色を呈する。72・73は、土師器杯であるが、72は器面の摩滅が著しく、調整技法を観察することはできない。73は、回転台を用いて成形したのではないかと思われる。

### 4)土坑5出土遺物(68~70)

69は、高杯の脚部である。内面に回転ナデ調整が認められたために須恵器としたが、胎土もやや粗く、軟質で、灰白色の色調を呈する。

### 5)土坑6出土遺物(89~92)

89は、「く」字に外反する口縁部をもった灰白色を呈する甕である。90は、高台付きの短頸壺である。高台が剥離しているが、他は完存している。器面も大半が摩滅しており、調整を観察することはできない。90を正置した上に、89を天地逆にかぶせるようにして出土した。91・92は、埋土から出土した。



第68図 出土遺物実測図(7) 土坑6

土した。91・92は、埋土から出土した。

### c. ピット出土の遺物

#### 1)A地区のピット出土遺物(第69・70 図)

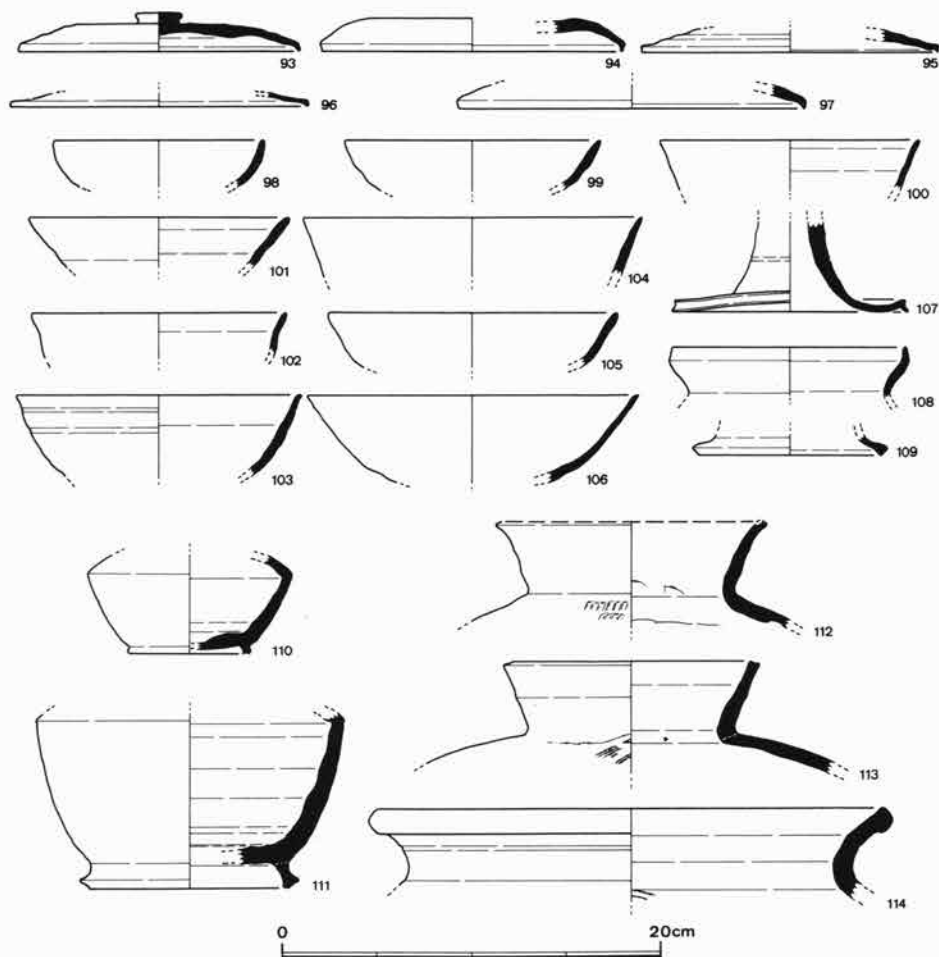
須恵器は杯身、杯蓋、椀、高杯、壺、甕などが、土師器は杯、甕などが出土している。また、124は土製の紡錘車、125は鉄刀子である。これらのうち、101・105・115・116・118は掘立柱建物跡1、95・96は掘立柱建物跡2、102は掘立柱建物跡4のピットから出土したものである。118は、器面の摩滅が著しいが、一部に赤色に塗られた痕跡が認められ、本来は、全面に塗られていたものと考えられる。

2)D地区のピット出土遺物(第71図)

須恵器は杯身と杯蓋、土師器は杯身と甕が図化できた。128～132は掘立柱建物跡7、133は掘立柱建物跡10のピットから出土した。129は軟質で、灰白色を呈する。

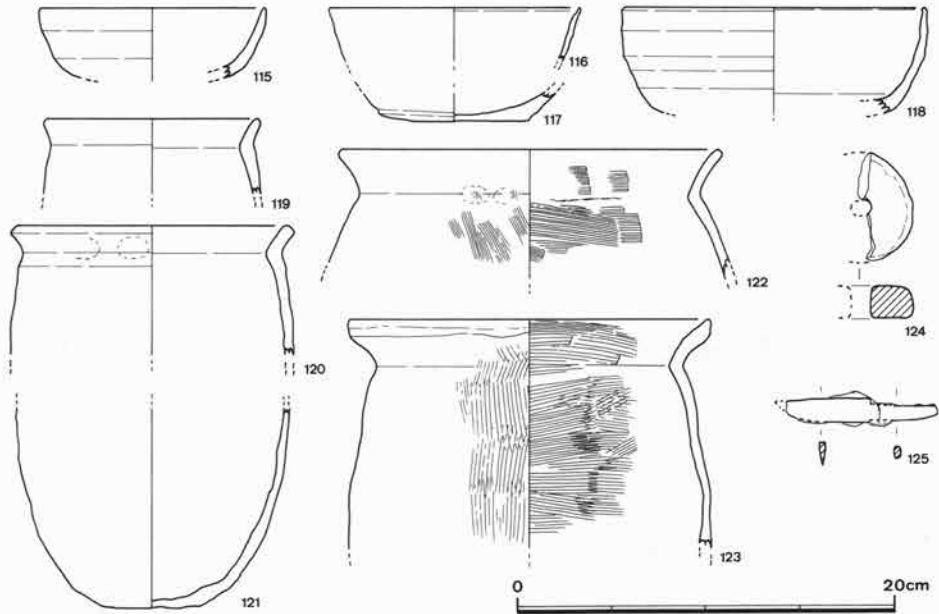
d. 包含層出土の遺物(第72図)

134～140は、須恵器杯蓋である。端部のみを短く下方に折り曲げるものと、端部を外側に引き出した後に折り曲げるものがある。140は、外面に墨書がみられるが、文字ではないと思われる。今回の調査で出土した唯一の墨書土器である。141は、大形の蓋と思われる。端部は外側に引き出してやや尖り気味に終わっている。142～160は、須恵器杯身である。161・162は、須恵器椀と思われる。底部がやや突出し、平高台状を呈している。平安時代の遺物である。163は、須恵器鉢である。外面は指押えの痕跡が明瞭で、粘土紐の底部はヘラ切りである。継ぎ目も明瞭に観察できる。164・165は、土師器杯である。164は、

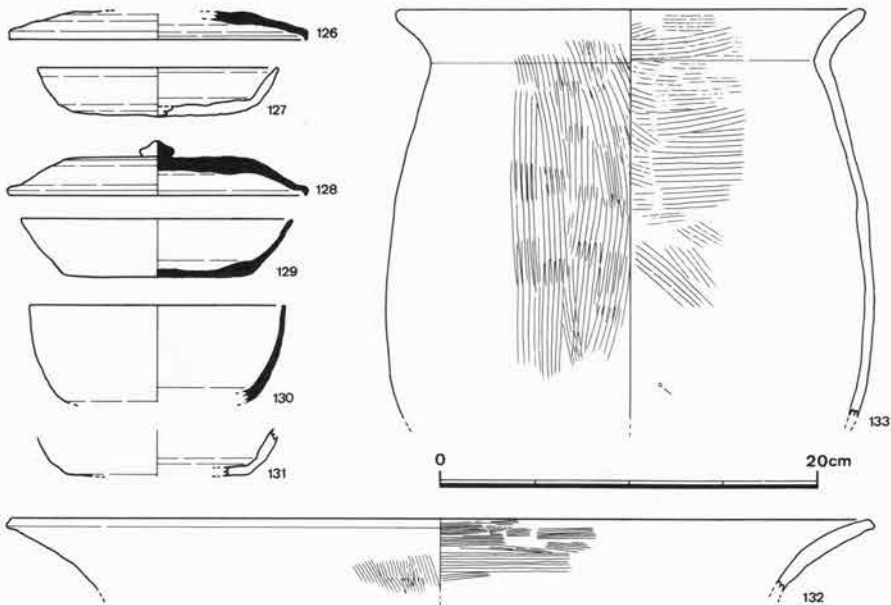


第69図 出土遺物実測図(8) A地区ピット

器面に赤色の顔料が塗られていたようである。底部外面にはハケ状の工具で調整を行った痕跡が認められる。回転台成形であると思われる。166・167は、平安時代の土師器碗である。167の底部には回転糸切り痕が認められる。168・170は土師器甕、169は土師器壺の口縁部である。171は、土製の竈の支脚である。底部付近の一部は黒斑状に変色している。

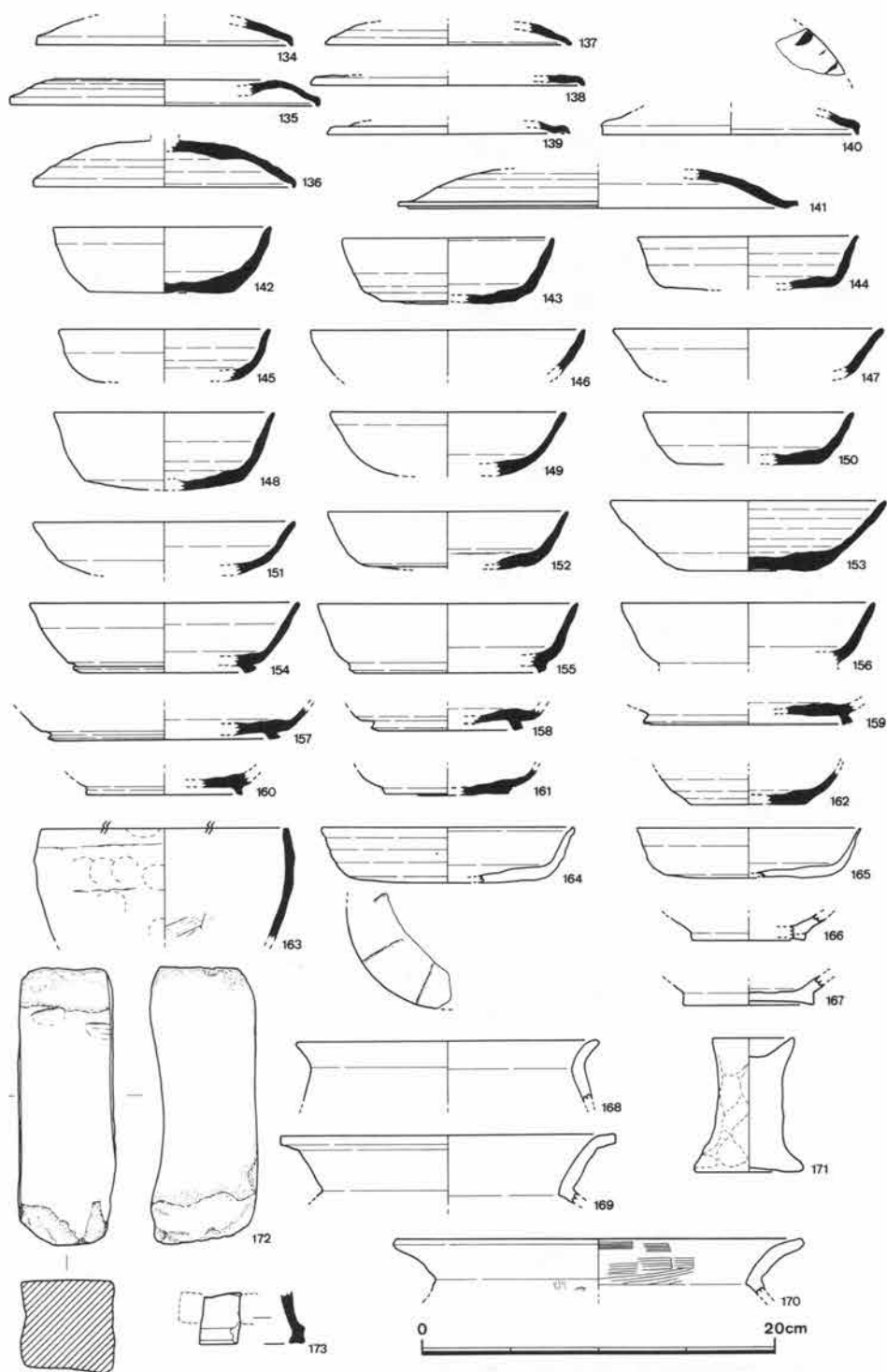


第70図 出土遺物実測図(9) A地区ピット

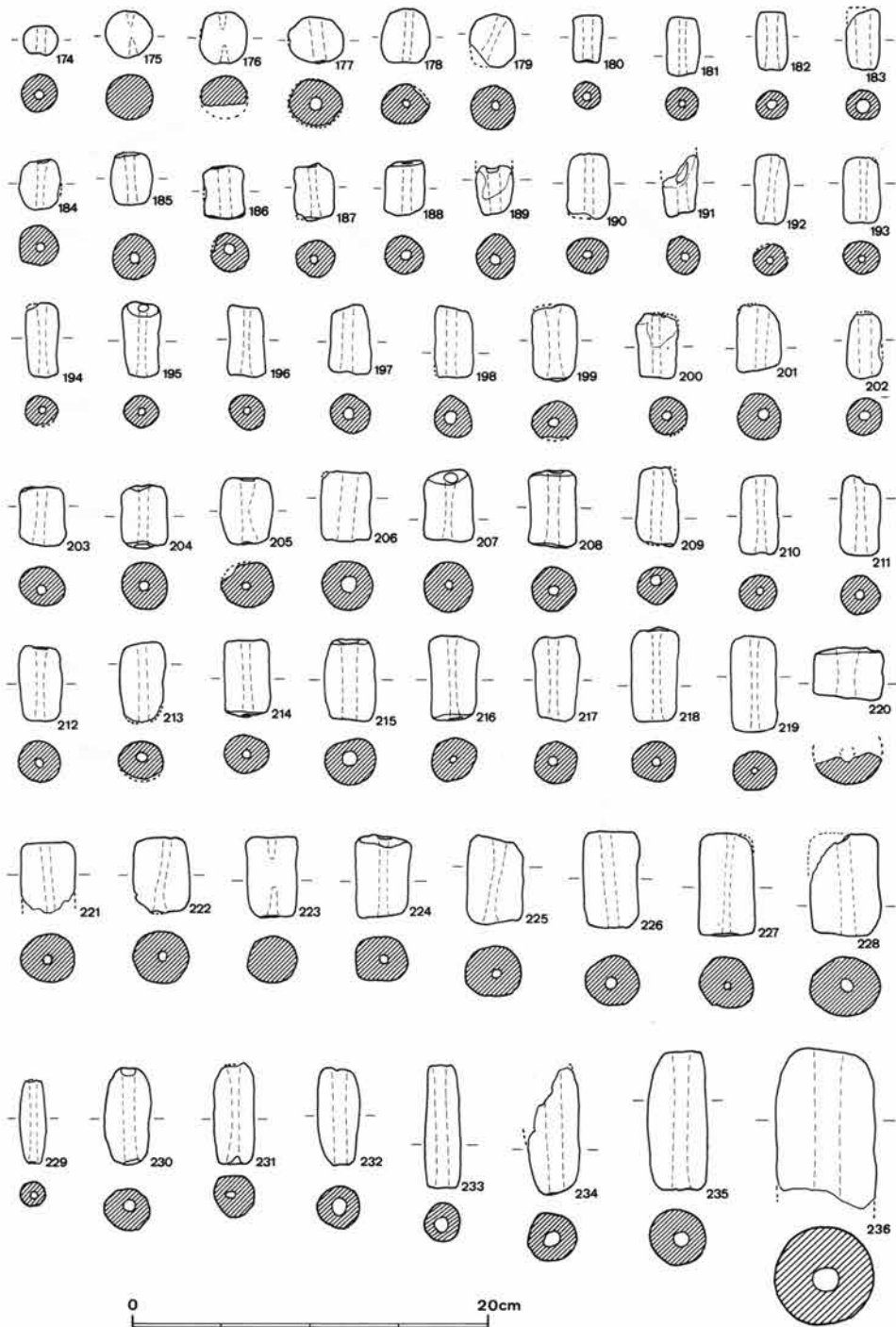


第71図 出土遺物実測図(10) D地区ピット





第72図 出土遺物実測図(11) 包含層



第73図 出土遺物実測図(12) 土錘

172は、砥石である。置き砥であり、1面のみ砥石面として使用している。173は、須恵器円面硯の脚部である。

#### e. 土錘(第73図)

土錘は、遺構や包含層などから多量に出土しており、漁撈がこの集落の重要な生業であったことを示している。形状は円筒形を呈するものももっとも多いが、球形のもの、円筒形のものなど多様である。また、大きさも多様であり、今回は分類を行うことができなかった。球形の175・176と円筒形の195は穴が貫通していない。完形品で、表面の摩滅が少ないものの重量を例示すれば、189が15.4g、185が17.0g、208が32.8g、214が29.9g、235が88.5gである。もっとも大きな236は一部が欠損しているが、255.0gを測る。

#### 4. まとめ

今回の調査ではA・D地区を中心に、非常に多くの遺構を検出することができた。A地区からD地区にかけて検出された竪穴式住居跡群は、それぞれの住居跡の時期を個別に明らかにすることはできないが、埋土からの出土遺物にはほとんど時期差を認めることができず、いずれも7世紀末から8世紀初頭までの間に埋没したものと考えることができる。また、包含層出土の遺物をも、7世紀後半を遡る遺物は認められず、この時期にこの遺跡の集落が成立したとみられる。竪穴式住居跡の分布は、幅約10mの帯状の範囲に限られる。遺跡は平坦な段丘上に立地しているので、住居跡のこのような不自然な分布は、居住域になんらかの規制が行われていた結果であろうと思われる。

その後、この集落の住居は掘立柱建物に変化する。掘立柱建物跡のピットと竪穴式住居跡の埋土との切り合いでは例外なく掘立柱建物跡のピットの方が新しく、また、掘立柱建物跡のピットから出土する遺物も竪穴式住居跡から出土する遺物とは時期差があるので、竪穴式住居跡と掘立柱建物跡とは併存しないと考えている。このことは掘立柱建物跡群の分布範囲に竪穴式住居跡群にみられるような規制が働いていないことからもうかがわれる。掘立柱建物跡は、詳細な時期を決定することが困難であるので、とりあえず、主軸方位によって5群を抽出して考えている。I群としたものは、主軸方向が北より東に約3°振る一群で、掘立柱建物跡1～3がこれに属する。II群は北より東に約20°振る一群で、掘立柱建物跡4・9がある。III群としたものは、北より東に約26°振る一群で、掘立柱建物跡5・6・8・11がこれに属する。IV群は、北より東に約23°振るもので、掘立柱建物跡10・12がある。V群は北より西に約7°振るもので、掘立柱建物跡14・15がある。また、これらの群に分類できないものに掘立柱建物跡7・13がある。各群の建物が同時に存在したかどうかは明らかでないが、集落の構成を考えるうえでは参考になるものと思われる。

これらの掘立柱建物跡群の営まれた時期は、ピットから出土した遺物などから考えて、竪穴式住居跡群の廃絶後、8世紀の中葉を下らない時期までに納まるものと考えられる。

このように、この遺跡では、近接した時期の竪穴式住居跡群と掘立柱建物跡群が検出され、同一集落における住居の形式の変化をとらえることのできる貴重な成果を得ることができた。竪穴式住居跡の廃絶される8世紀初頭頃は、713年の丹後分国にみられるように律令体制がこの地方に強く及んでくる時代である。この遺跡でみられる住居形式の変化もこれと強く関連していることが想像される。

この遺跡の集落は、丹後(丹波)国熊野郡(評)田村郷(里)を構成する集落のひとつであると思われる。丹後国熊野郡田村郷の名は、「丹後国田村郷神人丈万呂」「丹後国田村郷刑部夜恵五斗」「丹後国熊野郡田村郷中男作物海藻一□」など、平城宮出土木簡にもみられる。田村郷を構成する集落としては、すでに日光寺遺跡、長良遺跡が調査されており、今回の成果も含めて、この時代の郷の実態を考えるうえで貴重な資料になるものと思われる。

(森島康雄)

注1 これらの遺跡については以下の報告書が刊行されている。

関西考古学研究者連合会「京都府久美浜町浦明遺跡調査報告書」(『関西考古学資料集』1)  
1973

松井忠春『浦明遺跡』(京都府久美浜町文化財調査報告書第3集 久美浜町教育委員会)1980  
森島康雄「国道178号バイパス関係遺跡昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

注2 平城宮木簡(二) 奈良国立文化財研究所 1975

平城宮発掘調査出土木簡概報(十六) 奈良国立文化財研究所 1983

池邊 彌『和名類聚抄郡郷里驛名考證』 1981

付記 調査と整理には地元有志の方々や、学生諸氏等に、作業員・調査補助員及び整理員として参加していただいた。以下に記して感謝の意を表したい。

参加者名(順不同・敬称略)

山本弥生・小笠原順子・杉本 智・黒田邦夫・新村知代・森 友美・峰 陽子・上田いずみ・羽生夕紀子・福嶋美保・佐野晶子・安田由美子・山崎とも子・山添圭三・森口敏治・稲葉みね子・松田秋江・田中照夫・西山久枝・小森トシ枝・田中正省・岡田桂子・秋田義和・中西 博・野村信夫・山口五郎・寺下八重子・竹中仲右エ門・今井さわ・岡下保二・上田康代・吉田敏子・今井久子・仲原壽子・小森巳次・吉岡喜代子

### 3. 高田山古墳群(付 高田山中世墓・経塚群) 発掘調査概要

#### 1. はじめに

高田山古墳群は、京都府福知山市庵我字中に所在する古墳群であり、今回の発掘調査は、中丹土地改良事務所が計画・施工している府営広域農道建設に伴う事前調査である。

高田山古墳群は、1980年に山城考古学研究会によって正確な測量調査が行われ、1号墳が一辺25mの方墳、2号墳が南北22m×東西19mの方墳であることが判明した。1989年には、本広域農道建設に伴って1・2号墳北方の平坦地の調査を実施し、方墳である3号墳と円墳である4号墳を新たに検出した。これらの古墳群は、墳丘も低く、方墳と円墳がほぼ同じ規模であることなど、1・2号墳との相違点も多い。今年度の工事は、当初予定の道路建設計画に変更が生じたため、法面を拡張する必要が生じ、2号墳の墳丘の約60%と2・3号墳の間に広がる平坦地を対象として調査区を設定し、遺構・遺物の検出に努めた。

発掘調査は、平成3年5月7日から同8月23日に実施し、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎・同調査員小池 寛が担当し、本概要の執筆・編集は小池が行った。調査を進める上で福知山市教育委員会・中丹土地改良事務所をはじめ、関係諸機関の方々から多くの御協力を得た。また、本概要作成にあたり前田暁宏氏の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。<sup>(註1)</sup>

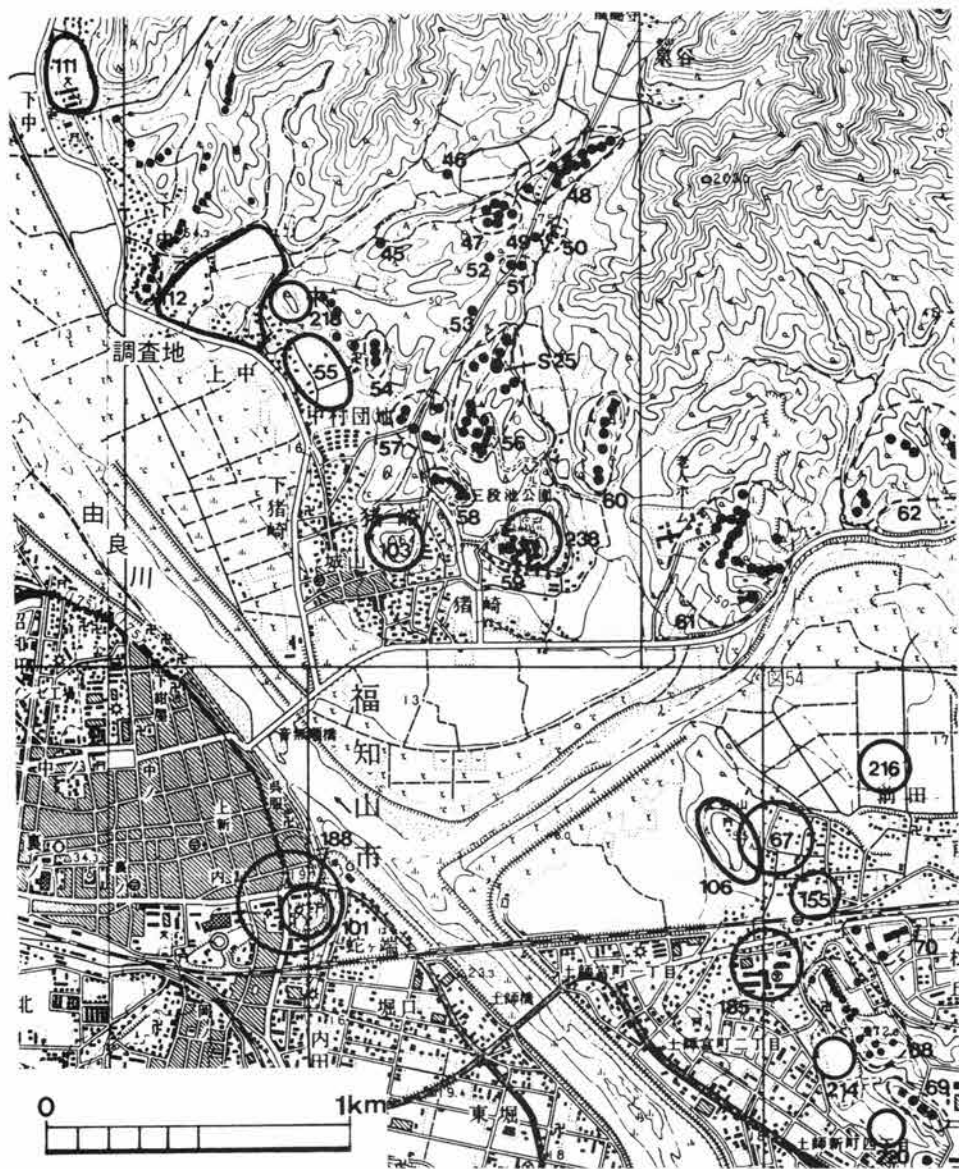
なお、本発掘調査に係わる経費は、中丹土地改良事務所が負担された。

#### 2. 周辺の歴史的環境(第74図・図版第27)

高田山古墳群は、福知山市街地から由良川を挟んだ対岸の丘陵上に位置しており、由良川と市街地を広く見渡せる条件にある。この丘陵は、烏ヶ岳(536.5m)から南西方にのびる丘陵先端部に位置している。本古墳群の周囲には、三段池公園から1km北方にかけて90余基の古墳が築造されており、その中には前方後円墳も含まれている。これらの古墳は、由良川によって形成された平野部を生産の基盤とする集団の墳墓と考えられる。一方、当該地東隣接地には、弥生時代後期の竪穴式住居跡や奈良・平安時代の掘立柱建物跡が確認された庵我遺跡がある。ここでは、後述する中世墓・経塚群と同時期の集落も確認されており、密接な関連があるといえる。現時点では古墳時代の集落は確認されていないが、周辺

の平野部に存在する可能性が高く、今後の調査に期待される。

高田山古墳群の第1次調査では(第75図)、3号墳が南北11m×東西9mの方墳、4号墳が直径11mの円墳であることを確認した。3号墳には2基の埋葬主体部が存在し、4号墳には礫を充填した埋葬主体部を1基確認した。特に、4号墳の周溝は、南側を3m掘り残しており、この地点と埋葬主体部の主軸線が直交することから、墓前祭を行った空間と深く



第74図 調査地位置図(1/25,000)

- |            |          |           |           |          |
|------------|----------|-----------|-----------|----------|
| 47.西谷古墳群   | 48.泉谷古墳群 | 56.池の奥古墳群 | 59.稲葉山古墳群 | 60.広所古墳群 |
| 112.高田山古墳群 | 55.老川遺跡  | 111.庵我遺跡  |           |          |



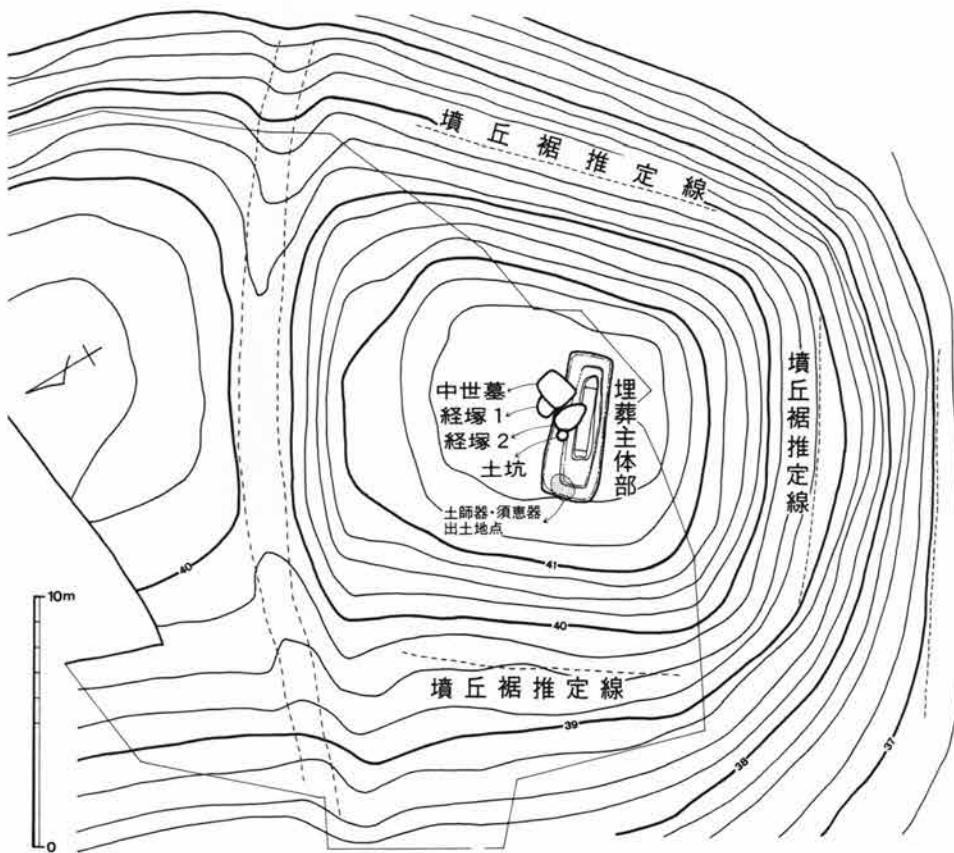
第75図 高田山古墳群地形測量図(1/1,000)

関連したと考えられる。一方、3号墳の周溝東角には、平安時代の土壌墓が穿たれている。

### 3. 調査の概要

#### (1) 2号墳

墳丘(第76図・図版第28-(1)) 測量調査によって南北22m×東西19mの墳丘規模であることが知られていたが、今回の開発対象範囲が墳丘の60%に及ぶため、墳丘表土を全面的に剥ぎ、墳丘裾部の傾斜変換線や墳頂部と、墳丘傾斜面の傾斜変換線及び墳丘盛り土の堆積状況を把握することに努めた。まず、北側の墳丘裾部は、東西に走る林道により削り込まれており、築造当初の形状は保持していないと考えられる。西側墳丘裾部は、緩やかな傾斜面を呈しているが、墳丘築造後の流土を除去した面に弥生時代の集石遺構(S X 9108)を検出しており、比較的明瞭な傾斜変換線を確認することができた。東側・南側の墳丘裾部は、開発対象地外であるため、正確な傾斜変換線は確認できない。以上の状況と埋葬主体部の位置などから測量調査と同一の墳丘規模を肯首できる。



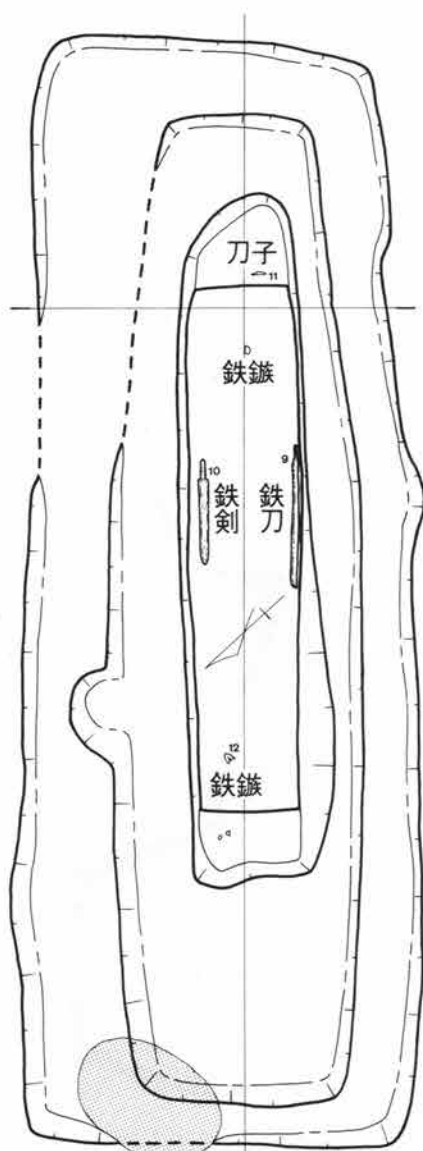
第76図 2号墳墳丘測量図(1/300)



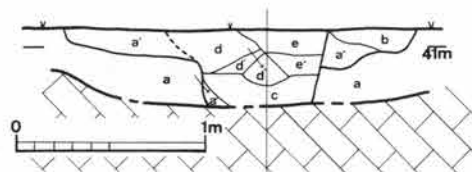
埋葬主体部(S X 9105)(第77図・図版第28-(2)) 墳頂部に位置する埋葬主体部は、墳丘の東西主軸線と一致しており、外郭掘形は、長軸5.8m、短軸最大幅2m・最小幅1.9mを測る。掘形を検出した面で、その北西方で須恵器・樽形甕、土師器・高杯群を一括で検出した(図版第29-(1))。それらの出土状況から、埋葬に係わる儀礼後、一括投棄されたと考えられる。この外郭の掘形の内側では、不明瞭ではあるが、段差を確認しており、長軸5.4m・短軸1.34mを測る。この段差は、外郭掘形の検出面との高さが10cmと浅いため、埋葬時の葬送儀礼に伴う段とは規定しがたく、棺を埋納する作業過程の必要から掘り込まれたと考えられる。棺の掘形は、不整形ではあるが、長軸3.62m・短軸0.68mを測り、棺自体は長軸2.77m・短軸0.55mを測る。棺は組合式木棺であり、棺内の北端には先端を西に向けて鉄製剣、南端には先端を西に向けて鉄製刀が置かれている。また、東西方には鉄鍬が各々一点置かれ、棺の掘形東端では鉄製刀子を確認した。

遺物(第78・79図、図版第34) 掘形検出面で出土した須恵器・土師器群は、明確な掘形はないが、一括して出土している。また、棺内からの鉄製品は、埋葬時の原位置を保っている。

須恵器・樽形甕 8は、口径8.6cm・頸径3.4cm・器高18cm・最大幅19.4cm・最大直径15.1cmを測る。頸部から外反し、屈曲した後さらに外反する口縁部をもつ。外面



土師器・須恵器1~8出土地点



第77図 埋葬主体部(S X 9105)実測図(1/40)

- |         |           |          |
|---------|-----------|----------|
| a.濁茶褐色土 | a'.濁暗茶褐色土 | b.淡赤褐色土  |
| c.暗茶褐色土 | d.暗赤褐色土   | d'.dより暗い |
| e.淡黒褐色土 | e'.eより淡い  |          |

には屈曲部より上位に波状文を施し、体部は無文である。焼成は堅緻で、破面の色調は赤紫色を呈する。陶邑古窯跡群からの搬入品である。

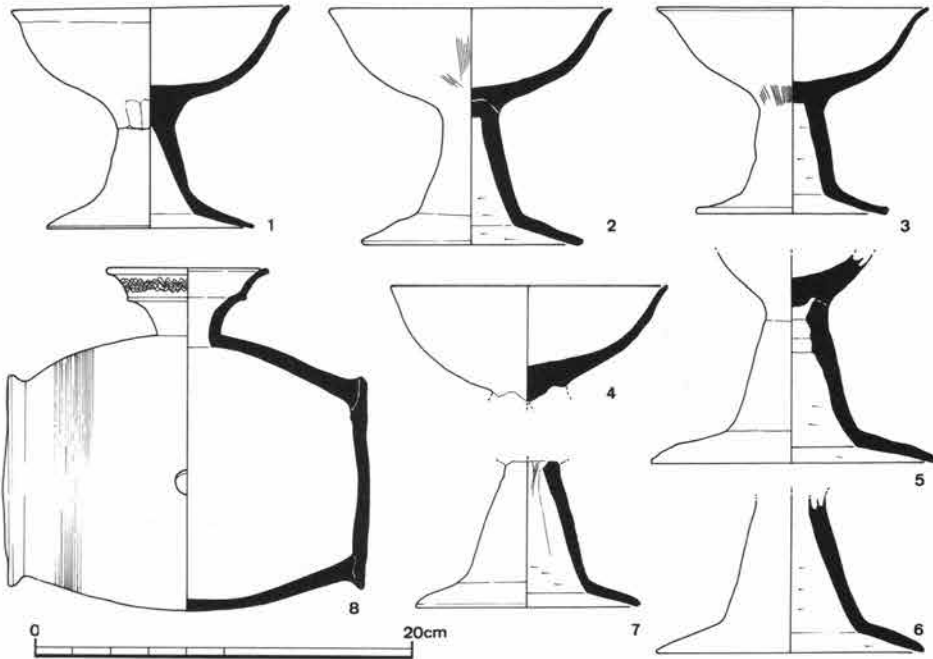
土師器・高杯は、総数10数個体を数える。基本的には、杯底部から緩やかに内湾し、やや外反する口縁端部と、杯接合部から斜め下方に直線的に下り、屈曲した後、直線的に開脚する脚部からなる。脚内面は、ヘラ削りによって整形するが、絞り込みによる整形も見られる。1の口径は14.8cm、器高は11.6cmで、5の脚径は15cmである。

鉄製刀9は、全長75.2cm・最大幅2.6cmを測る。

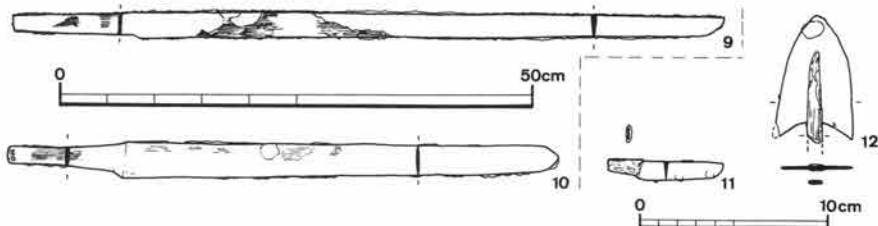
鉄製剣10は、全長58.4cm・最大幅3.6cmを測る。

鉄製刀子は、全長6.1cm・最大幅1cmを測る。

鉄製鏃は、無茎長三角形式に属し、全長6.5cm・最大幅4cmを測る。



第78図 埋葬主体部(S X 9105)出土遺物実測図(1/4)



第79図 埋葬主体部(S X 9105)出土遺物実測図(9・10.1/8 11・12.1/4)

## (2)その他の遺構・遺物

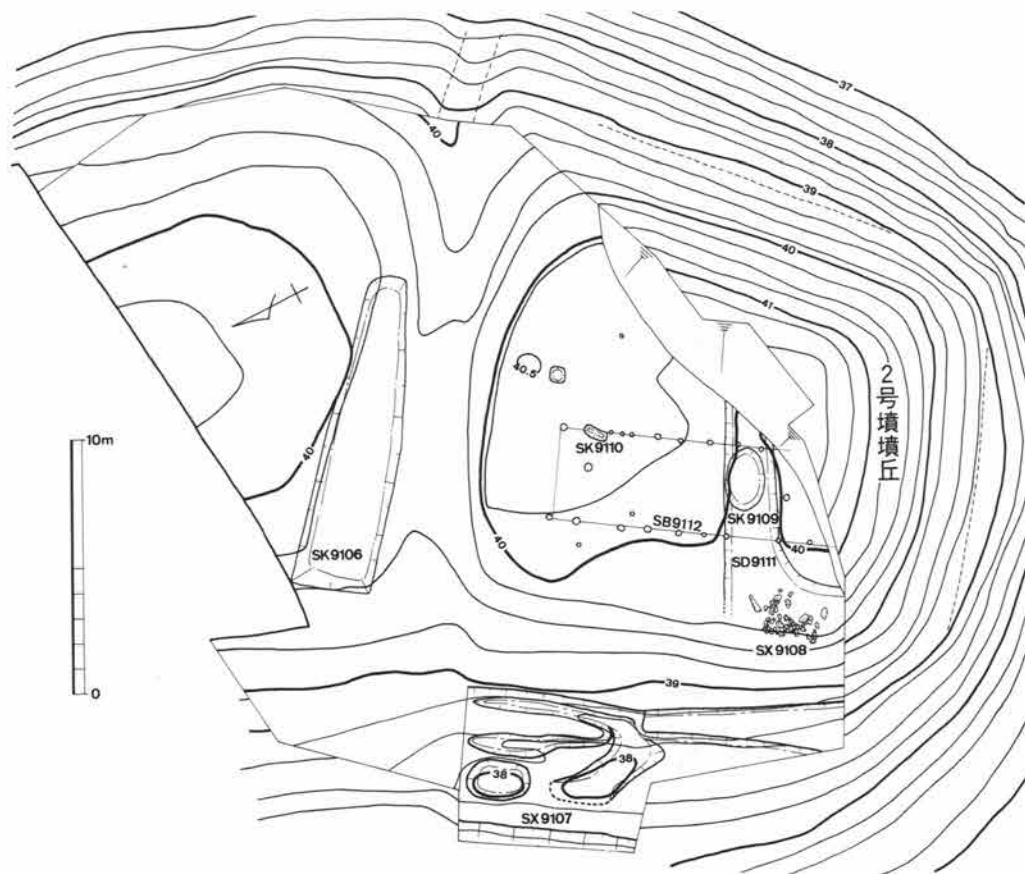
## a. 弥生時代の遺構・遺物

①遺構(第80図) 2号墳の墳丘盛り土中に弥生時代の土器が含まれていることから、盛り土下層に何らかの遺構が存在する可能性があった。

土坑(S K 9106) 長軸12.5m・短軸3.2m・深さ0.3mを測る長形状の土坑である。土坑の南東半部は、2号墳墳丘裾部に掘り込まれた林道のため、削平を受けている。土坑内からは、細片であるが弥生時代の土器片が少量出土している。

土坑(S K 9109) 長軸2.5m・短軸1.7mの規模を有し、平面形態は楕円形を呈している。土坑検出面から底部にかけてなだらかに掘り込まれており、最深部までは50cmを測る。埋土は暗茶褐色土であり、細かく分層できないことから短期間に埋まったと考えられる。本土坑から鉢14・脚部15のほか、図化できないが弥生時代の土器を検出している。

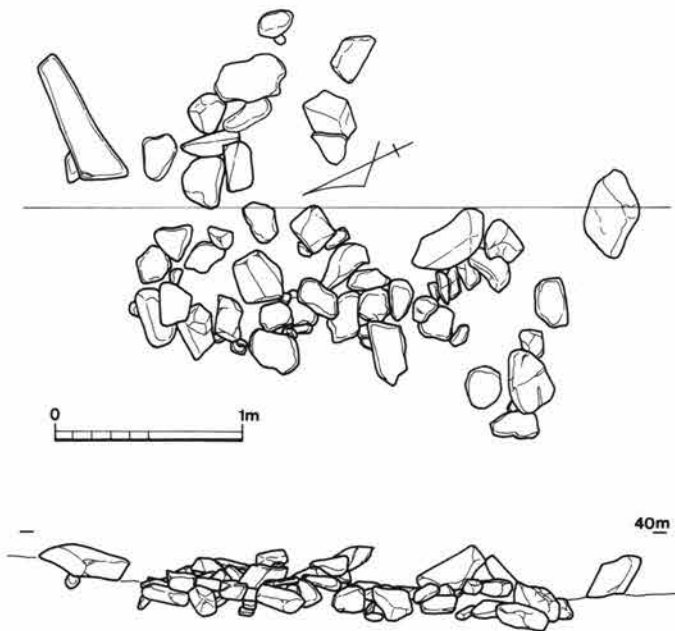
土坑(S X 9110) 長軸1m・短軸0.45mを測り、深さは0.3mである。埋土は、淡黒灰褐色であり、その状況から、土坑(S K 9109)同様、短期間に埋没したと考えられる。



第80図 弥生時代遺構配置図(1/300)

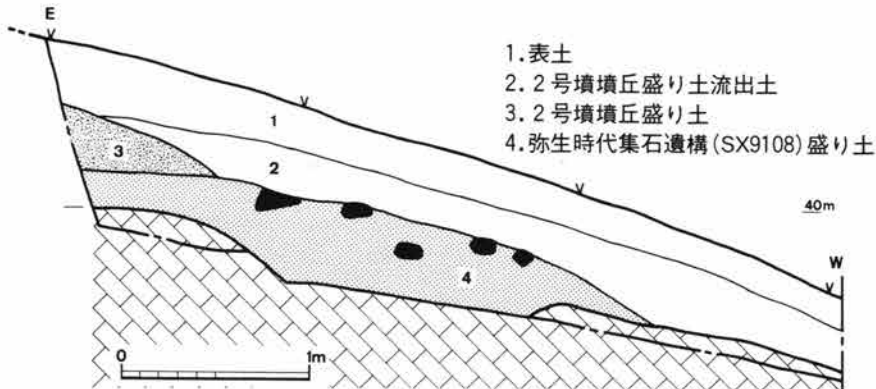
落ち込み(S X 9107)(図版第29-(2)) 古墳が築造された丘陵平坦地面と丘陵傾斜面の間に走る傾斜変換線上に位置する。1段目の落ち込みは、傾斜変換線と並行に走っており、検出面から約20cm落ち込んでいる。2段目以下は、不規則ではあるが傾斜変換線に並行し、その下方に長軸2.5m・短軸1.5m・深さ0.5mの楕円形状の落ち込みと、2段目の落ち込みから北方にのびる溝状の落ち込みが位置している。出土した土器群は、主に1段目と2段目に集中しており、器高71.2cmを測る壺22の破片の多くは、ここからの出土である。

集石遺構(S X 9108)(第81図) 土坑(S K 9109)の西方約5mに位置し、傾斜面に並行す

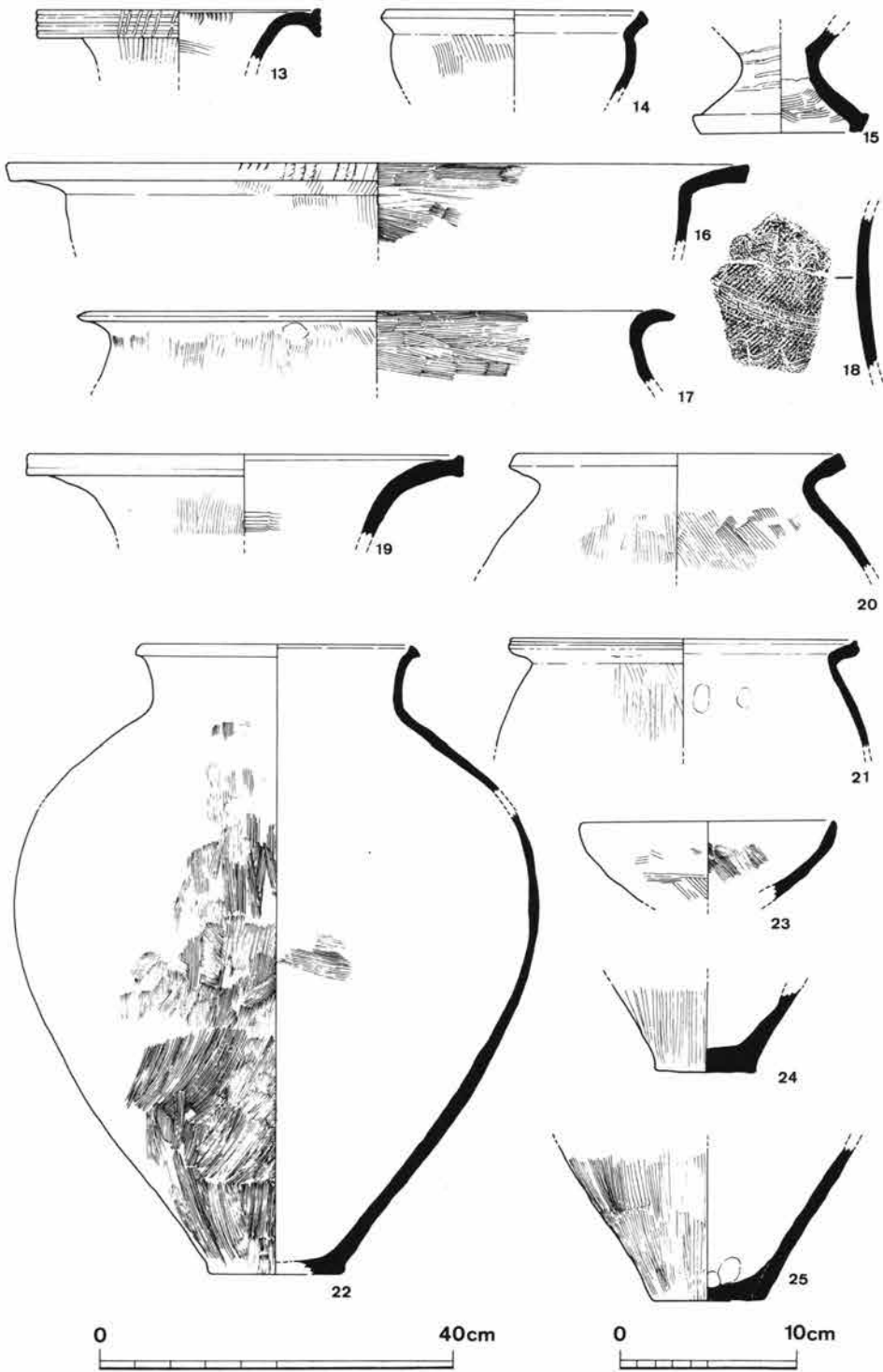


第81図 弥生時代集石遺構(S X 9108)実測図(1/40)

る南北の石列と直交する東西の石列からなる。礫群の多くは上方から転落している状況を呈しているが、礫群間から壺13などの土器破片が出土した。2号墳の盛り土との関連を検証する目的で土層断面(第82図)を作成したが、礫群を含む淡黒灰褐色土層(4層)の東上面は、2号墳の盛り土で覆われ、全体的に2号墳の盛り土の流出土で覆われている。



第82図 2号墳西側傾斜面南壁断面図(1/40)



第83図 弥生土器実測図(13~21・23~25.1/4 22.1/8)

13. S X9108 14・15. S X9109 16~25. S X9107

溝(S D9111) 先述した土坑(S K9109)から集石遺構(S X9108)にかけて穿たれた幅約2m・深さ約20cmの溝である。溝の北肩部は、直線的に傾斜面に直交して走っており、南肩部は、集石遺構(S K9108)に至る約1.5m上方で緩やかではあるが、南方に屈曲している。溝の中央部には土坑(S K9109)が溝の北肩を切るように掘り込まれている。溝の南肩部が集石遺構(S X9108)の上方1.5mで南方に屈曲することから、両者は同時期に併存していた可能性がある。

掘立柱建物跡(S B9112) 溝(S D9111)の北方平坦地から南にかけてのびる掘立柱建物跡である。南方の2号墳墳丘盛り土内にのび、さらに規模が大きくなる可能性がある。柱穴はすべて円形を呈しており、15～25cmの直径を測る。梁間の柱間距離は3.6mを測るが、柱穴を持たず、礎板などで柱を受けていた可能性も指摘できる。西側柱穴列は、北西を起点に、1m・1.7m・1.1m・1.3m・1m・1m・2.1m・1.3mの各柱間距離を測り、総計10.5mを測る。一方、東側柱列は、土坑(S K9110)によって削り込まれるが、北東を起点に、2m・0.8m・1.1m・0.9m・1.2m・1.1m・1mの各柱間距離を測り、総計8.1mを測る。各柱間距離は、一定しておらず、一連の掘立柱建物跡とするには、多くの問題を含んでいるが、両柱列が並行していることなどから掘立柱建物跡として認識した。

②遺物(第83図) 出土土器が最も集中する遺構は、落ち込み(S X9107)であり、80%以上を占める。図化できた資料を中心に概観しておきたい。

集石遺構(S K9108)出土土器 壺13は、口径16cmで、外面の凹線の上に棒状浮文を付す。

土坑(S K9109)出土土器 鉢14は、口径14.4cmを測り、体部外面を縦方向のハケ目で調整する。脚15は、脚径9cmで内面をハケで調整する。

落ち込み(S X9107)出土土器 甕16は、口径42cmを測り、外面を縦ハケ、内面を横ハケで調整する。壺18は体部片であり、波状文・櫛描き文による施文を施す。壺19は、口径24.8cmを測り、口縁部には面をもつ。甕20は、口径18.4cmで体部内外面をハケ目で調整を行う。甕21は、口径19.6cmを測り、体部外面は縦ハケにより調整を行い、内面は指頭圧痕が観察できる。壺22は、口径30.8cm・頸径28cm・体部最大径59.2cm・底径14.8cm・器高70.8cmを測る。体部外面をハケで調整し、内面にも部分的ではあるが横ハケが観察できる。鉢23は、口径14.3cmを測り、内外面にハケ目を観察できる。底部24は底径5.7cm、25は底径6.3cmを測り、いずれも外面は縦ハケ、底部内面は指頭圧痕が観察できる。

土坑(S K9109・S K9110)出土土器は、遺構の性格から一括性が高いが、落ち込み(S X9107)内出土土器は、遺構の断面観察から複数時期の堆積があったと考えられ、一括資料として取り扱うには問題点も多い。各遺構から出土した土器群を概観すれば、弥生時代中期後半に比定できる。

## b. 中世の遺構・遺物

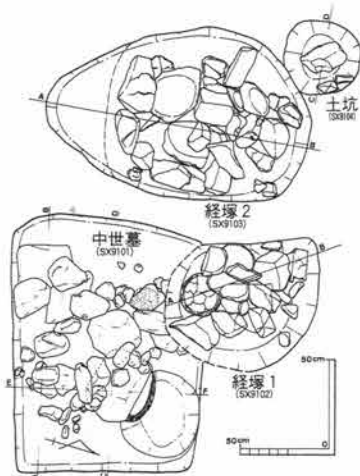
中世の遺構としては、2号墳墳頂部で検出した中世墓・経塚群・土坑があるが、墳丘表土直下では、瓦器・中国製青白磁・瓦質土器などの資料が出土している。各遺構の位置関係は、中世墓(S X9101)の北西角部を切り込んで経塚1(S X9102)が掘り込まれており、それらの西方に経塚2(S X9103)が掘り込まれている。土坑(S X9104)は、経塚2を切り込んではいないが、隣接して掘り込まれている(第84図)。

## ①中世墓(S X9101)

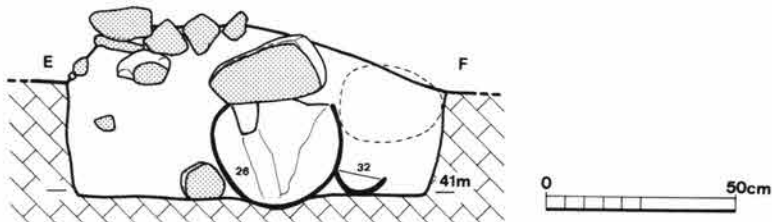
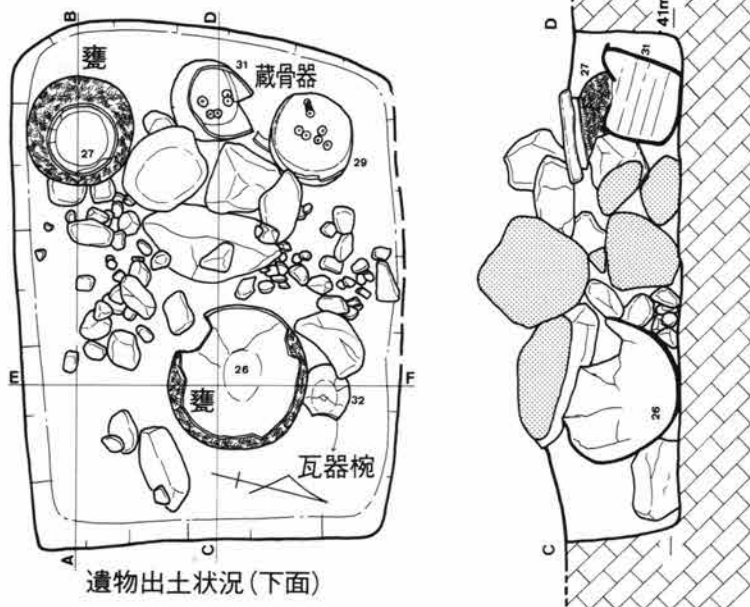
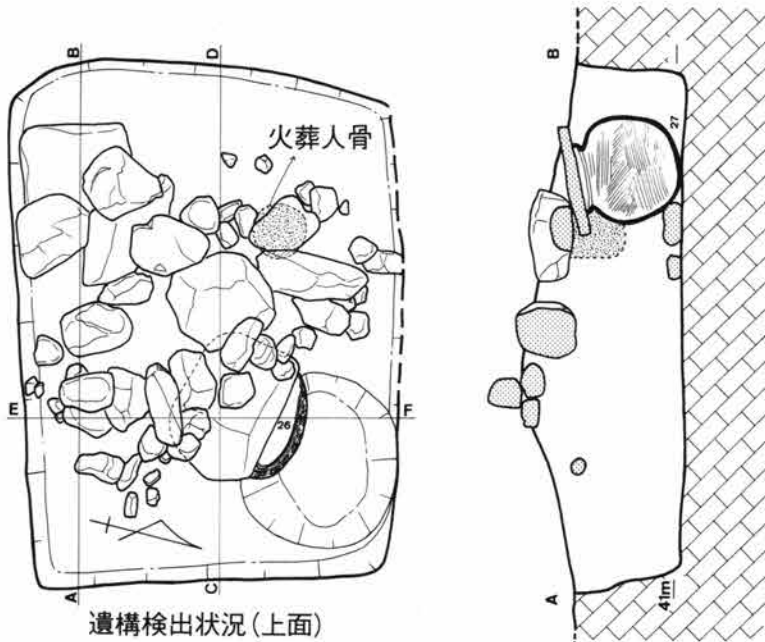
**遺構(第85図・図版第30)** 南北1m×東西1.37mの方形プランを有し、遺構を検出した面から墓壙底部までは0.3mを測る。また、墓壙内に充填された最上位の礫群から土壙底部までは0.54mを測る。充填された礫群は、墓壙中央に人頭大の礫を集石しており、その周囲には拳大の礫を配している。中世墓・経塚群の存在は、当初、予想されておらず、2号墳の埋葬主体部と墳丘盛り土の状況を把握する目的で設定したセクションは、墓壙の主軸線に対して角度をもって設定したが、確認できた最上位の礫群の上位にも拳大の礫群が集石されている状況を確認できた。それらの状況から、元来、礫群は中央部に高く集石した塚状を呈していたと考えられる。中世須恵器・甕26の直上には、底面が平坦な人頭大の礫を置き、同甕27の直上には、厚さ5cmの扁平な礫を配している。これらの礫群は、甕に蓋をする目的が意図されていたと考えられる。

中世須恵器・甕26の埋納状況は、甕自体の安定を確保するように若干掘り込まれた凹部に置かれており、甕の直上に礫を置いている。甕の中には、礫の重量で割れた破片が落ち込んでおり、元来、礫は口縁部を被覆するように置かれていたと考えられる。甕の中には、火葬人骨が埋納されており、多くは破片であった。また、甕底部とその上位で確認した火葬人骨には、基本的な残存状況に差異が見られることから、複数の火葬人骨が納骨されたと考えられる。この甕の北方、墓壙底面では、瓦器・椀32を検出している。瓦器の一部が甕の底部に接してはいるが、新旧関係は不明である。しかし、後述する経塚1(S X9102)では、経筒34直下で瓦器・椀37を確認したことから、甕を埋納する以前に瓦器・椀が墓壙底部に据えられたと考えておきたい。

墓壙南西角部には、中世須恵器・甕27がやや斜めの状態で据えられている。口縁部は厚さ5cmの扁平な礫で覆われており、底部内面には、1cm未満の暗



第84図 中世墓・経塚群配置図(1/40)



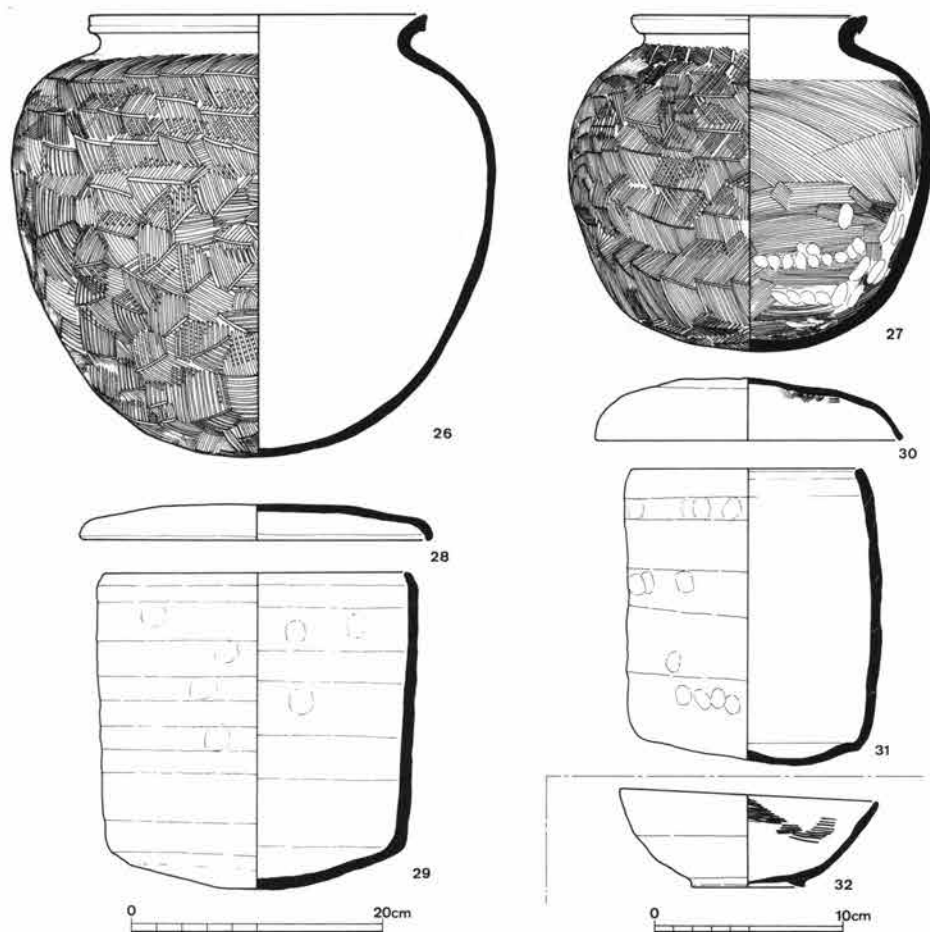
第85図 中世墓(S X 9101)実測図(1/20)



茶褐色土が堆積しており、経を甕内に入れていた可能性がある。

甕27の北方には、2個体の瓦質焼成の蔵骨器が据えられている。蔵骨器31は、検出した段階では一部が破損する蓋30がかかっており、筒内には微細片の火葬人骨が納骨されている。その火葬人骨片を除去すると、底部に天聖元宝・元豊通宝などの北宋銭が総計7枚(45~49他)出土した。蔵骨器29は、北側に隣接する経塚1(S X 9102)が掘り込まれる段階で、蓋28と蔵骨器の一部が破損している。微細片の火葬人骨片を除去すれば、底部に「V」字状に祥符元宝・元祐通宝などの北宋銭が10枚出土した。これらの北宋銭は、火葬人骨が投入される以前に蔵骨器底部に埋納されたものである。なお、充填礫群を検出した面で、直径14cm・深さ17cmの円形状に火葬人骨片が集中する部分を蔵骨器群の東方で確認した。その形状から曲物などの容器に火葬人骨を入れたと想定できる。

遺物(第86図、第90図41~49、図版第35・36-32) 中世須恵器・甕26は、口径26.6cm・



第86図 中世墓(S X 9101)出土遺物実測図(26~31.1/6 32.1/4)

頸径24.6cm・体部最大径38.6cm・器高34.8cmを測る。焼成は軟質であり、体部外面は、葉脈状のタタキ目が横方向を基本に顕著に見られ、内面はナデにより平滑に仕上げられている。甕27は、口径18.6cm・頸径16.6cm・体部最大径29cm・器高26.6cmを測る。堅緻に焼成されており、体部外面では頸部直下を縦方向の葉脈状タタキ目、肩部下半では横方向の葉脈状タタキ目が観察できる。内面は基本的に横方向のハケで調整し、部分的に指頭圧痕が観察できる。蔵骨器・蓋28は、色調は灰褐色を呈し、口径27.2cm・最大径28.2cm・器高3cmを測る。蔵骨器29は、蓋と同じ焼成であり、口径24cm・最大径25.8cm・器高25.2cmを測る。器表内外面には粘土帯接合痕が残り、指頭圧痕も観察できる。蔵骨器・蓋30は、灰褐色を呈し、口径24cm・器高5cmを測る。蔵骨器31は、蓋と同じ焼成であり、口径18cm・最大径20.1cm・器高23.2cmを測る。器表内外面には、粘土帯の接合痕があり、指頭圧痕も観察できる。瓦器・椀32は、器表面の残存状況は不良であるが、内面にヘラ磨きが観察できる。口径13.6cm・高台径6cm・器高4.8cmを測る。蔵骨器29には、41祥符元宝、42天聖元宝、43・44元祐通宝の他に聖宋元宝、政和通宝などの北宋銭が10点出土し、蔵骨器31には、45天聖元宝、46元豊通宝、47・49元祐通宝、48景德元宝の他祥符元宝、皇宋通宝の7点の北宋銭が出土している。

## ②経塚1(S X 9102)

**遺構**(第87図・図版第31) 先行して中世墓を完掘したため、土坑肩部の傾斜変換線は不明であるが、南北0.9m×東西0.7mの不整形な円形を呈する。充填された礫群は、土坑中央に人頭大の礫を配し、経筒外容器周囲を拳大の礫で充填している。基本的に経筒外容器は礫群で覆われており、経筒外容器の蓋は、礫の重量で破損しているものの、原位置を保っている。経筒外容器34を取り上げた時点で、瓦器・椀37を検出した。瓦器は、経筒外容器の直下になる部分が欠損していたが、残存率も比較的高い。また、瓦器を検出した土坑底面では、聖宋元宝などの北宋銭が主に、経筒外容器34に近い地点で9枚出土した。

検出した2点の経筒外容器の底面には、漆の被膜が重なり合っており、現地調査時では、それらの取り上げはできず、経筒外容器ごとに取り上げを行い、現在、保存処理を実施している(図版第32)。

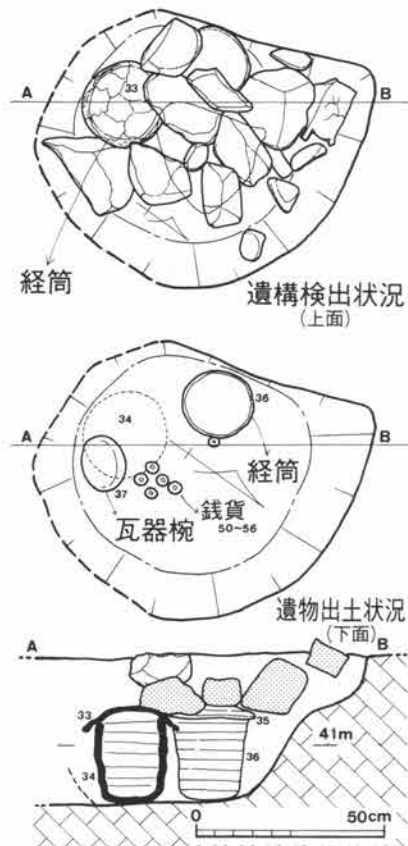
**遺物**(第89図33~37・第90図50~56) 経筒外容器・蓋33は、陶質焼成であって、口径25.2cm・器高6.4cmを測る。口縁部は2段に屈曲し、端部に面をもつ。内面はハケによって調整しており、外表面には指頭圧痕が観察できる。経筒外容器34は、陶質焼成であり、口径17.8cm・最大径19.6cm・器高21.2cmを測る。口縁端部は内外方に肥厚しており、器表内外面に粘土を接合した痕跡と指頭圧痕が観察できる。経筒外容器・蓋35は、陶質焼成であり、口径23.2cm・器高5.3cmを測る。基本的な形態は、蓋33と同じであるが、口縁部の

屈曲率は低い。経筒外容器36は、陶質焼成で、口径20cm・最大径11cm・器高22.7cmで、器表の内外面に粘土接合痕と、指頭圧痕が観察できる。瓦器・椀37は、口径13.2cm・高台径5.6cm・器高4.8cmを測る。内外面とも器表面の遺存状況は不良である。口縁端部はやや肥厚し、断面三角形の貼り付け高台が付く。土坑底面からは、50景祐元宝、51政和通宝、52祥符元宝、53・55皇宋通宝、54淳化元宝、56至和通宝のほか、聖宋元宝などの北宋銭が9枚出土している。

経筒外容器の内部には、経筒の外面に塗布した漆被膜を検出した(図版第32)。被膜の表面には銀箔の痕跡も観察でき、つまみ付木蓋蓋も確認した。漆被膜内面は竹の繊維が明瞭に残存しており、経筒自体の素材は、竹製であったと考えられる。また、木製の蓋は、なだらかな天井部を有し、中央にていねいな加工を加えたつまみを挿入している。蓋内面は、経筒口縁と接する部位を0.5cm程度削り込んでおり、つまみと蓋の天井部に黒漆を塗布している。なお、蓋の木質の残存状態は不良である。現状では、正確な個体数は確認できないが、経筒外容器各々に3個体の竹製経筒が埋納されている可能性がある。

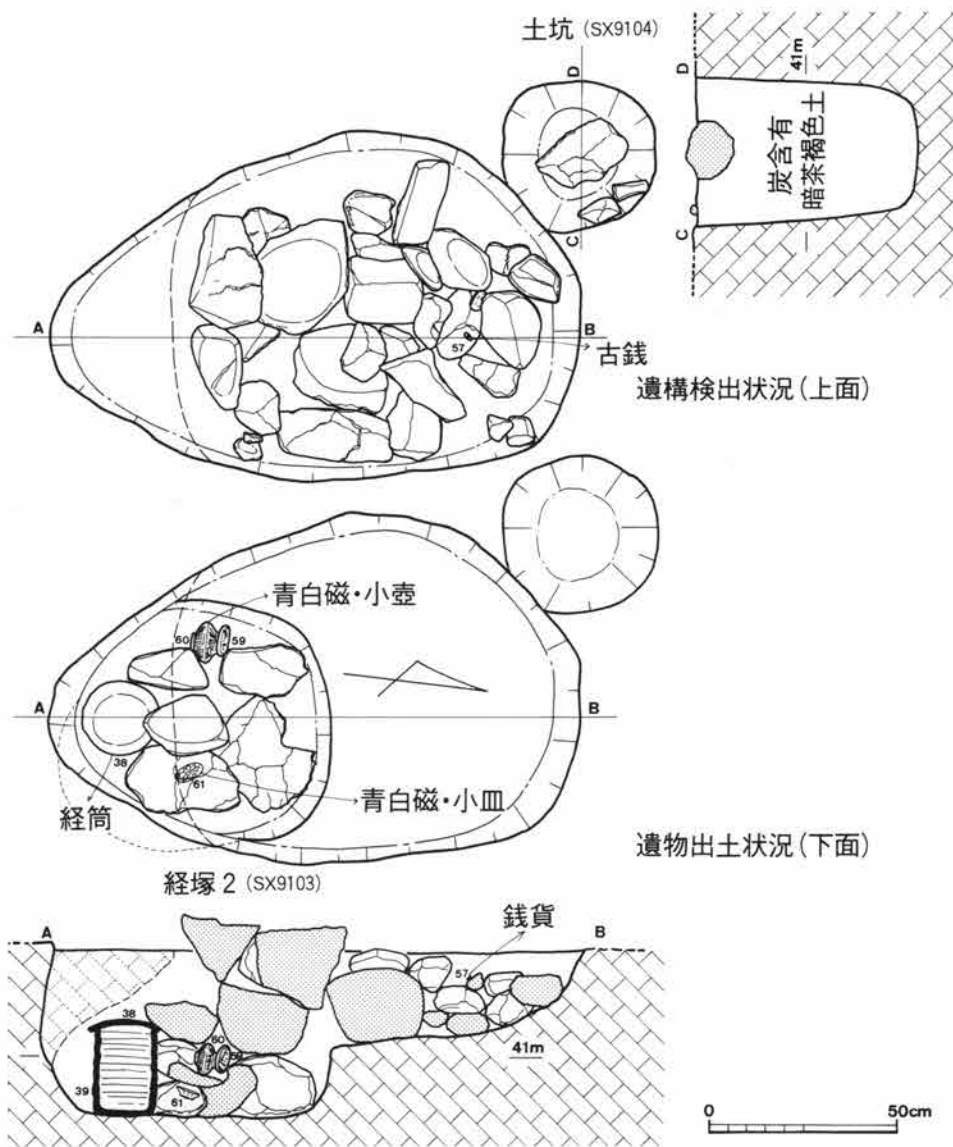
### ③経塚2(S X9103)

遺構(第88図・図版第33) 中世墓・経塚1の西方で検出した長軸1.4m・短軸0.92mの不整形な楕円形を呈する掘形をもつ。土坑北方は、元来、経筒外容器を埋納するためにオーバーハンクするように掘り込まれるが、2号墳の墳丘盛り土を掘り込んでいるため、崩落した状態で土坑掘形の輪郭を検出した。その状況を勘案して長軸を復原すれば、1.1m前後となる。土坑の北半部は、0.25mの深さまで掘り込まれており、底面は比較的平坦である。また、土坑南半は、検出面から0.45mの深さまで掘り込まれ、底面は平坦である。基本的な壁の形状は、検出面からなだらかに掘られているが、先述したように南壁は、経筒外容器を埋納するため、0.3m程度オーバーハンクして掘り込まれている。土坑北半部の平坦面は、拳大の礫で充填しているが、南半との境部には、人頭大の礫を配している。北半中央部から銭貨が一点出土している。



第87図 経塚1(S X9102)実測図(1/20)

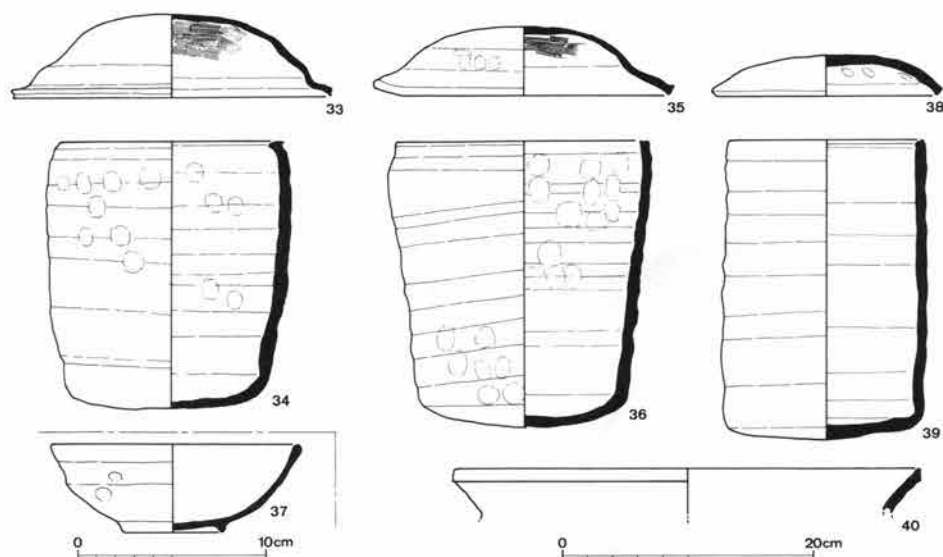
土坑に充填されている上位の礫群を除去すると、南半部の深い掘形内に人頭大の充填礫と経筒外容器38・39、中国製青白磁、小壺59・60を検出した。人頭大の礫群は、比較的まとまって出土しているが、青白磁・小壺が転落した状態で検出したことを考えれば、転落ないし陥没による移動が生じた可能性がある。中国製青白磁・小壺は、人頭大の充填礫間に転落した状態で出土しており、経筒外容器のように、安定した状態で据えられた可能性はない。これらの充填礫を除去する過程において、検出面下0.4mの地点で中国製青白磁・小皿61が充填礫下から出土した。小壺と同様に安定した出土状況ではない。これらの充填



第88図 経塚 2 (S X 9103) ・土坑 (S X 9104) 実測図(1/20)

礫は、基本的には、計画的な集積を行っていないが、経筒外容器を取り囲む礫群は、一種の石室を意識していると考えられる(図版第33-(2))。

遺物(第89図38・39、第90図57・58、第91図、図版第36) 経筒外容器・蓋38は、淡黒色を呈する瓦質焼成であって、口径17.4cm・最大径18.4cm・器高3.2cmを測る。内面には指頭圧痕がわずかではあるが残存している。経筒外容器39は、蓋と同じく瓦質焼成であり、口径15.4cm・器高23.8cmを測る。淡黒色を呈しており、粘土接合痕がわずかながら観察できる。中国製青白磁・小壺 蓋59は、口径5cm・最大径8.2cm・器高1.6cmを測る。天井部には、型造りによる草花文(牡丹文)が施されている。内面には、釉薬はかかっておらず、ナデ痕が明瞭に残存している。同小壺60は、口径6.4cm・体部最大径9.4cm・底部径6cm・器高5.6cmを測る。短く直立する口縁部で、器高のほぼ中央に最大径をもつ。体部外面肩部には、型造りによる草花文(牡丹文)が施されており、下半部には、放射状の印花文が観察できる。なお、内面には上半部と下半部を接合した稜線が明瞭に残っており、外面は接合部をていねいにナデ消している。底部外面には、釉薬はかかっていない。同小皿61は、口径6.2cm・底径2.3cm・器高1.2cmを測る。削り出し高台とわずかに外反する皿部からなる。型造りにより内面に12葉の花弁文が施されており、外面には、型押しの際に凹んだ痕跡が明瞭に観察できる。土坑内からは、57の熙寧元宝、58の元豊通宝が出土している。中世墓や経塚1での銭貨は、蔵骨器内底部に入れられていたり、土坑底面にまとまって出土しているが、経塚2は、そのような出土状況とは異なり、充填礫間から出土している。



第89図 経塚群・土坑(S X9104)出土遺物実測図(33~36・38~40.1/6 37.1/4)

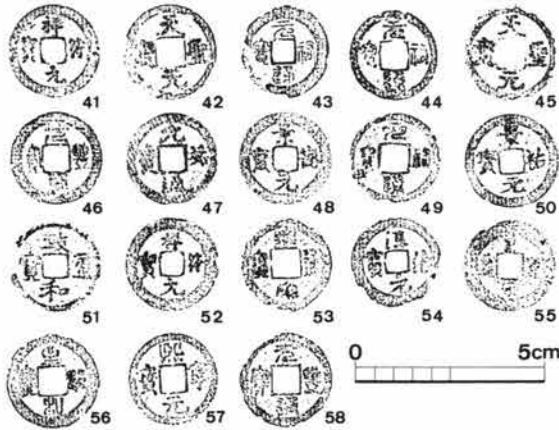
33~37.S X9102 38・39.S X9103 40.S X9104

④土坑(S X 9104)

遺構 経塚2の北西方に隣接して掘り込まれた土坑である。平面プランは、直径0.4mの隅丸方形を呈しており、深さは0.58mを測る。土坑検出面では、土坑の中央に25cm×15cmの礫と拳大の礫を置いている。土坑内の埋土は、炭を多く含む暗茶褐色土が主体であり、

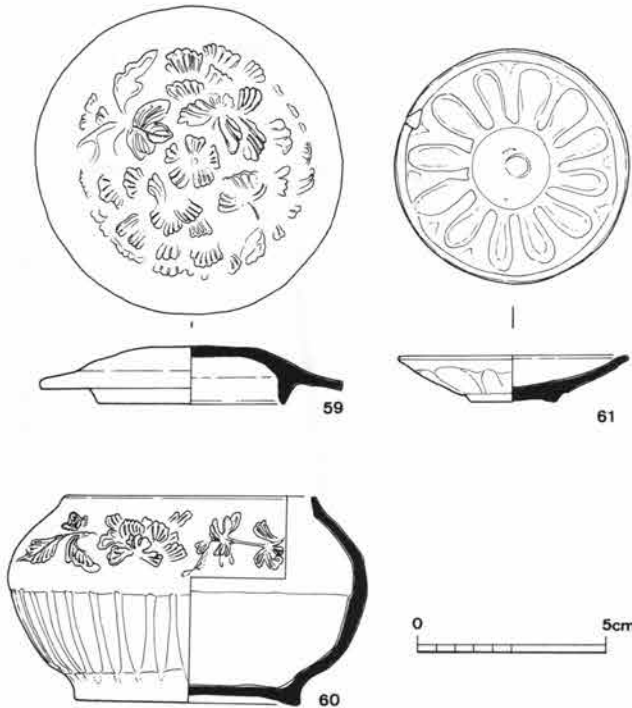
中世須恵器・甕40の口縁部が出土したにすぎない。

以上が中世関係の遺構・遺物である。中世墓と経塚群が隣接したところに造られていることが判明し、特に、中世墓の一部を切り込んで経塚が掘られている事実は、それらを群として考える場合に極めて重要である。



第90図 錢貨拓影(1/2)

41~44. S X 9101-29      45~49. S X 9101-31  
50~56. S X 9102      57・58. S X 9103



第91図 経塚2(S X 9103)出土青白磁実測図(1/2)

4. まとめ

高田山古墳群の発掘調査は、

古墳の調査成果の重要性とともに、下層から検出した弥生時代の掘立柱建物跡や集石遺構、上層の中世墓や経塚群など、当初、予想もしなかった成果をあげることができた。これら各々のもつ問題点は、周辺地域の歴史的環境を考える上で重要であり、詳細に解釈を行う必要があるが、本概要では、事実関係を明らかにすることを目的としたため、詳細な検討は後日にゆずることとした。

ここでは、各時代の問題点を事実報告を行った順に概観しておく。

**2号墳の調査成果と問題点** 2号墳は、南北22m×東西19mの方墳であることが、発掘調査によって確認された。綾部市・福知山市を中心とする中丹地域には、現在、約150基の方墳が確認されている。その中にあって一辺が20mを測る方墳は、12基を数えるにすぎず、全体の8%となる。2号墳の南側に所在する1号墳は、一辺25mの墳丘規模をもち、中丹地域では、4番目に大きな方墳であり、今回、調査を行った2号墳は、8番目の規模である。埋葬主体部からは、土師器や須恵器が出土しており、それらの土器群から、築造時期を陶器編年T K216前後<sup>(注3)</sup>に比定して大過ない状況にある。

中丹地域で、近年発掘調査された私市円山古墳は、直径80mを測る円墳であることが確認され、葺石や埴輪をもつ大型円墳として注目された。また、埋葬主体部に副葬された三角板革綴短甲や鏡・剣・刀・小型農耕具類の発見は、中丹地域が畿内政権にとって非常に重要視されていたことを証明しただけではなく、由良川によって開けた平野部の古墳時代の動態を再検討する必要性が生じた。この私市円山古墳は、出土遺物によって5世紀前半から中葉にかけての築造時期が設定されており、今回、発掘調査を行った高田山2号墳と時期的には近接している。私市円山古墳の墳丘・外表施設・埴輪、そして、埋葬主体部からの出土遺物から畿内政権と密接な関連をもった人物が想定でき、その人物によって、中丹地域が掌握されていたと考えられる。これは、私市円山古墳出現以後に、大型の方墳・円墳が築造されなくなることで傍証されている。その時期にあって、中丹地域では4・8番目の墳丘規模をもつ高田山古墳群の存在は、重要である。中丹地域において、弥生時代末から継続して築造される墳墓の形態は、基本的には方形墓であり、古墳時代前期から中期にかけても伝統的な墓制として踏襲されている。その観点で高田山古墳群を考えた場合、その墳丘規模から、在地勢力による自立的発展がうかがわれ、その存在を容認せざるを得なかった状況を想定できる。おそらく、私市円山古墳に葬られた人物は、中丹地域を比較的広い地域にわたって掌握したと考えられるが、小地域内の在地首長層を介在にすることによって、各地域の支配を強めていったと考えられる。今後、各古墳の築造時期を正確に把握し、さらに、検証を行いたいと思う。

**弥生時代の検出遺構の調査成果と問題点** 2号墳の下層で検出した掘立柱建物跡や、集石遺構・溝などは、出土土器から第Ⅲ様式から第Ⅳ様式に比定できる。溝(S D9111)の南肩部が南方向に屈曲し、その屈曲部の外縁に集石遺構(S X9108)が位置することは、同時期に併存したことを示唆しており、土層断面からも肯首できる状況である。その遺構群の性格については、検出範囲が狭小であり、検出か所が全体のどこに該当するのかが不明であるため、推測の域を出ないが、ここでは、墳墓としておきたい。今後は、集石をもつ墳

墓についての類例を集成し、検討を加える必要がある。

掘立柱建物跡(S B9112)は、柱穴ごとの距離は一定していないが、ほぼ対になることから掘立柱建物跡として復原できる。この丘陵は、由良川を広く見渡せる良好な条件下にあることから、この掘立柱建物跡もその条件と深い関係があるものと考えられる。また、落ち込み(S X9107)から出土した壺22は、一側面が良好に残存していることから、比較的残存状態の良好な時点で落ち込み内に転落あるいは投棄されたと考えられる。ここでは、墳墓ないし掘立柱建物跡で行われたある種の行為が、終了した直後に投棄されたと考えておきたい。弥生時代に関連する事実関係は、まだ整理に着手したばかりであり、今後、出土土器の詳細な様式設定を行う必要もある。また、検出遺構についても検討を必要とする。

**中世墓・経塚群の調査成果と問題点** 2号墳の墳頂部で検出した中世墓や経塚群は、中世須恵器甕の形態的特徴と出土瓦器碗の形態から、13世紀前半に比定して大過ない状況である。中世墓の中央に据えられた甕26内には、火葬人骨が比較的まとまって投棄されている。それに比べ、2点の蔵骨器には、微細な火葬人骨が入っているにすぎない。このことは、中央の甕が納骨用に据えられた状況を示唆していると考えられる。南西の甕27は、内部からの遺物はなかったが、福知山市・大道寺経塚例でも知られるように竹製の経筒を入れた可能性もある。いずれにしても、中世墓への蔵骨器の埋納回数は、出土状況から2回以上あったと考えてよい状況である。一方、経塚群は、現在、2基確認しているが、経塚1は小規模であり、経筒外容器内には漆の被膜が入っていることから、火葬人骨を埋納したとは考えられない。しかし、経塚2は、人頭大の礫群が転落した状況を呈していることから、何らかの火葬人骨を埋納する空間は存在している。これらの遺構を群として捉えた場合、従来の経塚に対する認識を多少なりとも修正する必要も生じる。今後、これらの解釈についても、さらに検討を加えていきたい。<sup>(注4)</sup>

(小池 寛)

注1 調査参加者(敬称略・順不同)

橋本 稔・林 秀子・松崎才枝・塩見健次郎・塩見みち子・塩見すえ子・塩見美夫・塩田あや野・塩田芳夫・塩見政野・塩見あや子・塩見時枝・塩見千世子・塩見登美子・坂東 正・塩見鈴子・塩見かをる・塩見房江・塩見増臣・塩見忠明

注2 小池 寛「高田山古墳群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

注3 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966

注4 調査中、難波田徹・杉原和雄・吉村正親諸氏から有益な御助言をいただいた。

[付] 高田山古墳群の略号は、第1次調査から「TDK」を踏襲している。



## 4. 細谷古墳群発掘調査概要

### 1. はじめに

細谷古墳群は、京都府綾部市位田町大字細谷に所在する後期古墳群で、今回の発掘調査は、社団法人京都府農業開発公社が計画・施工する公社営蓄産基地建設に伴う事前調査である。発掘調査は、古墳の存在がある程度予想された1号墳と同一丘陵内の範囲確認を当調査研究センターが行い、周辺一帯の古墳の分布調査と、墳丘規模などを明確にする目的で京都府教育庁指導部文化財保護課が調査を行った。

細谷古墳群は、京都府教育委員会が発刊した京都府遺跡地図第2分冊によると、4基からなる古墳群と認識されているが、基礎資料の不足からその分布状況と基数については正確に記載されておらず、不明な点が多かった。

発掘調査は、平成3年9月18日から同10月30日に実施し、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員小池 寛が担当した。また、本概要報告の執筆・編集は小池が行った。

発掘調査を進めるにあたり、綾部市教育委員会をはじめ関係諸機関<sup>(注1)</sup>の方々からは、多くの御協力を得た。また、共同調査を担当された京都府教育委員会指導部文化財保護課技師森下 衛氏からは、多くの御援助を賜り、本概要報告作成には、前田暁宏氏の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。

なお、本発掘調査に係わる経費は、社団法人京都府農業開発公社が全額負担された。

### 2. 周辺の歴史的環境(第92図)

ここでは、細谷古墳群が所在する綾部市の古墳時代を中心に、その歴史的環境について概観しておきたい。

綾部市・福知山市に代表される中丹地域は、由良川により形成された平野部を中心としており、由良川に面した丘陵先端部に多くの墳墓が築造される。古墳時代前期に築造された綾部市成山2・3号墳、福知山市宝蔵山4号墳は、壺棺などを主体部とする当該地の伝統的な墓制を踏襲している。これらの古墳の墳形は方墳で、中期に築造される綾部市菖蒲塚古墳・同聖塚古墳・妙見1号墳にまで受け継がれる。特に、菖蒲塚古墳と聖塚古墳は、中丹地域ではあまり見られない葺石・埴輪を持ち、在地色を堅持しながらも畿内政権との

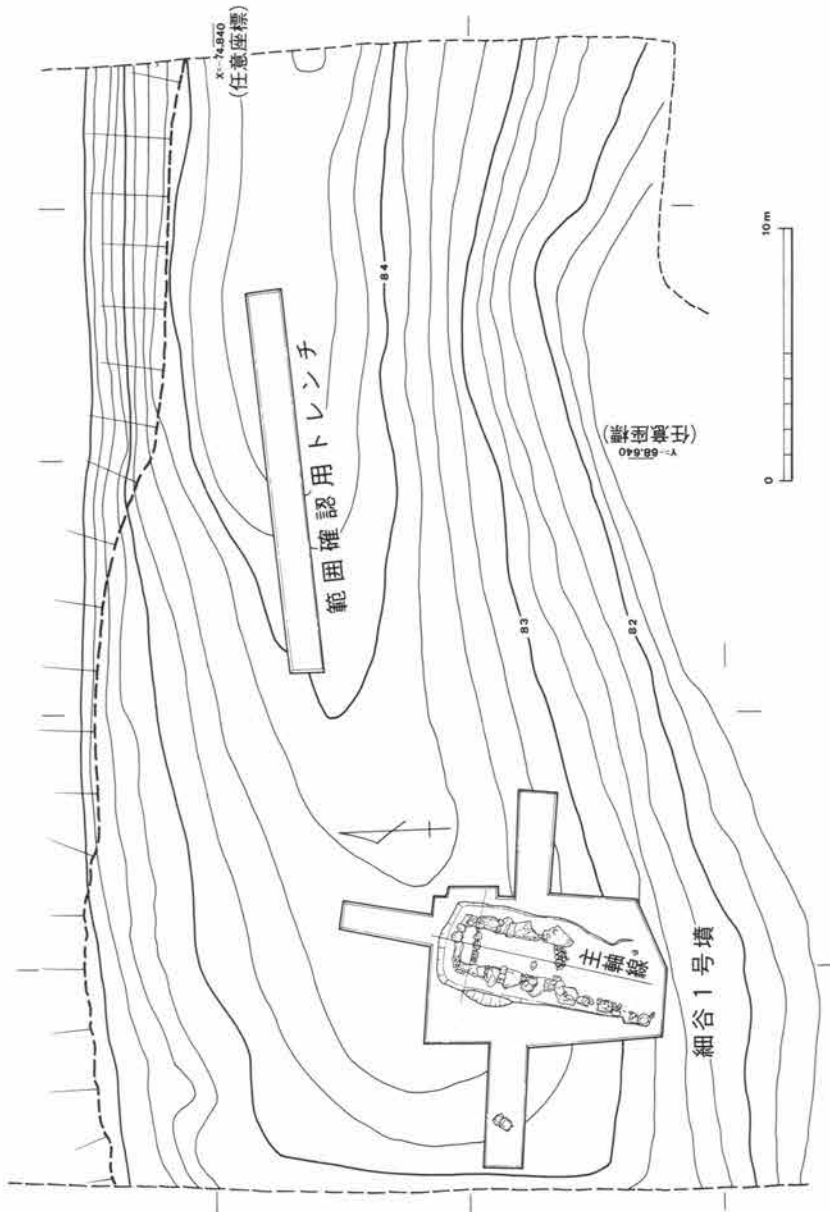
関係を示唆している。また、近年の開発で新たに検出された綾部市私市円山古墳は、80余mを測る円墳で、埴輪・葺石・造り出しを有し、埋葬主体部から三角板革綴短甲・胡篋・ミニチュア農耕具・仿製鏡・剣・刀・玉類などの畿内色の濃い副葬品が多数出土した。この古墳の発見で、古墳時代中期における中丹地域の重要性が認識されただけでなく、周辺地域の古墳の変遷を再考する契機ともなった。なお、古墳時代前期に成立する綾部市三宅



第92図 調査地位置図(1/50,000)

- |               |           |         |         |
|---------------|-----------|---------|---------|
| 37~40.以久田野古墳群 | 45.宮越古墳群  | 41.沢古墳群 | 73.位田城跡 |
| 197.位田遺跡      | 313.赤田城館跡 |         |         |

遺跡では、無墳丘の土壙墓が多数発見され、「民衆の墓」の実態が明らかにされた。細谷古墳群の西方約1kmには、中丹地域で最も古墳が集中する以久田野古墳群がある。古墳群の多くは後期古墳であるが、中期後半に築造された沢3号墳のように前方後円墳なども築造されている。これらの古墳群は、周辺の歴史的環境を考える上で重要であり、細谷古墳群を解釈する上でも、今後、検討しなければならない。このように、近年の考古学的調査により徐々にその実情が把握されつつあり、今後は、集落の検出が待たれる。

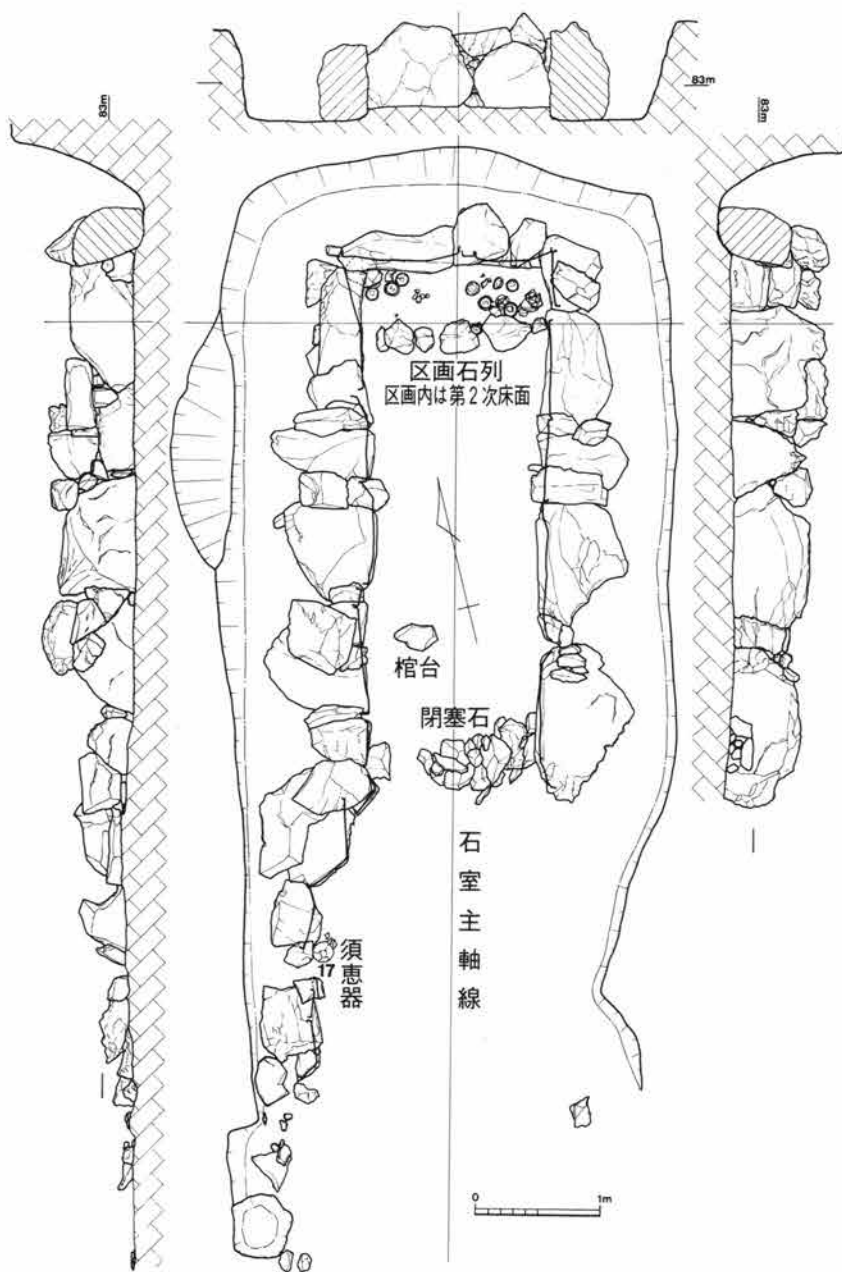


第93図 細谷1号墳地形測量図(1/300)

### 3. 調査の概要

#### (1) 墳丘(第93図・図版第37-(1))

細谷1号墳が所在している丘陵は、現在、牧草地となっているが、牧草地を造成する際に大きく削平を受けたため、墳丘は残存していない。そのため、墳丘規模や墳形について



第94図 細谷1号墳石室実測図(1/60)

は不明であるが、細谷古墳群の他の墳丘が円墳であることから、後期に通有に見られる円墳である可能性が高い。また、墳丘規模についても、想定する根拠に乏しいが、石室主軸線から西方に使用石材が2石位置しており、墳丘に関連する何らかの施設であると仮定するならば、直径15m以上を想定することも可能である。

## (2)石室(第94図・図版第37-(2)・39-(2))

石室の掘形は、幅3.6m・全長9mを測る。玄室部分は検出面から0.8mの深さまで掘削し、石室基底石を設置しており、羨道部方向に浅く掘り込まれている。

石室の上半部は、墳丘掘削時点で消失しており、天井部の構造や石室の高さは不明であるが、玄室奥壁の残存高は0.74m、左側壁の最も残存する部分で0.72m、右側壁で0.76mをそれぞれ測る。奥壁の基底石は2石で構成され、玄室左側壁は基本的には4石の基底石で構築されている。一方、玄室右側壁は、袖石を含め4石で構築されているが、奥壁部分は、0.5m前後の礫で構築している。玄室の全長は、残存する閉塞石の外面で計測すれば3.8mを測り、玄室幅は1.4mを測る。一方、羨道部は、0.4m前後の比較的扁平な礫で構築されており、羨道左側壁の残存高は0.4m、右側壁は完全に消失している。羨道幅は、玄門部を基準に玄門部で1.34m、南方1mラインで1.8m、南方2.6mラインで2mを測り、羨門部方向に幅を広く構築している。

玄室と羨道の構造から勘案すれば、天井石は、玄室には架設されていたと考えられるが、羨道部には、架設されなかったと考えることが妥当である。

玄門部の閉塞石は、玄室右側壁の袖石部分に接して残存しており、残存高は0.2mを測るにすぎない。また、玄室床面には左側壁から約0.3m、奥壁から2.8mの位置に、棺台に使用した0.3m×0.2mの扁平な礫が置かれている。床面の多くは攪乱を受けているため、棺台に使用した礫の間隔などは不明である。

床面の多くは攪乱を受けており、出土遺物は原位置を保っていないが、奥壁から1mは、かろうじて攪乱を免れていたため、第1次・第2次床面(図版第39-(1))が良好な状態で残存している。

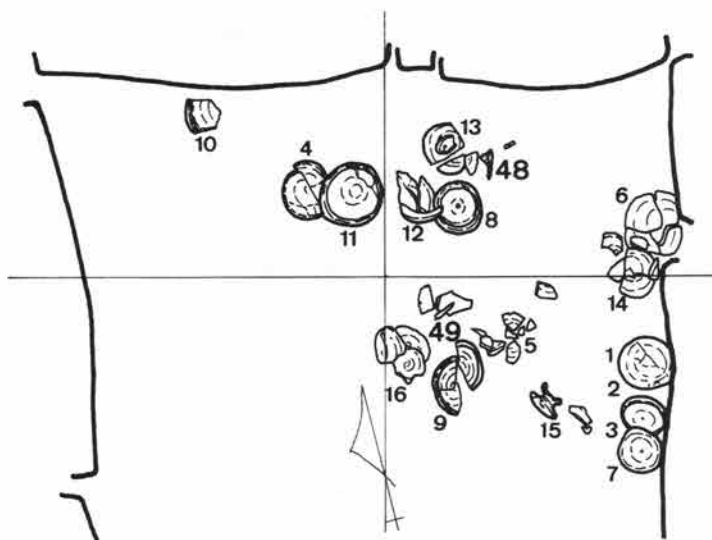
第1次床面(第95図・図版第38-(1))は、地山面直上に須恵器群を確認することによって認識した。出土した土器群は、奥壁部・右側壁部・中央部の3か所に集中する傾向があり、全体的に見れば右側壁部に集中している。奥壁部では蓋4、杯身8・10・11、高杯12・13、右側壁部では蓋1・2・3、杯身6・7、高杯14、中央部では蓋5、杯身9、高杯16がそれぞれ出土している。土器群が右側壁を中心に分布する要因としては、主軸線以西に棺が安置されたためと考えられる。これは、閉塞部近くで確認した棺台礫の位置関係からも矛盾しない。なお、土器群に混じって鉄製刀子48・49が出土しているが、その他の玉類は、

攪乱土中からの出土であり、第1次・第2次床面のいずれに属するかは不明な点が多い。

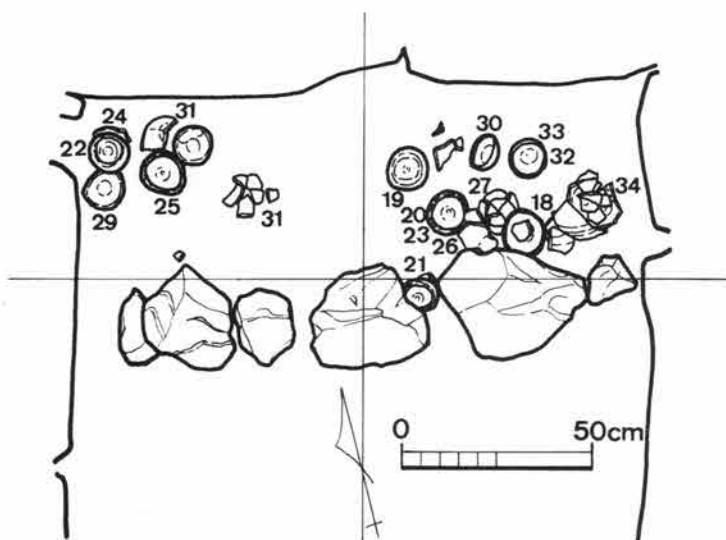
第2次床面(第95図・図版第38-(2))は、第1次床面を流入土が覆った段階で床面を貼り直して造られている。第1次床面と同じように多くは攪乱により消失している。第1次床

面との相違点は、奥壁から0.5mのラインに0.3m程度の礫を3石並べ、奥壁部を区画することにある。土器群は、右半部と左奥壁部の2か所に集中する。右半部からは、蓋18・19・20、杯身21・23、平瓶34、土師器26・27・30・32・33、左奥壁部から杯身22・24・25、土師器29・31が各々出土した。第2次床面に伴う鉄製品は奥壁区画部内から出土していない。

なお、須恵器平瓶35は、第2次床面から0.1m程度上層で出土しており、ここでは第2次床面に伴う土器として報告する。



第1次床面遺物出土状況



第2次床面遺物出土状況

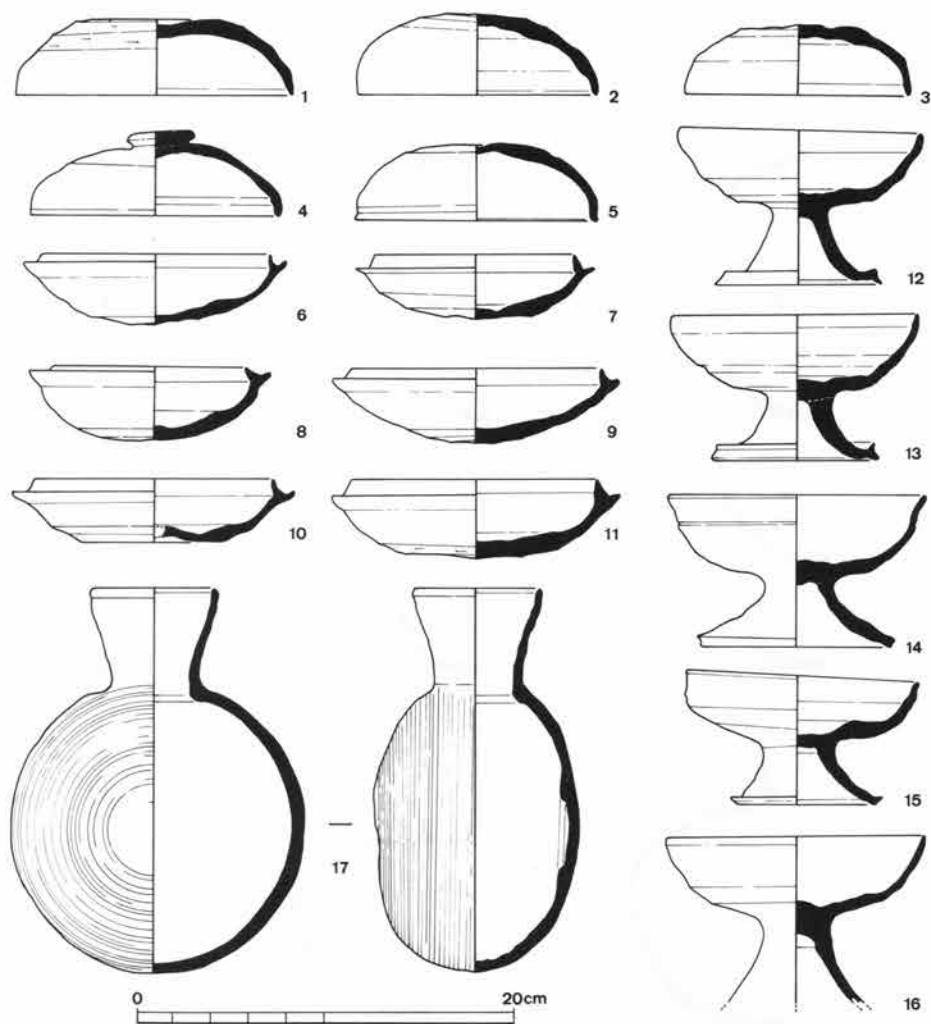
第95図 遺物出土状況実測図(1/20)

4. 出土遺物(図版第40・41)

出土遺物には、須恵器の蓋杯・高杯・提瓶・平瓶、土師器の鉢、そして、耳環、玉類、鉄鏃・鉄刀・鉄製刀子などがある。ここでは、各床面ごとに解説を加えるが、攪乱土中から出土した土器片や鉄刀については残存率がかなり低いため割愛する。また、各個体の法量については、付表9に記載した。

(1)第1次床面出土遺物(第96図)

須恵器・杯蓋は、4点出土している。1は、歪みにより天井部が平らになっているが、基本的には丸い天井部を有し、天井部と口縁部を分ける稜は消失している。また、口縁端部は丸くおさめているが、1は、内面に内傾面が形骸化した稜線がわずかに残っている。



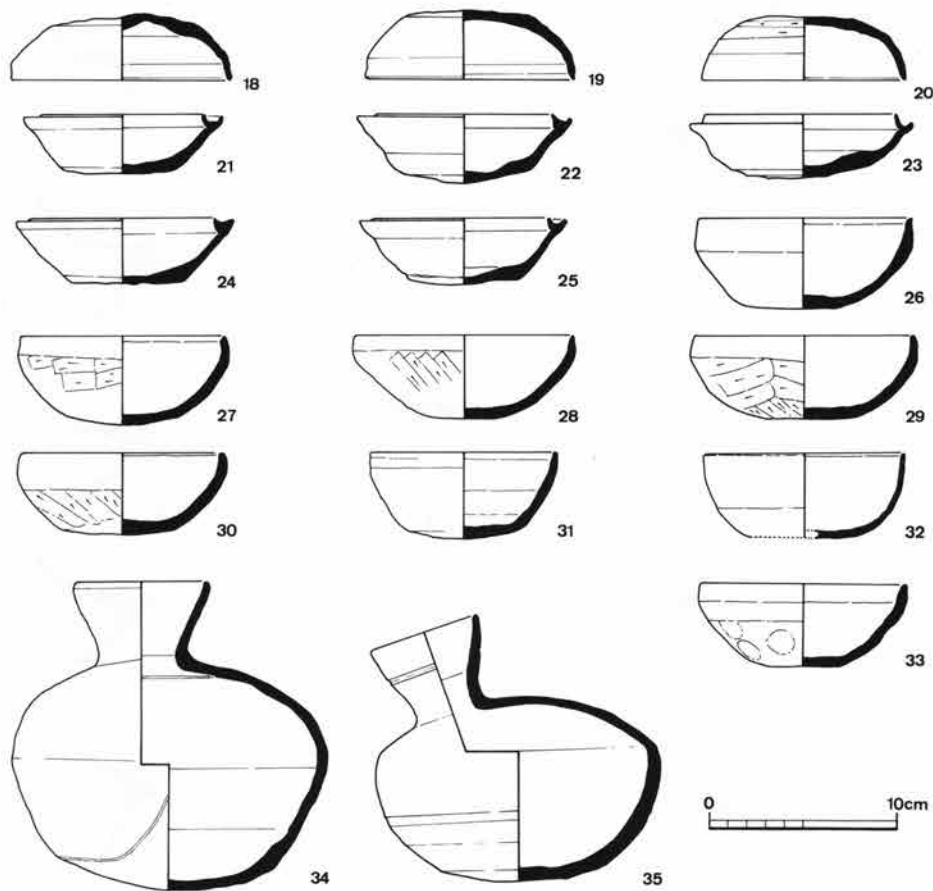
第96図 出土遺物実測図(第1次床面:1/4)

須恵器・杯身は、立ち上がりが上方にのびる6・7・9・10・11の一群と、斜め内方に短くのびる8に分類することができ、底部が丸い6・8・9の一群と比較的平らな7・10・11の一群に分類できる。また、口径も10cm前後を測る6・7・8の一群と13cm前後の9・10・11の一群に分類できる。これらの複合的な分類は、前型式の要素が残存するグループとより新しい型式を反映するグループが併存していることを現している(付表8)。

須恵器・蓋は、丸い天井部に扁平なつまみが付く4を確認している。基本的な形態は、先述した杯蓋と同様であるが、焼成が他の須恵器と比較して堅緻である。

須恵器・無蓋高杯は、焼成が不良なものが多く含まれるが、口縁端部が杯部からやや内湾する12・13・16の一群と、外反する14・15の一群に分類できる。また、脚端部が下方に肥厚し面をもつ12、上下方に肥厚し面をもつ13、上方に肥厚し面をもつ15、肥厚しない14にそれぞれ形態的特徴を分けることができる。

鉄製刀子48は残存長11.7cm、49は残存長6.7cmを測る。



第97図 出土遺物実測図(第2次床面:1/4)



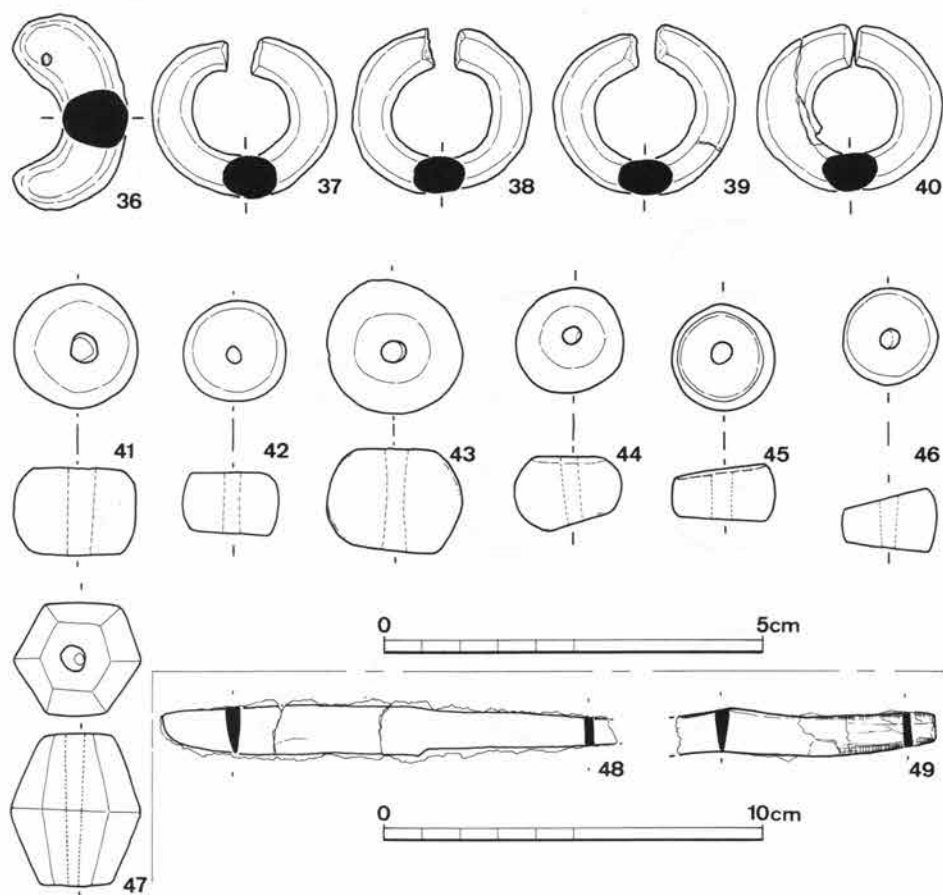
(2)第2次床面出土遺物(第97図)

須恵器・杯蓋は、3個体出土しており、丸い天井部から緩やかに内湾する口縁部をもっている。口径は10cm前後である。

須恵器・杯身は、立ち上がりと受け部の端部がほぼ同じライン上になるが、23は、立ち上がりが上方にのびる。また、基本的に底部は平らであるが、23は丸い。これらの諸特徴から23は、第1次床面で出土した杯身の特徴をもち、型的には古く位置付けられる。

須恵器・平瓶34は、後述する35と比べ、器高が高く、口縁部がほぼ垂直方向に近い部位に付けられており、35は、やや扁平で、口縁部は斜め方向に付けられている。

土師器・鉢は、8点出土した。基本的には外面をヘラ削りで調整し、口縁部を横ナデによって仕上げているが、底部で屈曲する28・29・30・31・32・33の一群と、丸い27に分類することができる。なお、口径はほぼ同じ法量を示しており、焼成・胎土・色調もそれぞれ共通要素が多い。



第98図 出土遺物実測図(鉄製刀子48・49.1/2 ほか.1/1)

(3)攪乱土内出土遺物(第98図)

攪乱土内から出土した遺物には、耳環や玉類、土器片などがある。

瑪瑙製勾玉36は、上端部から下端部までの長さ2.6cmを測る。瑪瑙特有の発色は良好であるが、部分的に細かな剝離が見られる。

耳環37は、上下2.1cm・左右2.5cm、38は上下2.2cm・左右2.4cmを測る。両個体とも、アマルガム技法によって付着させた金は良好に残る。39は上下2.3cm・左右2.4cm、40は上下2.2cm・左右2.5cmを測る。残存状態は不良である。

斑斕岩製丸玉41は、直径1.6cm・厚み1.2cmを測る。上下面の稜は明瞭である。43は直径1.7cm、最大の厚みは1.4cmを測る。側面形態がやや不均整である。

滑石製白玉42は直径1.3cm・厚み0.8cm、44は直径1.4cm・最大厚1cm、45は直径1.4cm・最大厚0.7cm、46は直径1.2cm・最大厚0.6cmを各々測る。いずれも大型の白玉である。側面形態が不整形であることに特徴があり、45のように上面を0.1cm程度抉るように加工する個体も見られる。これらの諸特徴は、大型の白玉であるために、装着の際、玉と玉が直線的に並列することを避ける目的が反映されたと見られる。

付表7 出土土器分類表

		須恵器・蓋杯		須恵器・高杯、提瓶、平瓶、土師器	
第一次床面	陶邑TK209				
第二次床面	陶邑TK217古相				

水晶切子玉47は、全長2cm・最大幅1.7cmを測り、上下各々6面に加工している。

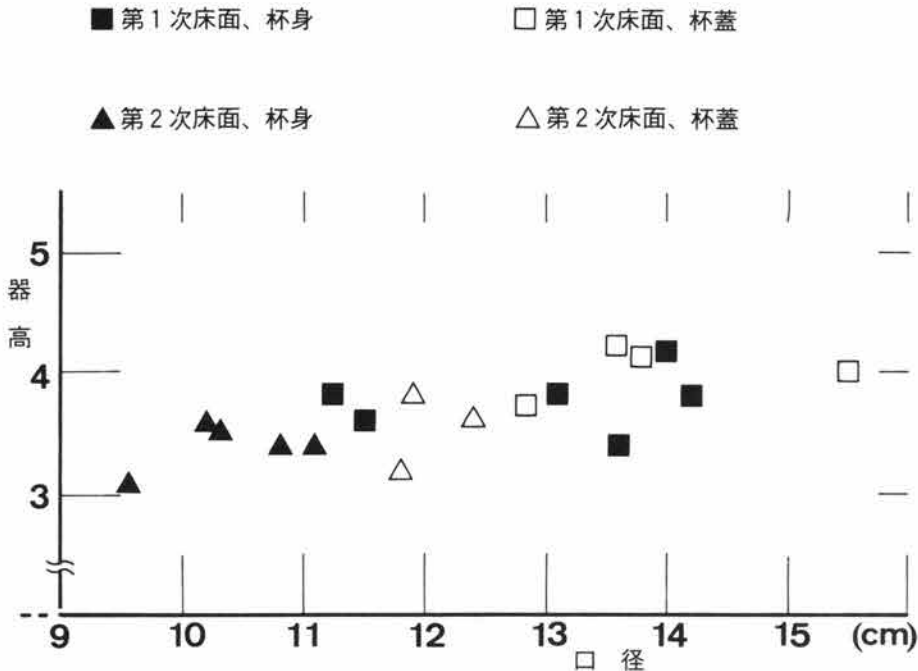
## 5. ま と め

細谷1号墳は、墳丘が完全に削平され、玄室床面の攪乱も著しい状況であるが、奥壁部分に限っては、第1次・第2次床面が良好な状態で残存しており、各々から一括して土器群を取り上げることができた。また、攪乱土内からではあるが、瑪瑙製勾玉・耳環・斑駁岩製丸玉・滑石製白玉・水晶製切子玉などの装身具類が出土した。これらの遺物群は、古墳時代末期の副葬品研究に新たな類例として追加できた意味は決して少なくない。

その中であって、第1次床面と第2次床面から出土した須恵器群は、法量・形態的特徴が異なることが判明した(付表7・8)。第1次床面の一括土器群は、杯身にやや口径が小さい個体も含まれるが、概ね14cmを中心としており、形態的特徴から陶邑編年T K209前後<sup>(注3)</sup>に比定できる。一方、第2次床面からの一括土器群は、杯身の口径が10~11cmに集中しており、同T K217前後に比定できる。特に、宝珠つまみが付かない点を重視すれば、その中であつても古相と認識できる。今後、以上の調査成果をふまえて、細谷古墳群のなかでの位置付けと周辺に所在する以久田野古墳群との関連などを考えていく必要がある。

(小池 寛)

付表8 土器法量比較グラフ



注1 調査参加者(順不同・敬称略)

橋本 稔・芦田正夫・芦田阿以・大槻芳枝・生湊久枝・梅原つゆ子・大槻哲雄・荻野一夫・荻野隆康・荻野一代・村上綾子・疋田季美枝・鈴木みかる・友井川十三代・小滝初代・丹新千晶

玉類の石材については、橋本清一氏に鑑定をお願いした。

注2 本概要では、奥壁部に向かって石室主軸線より以西を左側壁、以東を右側壁と呼称する。

注3 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966

[付] 細谷古墳群の略号は、共同調査を担当した京都府教育委員会と協議し、『AHK』とした。

付表9 出土土器法量表

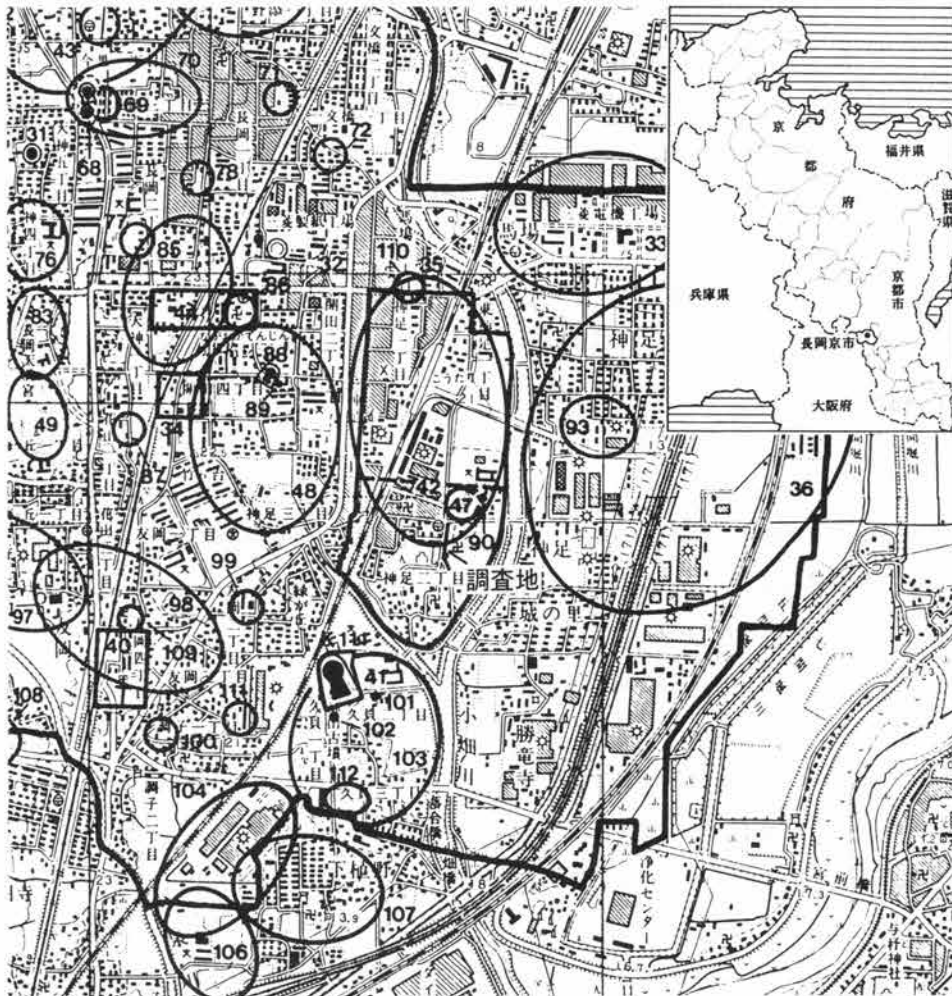
No.	器種	口径	器高	残存率	備考	No.	器種	口径	器高	残存率	備考
1	須恵器・杯蓋	14.6	4	100%		19	須恵器・杯蓋	11	3.6	100%	
2	須恵器・杯蓋	12.6	4.2	100%		20	須恵器・杯蓋	11	3.3	100%	
3	須恵器・杯蓋	12	3.6	100%		21	須恵器・杯身	8.6	3	100%	
4	須恵器・蓋	13.2	4.4	100%	つまみ付	22	須恵器・杯身	9.3	3.6	100%	
5	須恵器・杯蓋	12.6	4	100%		23	須恵器・杯身	10	3.3	100%	
6	須恵器・杯身	12	3.6	100%		24	須恵器・杯身	9.6	3.3	100%	
7	須恵器・杯身	10.6	3.6	100%		25	須恵器・杯身	9.2	3.4	100%	
8	須恵器・杯身	10.2	3.7	100%		26	土師器・椀	11	4.6	100%	
9	須恵器・杯身	13.2	3.8	100%		27	土師器・椀	11	4.8	100%	ヘラ削り
10	須恵器・杯身	12.8	3.3	80%		28	土師器・椀	11	4.4	100%	ヘラ削り
11	須恵器・杯身	13	4.1	100%		29	土師器・椀	12	4.4	100%	ヘラ削り
12	須恵器・高杯	12.8	8.1	100%		30	土師器・椀	11	4.1	100%	ヘラ削り
13	須恵器・高杯	13	7.5	100%	焼成不良	31	土師器・椀	9.8	4.4	100%	
14	須恵器・高杯	13.4	8	100%		32	土師器・椀	10	4.4	80%	
15	須恵器・高杯	12.4	6.6	100%	焼成不良	33	土師器・椀	11	4.3	80%	指頭圧痕
16	須恵器・高杯	13.7		60%		34	須恵器・平瓶	6.8	16	90%	ヘラ記号
17	須恵器・提瓶	6.6	20	90%	焼成不良	35	須恵器・平瓶	6	14	90%	
18	須恵器・杯蓋	11.4	3.4	100%							

## 5. 長岡京跡右京第381次発掘調査概要 (7ANMKO地区)

(右京七条一坊七町～八町・勝龍寺城跡・神足遺跡)

### 1. はじめに

今回の発掘調査は、一般地方道下植野長岡京線の拡幅工事に伴い、京都府乙訓土木事務所からの依頼を受けて実施した。調査地は、下植野長岡京線のうち、長岡京市教育委員会



第99図 調査地及び周辺の遺跡位置図(1/25,000)

(『京都府遺跡地図』第4分冊 [第2版] 1989より転載)

- |         |         |         |          |            |
|---------|---------|---------|----------|------------|
| 33.馬場遺跡 | 35.神足遺跡 | 36.雲宮遺跡 | 41.恵解山古墳 | 42.勝龍寺城跡   |
| 47.神足城跡 | 48.開田遺跡 | 90.神足古墳 | 93.芝本遺跡  | 103.南栗ヶ塚遺跡 |

によって公園整備の進められている勝龍寺城跡の東側をほぼ南北に走る道路部分であり、京都府長岡京市東神足2丁目・勝竜寺に所在する。ここは、従来の長岡京の条坊復原案では、七条第一小路をはさむ右京七条一坊七町～八町に位置し、さらに勝龍寺城跡、神足遺跡に含まれているため、各時期にわたる遺構・遺物の存在が予想された(第99図参照)。

現地調査は、平成3年8月1日～11月6日及び平成4年1月8日～1月28日に実施した。調査面積は、約300㎡である。調査にあたっては、長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センターをはじめ、関係諸機関や学生諸氏の協力<sup>(注1)</sup>を得た。なお、調査に係る経費は、京都府乙訓土木事務所が負担した。

## 2. 基本層位 (第100図参照)

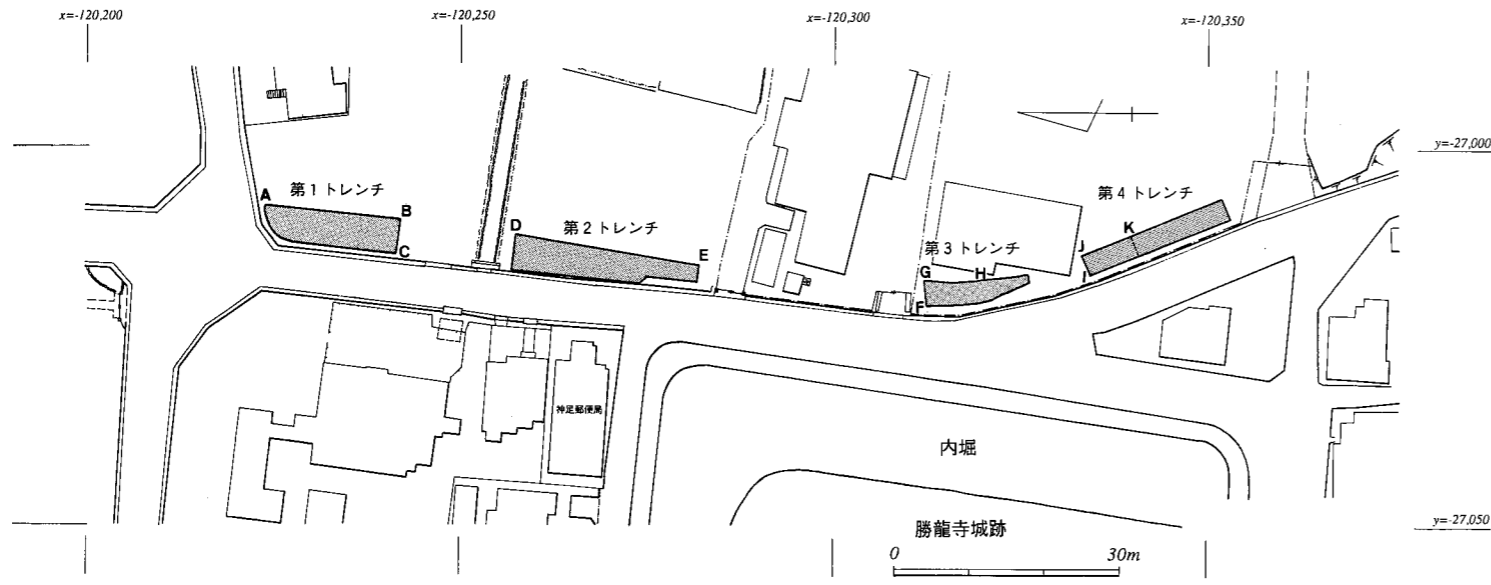
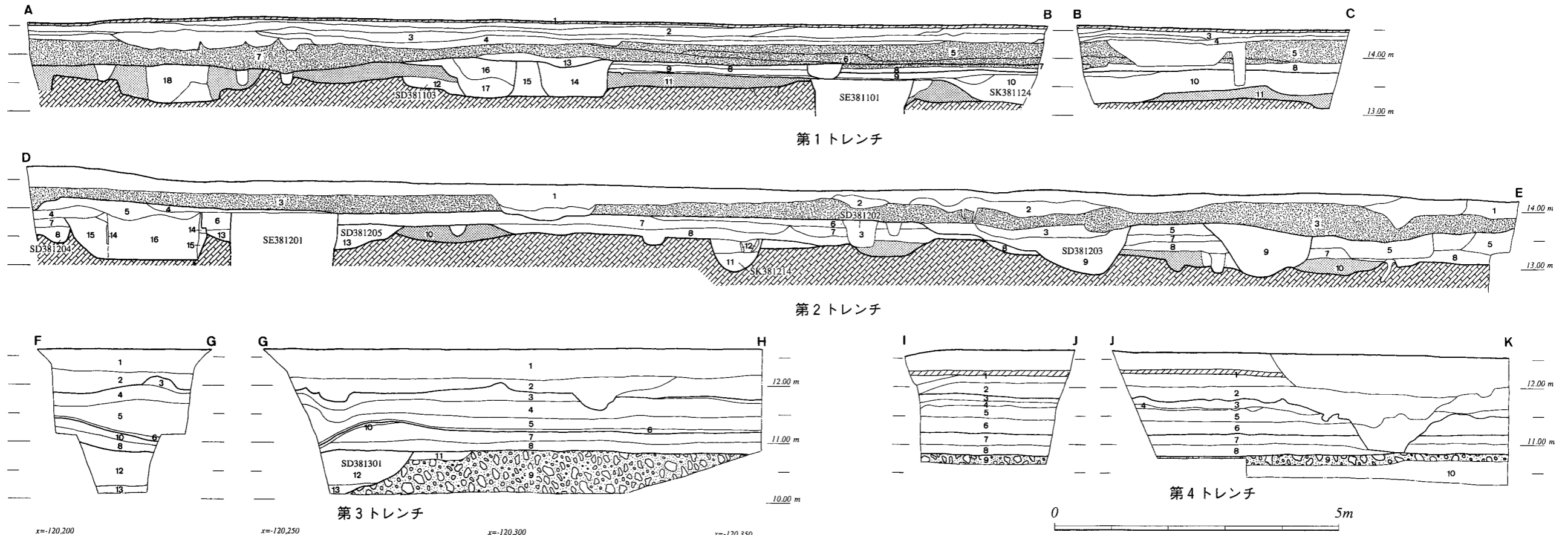
今回の調査は、4か所にトレンチを設定して実施した。北側から第1～4トレンチと呼称する。調査地は、南北に長く各トレンチで土砂の堆積状況も異なる。全体的には低位段丘面に属しているが、なかでも比較的安定した北側(第1・2トレンチ)と、後背湿地状を呈し、より低位な南側(第3・4トレンチ)との差が顕著である。

〔第1トレンチ〕基本層位は、整地土〔第Ⅰ層＝現代〕、暗褐色砂質～粘質土〔第Ⅱ層＝近世～近代〕、褐色砂質土・黒灰褐色粘質土〔第Ⅲ層＝鎌倉～近世〕、黒灰褐色粘質土〔第Ⅳ層＝弥生～鎌倉〕、黄褐色砂質土・黄褐～暗黄褐色砂礫〔第Ⅴ層＝地山〕である。なお、第Ⅲ層は、トレンチの南半のみで確認された。

〔第2トレンチ〕基本層位は、耕作土〔第Ⅰ層＝現代〕、暗黄褐色粘質土〔第Ⅱ層＝近世〕、褐色～暗褐色粘質土〔第Ⅲ層＝鎌倉～近世〕、黒灰褐色粘質土〔第Ⅳ層＝弥生～鎌倉〕、黄褐色砂質土・暗灰色中～大礫〔第Ⅴ層＝地山〕であり、層序は第1トレンチとほぼ対応するものの、様相はかなり異なっている。

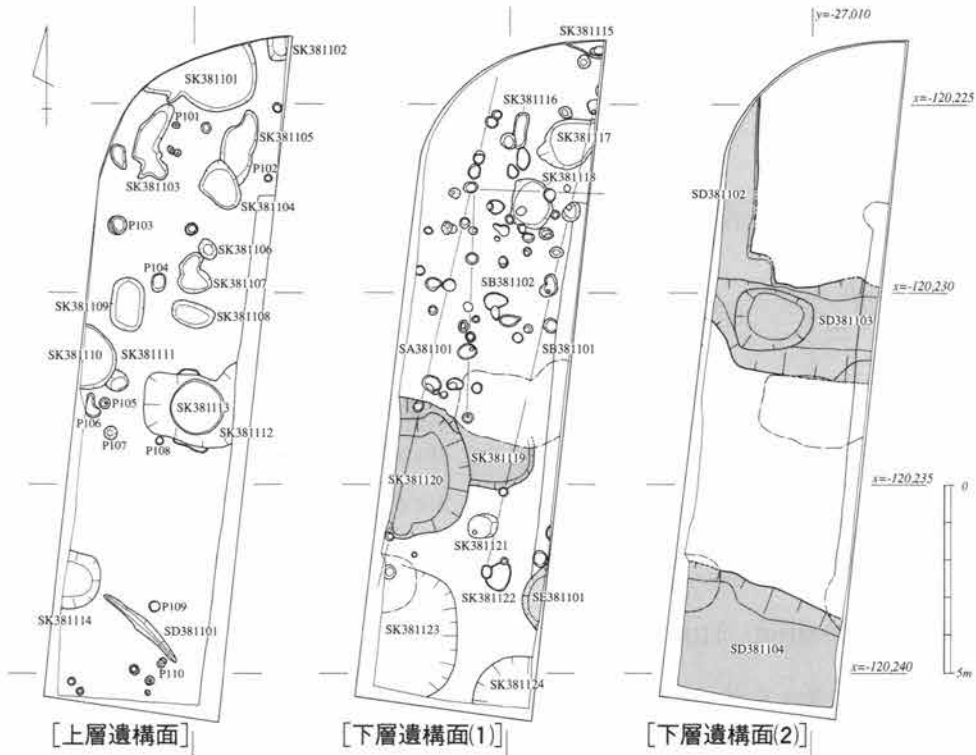
〔第3トレンチ〕基本層位は、整地土〔第Ⅰ層＝現代〕、暗青灰色小～中礫混シルト〔第Ⅱ層＝現代〕、青灰色シルト～細砂〔第Ⅲ層〕、暗青灰～褐色シルト〔第Ⅳ層＝現代〕、黒灰色細～中礫・極細砂〔第Ⅴ層＝中世?〕である。なお、図化できていないが、第Ⅴ層の下層で青灰色細～中礫〔第Ⅵ層＝地山〕を確認した。

〔第4トレンチ〕基本層位は、整地土・アスファルト〔第Ⅰ層＝現代〕、暗青灰色中礫混シルト〔第Ⅱ層＝現代、洪水層か〕、青灰色・暗青灰色極細砂～細砂〔第Ⅲ層〕、青灰色・暗青灰色シルト〔第Ⅳ層〕、黒灰色砂混シルト〔第Ⅴ層＝中世〕、黒灰色砂礫～シルト(植物含む)〔第Ⅵ層＝～中世〕であり、ほぼ第3トレンチと対応している。第Ⅴ層・第Ⅵ層は、流入とみられる遺物の包含層である。第Ⅵ層の下層は、第3トレンチで確認した地山(細礫～中礫)になるものと考えられる。



- |   |  |   |  |
|---|--|---|--|
| <p><b>【第1トレンチ】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 アスファルト</li> <li>2 濁黒褐色土 (礫含む)</li> <li>3 濁暗灰色土</li> <li>4 暗黄褐色土</li> <li>5 暗褐色砂質土 (小礫多く含む)</li> <li>6 暗黄褐色粗砂 (小礫多く含む)</li> <li>7 暗褐色粘質土 (小礫やや含む)</li> <li>8 褐色砂質土 (小礫多く含む)</li> <li>9 黒灰褐色粘質土 (炭含む)</li> <li>10 暗黄褐色砂質土</li> <li>11 黒灰褐色粘質土</li> <li>12 黒褐色粘質土</li> <li>13 黒灰褐色粘質土 (黄色粘土ブロック含む)</li> <li>14 暗黄褐色粘質土 (黄色粘土ブロック含む)</li> <li>15 濁暗褐色粘質土</li> <li>16 暗黄褐色粘質土 (暗褐色粘質土混じる)</li> <li>17 暗黄褐色粘質土 (黄色粘土ブロック混じる)</li> <li>18 暗黄褐色粘質土</li> </ol> | <p><b>【第2トレンチ】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 暗黄褐色粘質土 (耕作土)</li> <li>2 明黄褐色粘質土</li> <li>3 暗黄褐色粘質土</li> <li>4 淡褐色粘質土</li> <li>5 淡褐色砂礫</li> <li>6 暗赤褐色砂礫</li> <li>7 褐色粘質土 (小礫含む)</li> <li>8 暗褐色粘質土</li> <li>9 褐色粘質土 (小~中礫含む)</li> <li>10 黒灰褐色粘質土</li> <li>11 暗褐色粘質土 (細礫含む)</li> <li>12 黄褐色土 (焼土含む)</li> <li>13 黒灰~暗褐色粘質土 (小礫含む)</li> <li>14 明橙褐色粘土</li> <li>15 褐色粘質土 (14のブロック混じる)</li> <li>16 暗褐色粘質土 (14のブロック混じる)</li> </ol> | <p><b>【第3トレンチ】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 盛土 (コンクリート・雑木含む)</li> <li>2 濁暗青灰色シルト (小~中礫含む)</li> <li>3 青灰色細砂</li> <li>4 青灰色シルト</li> <li>5 青灰色シルト~細砂</li> <li>6 青灰色細砂</li> <li>7 暗青灰色シルト</li> <li>8 暗褐色シルト (細~小礫含む)</li> <li>9 黒灰色細礫~中礫・極細砂</li> <li>10 濁暗褐色シルト</li> <li>11 青灰色シルト~細礫</li> <li>12 暗灰色・暗褐色シルト (小~中礫含む)</li> <li>13 青灰色シルト (植物含む)</li> </ol> | <p><b>【第4トレンチ】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 盛土 (アスファルト・雑木含む)</li> <li>2 暗青灰色シルト (小~中礫含む)</li> <li>3 暗青灰色極細砂</li> <li>4 暗黄褐色細砂</li> <li>5 青灰色シルト</li> <li>6 青灰色細砂</li> <li>7 暗青灰色シルト</li> <li>8 青灰色シルト (黄褐色シルト含む)</li> <li>9 黒灰色シルト (細礫~中礫含む)</li> <li>10 黒灰色シルト~細礫 (植物含む)</li> </ol> |
|---|--|---|--|

第100図 トレンチ配置図及び土層断面図



第101図 第1トレンチ検出遺構平面図

### 3. 検出遺構と出土遺物

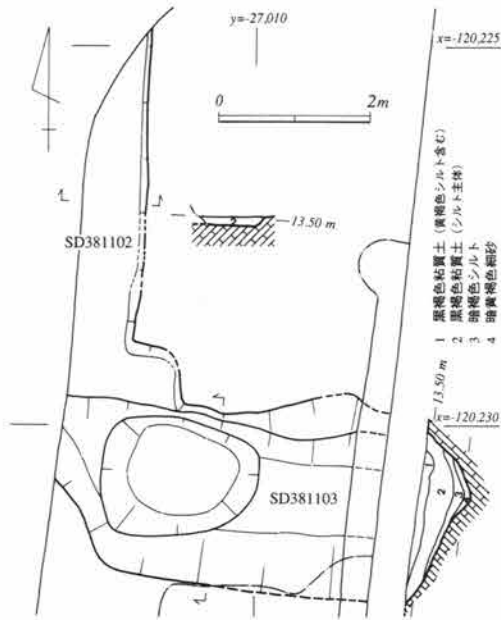
#### (1) 第1トレンチ(第101図参照)

【下層遺構(2)】地山面で検出した遺構のうち、弥生時代に属するものを記す。

溝S D381102・381103(第102図参照) S D381102は南北方向、S D381103は東西方向に延びる溝であり、トレンチ内で接続し、「L」字状の平面形を呈している。溝の埋土は、砂礫を含む黒褐色粘質土であるが、上層の第IV層との識別はやや不明瞭であり、周辺地区で確認される弥生時代の遺構の埋土とも異なっている。遺構のベースは、第V層(地山)である。S D381102は、トレンチの西壁に接しているため幅は確定できていないが、S D381103と接続するコーナー部分から、約1.8mと推定される。深さは、検出部分から約10cmと浅い。埋土内からは、弥生土器底部(第103図8)が溝底からわずかに浮いた状態で出土したほか、弥生土器の細片が出土している。S D381103は幅2.4m、深さは最深部で68cmを測り、S D381102よりも深く掘削されている。弥生土器は、埋土の上～下層にわたり含まれているが、いずれも細片化しており、また上層では中世の遺物と混在している。

これらの溝は、平面形態及び出土遺物から方形周溝墓の可能性が高いが、溝内出土の土器はいわゆる供献土器ではなく、いずれも埋没時の流入土内に含まれていたものと考えら





第102図 SD381102・SD381103平面図・断面図

す。4は精良な胎土をもつ甕で、口縁部に2条の凹線を施す。外面は粗いナナメハケ、内面はナデ調整を施す。8は甕の底部で、外面はていねいなヘラミガキで仕上げる。内外面に黒色の有機物が付着する。9は高杯脚部、5～6は壺の底部、7は右上がりのタタキを有する甕で、淡橙褐色の色調を呈する。これらの土器群は、第Ⅳ～Ⅴ様式の混在した様相を示すことから、周溝墓の築造時期は第Ⅳ様式、埋没の時期は第Ⅴ様式の段階と考えられる。

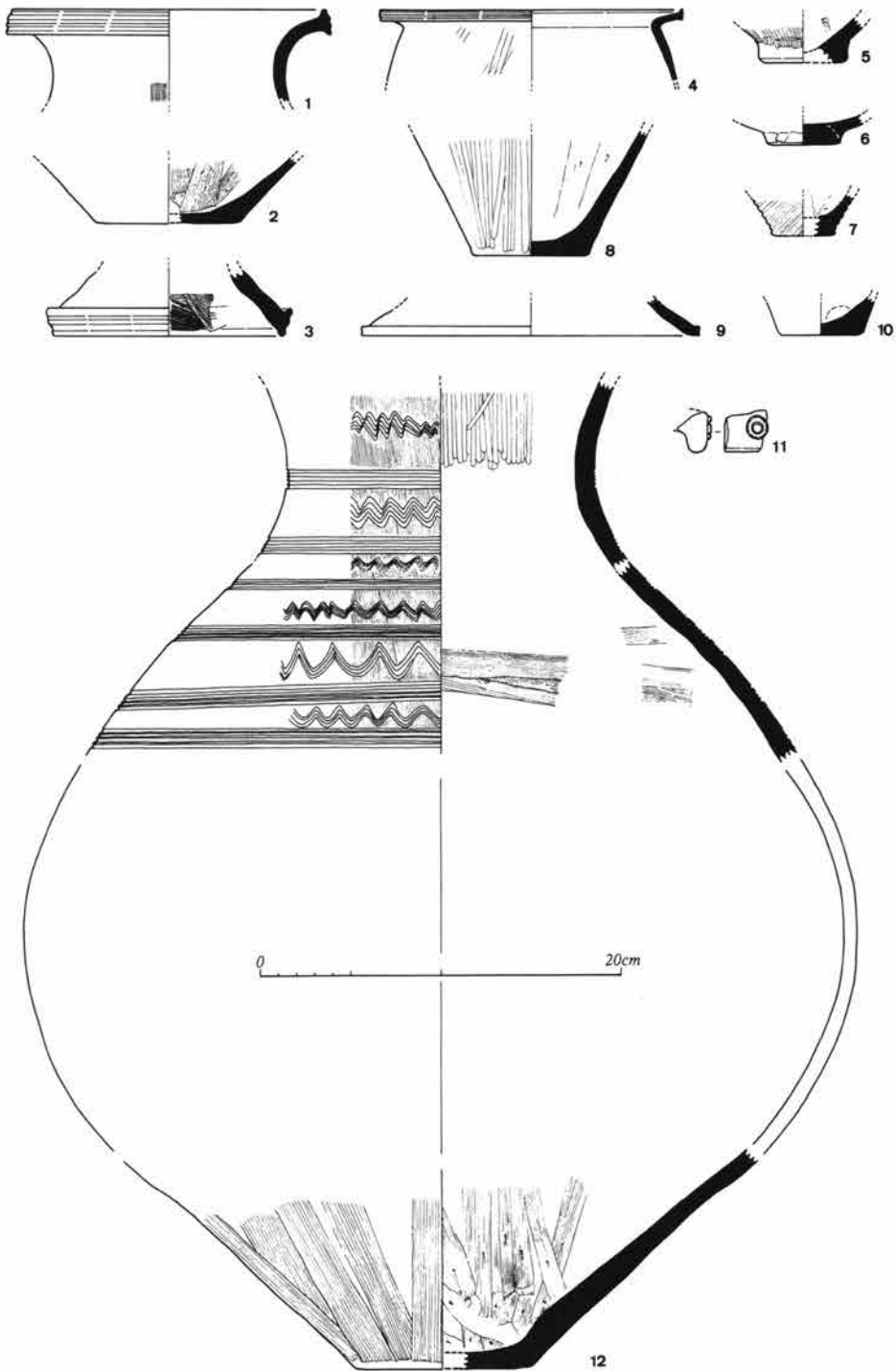
**S X 381104** トレンチの南部で検出した溝状の遺構である。北側の肩部はほぼ直線的にのびる。対応する南側の肩部は検出できていないため、幅は不明であるが、検出部分では3.2m、深さは0.3mを測る。埋土は、SD381102・381103と同様であり、上層に中世の遺物を、下層に弥生土器を少量含む。弥生土器はいずれも細片化しているが、甕底部(第103図10)のほか、凹線文をもつ壺等が出土しており、第Ⅳ様式に比定される。

S X 381104は、形状や出土土器からやはり方形周溝墓の可能性をもつが、確定できない。  
[下層遺構(1)] 地山面で検出した鎌倉～室町時代の遺構を記す(第104図参照)。

**建物跡 S B 381101 (Pit.115～119)** 南北5間以上と推定される建物跡である。トレンチ東壁に接しており、Pit.119を南西隅とし、西側への広がりも推定する。Pit.118の北側柱穴は、S K 381112によって失われていると考えられる。ただし、これらの柱穴のうち、Pit.116とPit.117のみ根石を有し、また他の柱穴よりも深く掘削されていることから、Pit.117以北とPit.118以南とで別の遺構である可能性も考えられる。建物跡の南北軸は、N-12°-Eの傾きを有する。柱間は、南北約2.3mを測る。S B 381102に後出する14世紀代の築造か。

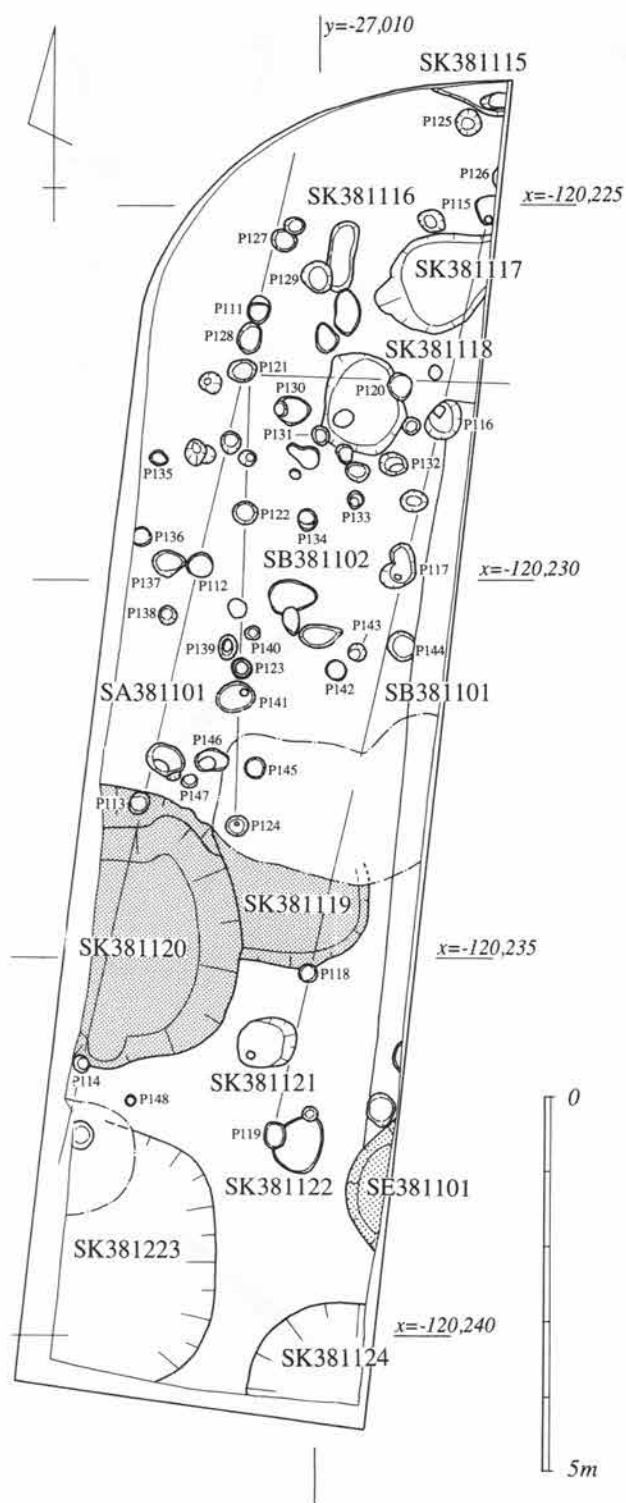
れる。溝で区画された内部は、地山面であり、同一面で中世のピットを検出しているため、削平を受けたと考えられる。規模は検出部分で約6.5m以上(南北)を測る。土坑S K 381115・S K 381117・S K 381118から弥生土器(第103図1)が出土しているが、いずれも中世の土器と混在しており、埋葬施設の可能性は低い。

**出土遺物(第103図2～9)** 2～7はSD381103、8・9はSD381102から出土した。2は壺の底部で、内面はケズリ、外面はナデによりていねいに仕上げる。胎土に石英を多く含み、淡黄褐色の色調を呈する。3は高杯の脚部で、2条の凹線を施



第103図 弥生土器実測図

1. S K381115 2~7. S D381103 8~9. S D381102 10. S D381104 11~12. 第2トレンチ第IV層



第104図 第1トレンチ下層遺構面(1) 検出遺構平面図

柵列 S A 381101 (Pit.111～114) N-12°-Eの傾きを有する南北方向の柵列である。S B 38101と並行する位置関係にあるものの、東西方向において柱穴が対をなさないことから、S B 38101に伴う柵列と判断した。なお、Pit. 113・114は、S K 381120の掘削後に検出した。柱穴間の距離は、約2.7mを測る。いずれの柱穴からも少量の遺物が出土した。第109図10はPit.112から出土した常滑の壺である。杉崎<sup>(注3)</sup>編年の第三型式で、14世紀の所産か。

建物跡 S B 381102 (Pit.120～124) 南北3間×東西1間以上の掘立柱建物跡である。Pit.121を北西隅、Pit.124を南西隅とし、東側への広がり方を推定する。建物跡の南北軸は、N-1°-Eの傾きで、真北に近い。柱間は、南北・東西とも2.0mを測る。検出した5か所の柱穴のうち、4か所から土師器・瓦器細片が出土した。瓦器碗は細片化しているが、包含層から出土した瓦器碗の所見から、14世紀前半と考えられる。

井戸 S E 381101 トレン

チ内で約1/3を検出した。推定の直径1.8mを測る素掘りの井戸である。約1.3mを掘り下げたが完掘はできていない。上部はラッパ状に広がる形状をもつ。土師皿(第105図1・2)、瓦質羽釜(第105図3)、陶器の甕(第105図4)のほか、青磁、須恵器甕体部、布目丸瓦の細片が少量出土している。井戸の埋没時期は、15世紀代と考えられる。

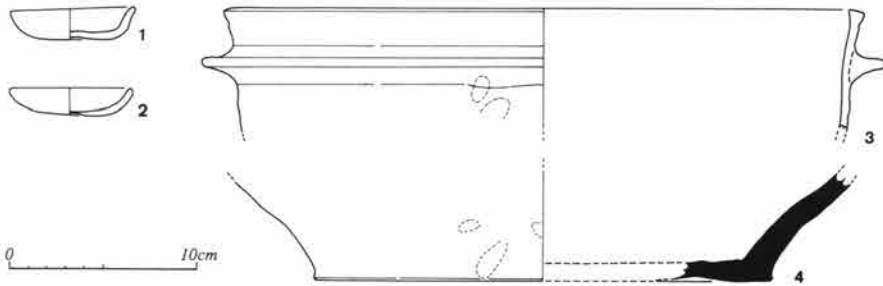
土坑 S K 381115 トレンチの北東部で検出した小土坑である。埋土は黒灰褐色粘質土で、弥生土器(第103図1)のほか、土師皿片、瓦器椀片が出土した。

土坑 S K 381116 長軸96cm・短軸35cmの楕円状の平面形を有し、深さ約7cmを測る浅い土坑である。土師皿片が少量出土した。

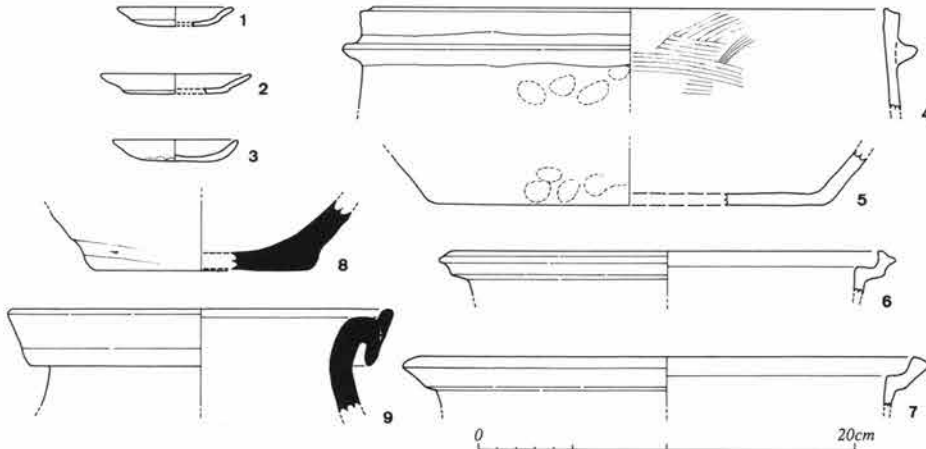
土坑 S K 381117 北東側に突出する部分を有する円形状の土坑である。深さは約60cmを測る。弥生土器甕底部、土師皿片、瓦質羽釜片が出土した。

土坑 S K 381118 長軸130cm・短軸60cmの楕円状の平面形を有し、深さ約18cmを測る浅い土坑である。埋土は黒灰褐色粘質土で炭を一部含む。弥生土器、土師皿、瓦器椀、瓦質羽釜の細片が出土した。

土坑 S K 381119 S K 381120の北東部に位置し、一部重複している。埋土からは切り



第105図 第1トレンチ S E 3811101出土遺物実測図



第106図 第1トレンチ S K 381123出土遺物実測図

合い関係は認められず、同時期に埋没したものと考えられる。土坑の北側は、S K 381112 によって削平されている。楕円形状の平面形を呈すると推定される。土師皿(第108図20~23)、瓦質鍋(第108図24)が出土した。土師皿23は、伊野分類Iタイプ<sup>(注4)</sup>の初期段階に相当し、15世紀前~中頃に位置づけられる。

土坑 S K 381120 (第107図) トレンチ内で約1/2を検出した。ややいびつながら推定の直径370cm・深さ45cmを測る大形の土坑である。土坑の南東部分には、10~15cmの角礫とともにまとまった土器類が一括廃棄されていた。埋没の時期は15世紀と考えられる。

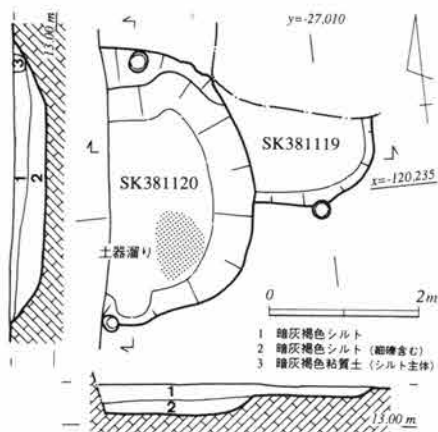
出土遺物(第108図1~19) 1~5は土師皿である。6は、瓦器で皿状の形態を有する。内面にヘラミガキを施す。7~10は瓦質の羽釜、11は鍋である。12は白磁椀、13~14は灰釉陶器である。16は常滑の壺で、杉崎編年第三型式前期に相当し、14世紀前半~中頃の所産か。15は産地不明の陶器の播鉢、17~18は備前焼の壺底部と播鉢である。播鉢は、間壁編年IV期<sup>(注5)</sup>に相当すると思われる、15世紀代に考えられる。19は土師質のミニチュアである。

土坑 S K 381121 長辺80cm・短辺65cm・深さ65cmを測る土坑である。内部に直径12cm・深さ30cmの柱穴を有するが、土坑との関係は不明である。瓦器椀、瓦質羽釜・鍋、土師皿、須恵器甕の破片が出土した。

土坑 S K 381122 長軸80cm・短軸60cmの浅い土坑である。埋土は、黒灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。

土坑 S K 381123 トレンチの南西隅で検出した。浅い落ち込み状の土坑である。埋土は、暗褐色粘質土である。出土遺物(第106図)に、土師皿(1~3)、土師質の羽釜(4)、瓦質の羽釜底部(5)、鍋(6~7)、陶器の鉢(8)、常滑の壺口縁部(9)がある。

土坑 S K 381124 トレンチの南東隅で全体の約1/4を検出した。S K 381120と同規模かやや小さい円形の土坑と思われる。褐色~暗褐色粘質土を埋土とし、15cm大の角礫を含んでいる。

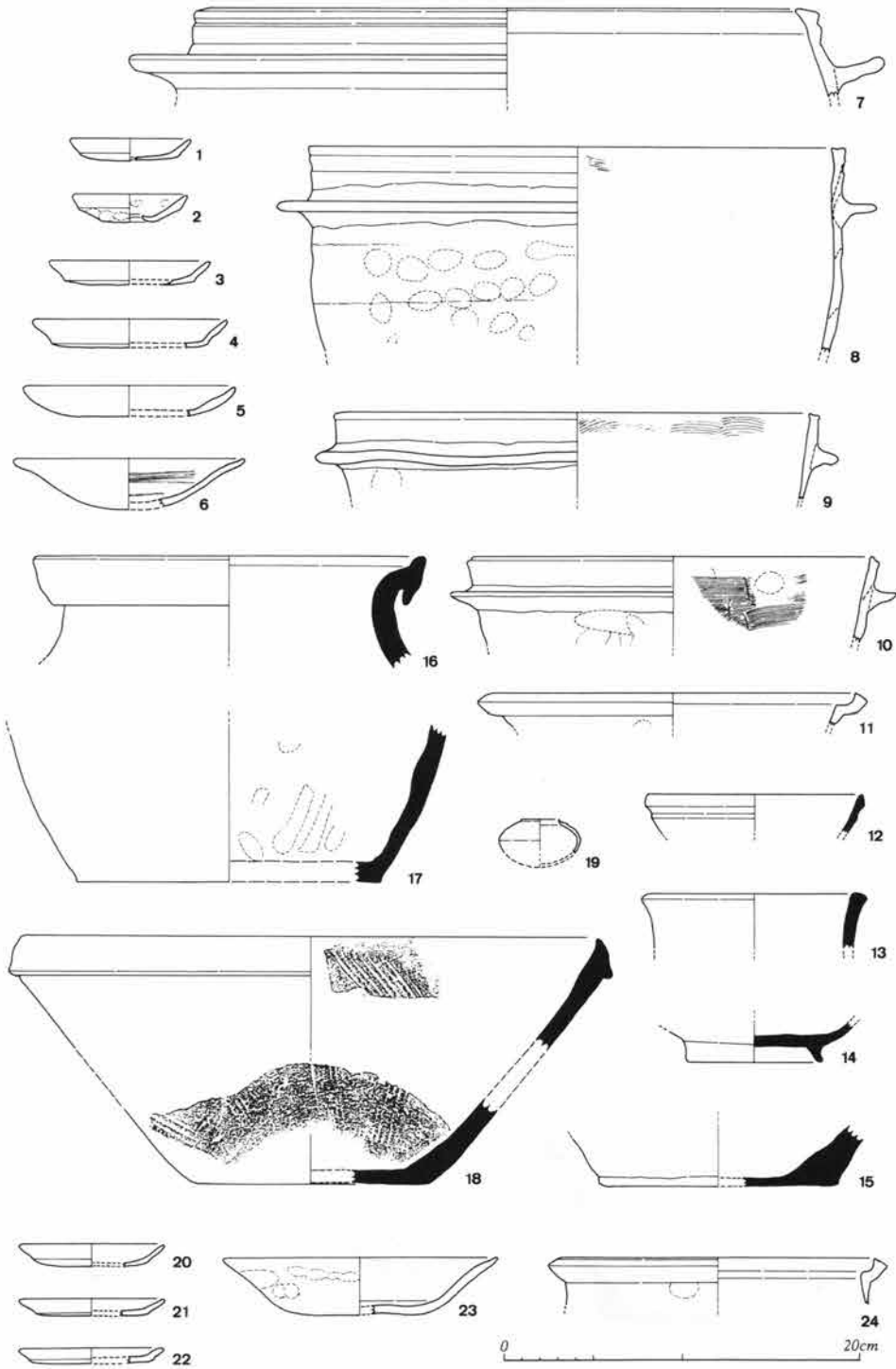


第107図 S K 381119・381120平面図・断面図

土師皿(第109図1)、瓦質羽釜(第109図2)が出土した。羽釜は、森島分類のI型式<sup>(注6)</sup>で、16世紀頃の所産と考えられる。

〔上層遺構〕 第三層(トレンチ北半で第四層) 上面 検出の室町~江戸時代の遺構を記す。

土坑 S K 381101 トレンチの北部で検出した土坑である。深さ約50cmを測り、下層まで達する。埋土は暗褐色粘質土(一部黄褐色シルト)である。弥生広口壺、瓦器椀、瓦質羽釜、土師皿、唐津椀(第109図12)、近世平



第108図 第1トレンチSK381120(1~19)・SK381119(20~24)出土遺物実測図

瓦が出土した。唐津椀は、17世紀前半の所産か。

土坑S K 381102 トレンチの北東部で検出した小土坑である。弥生広口壺のみ出土しているが、下層遺物の混入と思われる。

土坑S K 381103 不定形な平面形を呈する土坑である。埋土は、暗褐色砂質土で、一部黄褐色シルトを含む。深さは10~16cmと浅い。染付椀(第109図13)、土師皿が出土した。

土坑S K 381104 長軸130cm・短軸90cm・深さ10~16cmを測る土坑である。埋土は、暗褐色粘質土で上層に炭を含む。弥生甕底部、瓦質羽釜、土師皿(第109図3)が出土した。

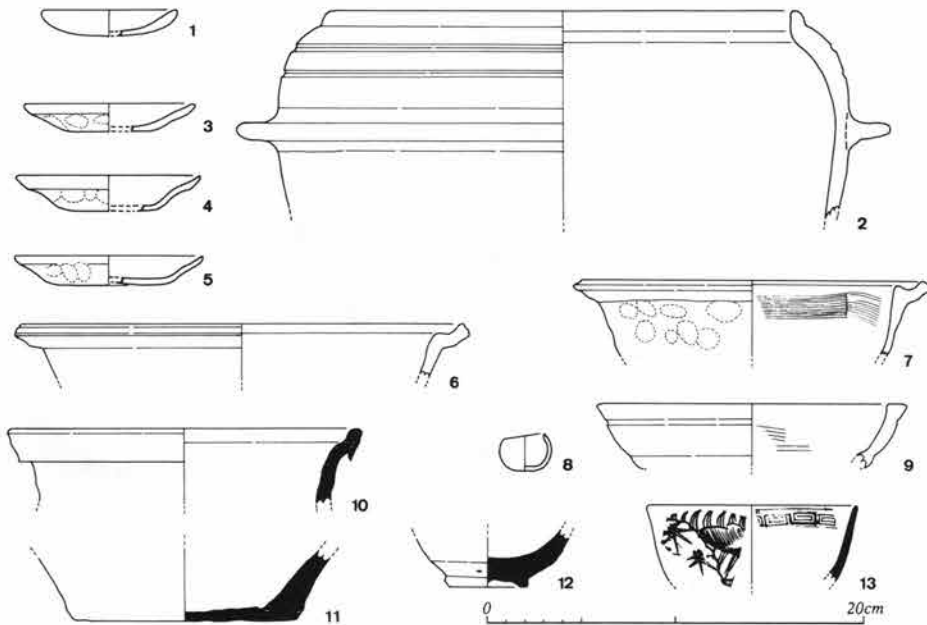
土坑S K 381105 S K 381103同様、不定形な土坑である。深さ12~30cmを測る。埋土は、暗褐色粘質土である。瓦器椀、瓦質羽釜、土師皿の細片のほか、土師質の壺口縁部(第109図9)、ミニチュア(第109図8)が出土している。

土坑S K 381106 直径50~60cm・深さ15cmの小土坑である。土師器細片が出土した。

土坑S K 381107 不定形な平面形を呈する土坑である。深さは、15cmを測る。埋土は、暗褐色粘質土である。土師皿片が出土した。

土坑S K 381108 長軸120cm・短軸60cm・深さ12cmを測る土坑である。埋土は、暗褐色粘質土である。瓦器椀片、土師皿(第109図4)が出土した。

土坑S K 381109 長軸140cm・短軸90cm・深さ30cmを測る楕円状の土坑である。埋土は、暗褐色粘質土である。瓦質羽釜、土師皿、丹波焼甕体部が出土した。16世紀代か。



第109図 第1トレンチ遺構内出土遺物実測図

- 1・2.S K 381124    3.S K 381104    4.S K 381108    5・6.S K 381114    7.S K 381111  
 8・9.S K 381105    10.Pit112    11.Pit102    12.S K 381101    13.S K 381103

土坑 S K 381110 直径160cm・深さ30cmを測る円形土坑である。埋土は、暗褐色粘質土である。瓦器椀、瓦質鍋、土師皿、近世の丸瓦・平瓦の各細片が出土した。

土坑 S K 381111 直径約50cm・深さ45cmを測る小土坑である。瓦質鍋(第109図7)のほか、壁土の細片が出土している。

土坑 S K 381112 長辺280cm以上・短辺180cm・深さ約70cmを測る土坑である。北東部は、別の土坑と重複している。埋土は、暗黄褐色粘質土で、地山ブロックを含む。中央部に S K 381113 が掘削されている。染付椀、信楽播鉢、近世丸瓦、瓦器椀、瓦質鍋、土師皿の破片が出土した。

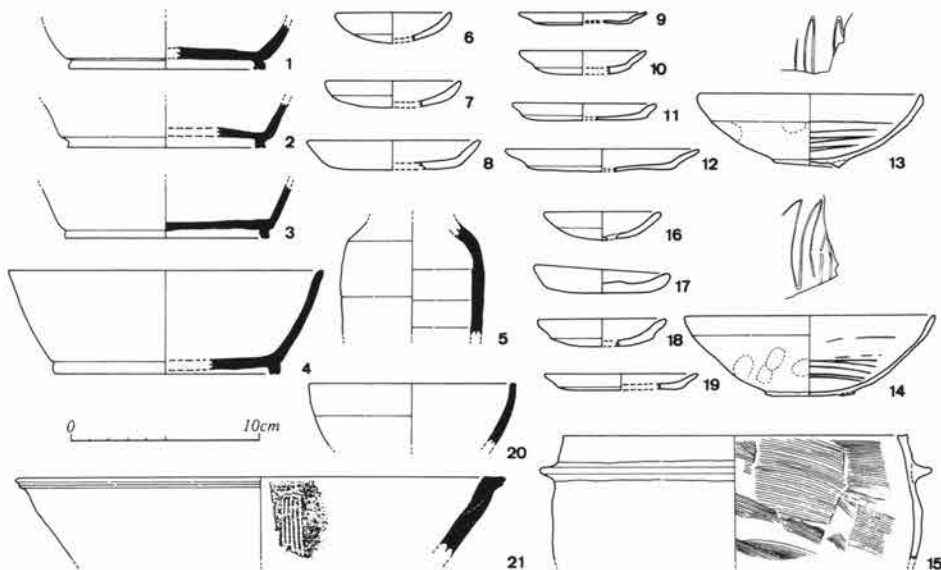
土坑 S K 381113 直径140cm・深さ70cmを測る土坑である。周辺に一部漆喰が遺存しており、野壺と思われる。近世丸瓦、青磁、瓦質羽釜、土師皿の破片が出土した。

土坑 S K 381114 直径155cm・深さ25cmを測る円形の土坑である。東半分を検出した。埋土は、黒灰褐色シルトで、小～中礫を多く含む。土師皿(第109図5)、瓦質鍋(第109図6)のほか、瓦質羽釜片が出土している。

溝 S D 381101 北西-南東方向をもつ浅い溝状遺構である。幅26cm・深さ5cmを測る。埋土は、黄褐色粗砂である。

〔包含層出土遺物〕〈第110図〉1～4は須恵器杯B、5は壺Gで長岡京期と考えられる。13・14の瓦器椀は、橋本編年の第Ⅳ期1段階に相当する。<sup>(注7)</sup>器高指数は32である。

〈第125図〉1は三巴文の近世軒丸瓦である。3は布目の平瓦で、平安時代と思われる。



第110図 第1トレンチ包含層出土遺物実測図  
1～12.第Ⅳ層 13～21.第Ⅱ・Ⅲ層

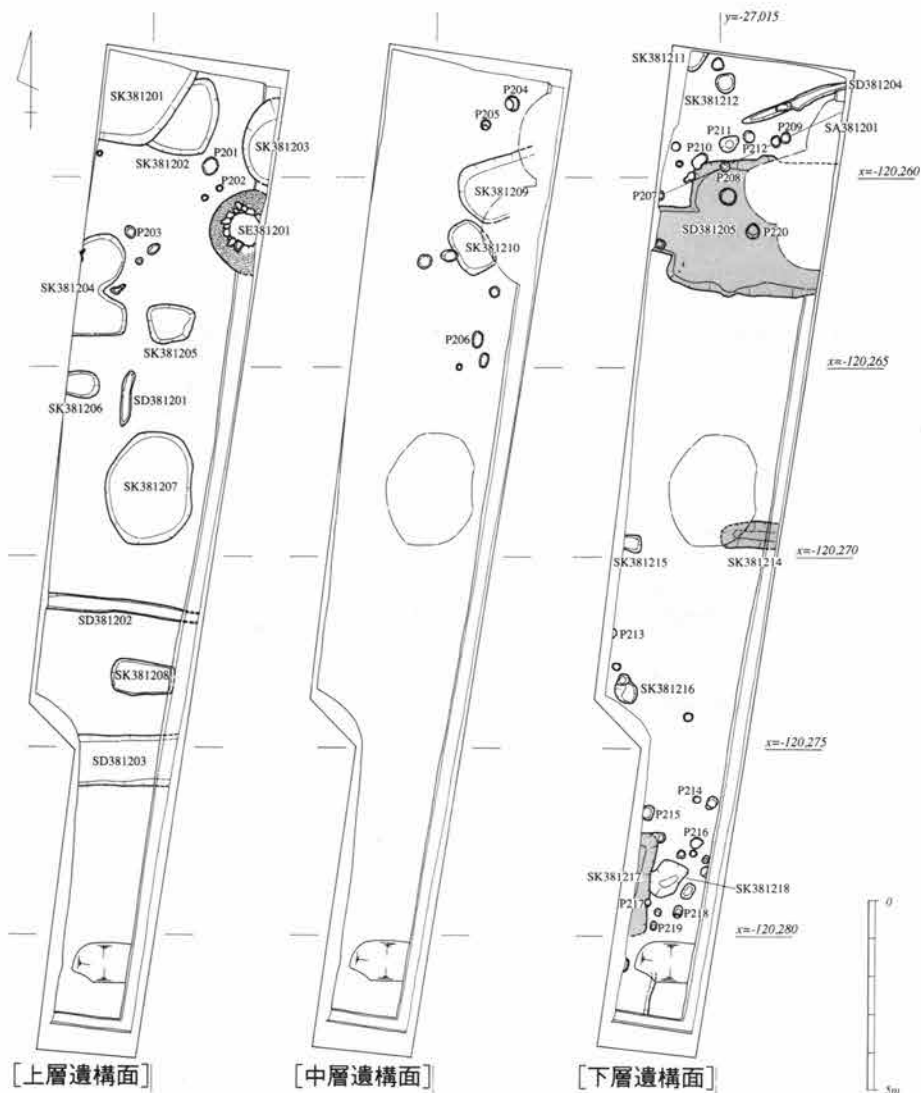


(2)第2トレンチ

[下層遺構] 地山面で検出した鎌倉時代の遺構を記す。

柵列 S A 381201 (pit.207~209) N-66°-Eの傾きを有する柵列である。3か所の柱穴しか確認していないが、北側の溝 S D 381205 とほぼ並行する位置関係にあり、溝を伴う柵列と判断した。柱穴間の距離は、1.8mを測る。ただし、pit.208の南東側には、同じく1.8mの間隔をもつ pit.220 が存在し、pit.208・209 とともに建物を構成する可能性も存在する。

溝 S D 381204 S A 381201の北側で、約80cm離れて並行する溝である。北東から南西に向かってやや浅くなり、トレンチの中央部で途切れる。埋土は、暗褐色粘質土である。



第111図 第2トレンチ検出遺構平面図

幅は、中央付近で26~36cm、深さ約10cmを測る。遺物は出土していない。

溝 S D 381205 東西にのびる溝であるが、幅の異なる2条の溝が接続して構成される。溝は、西側で幅約130cm・深さ約20cmを測る。中央部で幅が広がり、南北で350~380cmの規模となるが、深さは変わらない。あるいはこの部分のみ浅い方形の土坑と考えることも可能である。東側は後世の遺構によって削平されているが、東壁の断面から370cmの幅を有して東側へ延長するものと推定される。溝内のほぼ全体から遺物が出土しているが、特に第112図に示した2か所からは多くの土器がまとまって出土している。

出土遺物(第113~116図) 1~11は瓦器椀であり、いわゆる楠葉型に属する。内面にのみヘラミガキが施されているが、全体にミガキの間隔が広い傾向にある。見込みには、ジグザグ状暗文が施されている。器高指数は、平均で33である。橋本編年の第Ⅲ期3段階~第Ⅳ期1段階に相当し、森島の年代観<sup>(注8)</sup>によると、13世紀第3四半期に位置づけられる。

12~51は、土師皿である。伊野分類によると、13~44がAタイプに分類されるが、Aタイプはさらに細分化される可能性がある。法量では、7~8cm、12cm前後にまとまりがあるものの、小形品から大形品まで各種がそろっている(グラフ2参照)。

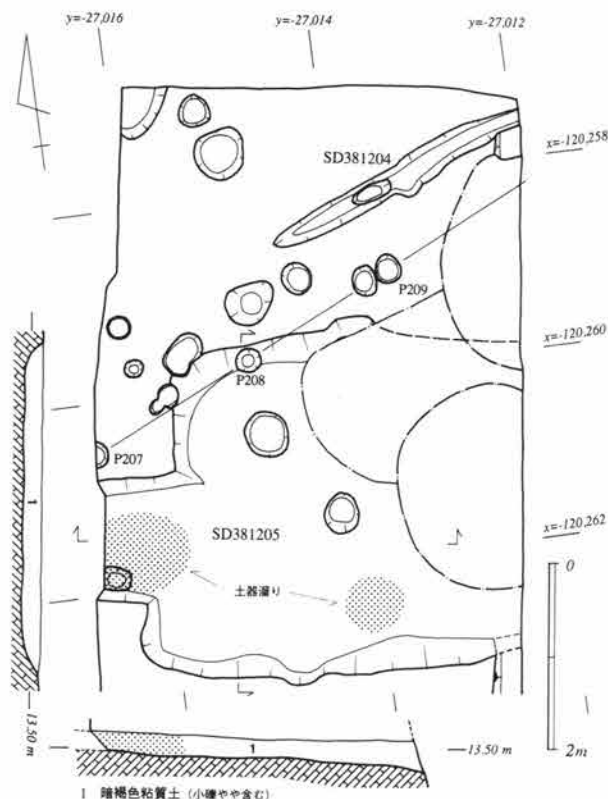
52~56は、三脚を有する瓦質羽釜である。57~59も瓦質の羽釜で、脚の有無は不明である。60は、わずかに内傾しながら直立気味に立ち上がる体部をもつ瓦質羽釜である。

61・62は、口径30~32cmの大形の瓦質羽釜である。

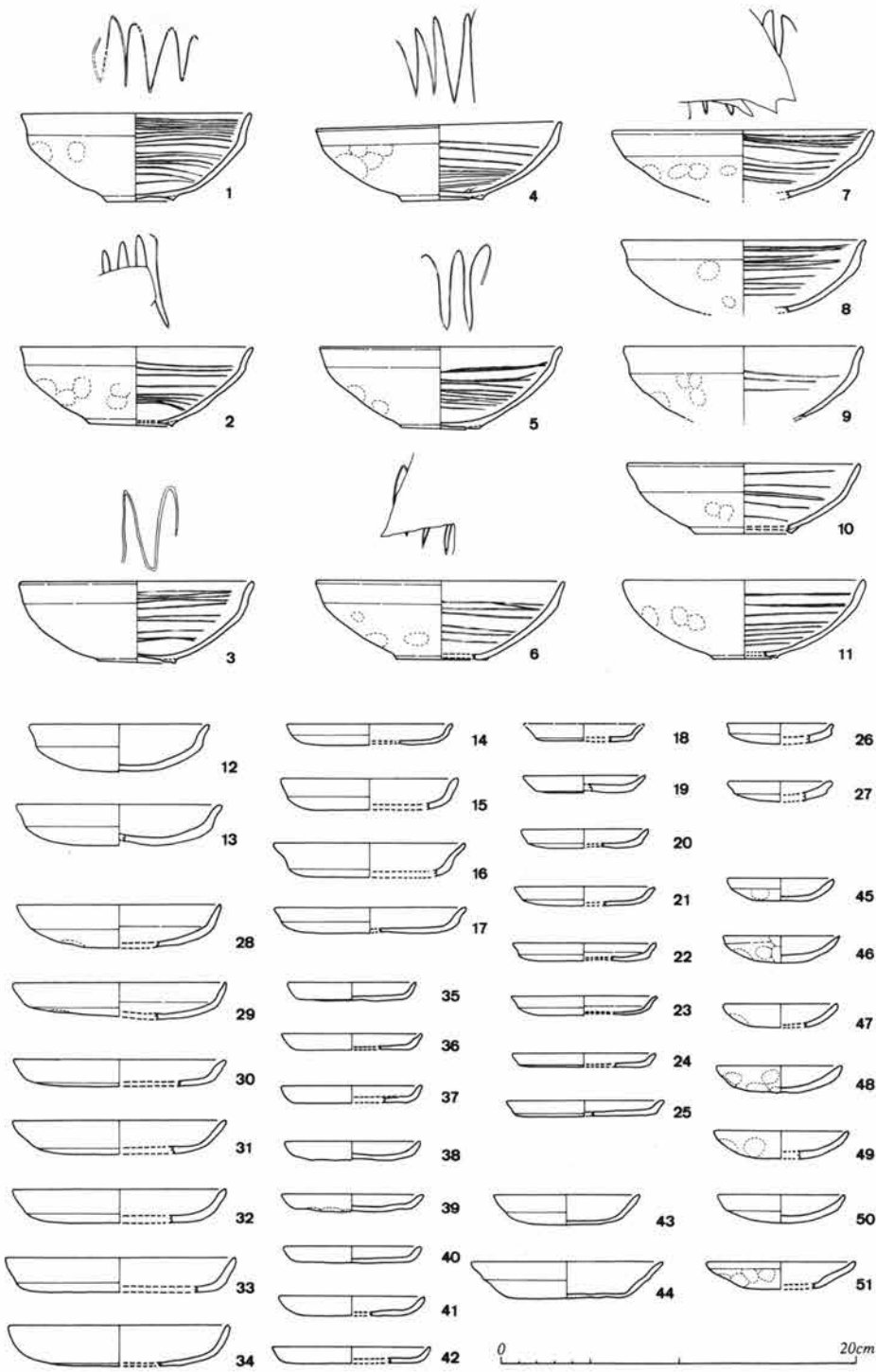
63~65は、東播系の須恵器ねり鉢である。神出第Ⅲ期・赤根川期第1段階<sup>(注9)</sup>に位置づけられる。66~70は須恵器甕である。71は白磁椀、72は白磁四耳壺の体部と考えられる。

土坑 S K 381211 トレンチの北西隅で、一部を検出した。遺物は出土していない。

土坑 S K 381212 直径



第112図 第2トレンチ北部検出遺構図

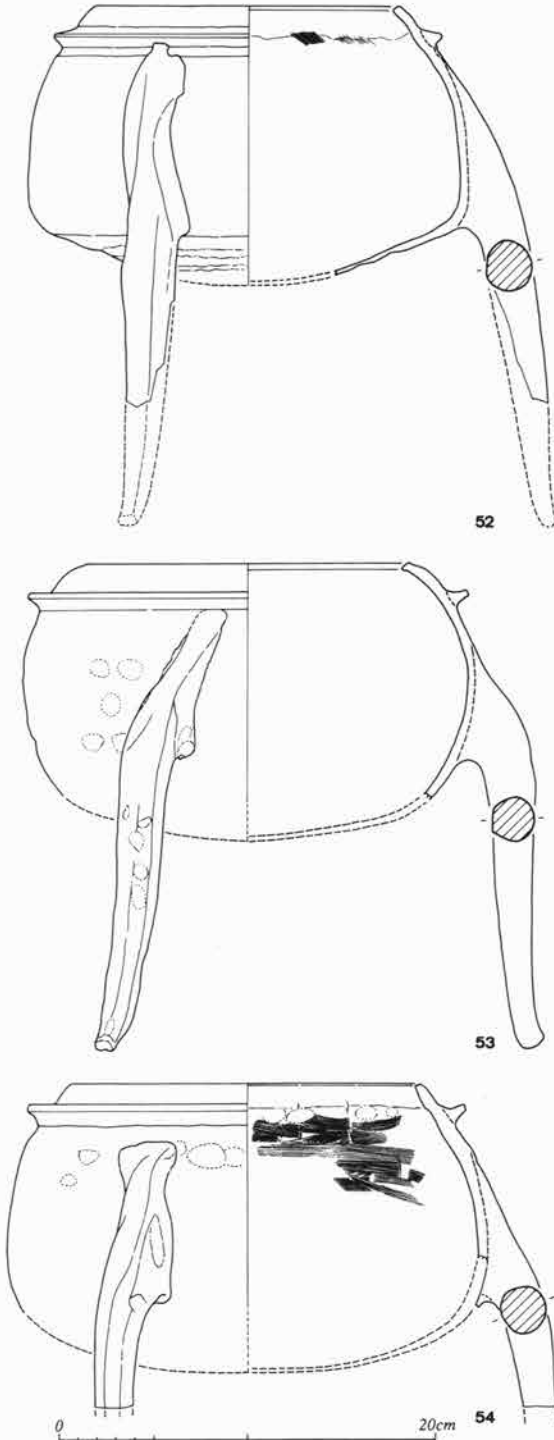


第113図 第2トレンチS D381205出土遺物実測図(1)

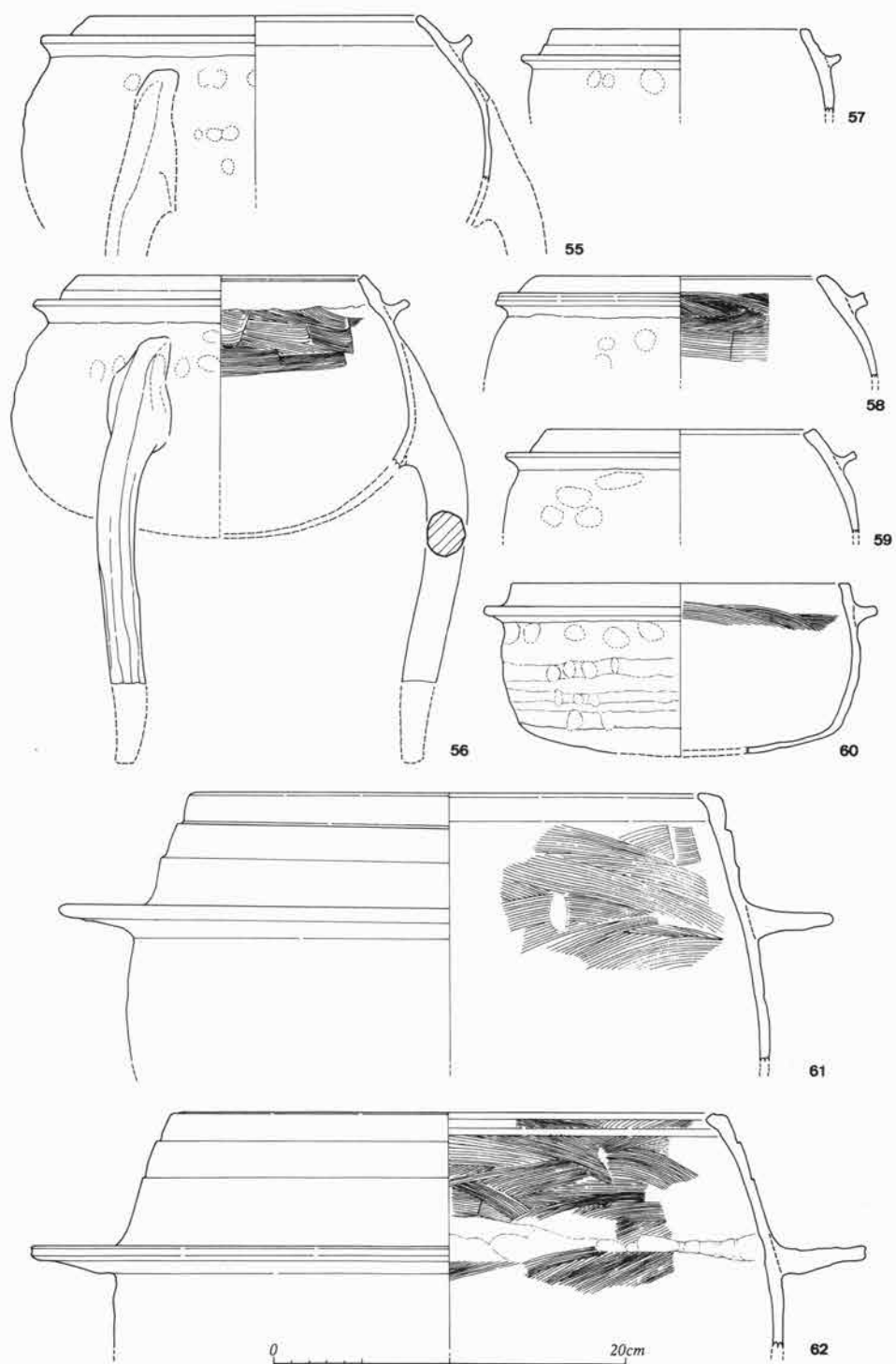
55cm、深さ17cmを測る小土坑である。遺物は出土していない。

土坑 S K 381214 南北103cm、東西150cm以上を測る楕円状の土坑である。土坑の北西部は土坑 S K 381207によって削平されている。東側は、調査地外へ延長する。溝の断面は、「U」字形を呈し、深さは約50cmを測る。土坑内には、焼土を含む黄褐色土が南壁に沿って帯状に存在したが、性格は不明である。上～下層にわたり、多くの土器が出土した。

出土遺物(第117図) 1～5は瓦器碗である。楠葉型に属する。底部の高台は、わずかに粘土紐を貼り付けただけの粗雑なものである。内面のみヘラミガキが施されるが、溝 S D 381205の瓦器碗よりもさらに簡素化されている。見込みには、ジグザグ状の暗文が施されている。口径は12cm以下で、器高指数は、35～40である(グラフ1参照)。橋本編年の第Ⅳ期2段階から一部第3段階に相当し、14世紀前半に位置づけられる。6～29は土師皿である。伊野分類Aタイプに属する。法量の分布は S D 381205に類似するが、口径12cm前後の大形品がない。



第114図 第2トレンチ S D 381205出土遺物実測図(2)



第115図 第2トレンチS D381205出土遺物実測図(3)

30は瓦質鍋、31は東播系の練鉢で、神出Ⅲ期・赤根川期第1～2段階に相当する。

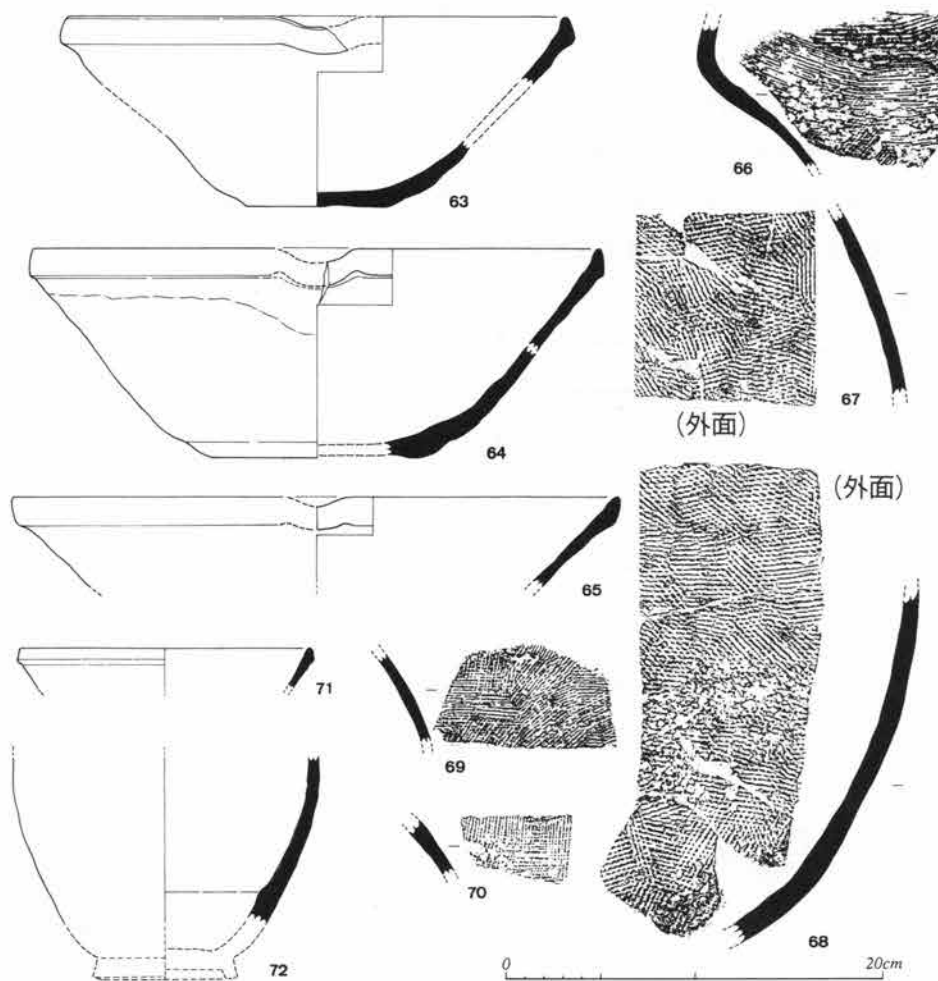
土坑 S K 381215 南北50cm・東西50cm以上・深さ20cmを測る方形土坑である。土師皿片が少量出土した。

土坑 S K 381216 長軸80cm・短軸60cm・深さ30cmを測る楕円状の土坑である。北側は、柱穴と重複する。瓦器椀、瓦質羽釜、土師皿の破片が出土した。

土坑 S K 381217(第118図) 南北約270cm以上を測る方形土坑であるが、東側の一部を検出したのみである。幅は、検出部分で約40cmを測る。肩部からゆるやかな傾斜で落ち込み、西側で深さ18cmを測る。土坑の南側では土器が一括廃棄されていた。

出土遺物(第120図) 瓦器椀(1～5)と土師皿(6～37)のみで他の遺物を含まない。

瓦器椀は、楠葉型に属する。高台は粗雑化が著しく、わずかに痕跡をとどめる程度であ



第116図 第2トレンチ S D 381205出土遺物実測図(4)

る。内面のヘラミガキは間隔が広く、簡略化している。見込みには、ジグザク状の暗文を施す。器高指数は32~33である。橋本編年の第IV期2段階に相当する。13世紀末~14世紀前半に位置づけられる。

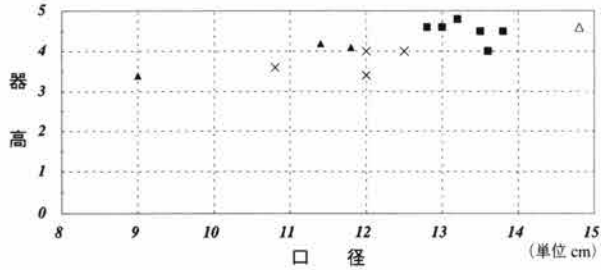
土師皿は、伊野分類のAタイプ(6~36)である。法量は、7~8cmと10~11cmとに分化し、少量の小形品が存在する。37の土師皿は、白色系で、いわゆるへそ皿の形態をもつ。

土坑 S K 381218 平面で、80~120cmの規模をもつ不定形土坑である。深さは、約40cmを測る。土坑 S K 381217に接しているが、埋土による先後関係は不明である。出土土器によれば、当土坑が先行すると考えられる。瓦器碗・土師皿(第119図)が出土した。瓦器碗は、橋本編年第III期2段階に相当し、今回出土したなかで最も古いタイプである。

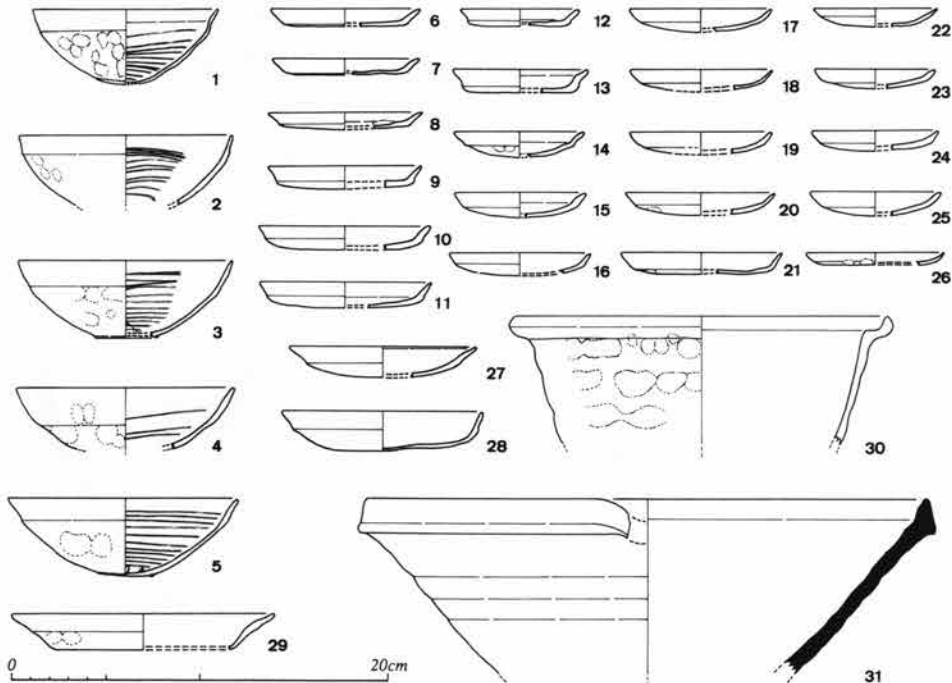
【中層遺構】 第III層を除去する過程で検出した室町時代の遺構である。

土坑 S K 381209 東側・南側を後世の遺構に削平されているが、長辺200cm以上・短辺100cm以上の方形土坑と考えられる。底は平らで、深さは20cmを測る。埋土は、暗褐色粘

グラフ1 瓦器碗法量グラフ



▲ S K 381214 × S K 381217 ■ S D 381205 △ S K 381218



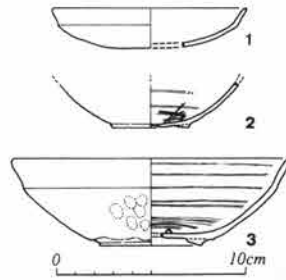
第117図 第2トレンチ S K 381214出土遺物実測図



第118図 S K381217・381218

質土であるが、多量の焼土・炭や焼土化した壁土が含まれる。ただし、土坑壁面は焼けておらず、これらを廃棄した穴と考えられる。信楽播鉢(第123図6)のほか、瓦器椀、瓦質羽釜、土師皿の細片が出土した。

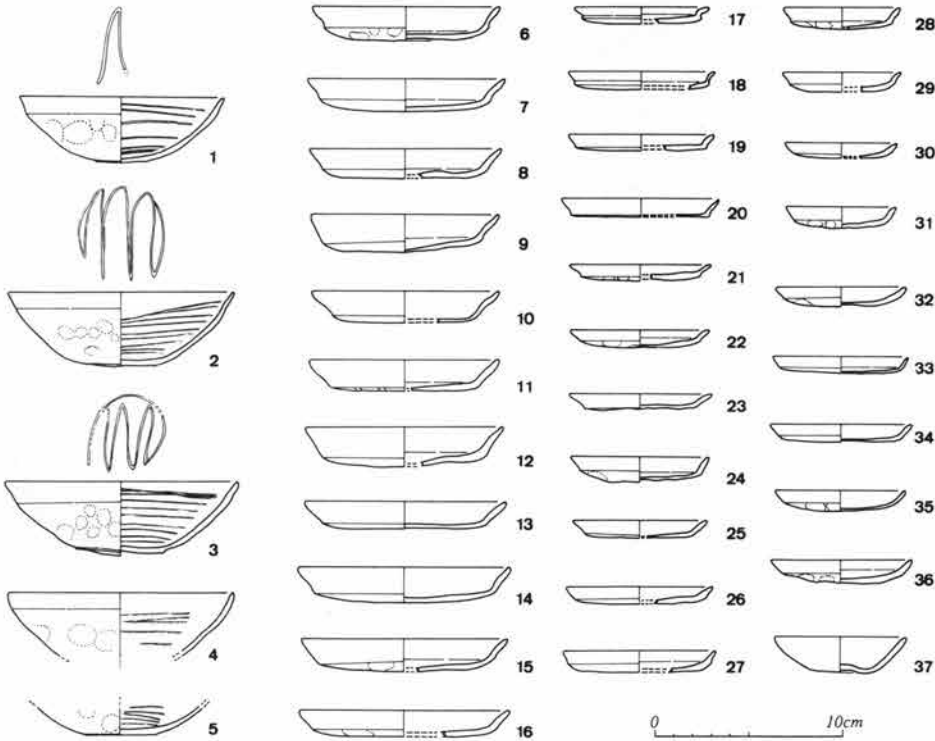
土坑 S K 381210 長辺140cm、短辺100cmを測る方形土坑である。平らな底をもち、深さは16cmを測る。暗褐色粘質土を埋土とし、わずかに焼土・炭を含む。S K 381209と同時期に掘削されたと考えられる。土師皿(第124図)のほか、瓦質羽釜片が出土した。



第119図 S K381218出土遺物

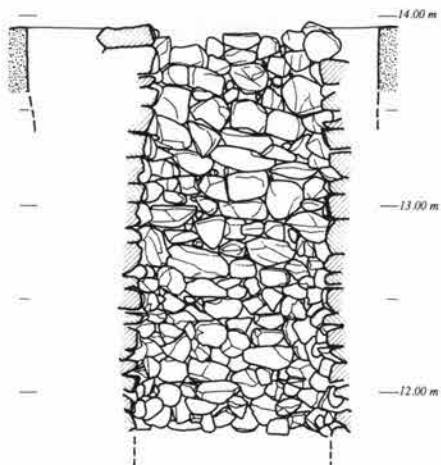
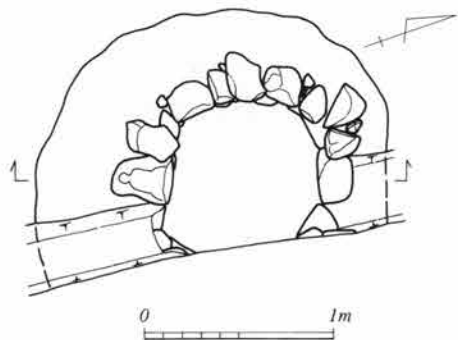
〔上層遺構面〕 第Ⅲ層  
上面検出の戦国～江戸時代の  
遺構を記す。

井戸 S E 381201 (第121  
図) 石組みで築かれた井  
戸である。内径は、上部で



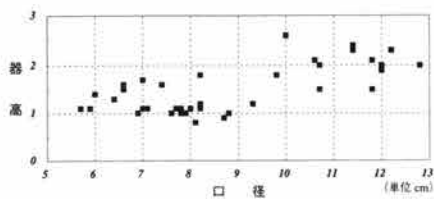
第120図 第2トレンチ S K381217出土遺物実測図



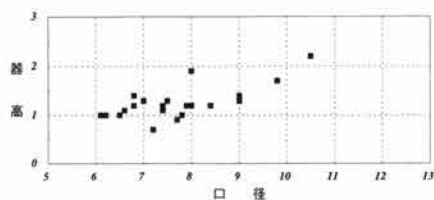


第121図 S E 381201平面図・断面図

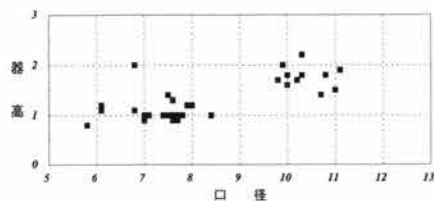
グラフ2 溝 S D 381205土師皿法量グラフ



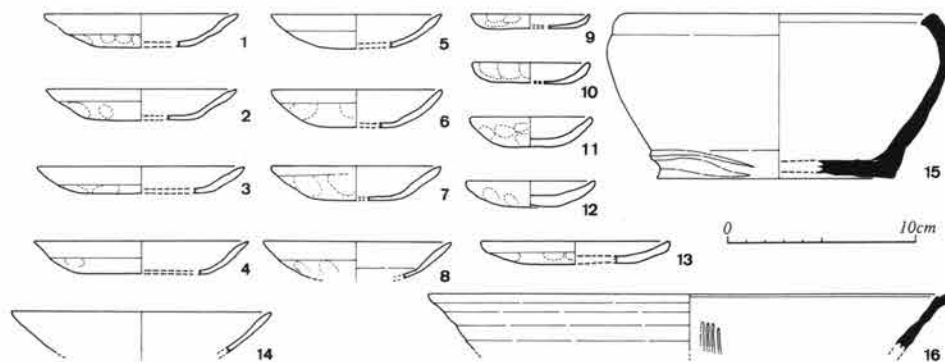
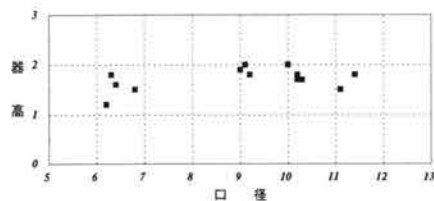
グラフ3 土坑 S K 381214土師皿法量グラフ



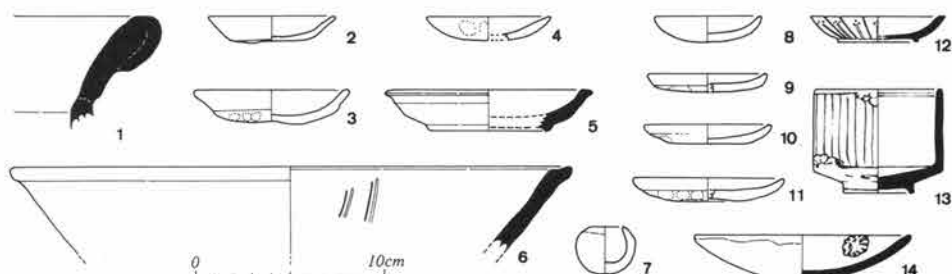
グラフ4 土坑 S K 381217土師皿法量グラフ



グラフ5 井戸 S E 381201土師皿法量グラフ

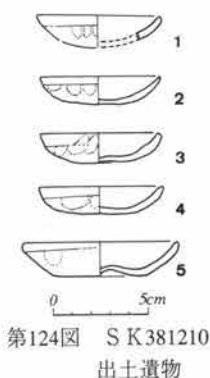


第122図 第2トレンチ S E 381201出土遺物実測図



第123図 第2トレンチ遺構内・包含層出土遺物実測図

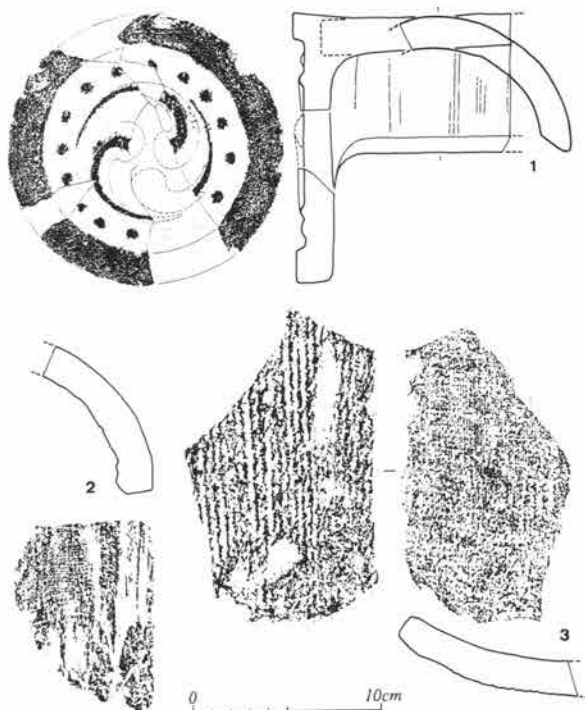
1.Pit206 2・3・7.第Ⅲ層 4.S K381205 5.S K381204 6.S K381209 8~14.S K381201



第124図 S K381210  
出土遺物

80~90cm、中央部で約100cmを測る。作業の安全上、検出面から約2mまでしか掘削できていない。石は、3~30cm大までさまざまな大きさのものが使用されているが、上部は比較的大きな石がラセン状に積み上げられている。石材の中には、確認したのみで5体の石仏が転用されていた。掘形は、井戸の中心とずれがあり、南側にやや広くなる。径約190cmを測り、ややいびつな円形を呈する。

出土遺物(第122図) 1~13は土師皿で、伊野分類Iタイプ(1~8)と手づくねの小形品である(グラフ5参照)。15は備前鉢、16は



第125図 瓦実測図

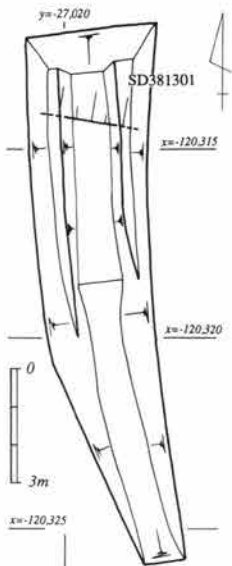
1・3.第1トレンチ第Ⅱ層 2.S K381218

信楽播鉢である。図化していない出土遺物に瓦質及び土師質の火鉢がある。これらの遺物から、井戸の年代は、16世紀の中~後半と考えられる。

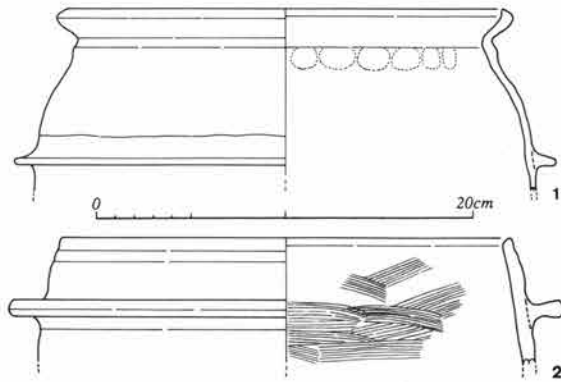
土坑 S K381201 トレンチの北西隅で検出した。一辺250cm以上・深さ50cmを測る土坑である。土師皿・陶磁器(第123図8~14)、近世瓦が出土した。18~19世紀。

土坑 S K381202 一辺約200cm・深さ25cmを測る方形土坑。遺物は出土していない。

土坑 S K381203 径240cmの円形掘形内に漆喰を使用し、



第126図 第3トレンチ



第128図 第3トレンチ S D381301出土遺物実測図

直径160cmの円形土坑を構築したもの。野壺と思われる。土師皿、備前播鉢等が出土した。

土坑 S K 381204 南北で270cm、深さ25cmを測る不定形な土坑である。志野小皿(第123図5)、土師皿、近世平瓦が出土した。志野小皿は、17世紀初頭に位置づけられる。

土坑 S K 381205 長辺130cm・短辺100cm・深さ30cmを測る土坑である。土師皿(第123図4)が少量出土した。

土坑 S K 381206 長辺90cm以上・短辺70cm・深さ30cmを測る土坑である。

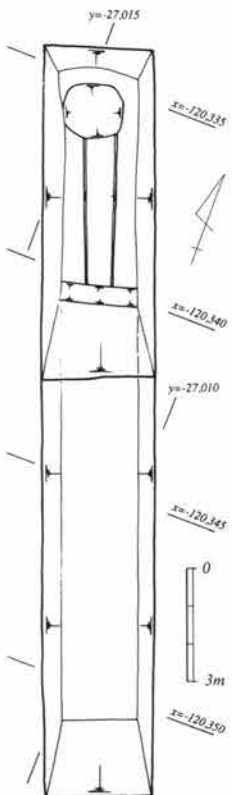
土坑 S K 381207 長軸300cm・短軸230cm・深さ90cmを測る大形の土坑である。埋土は、暗褐色砂礫である。近世平瓦、国産陶磁器類が出土した。18世紀。

土坑 S K 381208 長辺150cm以上・短辺75~90cm・深さ15cmを測る土坑である。近世平瓦、土師皿、菊花スタンプ文をもつ瓦質火舎等が出土した。

溝 S D 381201 幅25cm・深さ10cmを測る南北方向の溝状遺構。遺物は出土していない。

溝 S D 381202 幅30cm・深さ40cmを測る東西方向の溝。信楽播鉢、土師皿が出土した。

溝 S D 381203 東西方向の溝で、上層は機械掘削時に削平し、中層以下の部分を検出した。近世平瓦、土師皿、国産陶磁器類が出土している。



第127図 第4トレンチ

## 〔包含層出土遺物〕〈第103図11・12〉

完存していないが、同一個体の広口壺である。頸部から胴部へかけてはタテハケの後、櫛描きの直線文と波状文で装飾される。底部外面は、ハケ原体による調整が行われ、見かけはミガキ状を呈する。内面も同一原体によってケズリ状の調整が行われる。口縁は、端部の一部しか遺存しないが、円形浮文によって装飾される。色調は明赤褐色を呈する。凹線文の出現前後の時期と推定される。

## (3)第3トレンチ(第126図)

溝 S D 381301 第V層をベースとして検出した東西方向の溝である。トレンチ北側の土層断面観察により、溝の南側肩部のみ確認した。幅1.7m以上・深さ0.8mを測る。埋土は、暗灰色・暗褐色シルトで小～中礫を含む。

出土遺物(第128図) 1は大和型、2は在地産の瓦質羽釜である。

(4)第4トレンチ(第127図) 遺構は検出できていないが、第V・VI層から土師器が少量出土している。第IV層以下では、後背湿地状の堆積を示しており、わずかに出土した遺物も流入によるものと判断できる。第III層は、砂を主体とする堆積で、それ以前とは周辺環境に大きな変化のあったことが推測されるが、第3トレンチの所見から近代以後のことと考えられ、また居住区域としては引き続き適していなかったものと思われる。

なお、トレンチの南側は、地表下約2mで青灰色細砂をベースとして、溝・土坑状の遺構を平面的に確認したが、壁面の崩壊のため十分な調査が行えず、詳細は不明である。

付表10 ピット一覧表

No.	径cm	深さcm	出土遺物	遺構
101	18~26	7	瓦器碗・土師皿細片	
102	23	5~10	櫛鉢1	
103	52~54	14	土師皿片1	
104	40~54	12	土師皿片多・瓦器碗片	
105	30~32	34	土師皿片1	
106	34~66	17	瓦器碗・羽釜・土師皿片	
107	38	45	瓦器碗・羽釜・土師皿片	
108	24	29	羽釜片1	
109	30	26	土師皿片2	
110	20~30	17~21	土師皿片1	
111	30~36	11	瓦器碗片2	S A 381101
112	34~36	23	備前壺・土師皿・羽釜片	S A 381101
113	26~30	18	須恵器片1	S A 381101
114	23	21	土師皿片2・須恵器鉢1	S A 381101
115	40	12	弥生土器?2	S B 381101
116	58	33	なし	S B 381101
117	46	57	瓦器碗片1	S B 381101
118	25	12	なし	S B 381101
119	29~36	23	羽釜片1	S B 381101
120	34~37	32	瓦器碗片1・土師皿片2	S B 381102
121	30~40	22	瓦器碗片1・羽釜・土師皿	S B 381102
122	35	18	瓦器碗片2・土師皿片2	S B 381102
123	30	10	土師皿片1	S B 381102
124	30	28	なし	S B 381102
125	35~37	49	弥生土器?2	
126	(30~)	8	土師皿片2・羽釜片1	
127	30~35	8	土師皿片2	
128	33~40	8	瓦器碗片1	
129	42~44	18	瓦器碗片3・土師皿片1	
130	41~50	12	瓦器碗・土師皿・須恵器	
131	24~28	11	瓦器碗片・土師皿片	
132	34~40	27	須恵器片1	
133	25	10	瓦器碗片4	
134	28~33	34	土師皿片・壁土	
135	22~26	8	土師器片	
136	28	10	土師皿片3	
137	37~45	17	土師皿片・羽釜片	
138	26	19	土師皿片・須恵器片	
139	28~35	17	土師皿片2	
140	19~22	7	瓦器碗片1・土師皿片	
141	55	17	土師皿片2	
142	27~30	51	瓦器碗片1・土師皿片3	
143	26	84	土師皿片3	
144	41	32	須恵器壺片1	
145	30	18	土師皿片5・壁土	
146	32~48	28	瓦器碗片・土師皿片	
147	19~25	28	羽釜底部1	
148	16	22	瓦器碗・羽釜・土師皿片	
201	42~50	7	土師皿・羽釜・染付片	
202	18~20	7	近世平瓦・土師皿片	
203	28~34	9	瓦器碗片1	
204	40	16	土師皿・須恵器壺片	
205	28~30	11	瓦器碗片1	
206	28~41	8	常滑壺口縁1	
207	30	17	土師皿片・焼土	S A 381201
208	28	24	なし	S A 381201
209	27~31	10	土師皿片1	S A 381201
210	30~50	14	須恵器鉢片	
211	42~56	31	なし	
212	33~35	19	羽釜片1	
213	36	20	土師皿片1	
214	20~23	13	瓦器碗・土師皿片	
215	30~41	29	瓦器碗・土師皿片	
216	30~36	14	瓦器碗・土師皿片	
217	19	40	瓦器碗・土師皿片	
218	25~37	20	瓦器碗片	
219	18~26	59	瓦器碗・土師皿片	
220	37~43	25	なし	

#### 4. ま と め

〔弥生時代〕中期に属する方形周溝墓の南東コーナー部分を検出した。神足遺跡内では、最も南側で検出した周溝墓であり、墓域の広がりを知るうえで重要な成果といえる。

〔長岡京期〕七条第一小路を含め遺構は検出できなかったが、第1トレンチの包含層で当該期の須恵器を確認した。この時期の遺構は、中世に削平を受けた可能性が高い。

〔鎌倉時代～室町〕掘立柱建物跡、柵列、溝、土坑等今回の調査で最も多くの遺構・遺物を確認した。検出した主な遺構を時期別に整理すると、13～14世紀にS K 381218→S D 381205→S K 381217→S K 381214・S B 381102→S B 381101・S A 381101、15世紀にS E 381101・S K 381119・S K 381120、16世紀にS K 381124・S K 381210→S E 381201と変遷する。建物跡を確認したのは14世紀代のみであるが、他の遺構からその存在が予想される。これらの遺構は、鎌倉時代から細川藤孝による勝龍寺城の改修築(1571年)前後に相当し、右京第10・28次の調査成果とあわせ、中世神足の重要な資料となった。

出土遺物では、楠葉型瓦器碗終末段階の良好な一括資料を確認した。

〔江戸時代〕土坑・柱穴等を検出した。これらの遺構は、勝龍寺城が洪水によって北側へ移った後に整地を行い営まれたものと考えられる。

(鍋田 勇)

注1 今回の調査では多くの方々に参加・協力いただいた。記して謝意を表する(敬称略・順不同)。  
小牧 勲・島田豊彰・山門芳枝・島田加奈・森 暢子・森 善子・進木和美・北岡里絵・飛田  
浩一・柿原 実・尾関真二・前田暁宏・松本とも子・江口正孝・赤尾 健・中島恵美子・小田  
栄子・山中道代・竹内千賀子・内藤チエ・久平喜美子・田村重野  
なお、次の方々に調査中、ご指導・ご教示を賜わった。記して感謝したい(敬称略・順不同)。  
中山修一・岩崎 誠・小田桐淳・木村泰彦  
また、遺物については、当センターの伊野・引原・田代・森島の教示を得た。

注2 「長岡京市域地質図」(『長岡京市史資料編一』付図1) 1991

注3 杉崎 章「知多古窯の終末と常滑窯の出現」(『常滑市民俗資料館研究紀要』1) 1984

注4 伊野近富「『かわらけ』考」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査  
研究センター) 1988

注5 間壁忠彦「備前」(『世界陶磁全集』3 日本中世 小学館) 1977

注6 森島康雄「中河内の羽釜」(『中近世土器の基礎研究』VI) 1990

注7 橋本久和「中世土器研究予察」(『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会) 1980

注8 森島康雄「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」(『大和の中世土器』II) 1992

注9 森田 稔「東播系中世須恵器の生産と流通」(『中近世土器の基礎研究』III) 1987

## 6. 木津川河床遺跡平成3年度発掘調査概要

### 1. はじめに

木津川河床遺跡は、京都府八幡市八幡に所在する集落遺跡で、今回の発掘調査は、京都府土木建築部下水道室が計画・施工している木津川流域下水道浄化センター建設に伴う事前調査である。当該遺跡の発掘調査は、昭和57年から継続して実施されており、今回の調査で7次を数える。過去6回の発掘調査によって多くの考古学的所見を得るに至っているが、今回の調査対象地は、最も北方地点にあたり、平成元年度で検出した古墳時代前期の竪穴式住居跡群の広がりや土坑群・中世素掘り溝の延長・噴砂のつながりを確認する目的で、2か所に合計600m<sup>2</sup>の試掘トレンチを設定して調査を実施した。

座標は、「美豆」X=-123,063.88・Y=-26,035.10、「生津」X=-124,215.19・Y=-25,345.22の両基準点を使用し、水準点は、現行の工事用水準点を使用した。

今回の発掘調査は、平成3年12月2日から平成4年2月1日までの間行い、調査成果を同年1月28日に実施した関係者説明会で公表した。また、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎・同調査員小池 寛が担当し、結合トラバース測量では、同調査員野島 永がこれを補佐した。本概要報告の執筆・編集は小池が担当した。

発掘調査を進める上で、八幡市教育委員会をはじめ関係諸機関の協力を得た。また、調査に参加された方々からは、多くの援助があった。特に、本概要作成には、寒川 旭・前田暁宏氏の積極的な援助があった。記して感謝の意を表したい<sup>(注1)</sup>。

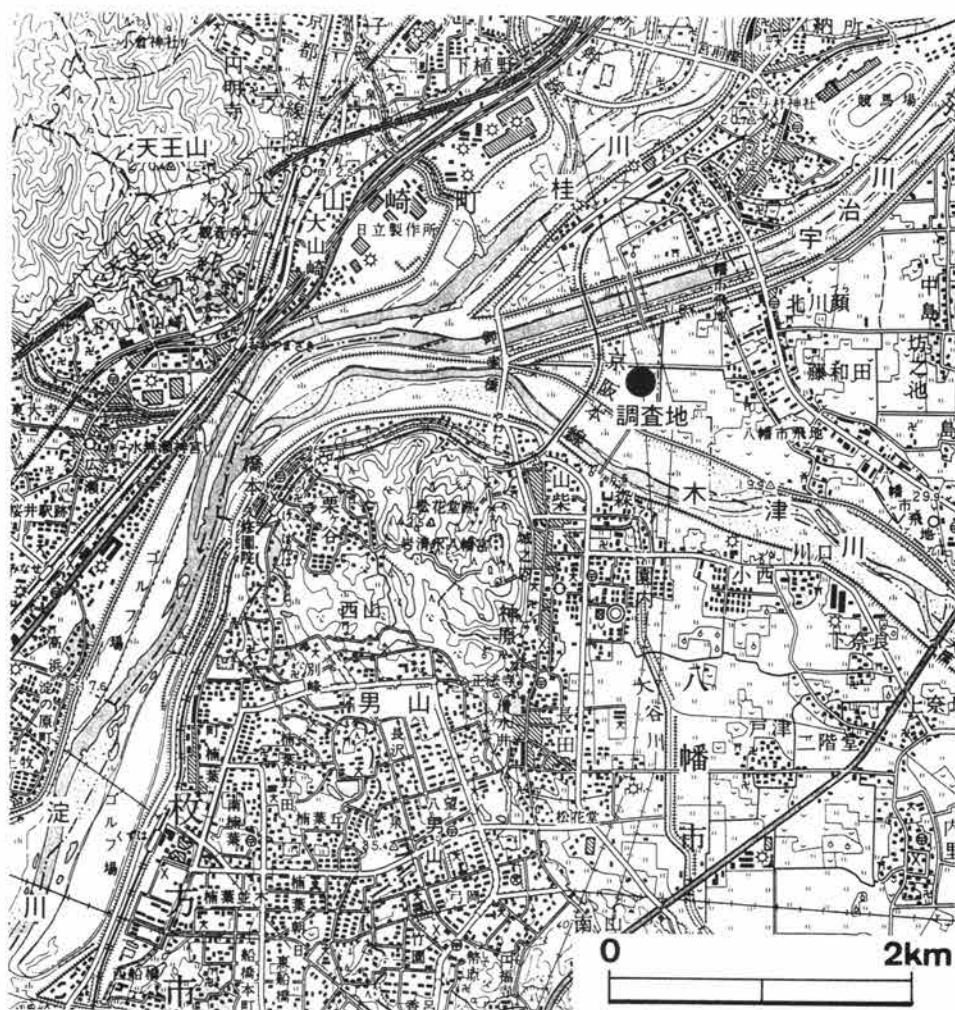
なお、発掘調査に係わるすべての経費は、京都府土木建築部下水道室が負担された。

### 2. 周辺の歴史的環境(第129図・図版第48-(1))

木津川河床遺跡が所在する八幡市は、南山城地域の北西部に位置しており、桂川・宇治川・木津川の三河川合流部の南方に隣接している。この三河川合流部の北方には、天王山山地が張り出しており、南方には、男山丘陵が位置している。両丘陵に挟まれた最も狭小な部分で三河川が合流し、河川名称を「淀川」と変え、大阪平野へ流れ込んでいる。これらの地理的条件から、当該遺跡は河川を介在にした地域間交流の重要拠点として機能していたと考えられ、近年の考古学的調査によって、その実態が徐々に解明されている。

八幡市には、その象徴として男山丘陵が所在しているが、その丘陵から南方には、画文

帯神獸鏡・石釧・勾玉・短甲・剣・刀などが出土した石不動古墳(全長88m)や三角縁神獸鏡・盤龍鏡・画文帯神獸鏡・仿製六獸鏡・仿製規矩鏡・楯形石・車輪石・碧玉合子・滑石釧などが出土した西車塚古墳(全長120m)、そして、内行花文鏡・三角縁神獸鏡・仿製六獸鏡・素環頭大刀などが出土した東車塚古墳(全長90m)が所在している。これらの古墳は、いずれも前方後円墳であり、古墳時代前期後半の当該地の重要性をあらわしている。また、古墳時代中期に築造されたヒル塚古墳は、一辺54.2m・墳丘高7.5mを測る方墳で、仿製鏡・槍・剣などの遺物が出土した。埋葬主体部は大規模な粘土槨であり、一帯を勢力範囲とする地方首長の存在を示唆している。古墳時代後期になると美濃山丘陵に荒坂横穴群や狐谷横穴群が出現する。南山城地域で横穴墓が最も集中する地域であり、特異な墓制が存在するところとして注目されている。

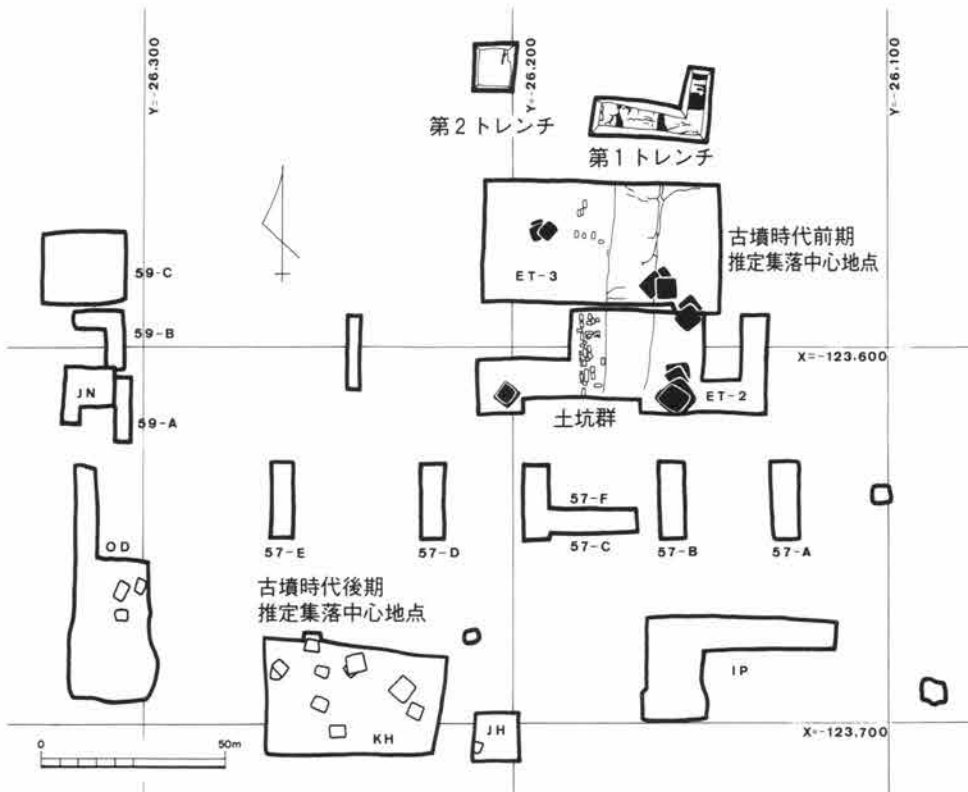


第129図 調査地位置図(1/50,000)

### 3. 調査概要

#### (1)層位・遺構

木津川河床遺跡では、今まで6回に及ぶ発掘調査が行われている<sup>(注2)</sup>(第130図)。昭和58年度調査地(KH)では、古墳時代後期の竪穴式住居跡10基をはじめ、古墳時代初頭の土器溜りや中世素掘り溝を多数検出した。この調査によって今まで不明であった古墳時代後期の集落の様相が明らかになったばかりでなく、標高わずか8m前後の地点に集落が存在することが実証され、その後の木津川・宇治川河床の重要性を認識する足掛かりになった。その後、昭和61年度のエアレーションタンクの建設に伴う調査(ET-2)では、古墳時代前期の竪穴式住居跡7基・不明土坑群・掘立柱建物跡などを検出し、平成元年度の調査(ET-3)では、古墳時代前期の竪穴式住居跡8基・不明土坑群・中世素掘り溝群などを検出した。これらの調査によって古墳時代後期の集落から北方に約100mの地点に古墳時代前期の集落が所在することが明らかになった。今回の調査地は、これらの前期集落を検出したトレンチの北方に隣接しており、関連の遺構・遺物の検出が予想されていた。なお、噴砂については、昭和61年度の発掘調査から地質学研究者によってはじめて認識されるに



第130図 トレンチ配置図

黒塗り：古墳時代前期竪穴式住居跡群 白抜き：古墳時代後期竪穴式住居跡群



至り、その後も当該遺跡では良好な資料を提供している。

今回の発掘調査は、以上の点に留意し、トレンチ設定を行い、古墳時代前期の遺物をわずかながら含む包含層と、時期・用途不明の土坑群、噴砂を検出した。以下、各トレンチごとに土層堆積状況と検出遺構を概観する。

①第1トレンチ(第131・132図、図版第48-(2)・49)

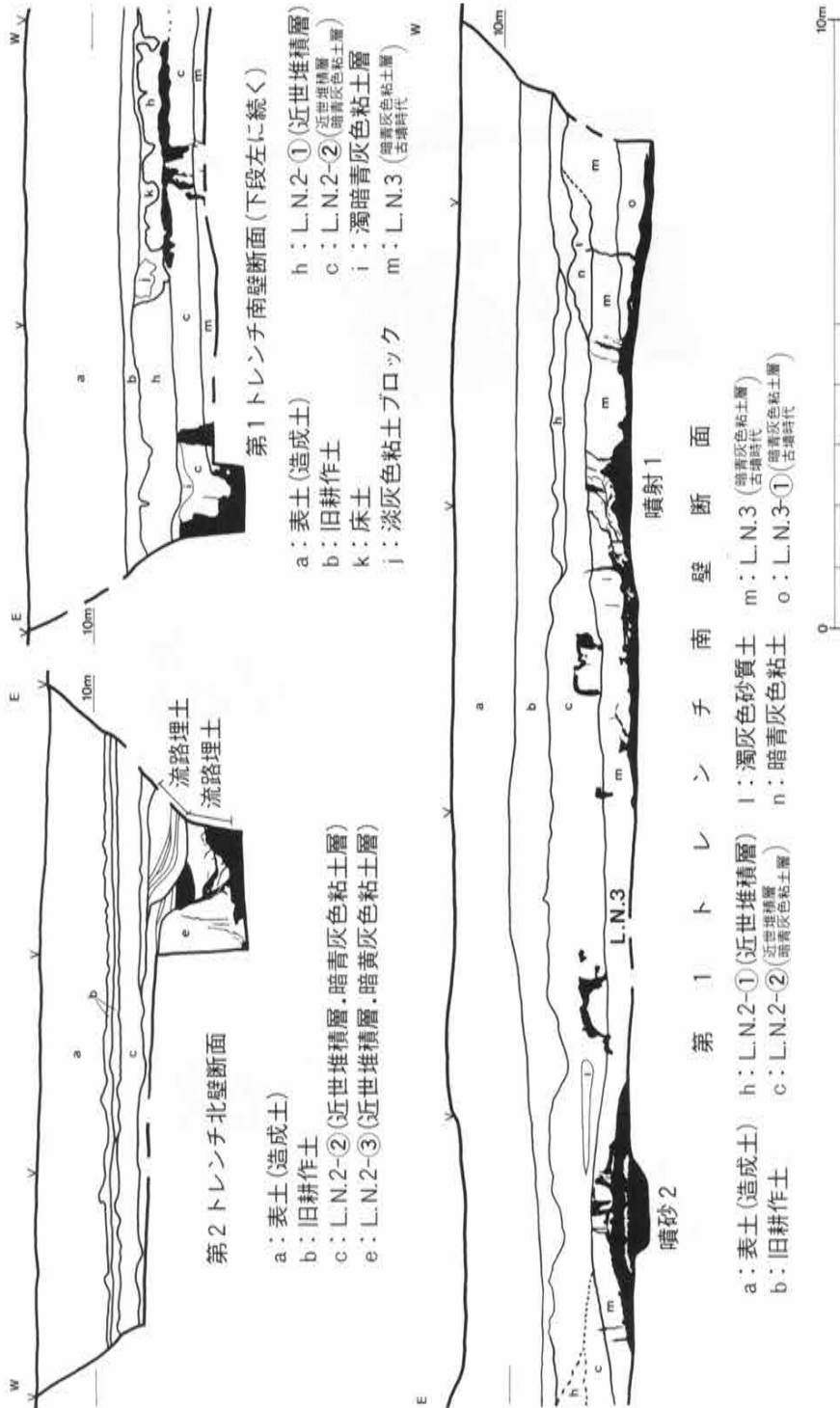
平成元年度の調査地(E T-3)の北方に隣接して設定したトレンチである。基本的な土層堆積状況は、表土が1.2m程度堆積し、その下層に0.6mの厚みで旧耕作土が堆積している。近世に比定できる堆積層(L.N.2)は、基本的には0.4m程度の厚みであるが、部分的には、上層h(L.N.2-1)と下層c(L.N.2-2)に分層することが可能である。その堆積時期については、噴砂が鍵層となって、後述するように、詳細な設定が可能である。

近世堆積層の下層には、古墳時代前期の遺物をわずかながら含む包含層m層(L.N.3)が、西方に0.4m、東方に0.2m程度堆積している。南壁断面で観察すると、噴砂1の中心点から東西幅約7m間にかけて、0.1~0.2m程度隆起しており、また、噴砂2の中心点から東西幅約6m間にかけて、0.2~0.3m程度隆起していることが観察できる。この隆起現象は、今までの調査成果でも明らかなように、液状化現象に伴う下層堆積層である砂層の噴出によって引き起こされたものである。

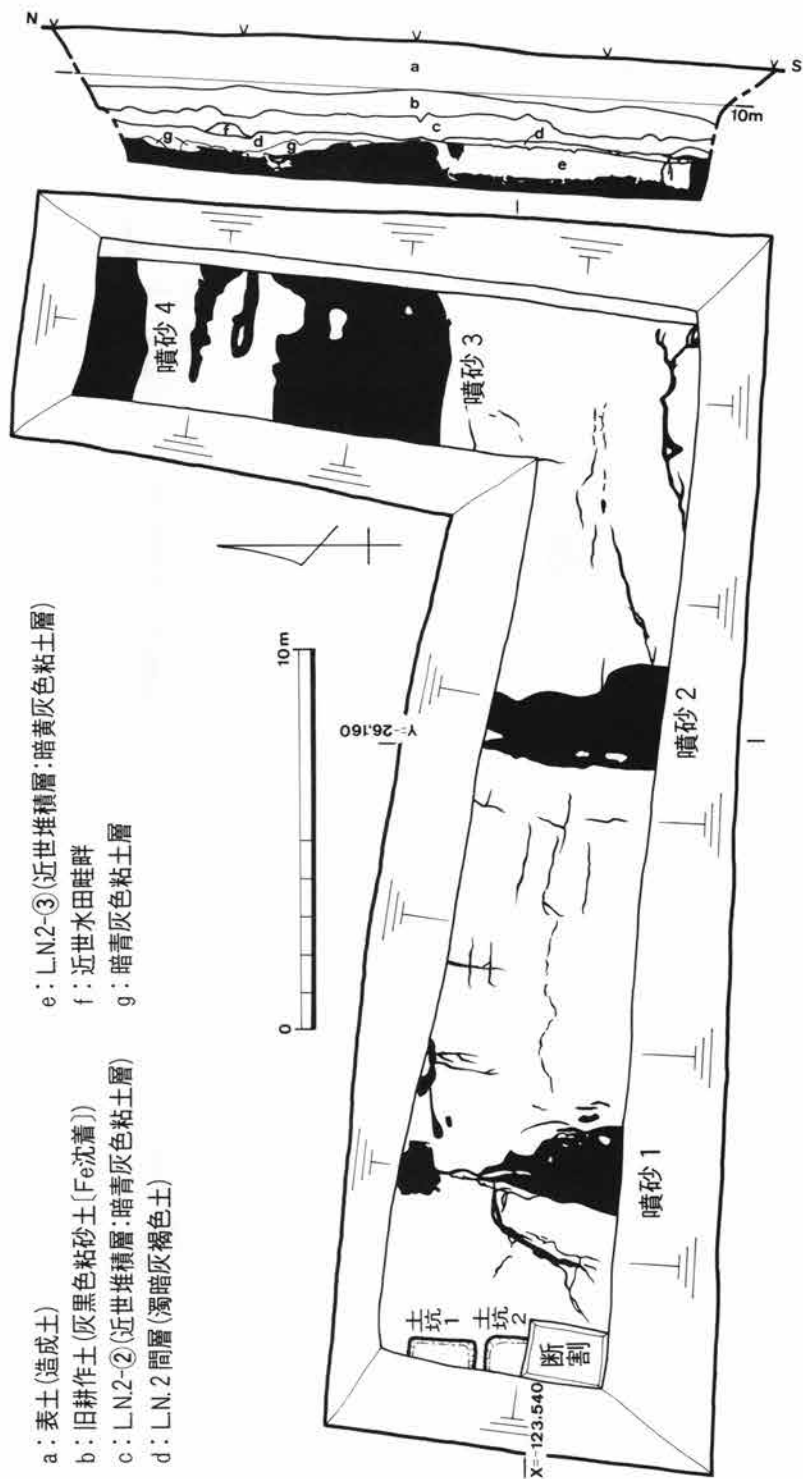
トレンチ西方では、古墳時代前期の包含層であるm層の下層に、4 m<sup>2</sup>に数点の土師器を含む包含層o層(L.N.3-1)が堆積している。断面観察では明確な遺構は検出していないが、o層の上面とm層の下面には、色調の違いが顕著であり、時期差を現すものとして把握できる状況である。トレンチ西端で検出した土坑群は、m層上面で輪郭を確認した。

古墳時代前期の遺物包含層であるm・o層の下層には、液状化現象によって噴出した噴砂のベースである灰褐色砂層が堆積している。噴砂1及び噴砂2の周囲は、液状化現象のため、比較的粒子の粗い砂層と細かい砂層が数層に分かれており、その砂層の間層として、青灰色粘土層が5cm程度、隆起曲線に沿うように堆積している。これらの砂と粘土の互層部分には、噴砂に伴うピラストラクチャーが観察できる。

噴砂1及び噴砂2の隆起部分から枝状に上がる細かい噴砂群は、隆起曲線に沿って斜めに噴き上がっているが、中心点直上に位置する噴砂は、ほぼ垂直に上がっている。これらの枝状の噴砂は、その多くが古墳時代前期の堆積層であるm層(L.N.3)上面で切られており、近世段階でm層の上面が削平を受けていると考えられる。一方、噴砂1・2からの枝状派生をしていない噴砂群を、近世堆積層であるc層内で検出している。これらの中には、n層にまで達している噴砂もあることから、噴砂1・2とは異なった時期の噴砂であることが考えられる。



第131図 第1トレンチ南壁断面・第2トレンチ北壁断面実測図(1/120)  
 黒塗り部分は噴砂を示す。



第132図 第1トレンチ測量図・東壁断面実測図(1/200)

黒塗り部分は噴砂を示す。

東西方向に走る噴砂3は、標高8mの面で計測すれば、幅約4.3mを測る。断面観察によってベースの砂層が隆起するに留まっているが、砂・粘土が互層に堆積しており、上層部には、噴砂1・2周辺で確認できたものよりは、明確なピラストラクチャーが観察できる(図版第50-(2))。これらの噴砂検出状況は、平面的にも過去の調査のなかで最大規模であるが、噴砂のベースとなっている砂層の上面に堆積する粘土層の厚さによって、その噴き上がりに差異があることを考慮すれば、古墳時代前期には、生活条件の整わない地点であったと考えられる。

第1トレンチにおいて検出した遺構は、西端の土坑群である(図版第50-(1))。土坑の大半は、トレンチ外になるため正確な法量は計測できないが、土坑1の南北は1.7mを測る。深さは0.2mと深く、上半部は削平を受けている可能性が高い。昭和61年度・平成元年度の調査地でも確認されている。その報文には、灰釉陶器の出土が報じられており、土壙墓と規定されているが、現況から積極的にそれを支持する状況ではない。

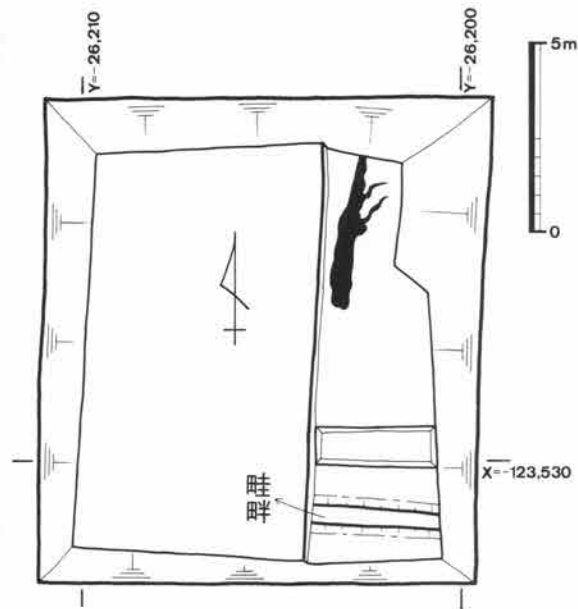
#### ②第2トレンチ(第131・133図、図版第51-(1))

第1トレンチの西方約25mの地点に設定したトレンチである。表土・旧耕作土下に近世堆積層である暗青灰色粘土層が堆積している。第2トレンチでは、古墳時代前期の堆積層は確認できず、近世堆積層であるe層を切る流路を確認した。流路は、その断面観察から2回の比較的急激な流れがあったと考えられる(図版第51-(2))。

トレンチ内では、東西方向の畦畔を一条確認した以外、明確な遺構は検出し得なかった。なお、南北に走る噴砂は、先述した流路の中間層に集中していることが確認できた。

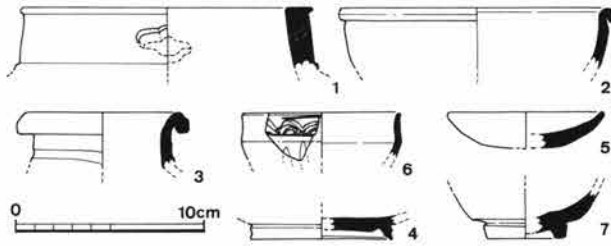
#### (2)出土遺物(第134・135図)

出土遺物の大半は破片資料であり、また、出土状況も良好ではない。ここでは、図化できた個体について記述しておきたい。なお、図化はできなかったが古墳時代前期の包含層から古式土師器片が出土している。

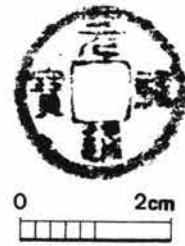


第133図 第2トレンチ測量図(1/200)

黒塗り部分は噴砂を示す。



第134図 出土遺物実測図(1/4)



第135図 銭貨拓影

1は、瓦質土器・火舎である。口径15.4cmを測り、口縁部中央部に透かしをもつ。2は、片口の鉢で、口径14.6cmを測る。3は、中国製白磁・壺で、口径8.1cmを測る。4は、近江系緑釉・杯で、高台径は、6.5cmを測る。5は、土師器・皿で、口径8.2cmを測る。6は、中国製の染付椀で、口径8.3cmを測る。7は、唐津・椀である。第135図の銭貨は、中国北宋銭(元祐通宝)で、直径2.3cmを測る。

#### 4. まとめ

今回の発掘調査では、古墳時代前期の遺物包含層を確認したものの、同時期の竪穴式住居跡などの遺構は検出できなかった。南方の平成元年度の調査では、竪穴式住居跡を7基検出しているが、その一群からは、30mの距離がある。おそらく、平成元年度の調査地で検出された竪穴式住居跡群が集落の北限と考えられる。当該地にまで集落が至らなかった要因としては、地形的な条件が整っていなかったことが考えられる。このことは、第1トレンチで確認した幅3mを測る噴砂群が、古墳時代前期の包含層(L.N.3)を大きく切り込んでいることでも理解できる。一方、噴砂は、従来の見解によれば、慶長元(1596)年の伏見地震の液状化現象に伴うと推測でき、さらに、近世堆積層であるc層内の噴砂は、寛文2(1662)年の近江地震によるものと解釈できよう。今後、周辺地域での良好な堆積状況を把握することによって、噴砂の年代も確定できるであろう。

(小池 寛)

注1 調査参加者(敬称略・順不同)

前田暁宏・正田季美枝・鈴木みかる・牧野みゆき・福丸タエ子・針尾紀代・森川敦子

注2 過去の調査概報は「京都府遺跡調査概報」として刊行されているが、ここでは割愛する。

注3 噴砂については、寒川 旭氏から多くの御教示を受けた。

[付] 木津川河床遺跡の略号は、従前から付された「YKK」を踏襲している。

## 7. 大切遺跡発掘調査概要

### 1. はじめに

大切遺跡<sup>おぎれ</sup>の発掘調査は、京都府土木建築部が計画している防賀川小河川改修事業に伴う事前調査で、京都府綴喜郡田辺町字東・河原・草内・興戸などに所在する。

防賀川は、田辺町を南北に流れる天井川で、上流域の開発が進展することによって生じる水害防止対策や天井川盛り土部分を除去し、河川を中心とする一帯を有効に利用することを目的として、盛り土の除去が計画された。その掘削工事の際、田辺町在住の郷土史研究家によって丹念な表面採集作業が繰り返し行われ、弥生時代後期から古墳時代前期・後期、そして、中近世の遺物が多く採集された。それらの土器群には、比較的大きな破片も含まれており、防賀川周辺に同時期の安定した遺物包含層ないし遺構が存在することが予想された。今回の調査地は、当初、「鍵田遺跡」として呼称し、調査を進めたが、本来の鍵田遺跡とは時期的な違いもあり、字名も異なることから、田辺町教育委員会、京都府教育委員会と協議し、字名を冠して「大切遺跡<sup>(注1)</sup>」と変更した。

田辺町は、防賀川や馬坂川などの天井川が多く見られる地域として注目されているが、天井川が古代条里の成立と深く関連しているとする説や度重なる氾濫によって現況の天井川が形成されたとする説などが論じられている。今回の防賀川盛り土掘り下げ工事に伴う調査は、歴史地理学の分野からも天井川の形成過程を知る機会として注目された。

今回の発掘調査は、平成4年2月3日から同3月7日の間行った。また、調査成果を3月6日の関係者説明会で公表した。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員小池 寛が担当し、同調査員野島 永がこれを補佐した。本概要の執筆・編集は小池が行った。なお、調査を進めるにあたり、田辺町教育委員会・京都府田辺土木事務所をはじめ関係諸機関の協力と調査に参加された多くの方々の援助を得た。また、本概要作成にあたり前田暁宏・中井義雄・松村 茂諸氏の多大なる協力を得た。記して感謝の意を表したい<sup>(注2)</sup>。

なお、調査に係わるすべての経費は、京都府土木建築部が負担された。

### 2. 歴史的環境

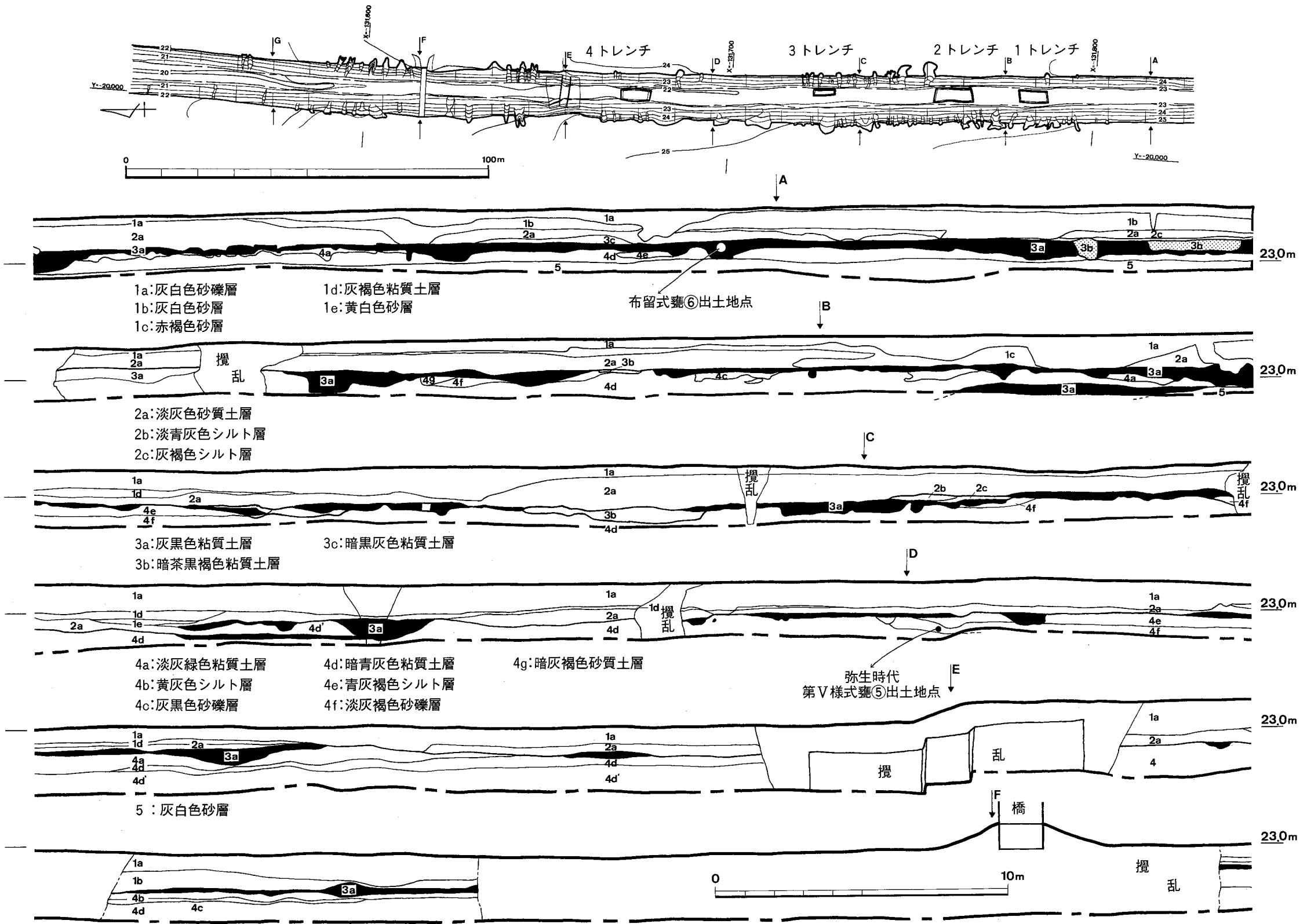
大切遺跡は、今回の掘削工事で新しく発見された遺跡であり、後述するように弥生時代

末期から古墳時代前期にかけての安定した遺物包含層(L.N.3)を確認しており、堆積状況から比較的広い範囲に広がる可能性が考えられる。周辺の弥生時代末期から古墳時代前期に比定できる遺跡としては、当該地から南西方向に所在する興戸遺跡がある。同遺跡では、布留式併行期の土坑などが確認されており、丘陵先端部にまで遺跡の範囲が広がることが推定されている。一方、当該地南東方向には、弥生時代後期の集落が存在する飯岡遺跡が



第136図 調査地位置図(1/25,000)

- |                |                 |              |
|----------------|-----------------|--------------|
| 29.興戸遺跡(弥生～中世) | 35.飯岡車塚古墳(古墳前期) | 77.南垣内遺跡(中世) |
| 78.宮ノ後遺跡       | 81.河原遺跡         | 83.稲葉遺跡      |
| 96.飯岡遺跡(弥生後期)  | 129.伝道林遺跡       | 131.東神屋遺跡    |
| 134.大切遺跡       | 153.五反田遺跡       |              |



図中の土層番号には、「L.N.」を冠していない。

第137図 調査地地形測量図及び東壁断面実測図  
黒塗りは古墳時代前期遺物包含層を示す。



ある。この遺跡は、木津川一帯を見渡せる独立丘陵である飯岡丘陵にあり、対岸との地理的環境から高地性集落と考えられている。また、同丘陵には古墳時代前期に築造された全長90mの前方後円墳である飯岡車塚古墳が所在する。硬玉勾玉・碧玉管玉・車輪石・石釧・碧玉合子などが出土しており、南山城地域における古墳時代前期の動態を考える上で重要である。

大切遺跡周辺には、上記以外の遺跡が所在しているが、範囲や性格などは十分に把握されていないのが現状である。今後、それらの実態が明らかになれば、周辺地域の歴史的環境を復原することが可能になるであろう(第136図)。

### 3. 調査の概要

大切遺跡の発掘調査は、すでに盛り土掘り下げ工事が完了し、新たに改修された河川の河床と東西両傾斜面を対象とした。そのため、土層堆積状況を把握することを主目的とし、河床に合計4か所のトレンチ(総面積約110m<sup>2</sup>)を設定し、東側傾斜面の精査を行った。また、調査対象地は南北約300mと長いため、便宜的に南から1区画40m、総計7区画に分割して遺物の取り上げ・図面作成を行った。

#### (1)基本層序(第137図、図版第52・53・55)

調査地の基本層序は、最上層に近世陶磁器を含む灰白色砂礫層(L.N.1a)・灰白色砂層(L.N.1b)が堆積している。この2層は、Dライン以北では、比較的安定した堆積状況を見せており、60cmの厚みが確認できる。しかし、それ以南では、度重なる氾濫によって堆積状況も一定しておらず、下層の淡灰色砂質土層(L.N.2a)を深く切り込んでいる部分が、A～Bライン間で顕著に見られる。なお、L.N.1bの下層に断続的に堆積する赤褐色砂層(L.N.1c)は、Fe沈着面として認識できており、一定時間の溜水があったものと解釈できる。L.N.2では、基本的に遺物は出土していないが、上面には淡灰色砂質土層(L.N.2a)が堆積し、下層には、灰褐色系シルト(L.N.2b.2c)が堆積している。これらの層は、近世か近世以前の氾濫による堆積と考えられる。

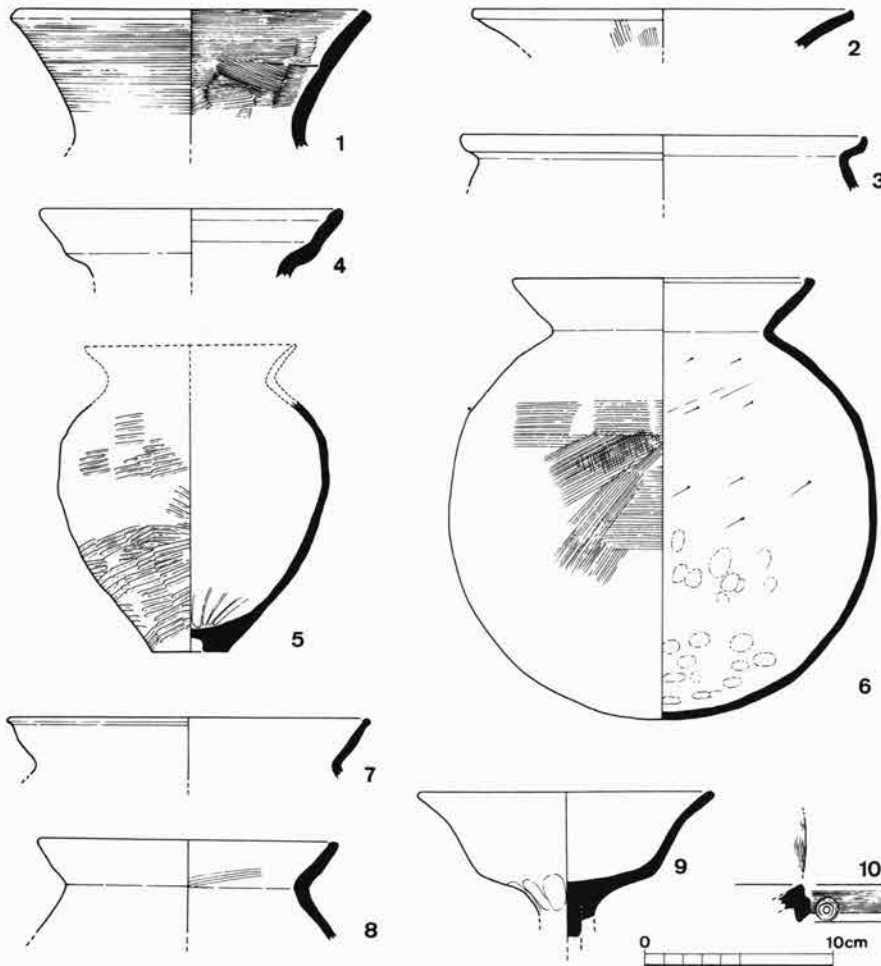
灰黒色粘質土層(L.N.3a)・暗黒褐色粘質土層(L.N.3b)・暗黒灰色粘質土層(L.N.3c)は、古墳時代前期の包含層であり、Cライン以南では安定した状況を呈している。また、最も安定した部分では、60cmの厚みがみられ、上面は均一に平坦である。一方、Cライン以北では、堆積層自体は不均一ないし断続的となり、D～Eライン中間地点やFラインから南10m地点では、溝状落ち込みが確認できる。層内からは、土師器の破片が出土しており、Aライン付近では、布留式甕がほぼ完形に近い状態で出土している(図版第54-(1))。

また、Bラインから10m南方及びEラインから南方15地点では、L.N.3が中間層を挟ん

で上下2層に堆積している。この2層は、土質や色調から同じ時期の包含層として捉えうるが、若干の時期差を考慮する必要がある。古墳時代前期の遺物包含層の下層には、粘質土層・シルト層・砂礫層(L.N.4)が互層に堆積している。Dラインでは、淡灰褐色砂礫層(L.N.4f)内から弥生時代畿内第V様式の甕の体部下半部が出土している(図版第54-(2))。

(2)遺構

断面精査が調査の中心であったため、確認したL.N.3の落ち込みの性格を規定するだけの根拠を欠くが、遺物の出土状況と土器自体の残存率のよさから投棄された可能性が指摘でき、溝ないし土坑の可能性が高い。また、同様な落ち込みが小規模ながら確認できており、溝や土坑が多く存在すると推測される。なお、比較的規模の大きい落ち込みとしては、Fラインから南方に20m・Eラインから南方に25m・Cラインから南方に20mの地点で確



第138図 出土遺物実測図(1/4)

認できており、深さは80cm前後を測る。その他、ピットや杭痕などが出土しているが、明確な時期設定をできないのが現状である。

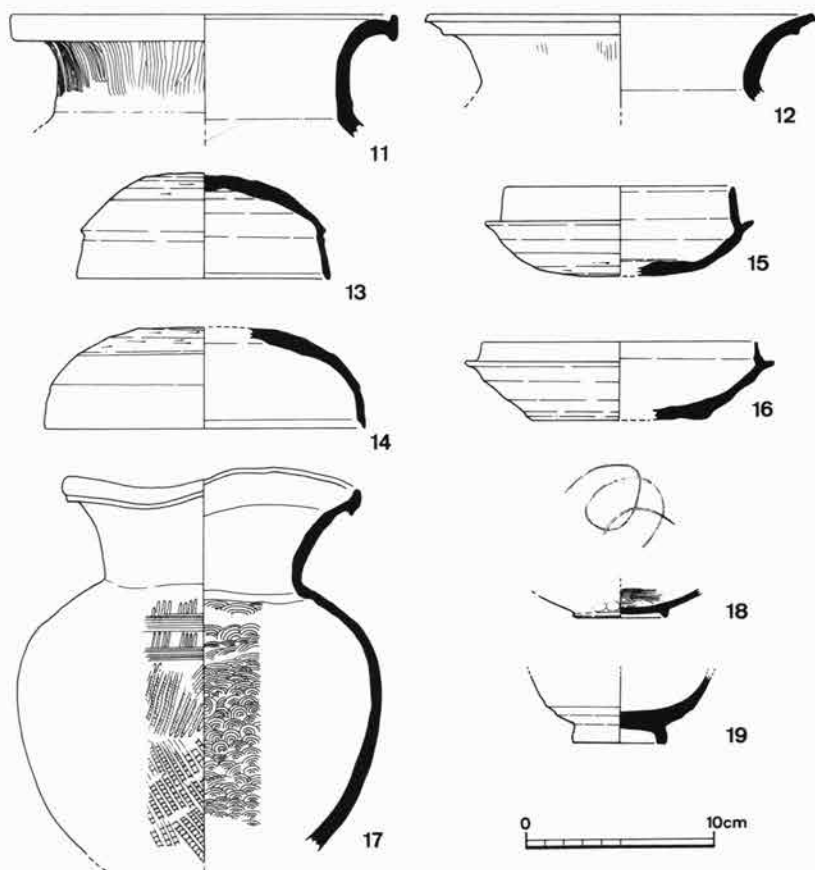
(3)出土遺物(図版第56)

出土遺物の多くは破片資料であるが、L.N.3から出土した土器群について概観しておきたい。また、盛り土掘削工事中に表面採集された土器群と調査地内で採集した土器群、そして、天井川盛り土最上位で採集した土器についても概観しておく。

[調査地内出土・表面採集資料] (第138図・第139図18・19)

弥生土器 甕5は、L.N.4から出土した。肩部から上半部を欠くが、体部外面には、右上がりのタタキ目が観察でき、底部内面には板状工具の圧痕が放射状に残る。底部外面は、輪台状を呈している。諸特徴から弥生時代畿内第V様式でも後半期に比定できる。

土師器 甕2は、口縁部のみであるが、胎土がチョコレートブラウンを呈しており、生駒西麓から搬入された土器である。なお、破片資料に同様な胎土をもつ土器片が見られる。



第139図 表面採集資料実測図(1/4)

11~17.念仏寺付近 18.調査地内 19.防賀川天井部最上付近

土師器 壺10は、細片のため口径は不明であるが、外面を板状工具で調整した後、円形浮文を貼り付け、上面には波状文を施している。庄内式併行期に比定できる。

土師器 甕6は、口径16cm・頸径11.7cm・器高23.4cm・体部最大径22.6cmを測る。体部は球体を呈しており、端部が肥厚する口縁部をもつ。体部外面は、細かいハケによって調整しており、内面上半部はヘラ削り、下半部には指頭圧痕が顕著に残存している。

土師器 高杯9は、杯底部から斜め上方にのび、外反する口縁部をもつ。脚部外面には指頭圧痕が残存する。

瓦器 椀18は、見込みに輪花状の暗文を施し、断面三角形の貼り付け高台が付く。

[松村氏採集資料] (第139図11~17)

天井川盛り土掘削時に郷土史研究者である松村 茂氏によって採集された資料である。

弥生土器 壺11は、口縁端部が上方・下方に肥厚し、頸部外面を縦方向のハケによって調整する。口径は20.5cmを測る。弥生時代後期に比定できる。

須恵器 甕12は、口径20.2cmを測る。頸部で外反し、口縁端部に面をもつ。口縁部外面には、貼り付けた稜が顕著に残る。

須恵器 杯蓋13は、丸い天井部をもち、天井部と口縁部を分ける稜は比較的明瞭である。口径13.3cmを測る。14は、内傾する口縁部をもち、口径16.8cmを測る。

須恵器 杯身15は、ほぼ垂直に立ち上がり内傾する口縁部をもつ。口径12cmである。16は、短い立ち上がりをもち、口径14.6cmを測る。

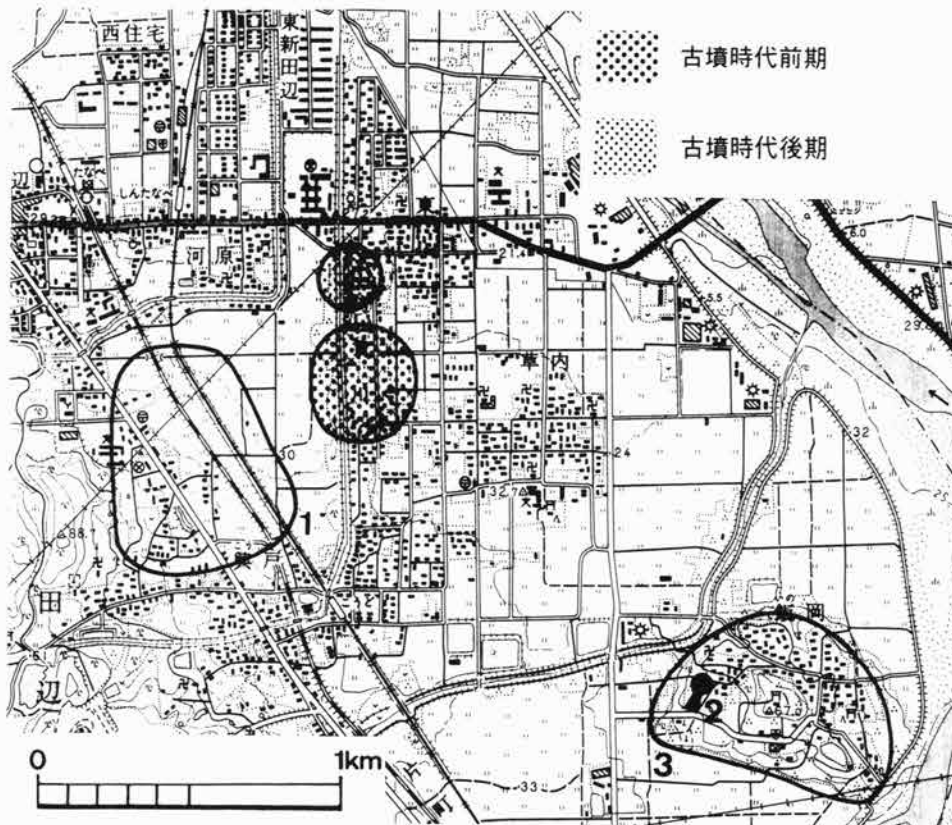
唐津 椀19は、上半部を欠くが、断面四角形の高台が付く。17世紀後半に比定できる。

#### 4. ま と め

大切遺跡の発掘調査は、新たに改修された河川の傾斜面を精査し、土層の堆積状況を把握することを主目的とした。その結果、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての遺物包含層が、比較的広い範囲に広がっていることを知り得た。その包含層は、南方に厚く堆積する傾向があり、徐々に薄くなるもののDライン地点までは、連続して堆積していることを確認した。また、Dライン以北では、断続的ながら堆積していることを確認しており、溝状の落ち込みを数か所で観察している。このことは、集落の中心が調査地南方に存在することを示唆しており、希薄ながら遺構が北方にまで広がることを示している。その範囲については、調査地内全域から南方に広がることが予想され、南北400m×東西400m以上を想定できる。出土遺物の多くは、布留式併行期の古相を呈しており、集落の成立時期を設定する根拠ともなる。出土土器の中には、河内産の土器が混入しており、木津川を介在にした地域間交流を考慮する上で重要な類例である。

一方、改修整備事業が完了した念仏寺付近で採集された古墳時代後期の土器群は、13・15が陶邑編年MT15に比定でき、14・16はTK10ないしTK43に比定できる。これらの土器群は、表面採集ではあるが残存率が高いことから、土坑などの遺構に伴う可能性が高い。今回の発掘調査地区では、同時期の土器群は出土していないことから、念仏寺周辺に古墳時代後期、調査地以南に古墳時代前期の遺構群が存在することが考えられる(第140図)。

このような状況で、今回検出した古墳時代前期の集落を南山城地域の中で一定の解釈を行っておきたい。南山城地域で前期古墳が集中する地域としては、西山古墳群・尼塚古墳群・梅の子塚古墳群・上大谷古墳群が所在する城陽市北部地区、石不動古墳・茶臼山古墳・西車塚古墳・東車塚古墳が所在する八幡市北部地区、瓦谷古墳などが所在する木津町南部地区、椿井大塚山古墳・平尾城山古墳が所在する山城町南西部地区、飯岡車塚古墳が所在する田辺町飯岡地区をあげることができる。城陽市北部地区には、塚本遺跡周辺に開けた可耕地が広がっており、安定した農業生産を基盤に成立した集落が展開されている。それに隣接する丘陵に前期古墳が築造される事実は、在地勢力の自立的発展を示唆してい



第140図 古墳時代遺物包含層範囲推定図(1/25,000)

1.興戸遺跡 2.飯岡車塚古墳 3.飯岡遺跡

る。これと同じような条件をもつ地区として八幡市北部地区・木津町南部地区がある。

大切遺跡が所在する田辺町北東地区には、前期の前方後円墳である飯岡車塚古墳が飯岡丘陵に築造されているが、それが成立した基盤こそが、大切遺跡周辺に広がる可耕地による豊富な農業生産であり、大切遺跡は、それを形成せしめた一集落と規定できる。今後、周辺の調査が進展し、集落の範囲や時期設定が進むことに期待したい。

一方、天井川である防賀川がどのような過程を経て、現況のような状態になったのかについては、今後の調査課題であるが、氾濫によって堆積したL.N.1から近世遺物が出土し、盛り土最上部付近で17世紀後半の唐津椀19が出土していることは、防賀川が、奈良時代に設定される条里の影響を受けて、南北方向に改修されたとするよりは、現況の天井川が形成される以前の氾濫がベースとなり、近世段階に河川改修が行われ、以後、現況のような天井川になったとする説を、消極的ではあるが、支持しておきたい。今後、天井川盛り土の断面が観察できれば、多くの問題を解く根拠が提示できると考えられる。<sup>(注3)</sup>

(小池 寛)

注1 平成4年3月6日に行った関係者説明会資料及び、同日の記者発表では「鍵田遺跡」と呼称したが、本書をもって「大切遺跡」と変更する。

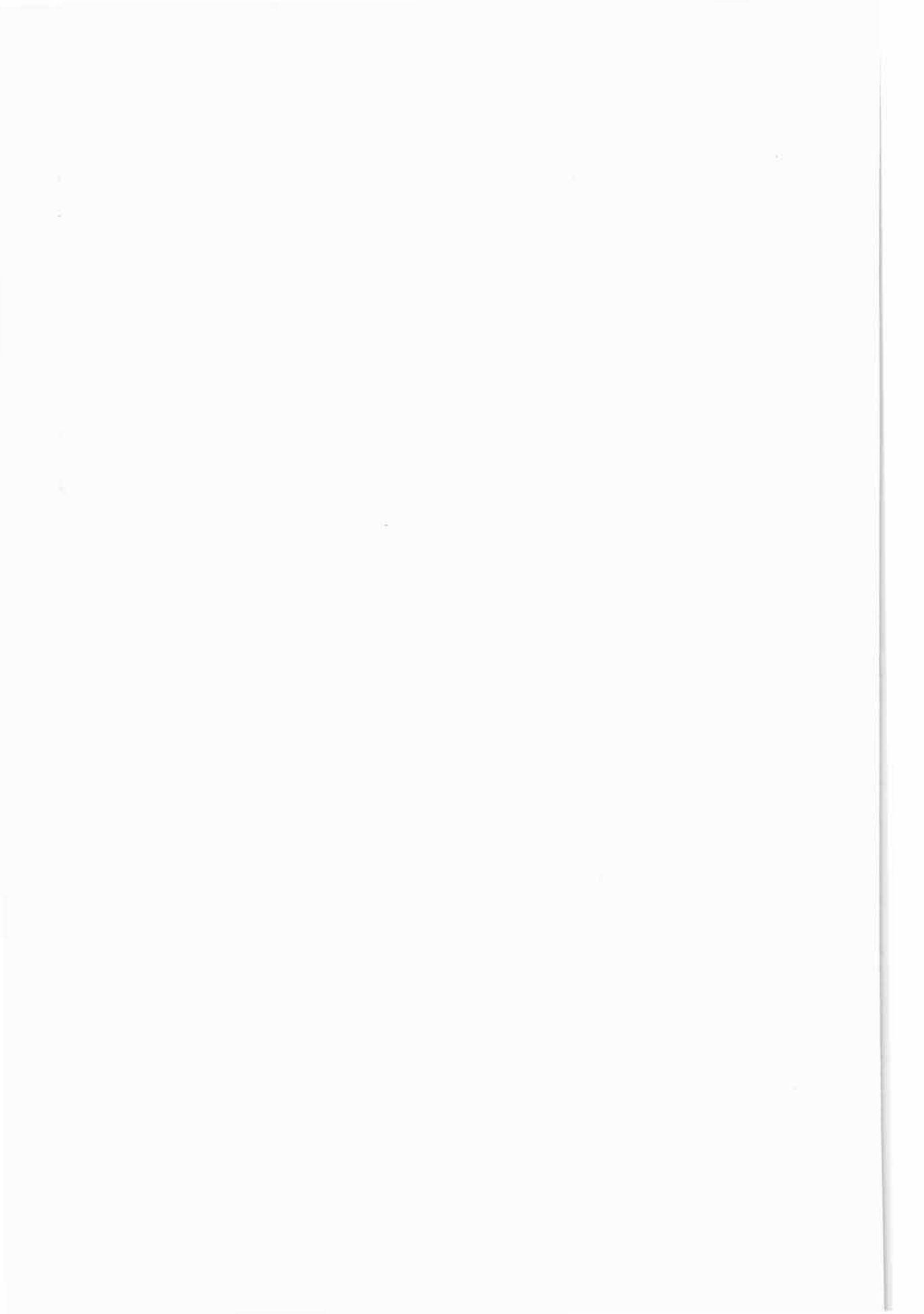
注2 調査参加者(敬称略・順不同)

前田暁宏・波部 建・角南聡一郎・後藤昌子・橋本 稔・照沼修美・松崎才枝

注3 天井川の成立については、山口大学名誉教授小野忠熙先生の有益なご教示があった。記して感謝いたしたい。

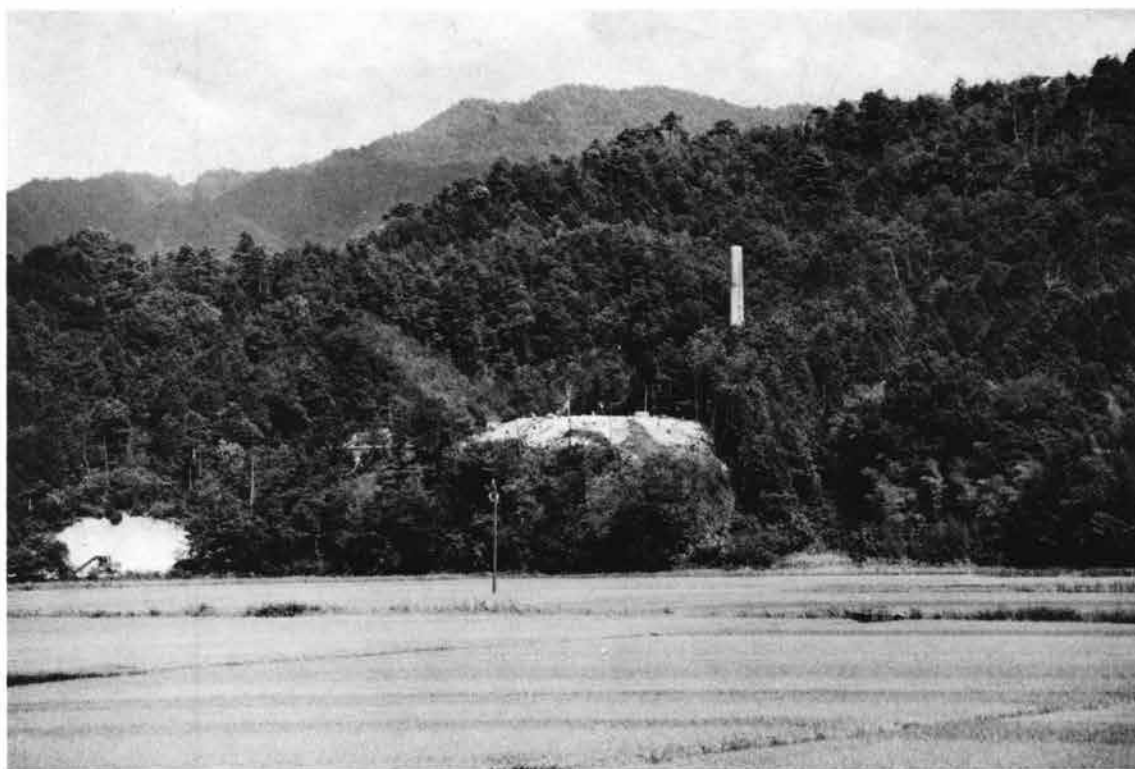
[付] 大切遺跡の略号は、当初、鍵田遺跡として調査を進めたため、「TTK」の略号を付した。

圖 版





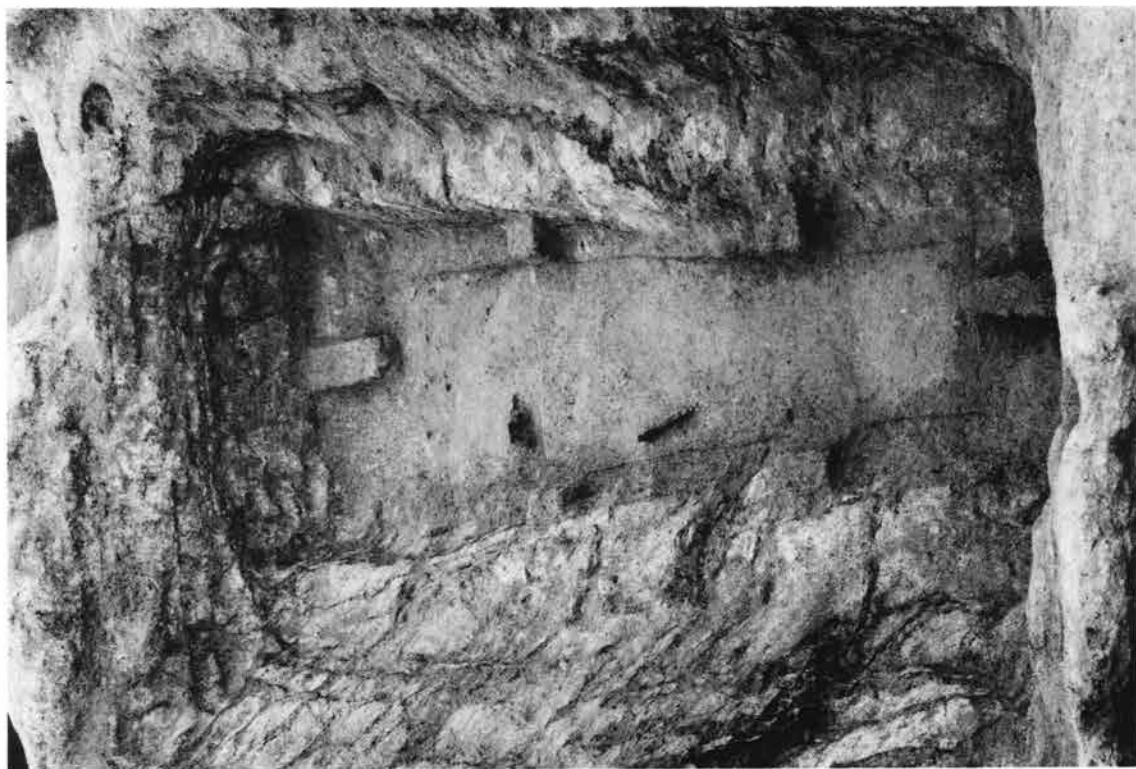
図版第1 内和田古墳群



(1) 内和田古墳群遠景（西から）



(2) 内和田5号墳全景（南から）



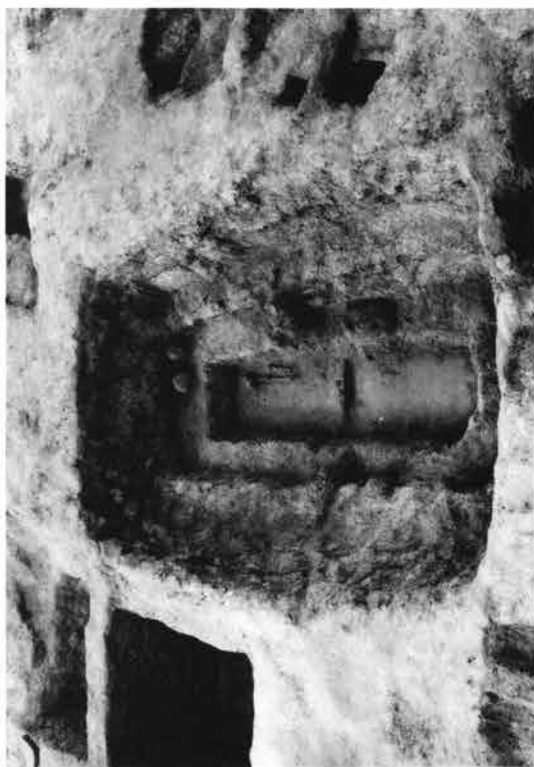
(1) 5号墳SX01全景(東から)



(2) 5号墳SX01墓壇上面土器出土状況



(3) 同 器台出土状況



(1) 5号墳SX02全景(南から)



(2) 同 木棺内遺物出土状況



(3) 5号墳SX03全景(南から)



(4) 同 基壇上面土器出土状況



(1) 5号墳SX04全景(東から)



(2) 5号墳SX05・06全景(東から)



(3) 5号墳西半部の状況(南から)



(4) 5号墳SX09・10全景(北から)



(1) 5号墳SX11全景(東から)



(2) 5号墳SX12全景(東から)



(3) 5号墳SX13全景(西から)



(4) 5号墳SX14全景(東から)



(1) 5号墳SX15全景(南から)



(2) 5号墳SX16全景(東から)



(3) 5号墳SX17・18全景(南西から)



(4) 5号墳南裾部の状況(東から)



(1) 4号墳調査前全景 (東から)



(2) 4号墳調査後全景 (北から)



(3) 4号墳主体部全景 (西から)

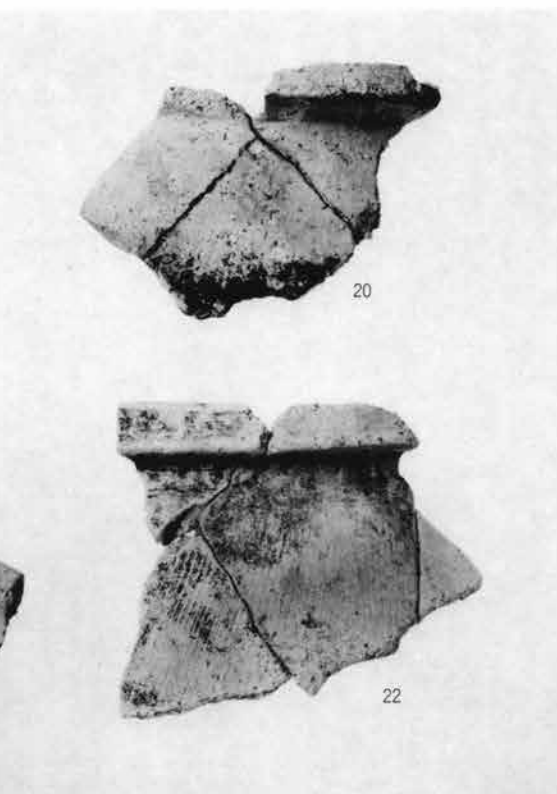
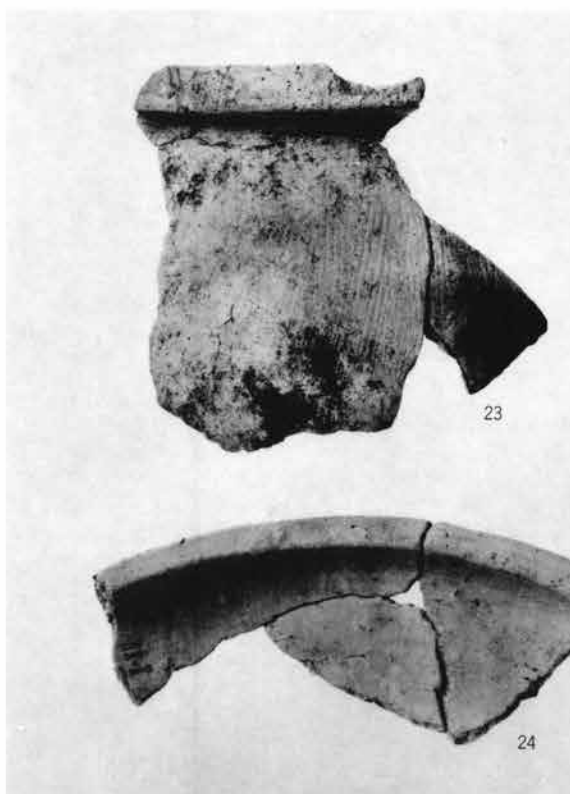


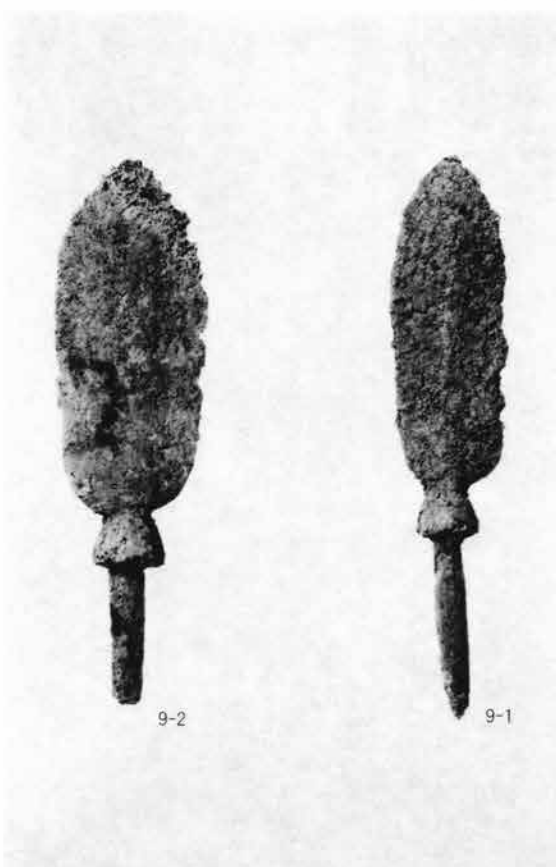
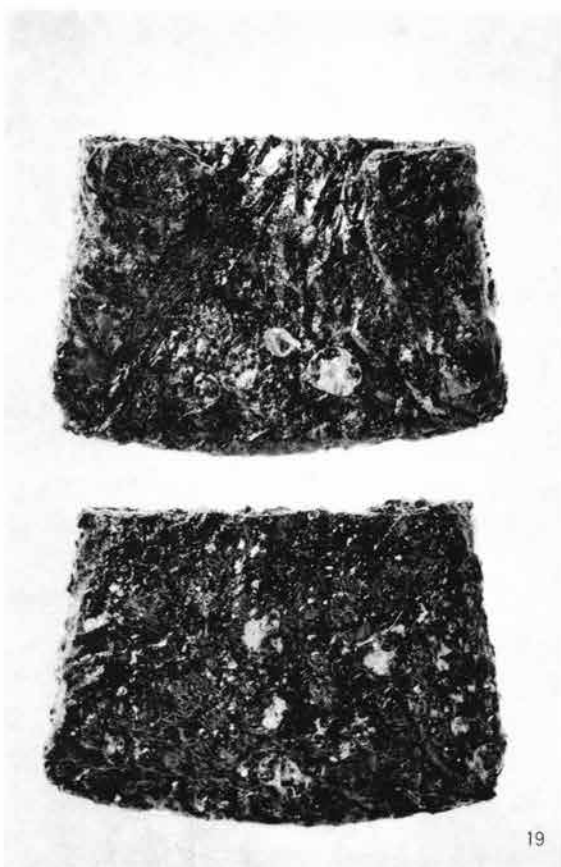
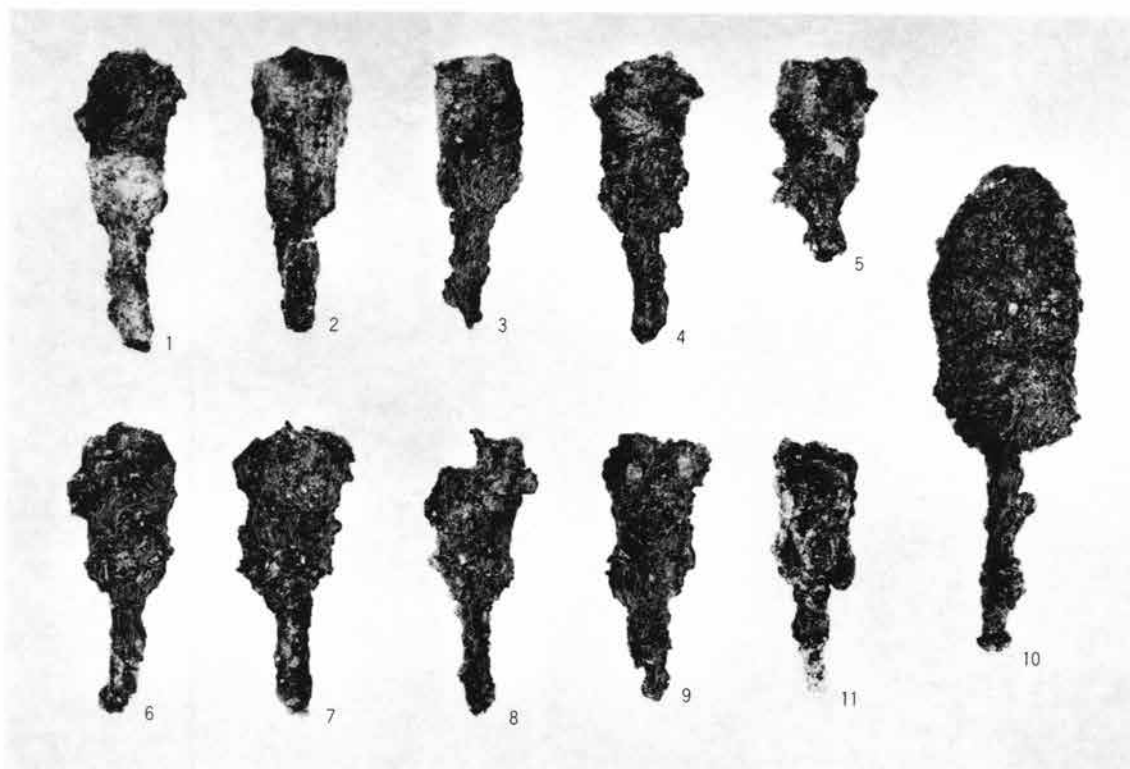
(4) 2号墳トレンチ全景 (南から)



出土遺物1)土器 (番号は実測図番号に対応する)











(1) A-1トレンチ全景(南から)



(2) A-2トレンチ全景(東から)



(3) A地区古墳全景(北東から)



(4) A地区古墳遺物出土状況(東から)



(1) B-1トレンチ全景(南から)



(2) B-3トレンチ全景(北から)



(3) Cトレンチ全景(南から)



(4) Dトレンチ全景(東から)



(1) A地区全景 (北東から)



(2) A地区 (北東から)



(1) A地区 (北東から)



(2) D地区北西半全景

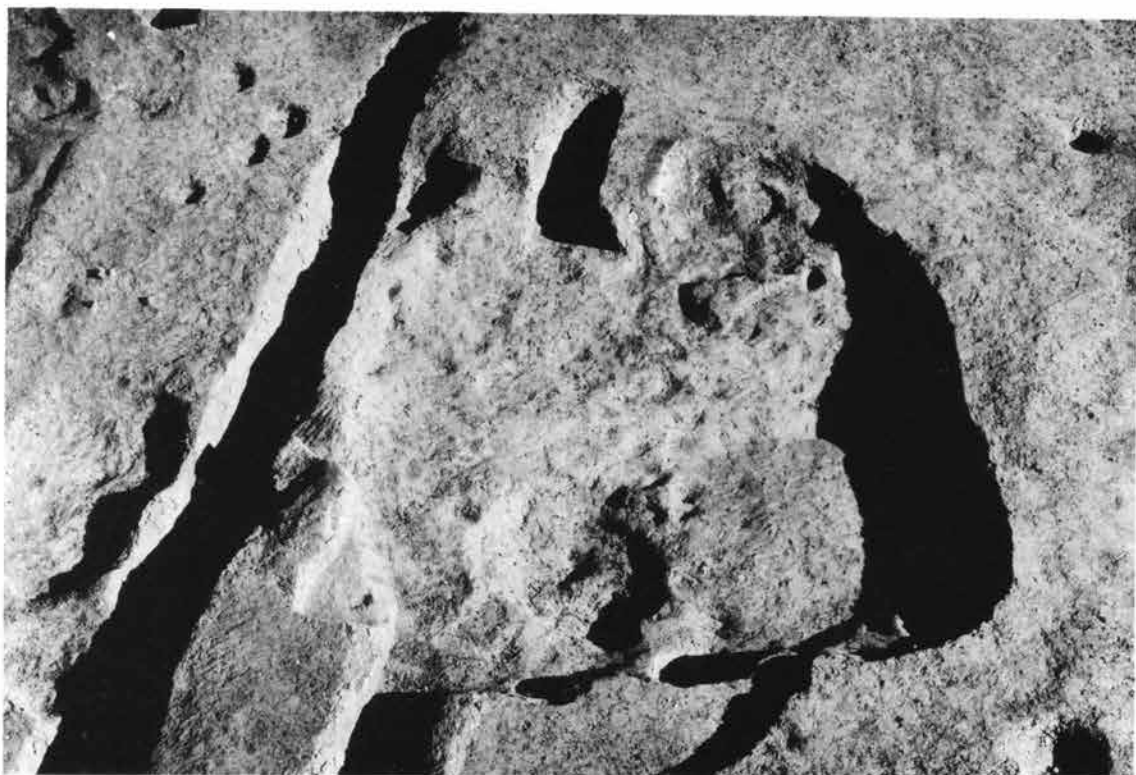


(1) D地区南東半全景 (南西から)



(2) B・E地区北西半全景





(1) 竪穴式住居跡1全景 (西から)



(2) 竪穴式住居跡3全景 (北西から)



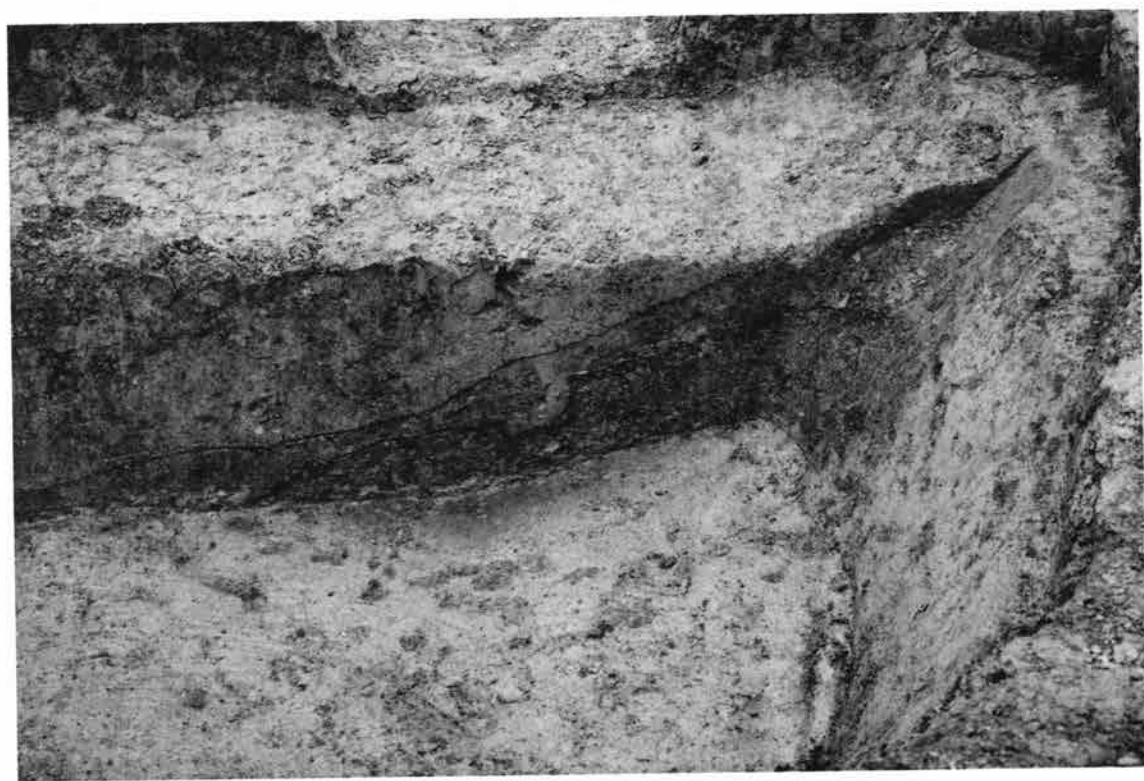
(1) 竪穴式住居跡5全景（西から）



(2) 竪穴式住居跡7全景（北東から）



(1) 竪穴式住居跡9・10全景（南西から）



(2) 竪穴式住居跡竈断面（東から）



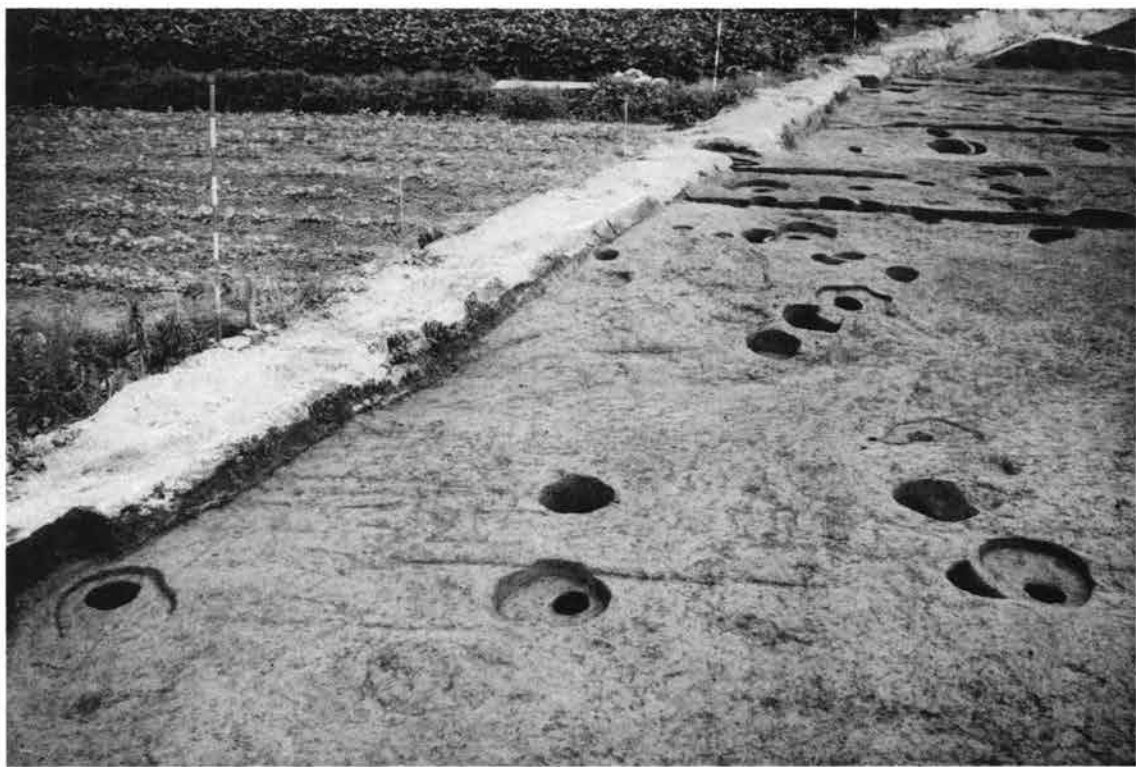
(1) 掘立柱建物跡1全景（南から）



(2) 掘立柱建物跡8全景（北から）



(1) 掘立柱建物跡9・10 (南東から)



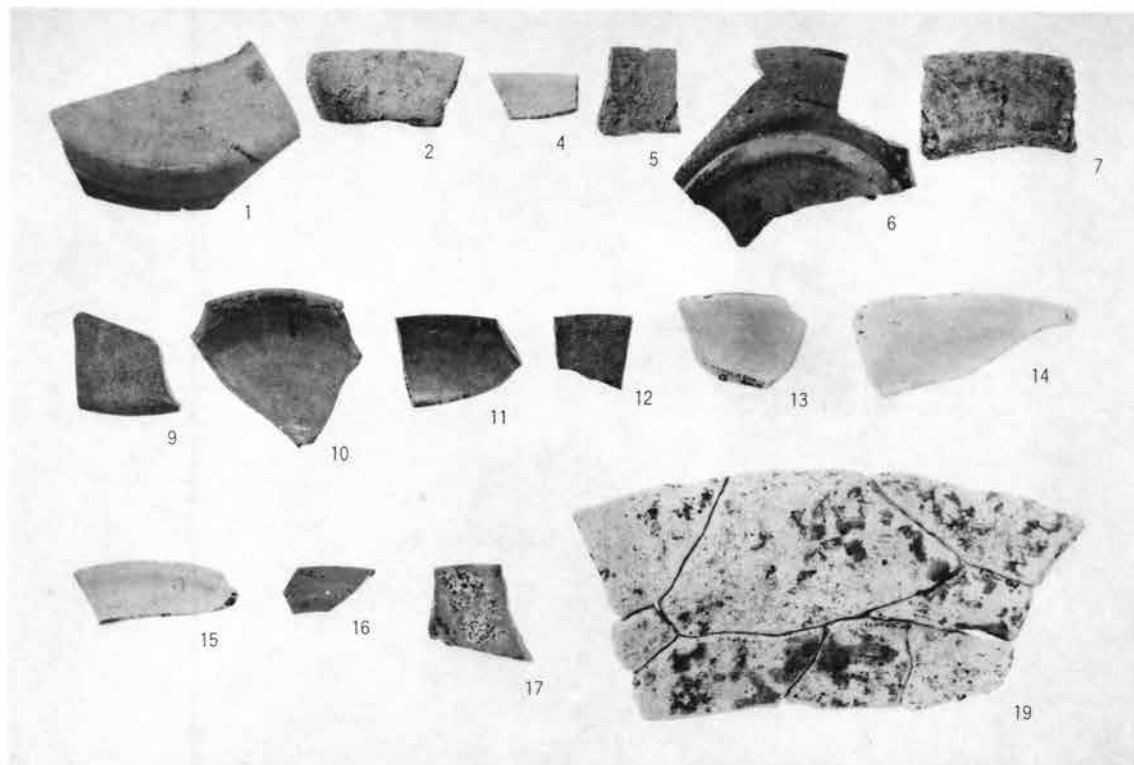
(2) 掘立柱建物跡13 (北から)



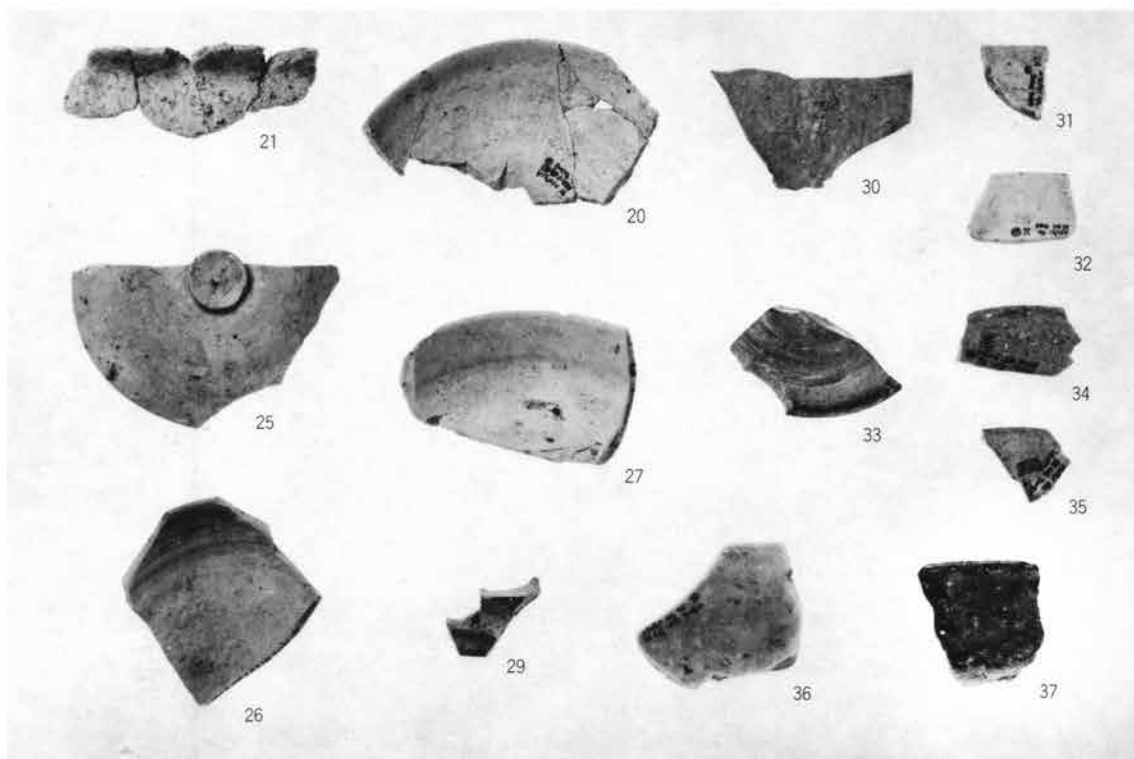
(1) 掘立柱建物跡15 (北から)



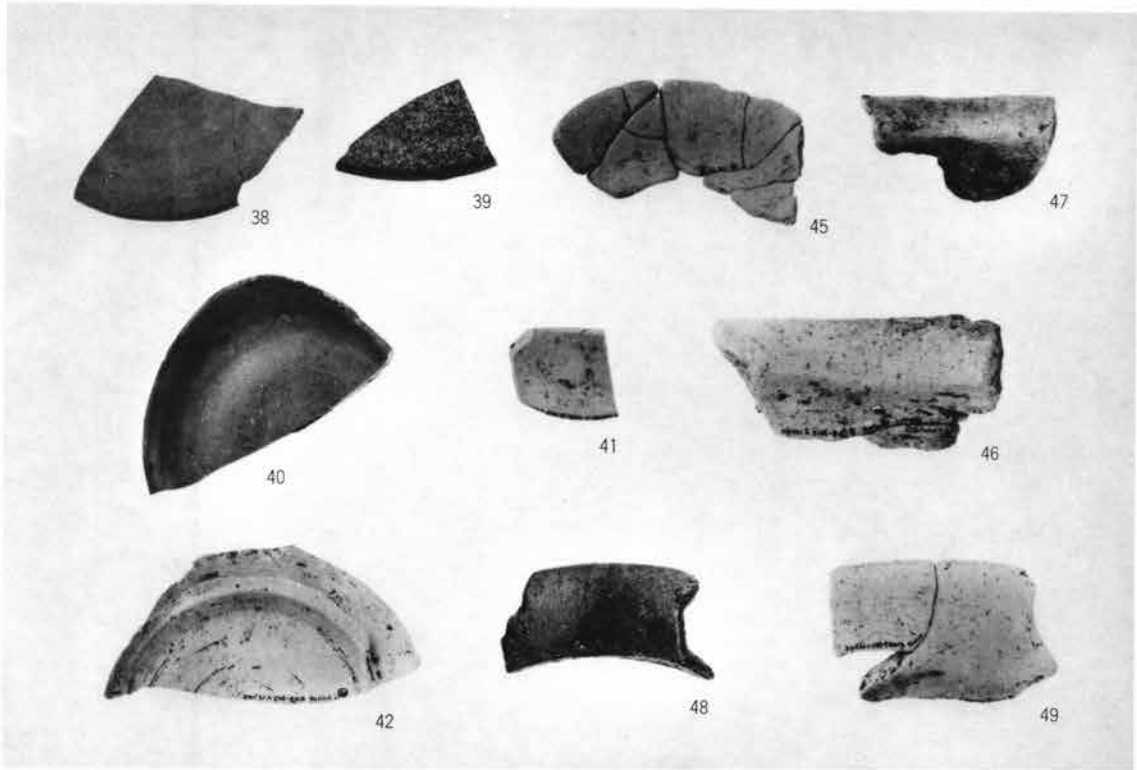
(2) 土坑6遺物出土状況 (南西から)



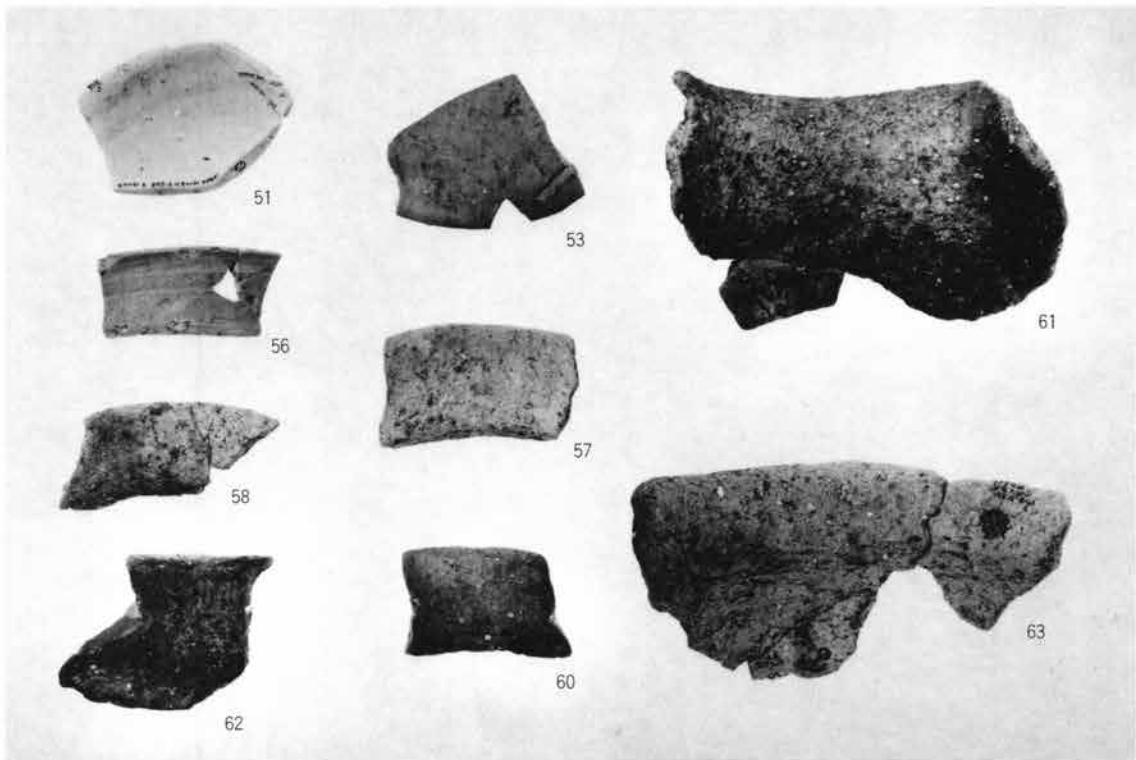
(1) 竪穴式住居跡1～3出土遺物(番号は実測図と一致)



(2) 竪穴式住居跡4～6出土遺物(番号は実測図と一致)

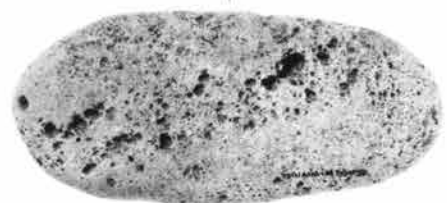


(1) 竪穴式住居跡7出土遺物 (番号は実測図と一致)



(2) 竪穴式住居跡10出土遺物 (番号は実測図と一致)





3



59



43



50



52



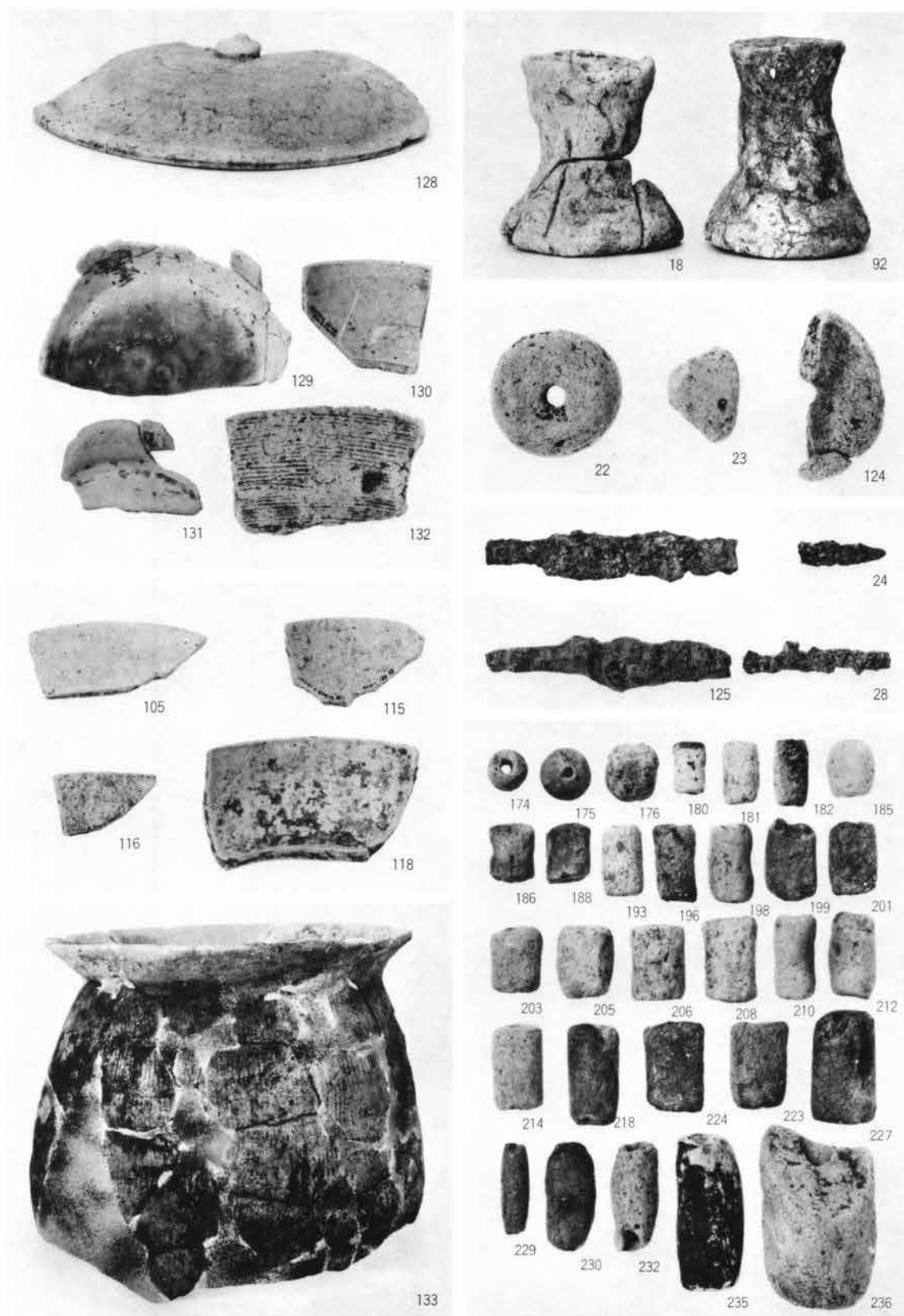
54



65



90



出土遺物(2) (128~132: 掘立7 105・115・116・118; 掘立1 133; 掘立10 18; 竪穴3 92; 土坑6 22~24; 竪穴4 28; 竪穴5)



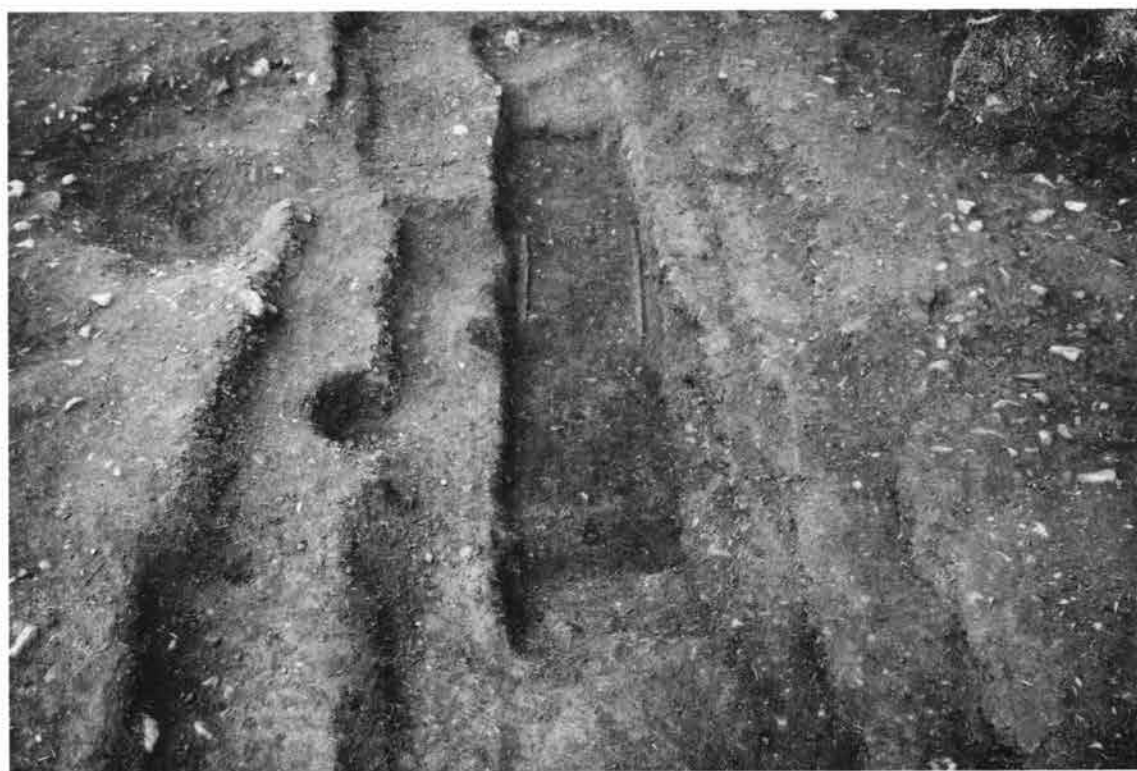
(1) 調査地遠景（北東から）



(2) 調査前全景（北から）



(1) 調査地全景（北から）



(2) 埋葬主体部完掘状況（北西から）



(1) 埋葬主体部，土師器・須恵器検出状況（東南から）



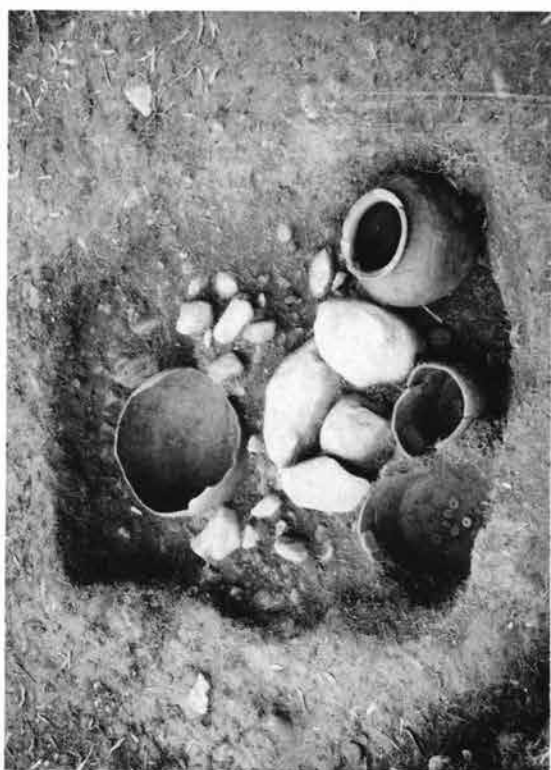
(2) 弥生時代SX9107完掘状況（北から）



(1) 中世墓検出状況 (東から)



(2) 中世墓検出状況 (最上位礫群除去後, 東から)



(3) 中世墓遺物出土状況 (東から)



(4) 中世墓蔵骨器内古銭出土状況



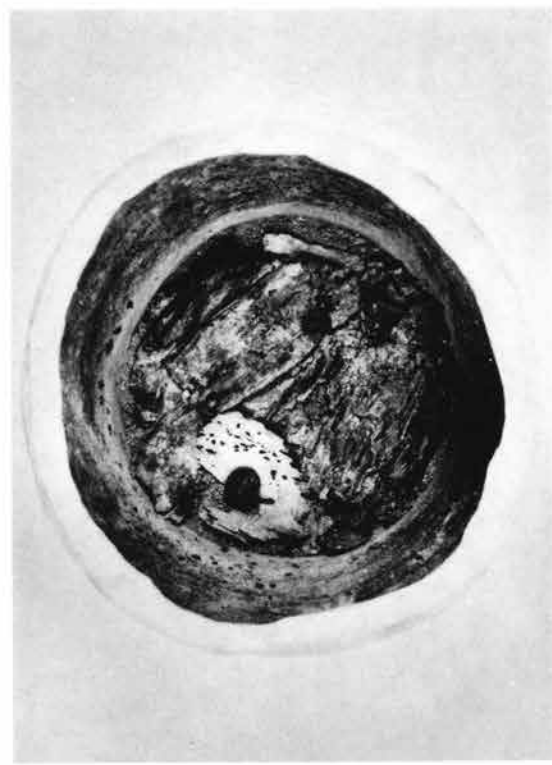
(1) 経塚群・土坑充填礫検出状況 (北から)



(2) 経塚1 経筒検出状況 (南から)



(3) 経塚1 底部遺物出土状況 (南から)



(4) 経筒21竹製経筒遺存状況



(1) 経筒23竹製経筒遺存状況



(2) 経筒23竹製経筒遺存状況

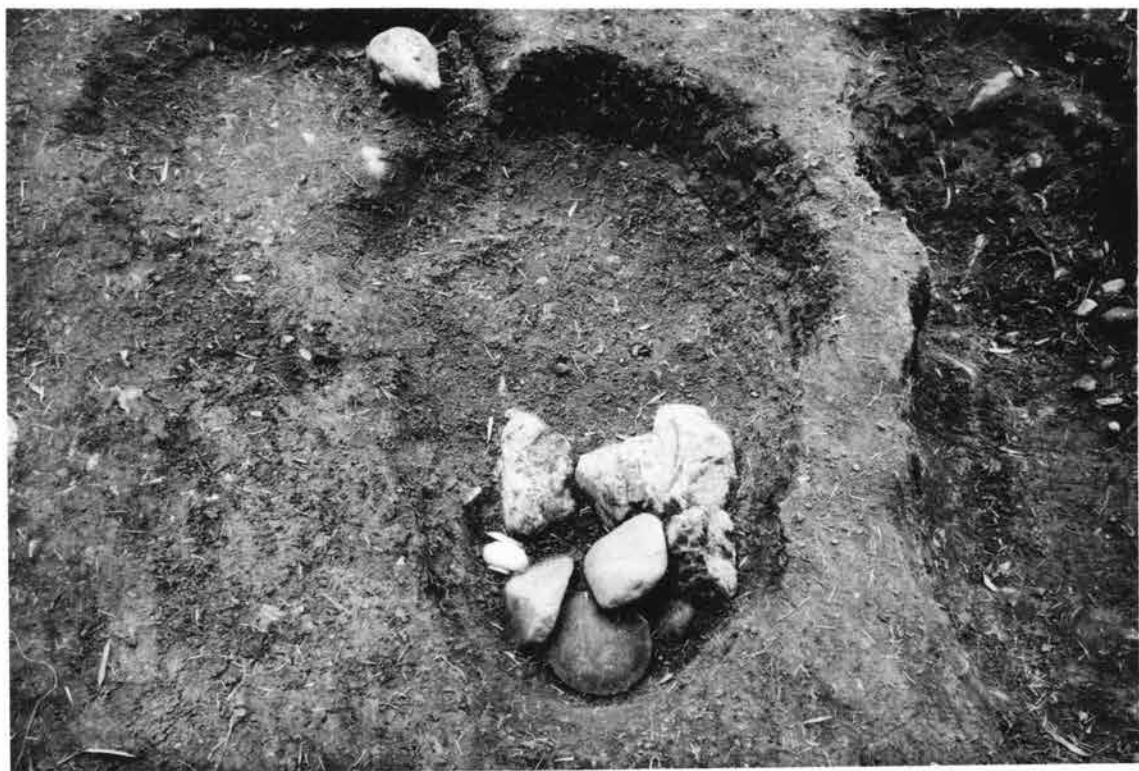


(3) 経筒23竹製経筒木製蓋



(4) 経筒23竹製経筒漆被膜





(1) 経塚2 遺物出土状況 (南から)



(2) 経塚2 瓦質経筒出土状況 (北から)



1



2



3



4・7



8



12



11



10



9



26



27



28  
29



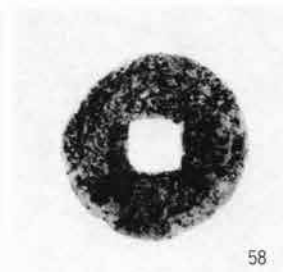
30  
31



33  
34



35  
36





(1) 調査前全景（西から）



(2) 石室全景—第2次床面検出時—（南から）



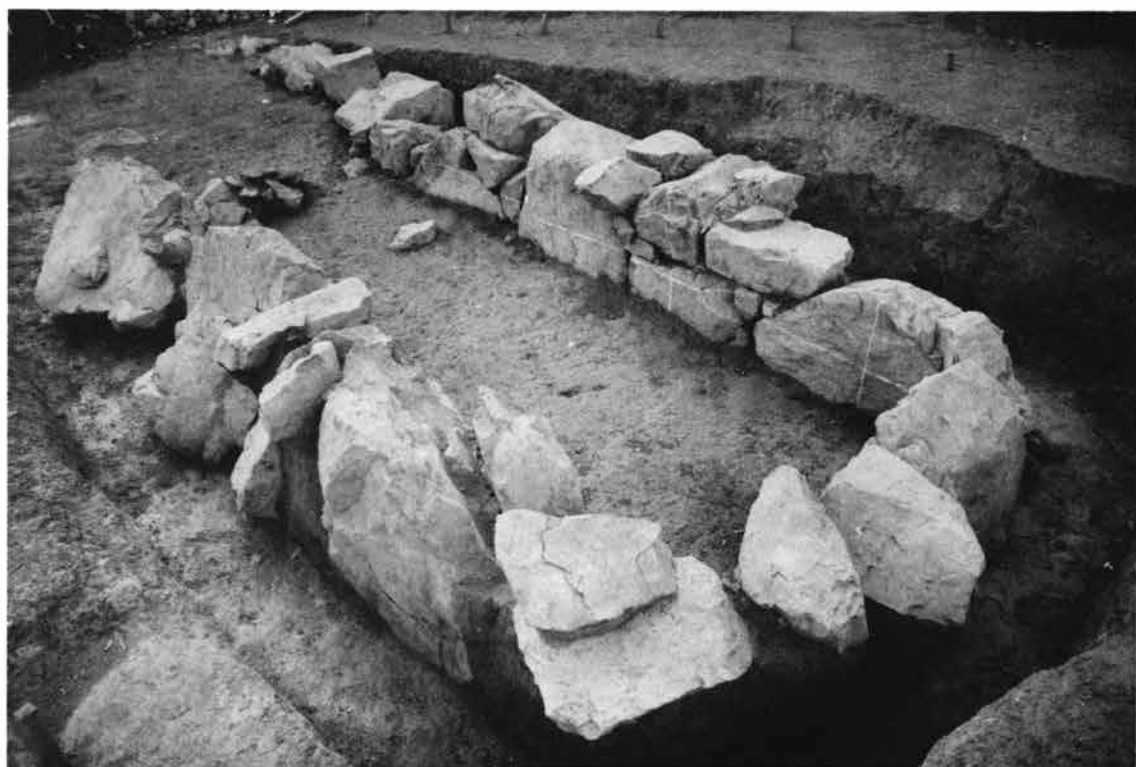
(1) 第1次床面遺物出土状況(南から)



(2) 第2次床面遺物出土状況(南から)



(1) 遺物出土状況（中央列石左：第2次床面，右：第1次床面：西から）



(2) 石室完掘状況（北東から）



4



20



6



2



10



13



11



14

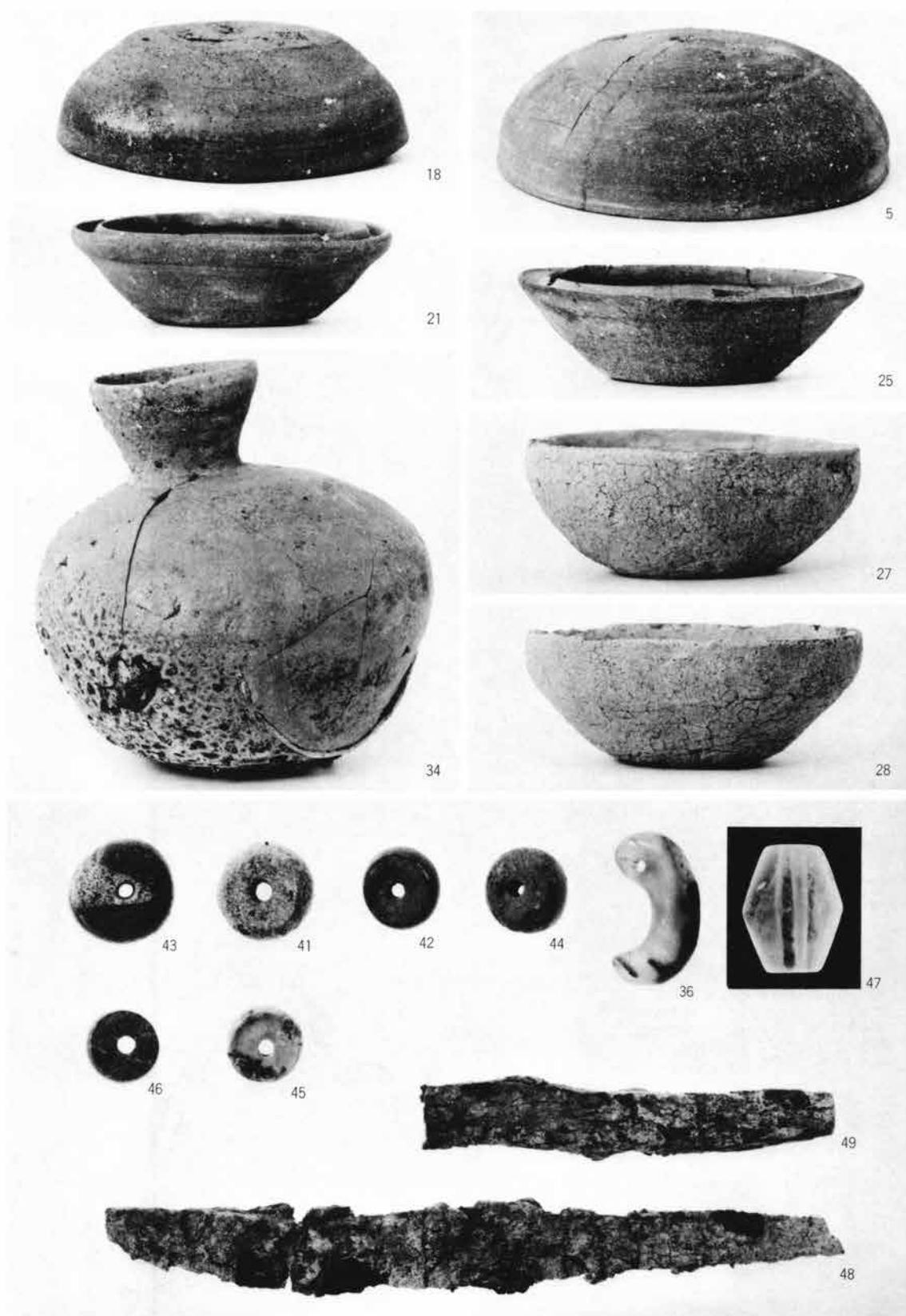


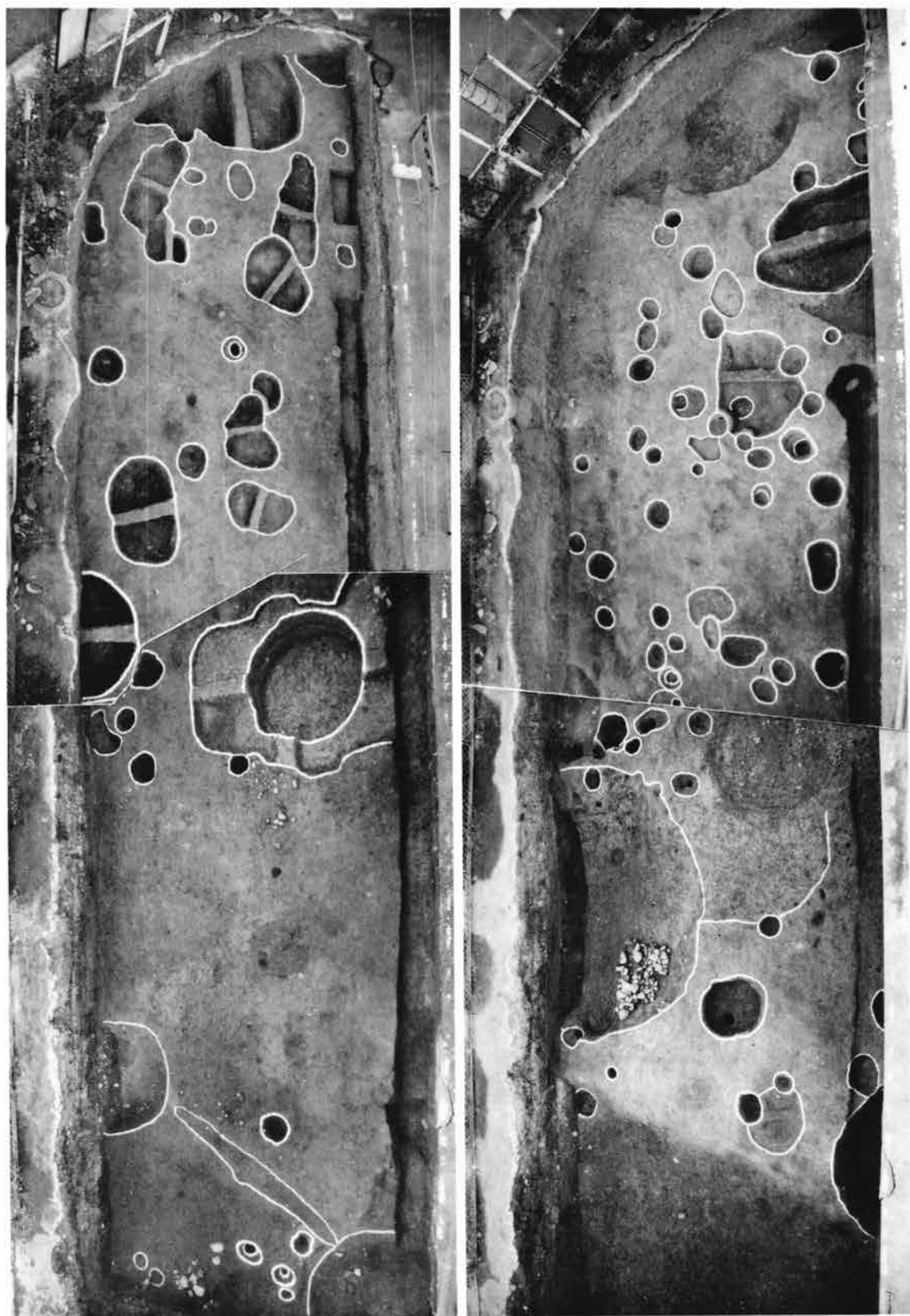
17



15

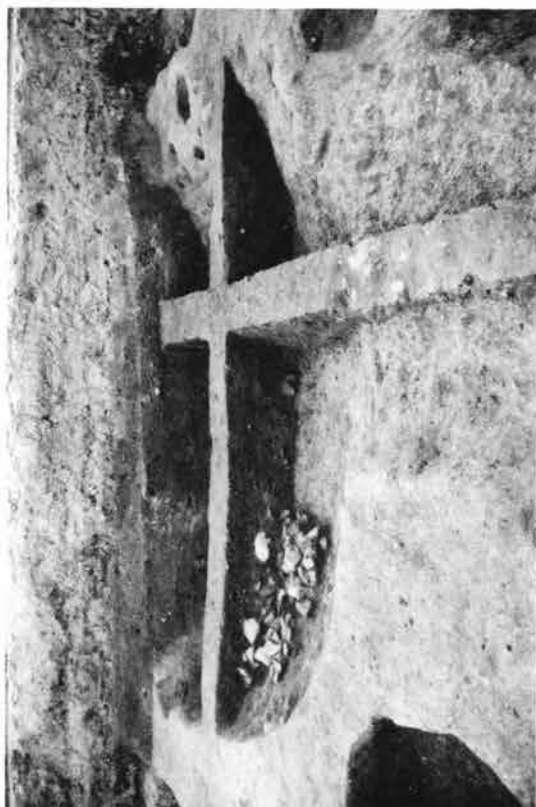






(1) 第1トレンチ上層遺構

(2) 第1トレンチ下層遺構(1)



(1) 土坑SK381120・381119 (東から)



(2) 土坑SK381120遺物出土状況



(3) 溝SD381102・381103 (南西から)



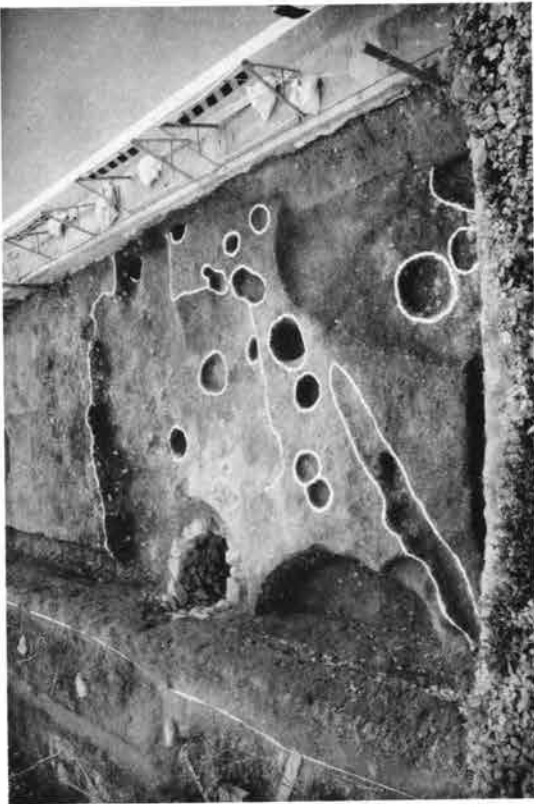
(4) 溝SD381103埋没状況 (東から)



(1) 第2トレンチ上層遺構 (北から)



(2) 第2トレンチ中層遺構 (北から)



(3) 第2トレンチ下層遺構 (北から)



(4) 溝S381205遺物出土状況 (東から)



(1) 第2トレンチ南部検出遺構



(2) 土坑SK381214 (西から)



(3) 土坑SK381217遺物出土状況



(4) 第3トレンチ全景 (南から)



(5) 第4トレンチ北部全景 (南から)



(6) 第4トレンチ北壁 (南から)



第113図1



第113図4



第113図2



第113図5



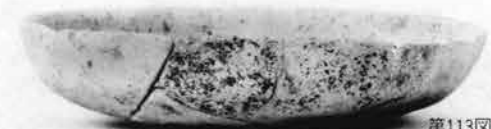
第113図38



第113図17



第113図34



第113図28



第113図29



第113図44



第116図64



第115図60



第115図62



第114図52

図版第47 長岡京跡右京第381次



溝 S D 381205出土遺物





(1) 調査地遠景 (石清水八幡宮付近から)



(2) 第1トレンチ遠景 (西から)

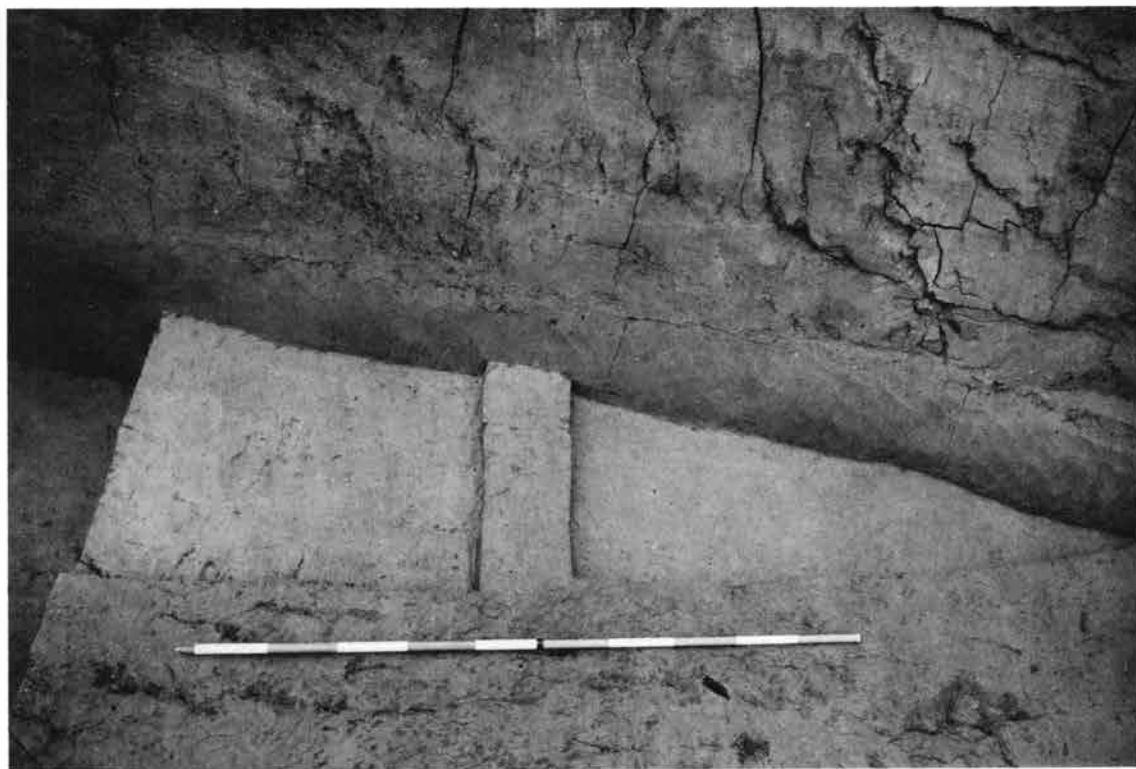




(1) 第1トレンチ全景（東西部分：東から）



(2) 第1トレンチ全景（南北部分：南から）



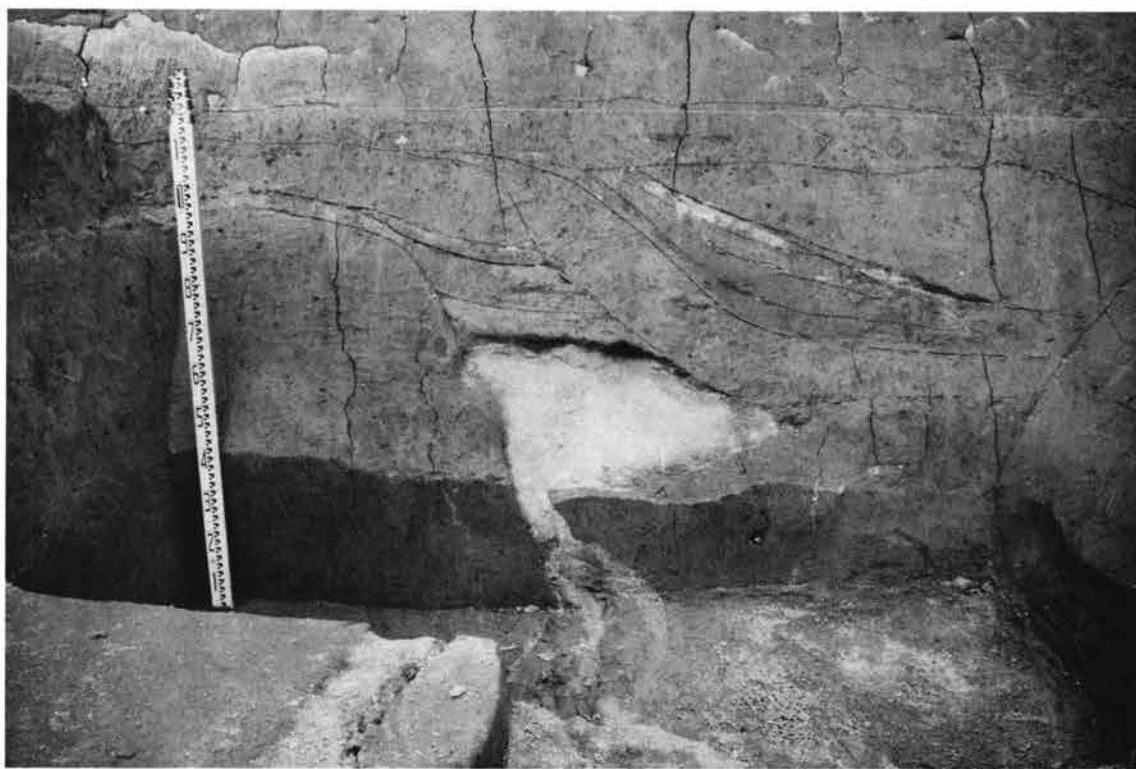
(1) 土坑群完掘状況（東から）



(2) 噴砂3検出状況（西から）



(1) 第2トレンチ全景 (南から)



(2) 噴砂・流路断面観察 (南から)



(1) 調査地全景（中央奥が防賀川天井部盛り土：北から）



(2) 調査地全景（防賀川天井部盛り土から）



(1) 古墳時代前期包含層検出状況（西北から）



(2) 古墳時代前期包含層範囲確認状況（西北から）



(1) 遺物出土状況（布留式土器：西から）



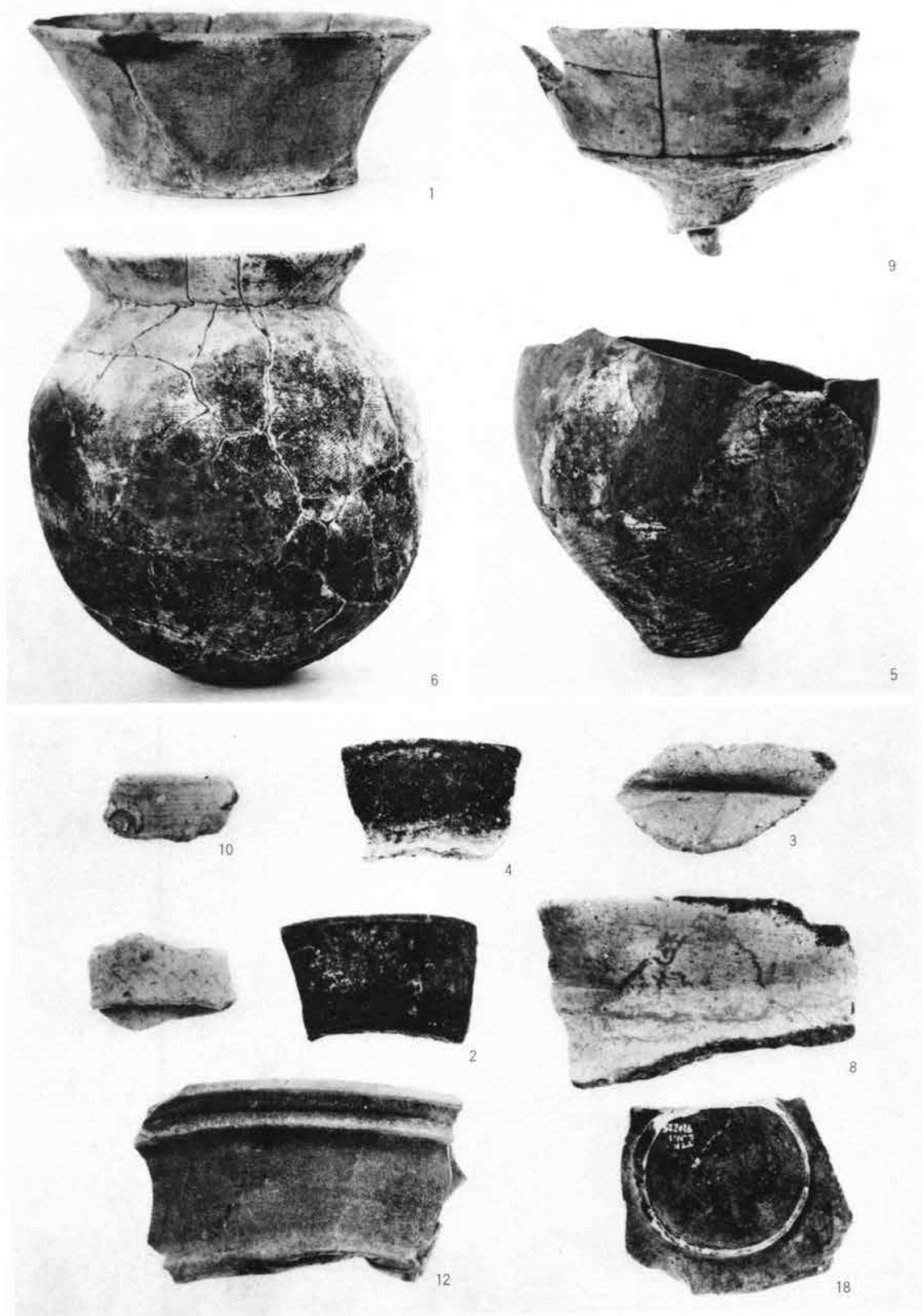
(2) 遺物出土状況（畿内第V様式：西から）



(1) 第4トレンチ全景 (西から)



(2) 第4トレンチ全景 (西北から)



出土遺物



京都府遺跡調査概報 第49冊

平成4年3月23日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3

Tel(075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

Tel(075)441-3155 (代)